

# 東北学院大学 教養学部論集

第 155 号

2010 年 3 月

## 〔論 文〕

エル・グレコと古代 (I) —— 初期作品を中心に …………… 松 井 美智子 …… 1

Tilesius und Japan (Teil 2) : Tagebuchauszüge über die Rückreise  
von Nagasaki nach Kamtschatka 1805 …………… Frieder SONDERMANN …… 21

連濁に対する (見かけ上の) 反例 …………… 高 橋 直 彦 …… 55

English Conversation : Oku No Hosomichi  
…………… Scott WATSON & Craig MacDONALD …… 69

強磁場による荷電ベクトル場不安定とカオスパターン I 保存系  
…………… 高 橋 光 一 …… 109

## 〔翻 訳〕

ピーター・ロッシによる応用社会学諸論 …………… 久 慈 利 武 …… 127

東北学院大学学術研究会



目次

〔論 文〕

- エル・グレコと古代（I）——初期作品を中心に ……………松井美智子…… 1
- Tilesius und Japan (Teil 2): Tagebuchauszüge über die Rückreise  
von Nagasaki nach Kamtschatka 1805 ……………Frieder SONDERMANN…… 21
- 連濁に対する（見かけ上の）反例……………高橋直彦…… 55
- English Conversation: Oku No Hosomichi  
……………Scott WATSON & Craig MacDONALD…… 69
- 強磁場による荷電ベクトル場不安定とカオスパターン I 保存系  
……………高橋光一…… 109

〔翻 訳〕

- ピーター・ロッシによる応用社会学諸論……………久慈利武…… 127

●印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページから読むことができます。

〈<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/index.html>〉

東北学院大学学術研究会のホームページには

東北学院大学 〈<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/index.shtml>〉 から、

図書館・教育研究施設か、研究・産官学連携を開き、

図書館・教育研究施設 →学術研究会

研究・産官学連携 →学術誌 →学術研究会（紀要、論集）へとお進み下さい。

執筆者紹介（掲載順）

- |                    |  |
|--------------------|--|
| 松 井 美智子<br>(森 美智子) | (本学教養学部 教 授)                               |
| フリーダー ゾンダーマン       | (本学教養学部 教 授)                               |
| 高 橋 直 彦            | (本学教養学部 准教授)                               |
| スコット・ワトソン          | (本学教養学部 教 授)                               |
| クレイグ マクドナルド        | (University of Prince Edward Island<br>講師) |
| 高 橋 光 一            | (本学教養学部 教 授)                               |
| 久 慈 利 武            | (本学教養学部 教 授)                               |

# エル・グレコと古代（I）—— 初期作品を中心に

松 井 美 智 子

エル・グレコすなわち「ギリシア人」という呼称をすでに生前から有したばかりでなく、生涯にわたって作品署名をギリシア語で行っていたこの画家と、古代ギリシアあるいはローマの文化や芸術遺産とのかかわりについては、さまざまな観点から考察しうるテーマであるに違いない。たとえば、これまでもすでに蔵書の検討を通じてグレコの古典文化への関心は裏付けられており、一端を示すなら、彼は古典ギリシア語やラテン語を解しアリストテレスの『形而上学』や『政治学』ほか数々の哲学書を蔵して、哲学や文学ばかりか修辞学、弁論術、歴史など広く人文主義的教養を陶冶していたと判明している<sup>1</sup>。あるいはまた、彼がかつて所蔵し 20 世紀の第 3 四半世紀に奇跡的に再発見されたウイトルウィウスの『建築書』とヴァザーリの『芸術家列伝』における、グレコの自筆による書き込みの解読と研究も、彼と古典文化のかかわりを考える貴重な資料を提供してくれている<sup>2</sup>。

本稿は、こうした研究成果を踏まえつつ、初期から晩年に至る画家の創作活動それ自体に焦点を当てて、グレコと古代、ことに古代芸術とのかかわりを考察してゆく。この問題については従来、《蠟燭に火を灯す少年》（図 20）や《ラオコーン》など古代に直接主題を求めたとみなされる作品に限定され、総じて個別的に検討が行われてきたと思われる。しかし本稿では、クレタ島における初期の画業から最晩年に至るまでを通時的に検証することによって、グレコが古代への関心を顕わにしているのは、その芸術形成期と晩年の二つの時期に特化していること、また芸術形成期では古代に対して芸術規範として受容しようという肯定的・積極的な姿勢を示しているのに対して、晩年にあっては規範としての芸術価値をむしろ相対化する造形を行っている事実を指摘したい。またそうであるなら、グレコの古代美術へ評価は初期から晩年まで一定不変なのではなくて、変遷を遂げているとみなすべきであるに相異なる。そしてまさしくそれは、グレコのラファエロ芸術に対する評価の変貌と軌を一にしていることにも注意を促したいと思う。さらにまた古代美術への関心は、グレコ芸術の獨創性、

<sup>1</sup> グレコの蔵書の検討は、さまざまな文献において行われている。一例のみあげると、Fernando Marías, Agustín Bustamante, *Las Ideas Artísticas de El Greco*, Madrid, 1981, pp. 43-55, 221-24.

<sup>2</sup> *Ibid.* Xavier de Salas, Fernando Marías, *El Greco y el Arte de su tiempo*; *Las notas de El Greco a Vasari*, Real Fundación de Toledo, 1992. Fernando Marías, *El Greco y los usos de la antigüedad clásica*, in *La Visión del Mundo Clásico en el Arte Español*, Jornada de Arte, 1993, pp. 173-82.

その独特な特質と緊密にかかわる、光の造形的探求の出発点を提供し、物質的な光から神的・超越的な光の造形につながってゆくことを論じてゆく。

## 第 1 章 芸術形成期の諸作品における古代

まず注目しなければならないのは、1567 年頃ヴェネツィアに移住する以前のクレタ島時代に制作したイコン画において、グレコは古代的な意匠に対する関心をすでに明示していることである。しかもそれが、こんにち現存し確実に視されている彼のもっとも初期のイコン画の多くにおいて指摘しうることは、古代的意匠への関心はきわめて早期から深く画家の心をとらえていたことを浮き彫りにしていると思われる。

先年シロス島で発見された《聖母の死》(図 1) は、パレオロゴス朝ビサンティンの同種のイコンの図像伝統を基本的に踏襲している<sup>3</sup>。しかし伝統を逸脱したきわめて大胆な細部を複数含んでいるのも事実である。なかでも画面下部の中央に描かれている、燭台に着目したい(図 2)。これは、その驚くばかりに古代的・異教的な意匠によって、また台座に記された画家の署名によって、わたしたちの関心を二重に引きつける。

この燭台は画面の中心軸上にあり、上方にはキリストの頭部、次いで精霊の鳩、さらに被昇天の聖母マリアを頂いている。まさに枢軸の一面を占めているわけである。一見すると噴水の台座を思わせるデザインだが、その正面に、互いに腕をからませ合いながら、他方の腕で蠟受け皿を捧げ持つカリアチュードのような半裸体の女性像が、多角形の重厚な台座の上に立っている。この女性群像は、胸部のみならず腹部さえ露わで、裸体性が驚くばかり大胆に強調されている。その発想源は、これまで指摘されてきたとおり、異教的な三美神の図像にあっただろう。三美神は、周知の通り、イタリア・ルネサンス期に彫刻や絵画を通じてひろく造形化されており、古典古代的な女性裸体像のフォルムの追求に加えて、哲学的・寓意的な解釈を伴って表象されるルネサンス人文主義を象徴する主題といえるものだった。グレコのもティーフの源泉は、半裸の女性群像ばかりでなく重厚な基台のデザインの類似性から、フランスのフランソワ一世のためラファエロが制作した香炉のデッサンに基づくマルカントニオ・ライモンディの銅版画(図 3)、さらにエネア・ヴィーコによる燭台のデザイン版画(図 4)

<sup>3</sup> Maria Constantoudaki-Kitromilides, Italian Influences in El Greco's Early Work. Some new Observations, in *El Greco of Crete*, ed. by N. Hadjinicolaou, Iraklion, 1995, pp. 97-118, esp. 100. シロス島の《聖母の死》については、さらに以下の文献を参照。Myrtali Acheimastou-Potamianou, *Dominicos Theotocopoulos: The Dormition of the Virgin, a Work of the Painter's Cretan Period*, pp. 29-44; Kanto Fatourou-Hesychakis, *Philosophical and Sculptural Interests of Domenicos Theotocopoulos in Crete*, pp. 45-68, in *El Greco of Crete*, ed. by N. Hadjinicolaou, Iraklion, 1995. G. Mastoropoulos, in *Exh. Cat. El Greco. Identity and Transformation*, 1999, pp. 340-42.



図1 エル・グレコ 《聖母の死》 シロス島, エルムポリス  
聖母の死聖堂

に求められる可能性がある<sup>4</sup>。

カント・ファトゥールー・ヘシカキスは、燭台の位置に着目し、横たわる聖母マリアに近接して配置されていることから、三美神はキリスト教の三枢要徳、すなわち『コリント人への第一の手紙』13章の一節（13節）に由来する希望、信仰、慈愛（愛）を象徴するとみなしている。この三者は、初期キリスト教時代の外典テキストにおいて、神の母、教会に関連付けられてあり、またパノフスキーによれば、燭台そのものが聖母マリアのシンボルと見なしうるものであった<sup>5</sup>。

次に注目すべきは、燭台の台座部分に、画家の署名が鮮やかに記されていることである（図

<sup>4</sup> Kanto Fatourou-Hesychakis, *op. cit.*, p. 60.

<sup>5</sup> *Ibid.*, esp. pp. 60 ff. E. Panofsky, *Early Netherlandish Painting*, Cambridge, Mass., 1953, vol. I, p. 143 and n. 2, also p. 146, n. 4.



図2 エル・グレコ 《聖母の死》(部分図)



図3 マルカントニオ・ライモンディ 《香炉》  
銅版画



図4 エネア・ヴィーコ 《女性像のある燭台》  
銅版画

5)。ギリシア語大文字で記されたこの署名について、ここで詳細に立ち入ることはできないものの、少なくともこれはイコン画における署名の慣習をおおきく逸脱した、ひじょうに独特なタイプの署名であるとたびたび指摘されてきた。ことにこのサインの末尾を占める

動詞「δείκνυμι (ὁ δείξας)」は、ストラボンやルキアノスがときに「創造する、描く、表す」という意味で用いた古風な用例に合致しているという<sup>6</sup>。一方、グレコの蔵書にはルキアノ

<sup>6</sup> Olga Gratzou, Domenicos Theotocopoulos «ὁ δείξας», A Commentary on a Rare Signature Type of El Greco, in *El Greco of Crete*, pp. 69-74. *El Greco. Identity and Transformation*, Exhib. Cat., 1999, pp. 340-42, (entry by G. Mastoropoulos). 益田朋幸, 「エル・グレコとビザンティン美術」, 『国学院雑誌』第95巻8号, 平成6年8月, 1-14頁。





図5 エル・グレコ 《聖母の死》 (部分図)

スの著書が含まれていると知られている。画家はここでイコン画の署名の慣習を排し、あえて古代的な用語法を採用したことになる。しかも、ほかならぬこの燭台——イコン画にあって驚くべき古代的・異教的意匠を有している——に、このような署名を付しているのであってみれば、古代的なるものに対する画家のつよい意思表明をここに読み取ることも可能と思われる。

《聖母のイコンを描く聖ルカ》(図6)は、同じく画家のクレタ島時代の作例と考えられるものだが、前作品と同様、基本的には後期ビザンティン・イコン画の図像を踏襲しながら、慣習を逸脱する注目すべき古代的モチーフを採用している。それは聖人と制作



図6 エル・グレコ 《聖母のイコンを描く聖ルカ》  
アテネ、ペナーキ美術館

中のイコンとの間に描きこまれている、半裸の天使像である(図7)。頭部をはじめ像の一部は破損しているものの、判別可能な部分に着目すると、胸部や片方の脚を太腿まで露わにしているところは、前記作品の三美神と同様に、裸体性を大胆に強調したイメージといえる。銘文の記された白い巻物状のものをたなびかせ、片方の手に月桂冠を携えてルカの頭上に捧げようとしているところである。一見して古代の勝利の寓意像を想起されるモチーフだが、マリア・コンスタントウーダキがグレコの発想源と考えている、ベルナルディーノ・カンピに帰されるデッサンに基づきジョヴァンニ・バッティスタ・ダンジェリが作成した版画(図



図7 エル・グレコ 《聖母のイコンを描く聖ルカ》  
(部分図)



図8 ジョヴァンニ・バッテスタ・ダンジェリ  
《ウェスタの巫女トゥキア》(部分図) エンゲ  
レーヴィング



図9 エル・グレコ 《東方三博士の礼拝》 アテネ, ベナーキ美術館

8) は、たしかによく類似している<sup>7</sup>。

アテネのベナーキ美術館所蔵の《東方三博士の礼拝》(図9)は、いわゆるイコン画というより、むしろルネサンス以降のイタリアの図像、構図と様式を本格的に踏襲しているテンペラ画といってよいものだ。古代的要素としてもっとも注目されるのは、画面左の聖家族を取り囲んでいる建築モチーフである。小画面であるにもかかわらず、古代風建造物の廃墟

<sup>7</sup> Maria Constantoudaki-Kitromilides, *op. cit.*, pp. 103-6. *The Illustrated Bartsch 32: Italian artists of the sixteenth century. School of Fontainebleau*, New York, 1979, p. 303, fig. 1.

を構成しているヴォールトや柱頭は、アカンサスの葉模様も識別可能ほど入念に描写されている。廃墟は旧約世界（旧世界）を象徴しているとみなしうるし、マリアの背後に見える二連のコリント式列柱は、キリスト降誕の際にマリアが柱に背中を持たせたとする伝説（偽ボナヴェントゥーラ『キリストの生涯についての瞑想』）を想起させもする。そして前記の《聖母の死》と同様に、マリアに関連付けられる古代風モチーフの、またしてもその台座部分に画家の署名が付されているのは、はたして偶然であろうか。グレコの姓である「Θεοτοκόπουλος（テオトコプロス）」が「聖母の息子」の謂であることはよく知られている<sup>8</sup>。とすればマリアが腰をおろしている神殿台座、彼女の足元に画家の署名が配されているのは、偶然ではないかもしれない。聖母マリアと画家の繋がりを想起させ、古代的なるものへの画家の関心に注意を促しているのだろうか。

いずれにしても、キリスト教主題を扱いながら、古代風の建築空間や建築モチーフを背景として活用する傾向は、イタリア滞在期の諸作品に継承され、造形上さらに重要性を増してゆく。なかでも「神殿から商人たちを追い出すキリスト」や「盲人を癒すキリスト」を主題とする複数のヴァージョンに、もっともよくあらわれている。たとえばワシントン、ナショナル・ギャラリーの《神殿から商人たちを追い出すキリスト》（図 10）では、背景のアーチ



図 10 エル・グレコ 《神殿から商人たちを追い出すキリスト》 ワシントン、ナショナル・ギャラリー

<sup>8</sup> ギリシア語「Θεοτόκος（テオトコス）」は「神を生む者」の謂であり、神の母＝聖母マリアを指すものとされる。他方、接尾語「...πουλος（プロス）」は「...の息子」の謂で、古代よりギリシア人の姓として用例はきわめて多い。Camon Aznar, *Dominico Greco*, Madrid, 1970, tomo I, p. 15.



図 11 エル・グレコ 《神殿から商人たちを追い出すキリスト》 ミネアポリス，インスティテュート・オブ・アーツ

形の開口部分とその両側の古代風彫像の設置に、ラファエロの《アテネの学堂》の反映を見ることは容易である。

ミネアポリスの同主題画（図 11）は、堂々たる量塊的な建築空間の描写という点において、グレコの生涯を通じてもっとも成功していることは疑いない。と同時に、透視図法を活用した三次元空間の造形という点で、彼の作品中もっとも説得力を有している。空間の構成、群像の処理、コントラストの強い色彩の選定などに、古代、ルネサンス、マニエリスムの諸要素の混交が指摘でき、イタリアにおける彼の芸術体験のいわば総決算ともいえるかもしれない。そうであればこそ、作品の最前景右隅にティツィアーノやミケランジェロらと並んで、ほかならぬラファエロの肖像を描きこんでいることもじゅうぶんに理解できるのである。グレコが晩年に行ったヴァザーリの『列伝』への書き込み——「ラファエル・デ・ウルビーノの作品の大半には古代への依存がみられる」<sup>9</sup>——が証言しているように、グレコにとって、ラファエロは端的に古代芸術の大いなる信奉者と捉えられていたと考えられる。とすれば、グレコがここに肖像を描き込むことで顕彰しているのは、ラファエロ芸術のもつ古代的なるものへの深い傾斜であっただろう。そしてそれは、とりもなおさず当時のグレコ自身の関心に合致し、その規範たりえるものであった。

<sup>9</sup> X. de Salas, Fernando Marías, *op. cit.*, 1992, p. 81. グレコの当該の書き込み箇所の内容は *Ibid.*, p. 126 [II, 16-17]. これを補正したスペイン語文は次の通りだが、長文の一部を構成しているため、本稿の訳文では文意を分かりやすくしてある。「depender de la antigüedad como se ve en la mayoría de las cosas de Rafael de Urbino」

古代風の建築空間の描写ばかりではない。さらに建築そのものへ彼が強い関心を有していたことは、蔵書目録に記されたさまざまな建築書の存在や、彼自身が建築論を執筆していたと伝えるフランシスコ・パチェーコの証言、そしてウィトルウィウスの『建築書』に記された丹念な書き込みから、よく知られている。建築への関心はイタリア時代のさまざまな作品群に反映されているが、たとえばドレスデンの《盲人を癒すキリスト》(図12)の背景には、



図12 エル・グレコ 《盲人を癒すキリスト》 ドレスデン, 絵画館



図13 エル・グレコ 《盲人を癒すキリスト》 パルマ, 国立絵画館

S. セルリオの『建築の一般原理』の挿図を発想源にしたモチーフが使われている。またファルネーゼ家のために描かれたパルマ美術館の《盲人を癒すキリスト》(図13・14)には、ローマのさまざまな古代建築の反映が指摘されている。たとえばキリストの肩越しに見える建造物について言えば、ここには古代の凱旋門建築に通じる特徴が見出されるし、さらに透視図法の消失点に位置している廃墟の建造物には、ディオクレティアヌスの浴場のテピダリウムの一部が活用されている(図15)<sup>10</sup>。

こうした建築モチーフのほかにも、イタリアとくにローマで実見した可能性の高い古代彫刻が、さまざまな形で使われている。たとえば上記のワシントン作品(図10)では、画面左前景で片脚を露出した女性の頭部に、古代のヴィーナス像頭部の痕跡が、またその後方



図14 エル・グレコ 《盲人を癒すキリスト》(部分図)パルマ, 国立絵画館



図15 ドシオ 《ディオクレティアヌスの浴場のテピサン》 フィレンツェ, ウフィツィ美術館

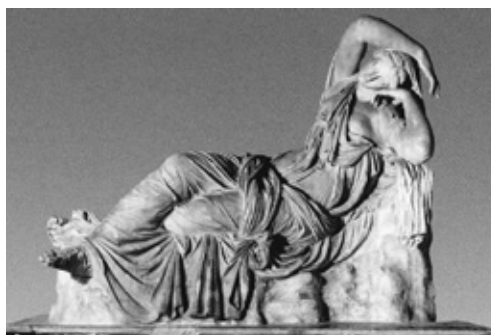


図16 《眠るアリアドネ》 ヴァチカン美術館

<sup>10</sup> イタリア時代のこれらの作品における、古代建築あるいは彫刻からの引用は、これまでさまざまな論者によって取り上げられている。近年の作品カタログに総括されているので、それを示す。José Álvarez Lopera, *El Greco: Estudio y Catalogo*, ed. by Fundación Arte Hispánico, 2007, volumen II, tomo I, pp. 58-74.



図17 《ファルネーゼのヘラクレス》 ナポリ, 国立考古学博物館

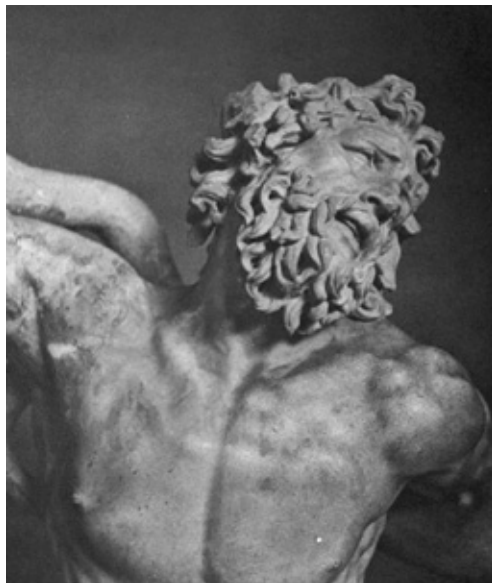


図18 《ラオコーン群像》(部分図) ヴァティカン美術館

で胸を露わにして後ろに仰け反る女性像には《眠るアリアドネ》(図16),あるいは《ニオベの娘》のポーズの借用を指摘できる。一方,バルマの《盲人を癒すキリスト》(図14)では,左側中景で黒い顎鬚を蓄え腰布をわずかにまとっている男性像に,当時ファルネーゼ家に所蔵されていた古代彫刻《ファルネーゼのヘラクレス》(図17)の反映がみられる。さらにその左隣の白髪白髭の男性の頭部には,ヴァティカン《ラオコーン群像》のラオコーンの頭部(図18)を想起させるものが含まれている。

## 第2章 蠟燭に火を灯す少年

このように一見して明らかなモチーフや形態の借用とは異なって,イタリア滞在期に制作された「蠟燭に火を灯す少年(厳密には,炭火を吹きながら蠟燭に火を灯す少年)」を主題とする作品群のはらむ問題は複雑だ(図19・20)<sup>11</sup>。なんらかの寓意的メッセージを伴っ

<sup>11</sup> *Ibid.*, pp. 103-7. D.Davies, *El Greco. Mystery and Illumination*, Exh. Cat., Edinburgh, National Gallery of Scotland, 1989. Pita Andrade, *Sobre los soplores o sopladores del Greco*, in *Homenaje al prof. Martín González*, Valladolid, 1995, pp. 547-51. *El Greco*, Exhib. Cat., London, National Gallery, 2003, n. 63, (entry by G. Finaldy). H.E. Wetthey, *El Greco and his school*, Princeton, 1962, I, pp. 25-26, II, no. 122.



図 19 エル・グレコ 《蠟燭に火を灯す少年》 マドリード、コレクション・コロメル

ている可能性は少なくないものの、独立した半身像風俗画であることはまぎれもない。またテネブリスムあるいはブレ・カラヴァッジスムといえる明暗の強烈な対比効果の追求が造形上の真のテーマとなっており、しかもそれが世俗的テーマに適用されて 1570 年代初頭に描かれた事実を勘案するなら、こうしたジャンルの開拓例のひとつと位置付けられよう。

J. ビアロストツキが、大プリニウスの『博物誌』の記述に注意を促しつつ、「蠟燭に火を灯す少年」というモチーフがじつは古代芸術に淵源を有する可能性を指摘したのは、1966 年のことである<sup>12</sup>。『博物誌』には、火

に息を吹きかけている少年を表現した事例が、三例登場するからである。そのうちの二例は絵画で、まず 35 卷 138 節の冒頭に「第一流に次ぐ人々について述べよう」と記されたあと、第二番目に登場する画家アンティフィルス (Antiphilus) の手になる作品として「火を吹いている少年と、それ自身美しいが、火の反射によって照らされ、また少年の顔に投げられた光によって明るくなっている部屋」とある (35 卷 138 節)。もう一点はフィリクス (Philiscus) なる画家による、「火を吹いている少年のいる画家の仕事場」(35 卷 143 節) という作品である。残る一つは彫刻作品で、作者はミュロンの弟子のリュキウス (Lycius Myronis discipulus) であり、彼は「その師に恥じない、消えかかった火を吹く少年」を制作したとされている (34 卷 79 節)<sup>13</sup>。

プリニウスの著作は、当時の知識層にひろく知られていたもので、グレコがそのエクフラシスに挑戦しようとしたとしても不思議はない。ことに注目されるのはナポリ、カポディモンテ美術館所蔵の《蠟燭に火を灯す少年》(図 20) が、1570 年以降ローマにおいて画家が寄寓したファルネーゼ宮の、1644 年と 53 年の財産目録に記載されていた事実である<sup>14</sup>。これは、

<sup>12</sup> J. Bialostocki, Puer Sufflans Ingues, in *Arte in Europa. Scritti di Storia dell' Arte in onore di Edoardo Arslan*, Milano, 1966, pp. 591-95.

<sup>13</sup> Pliny, *Natural History*, IX, *Libri XXXIII-XXXV*, in the Loeb Classical Library, trans. by H. Rackham, pp. 184-85, 360-62, 364-65. 『プリニウスの博物誌』III, 中野定雄・中野里美・中野美代訳, 雄山閣, 平成 7 年 (5 版), 1383, 1436-37 頁。邦訳は参考にとどめてある。

<sup>14</sup> *I Farnesi: Arte e Collezionismo*, Exhib. Cat., Parma-Napoli-Monaco, 1995, no. 54 (p. 246), (entry by Pierluigi Leone de Castris).





図20 エル・グレコ 《蠟燭に火を灯す少年》 ナポリ, カポディモンテ美術館

この作品が当初からファルネーゼ家のために制作された可能性を物語る。またファルネーゼ宮の学者サークルの中心人物であるフルビオ・オルシーニは、高名な古典学者にして古物収集家であった。デイヴィッド・デイヴィスは、オルシーニがウイトゥルウスの数種類のラテン語版を所有していたことに注意を促したばかりでなく、さらに絵画の収集家としてジョルジョーネの作品とされる《老婆と少年の頭部》なる作品（デイヴィスはこれが風俗画の可能性もあるとみている）を《聖ジョルジョ》とともに所蔵していた点に着目して、グレコによるエクフラシスの背景に人文主義者オルシーニの存在の大きさをあらためて強調している<sup>15</sup>。たしかにオルシーニは、ローマ滞在期のグレコの様式基準作のひとつである《ジュリオ・クローヴィオの肖像》と《シナイ山風景》ほか複数の肖像画を所蔵し、画家と緊密な関係を築いていたのである。

<sup>15</sup> D. Davies, *op. cit.*, pp. 11-13.

こうした状況証拠を積み上げることによって、グレコが古代美術家のエクフラシスを行った蓋然性はこんにち高いとみなされるに至っている。イタリアへの移住後わずか数年のうちにエクフラシスを実践したという事実は、彼を取り巻く文化環境の影響が少なくなかったにせよ、やはりこの頃のグレコにとって古代美術への積極的な関心を裏付けるものと思われる。

プリニウスの記述をグレコの作品と比較してみると、じつは中心的モチーフからして厳密には異なっており、副次的な要素すら相違は少なくない。プリニウスによれば、古代の件の三作品とも、少年は火を吹いているとのみ記されているが、グレコは火を吹きながら蠟燭に火を灯そうとしているさまを描いている。加えて、画家アンティフィルスでは、炎が少年のいる部屋を照らし出しているという空間の照明効果が称えられているのに対して、グレコ作品には空間への光の反映はきわめて乏しい。また画家フィリクスでは、画家の仕事場という場の設定が絵に含まれているのに対して、グレコにはいかなる場の説明もない。しかしながら視点を変えて、プリニウスの記述のとおり「火を吹いている少年のいる画家の仕事場」、すなわち自分のアトリエにおいて、グレコは火を吹いている少年のモデルを使ってエクフラシスを行なった、その所産が件の作品であるという、いわばエクフラシス行為そのもののメタ絵画化を図ったという解釈も不可能でないかも知れない。グレコはそうした発想さえ行いうる機知の人ではあったからだ。

一方、ミュロンの弟子リュキウスの彫刻と比較すれば、厳密にはリュキウスのように「消えかかった火を吹く少年」を、グレコは表してはいない。しかしながら仮にリュキウスの彫像のエクフラシスを行ったとするなら、さらに興味深い視点が浮上してくるのである。上記のような絵画のエクフラシスの場合にトポスとして当時の画家が造形上意識するところの、古代に対する当代、言語表象に対する視覚表象という二つの対立軸とそれぞれ後者の優位性の表明に加えて、こんどは絵画と彫刻の優劣比較論<sup>パラゴネ</sup>という見地がクローズ・アップされてくるはずだからである。

これまでは画家のエクフラシスということで、グレコの着想源としてまずアンティフィルスが注目されることが多かった。しかし灼熱の炎のゆらめきと反射光、さらに熱効果をも十全に表現しうるのは、彫刻よりも絵画においてであることを、画家はこのエクフラシスを通じて表明しようとした可能性も排除はできない。

一方、グレコがイタリアからスペインへ移住しておよそ 10 年を経たころに、フェデリコ・ズッカロがエル・エスコリアル<sup>エル・エスコリアル</sup>の聖堂主祭壇画を制作するためスペインを訪問し、トレドへ足を延ばす。ズッカロの所有していたヴァザーリの『列伝』ジュンティ版が、グレコの手に渡ったのはこの頃と推定される。そして興味深いことには、『列伝』の冒頭（フェルナンド・マリーアスによれば、グレコ所蔵の『列伝』では第三巻冒頭に位置している）にフィレンツェ

人の人文学者ジョヴァンニ・バティスタ・ディ・マルチェッロ・アドリアーニのヴァザーリ宛て書簡が収録されており、そのなかにプリニウスによる上記のアンティフィルスらの記述が採録されているのである<sup>16</sup>。ただしアドリアーニ書簡では、画家のアンティフィルスとフィリクスについてプリニウスと同様の記述がみられるものの、プリニウスにおいて彫刻家リュキウスとあったものが<sup>17</sup>、アドリアーニでは **Butio** (マリーアスは **Buthio** と表記) という別の名前にとってかわっている<sup>17</sup>。アドリアーニ書簡でなぜリュキウスが **Butio** なる彫刻家名に代わっているのか、筆者には今のところ不明である。『列伝』のグレコの書き込みを総合的に検証しているマリーアスは、あくまでアドリアーニ書簡に立脚しているためであろう、プリニウスの記述との齟齬に注意を払ってはいない。

この問題を等閑視しえないように思えるのは、周知のとおり、グレコが書き込みを行う際に、テキストの記述内容に対してしばしば神経質とも見える反応、態度を示すことが少なかつたからである。たとえば問題のアドリアーニ書簡で、彫刻家リュシッポスの綴りをヴァザーリが **Lyssippo** と記したところを、グレコは **Lysippo** とわざわざ欄外に訂正する念の入れようであったと知られている<sup>18</sup>。しかしながらマリーアスによれば、グレコは **Butio** について、その名前と彼が制作した火を吹く少年の箇所、下線を残したに過ぎなかつた。さらにいっそう興味深いことには、アンティフィルスとフィリクスの箇所に、彼は何の痕跡も残していないのである<sup>19</sup>。『列伝』への書き込みに、イタリア時代の画家の真意を探る試みは、むしろ困難といえるかもしれない。いずれにしても、作品に立ち戻ってみる必要がある。

あらゆるものを飲み込んでしまうような漆黒の暗闇を背にして、ひなびた田舎風の少年が左手に白熱する炭火を、右手には細く短い蠟燭をもち、口をすぼめて炭火に息を吹きかけて火勢を強めながら、蠟燭へ火を灯そうとしているところである (図 20)。縦 60 センチを超える画面の中央を、少年のほぼ等身大の半身が占めているため、画面を前にすると少年は観者の眼前にいるような錯覚に陥る。少年が手元に全神経を集中しているさまが手に取るように感じられるのも、N・ハヅィニコラウの指摘するとおりの<sup>20</sup>、少年と画面の距離がきわめて間近に設定されており、そのため少年と観者自身も近接し、画面の細部観察を可能にして心理的な近接感をも与えるからであろう。マドリードのヴァージョン (図 19) では、炭火の

<sup>16</sup> G. Vasari, *Le Vite de' più eccellenti pittori, scultori ed architettori*, ed. G. Milanesi, I, Firenze, 1906, pp. 48-49, 67.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 67, «Butio discepolo di Mirone». Xavier de Salas, Fernando Marías, *op. cit.*, pp. 95-96. Fernando Marías, *op. cit.*, 1993, pp. 175-78.

<sup>18</sup> Xavier de Salas, Fernando Marías, *op. cit.*, p. 96.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 96. Fernando Marías, *op. cit.*, 1993, p. 176.

<sup>20</sup> *El Greco. Identity and Transformation*, Exh. Cat., 1999, pp. 340-42, (entry by N. Hadjinicolaou).

火勢はいくぶん穏やかで、少年の口の周りを中心にした顔の下半分と襟元や右掌とを部分的に照らし出しているものの、照明の範囲は限定的だ。他方、カポディモンテのヴァージョン（図 20）では、炭火の炎はいっそう力強く、少年の顔から胸元全体をより輝やかに照らし出して、いっそう洗練された印象を与える。炭火を握る左手は、激しい光で掌が透けて見えるほどだ。双方ともにグレコの全作品のなかで、おそらくもっとも迫真的な自然主義に貫かれた作品群であることは疑いない。ウォーターハウスやアルバレス・ロペーラも着目していることだが<sup>21</sup>、個性化された頭部を丹念な筆触でモデリングしているところから、制作にあたっておそらく現実の少年をモデルとして使用したのであろうし、これを一少年の肖像とみなすことも可能と思われる。ローマにおいて、グレコはほかでもない肖像画の手腕を買われていたことが想起されるのである。

とはいえ、白熱した炭火そのものと、それが少年に及ぼす激しい照明効果、熱効果を含む灼熱の極限を描写しようとしているところが、この絵画実験を類例のない野心的なものとしていることは明らかだ。無論こうした絵画実験の背景には、遠くレオナルドの夜景図の試みや、サヴォルドによる複数の光源と空間における照明効果の追求（図 21）、あるいはコレッジョの夜景図に見る幼児キリストを光源とするまばゆい光の造形、そしてさまざまなヴェネツィア派の遺産があった。晩年のティツィアーノやバッサーノあるいはティントレットが、いずれも夜景をベースに強烈な明暗の対比や照明効果の追求を数々の作品で行なったことはよく知られている。とくにティツィアーノの降誕図（フィレンツェ、ピッティ絵画館）では、火の灯った蠟燭を持つ少年が描きこまれ——初期フランドル絵画の降誕図によく見られるとおり、画中の蠟燭は、光の中の光、あるいは真の光としてのキリストと対照させる、物質的



図 21 ジェロラモ・サヴォルド 《聖マタイと天使》  
ニューヨーク、メトロポリタン美術館



図 22 ティツィアーノの原画に基づくマスター IB  
による木版画 《キリストの降誕》

<sup>21</sup> José Álvarez Lopera, *op. cit.*, esp. p. 103.

で物理的な現世の光として描かれる——しかもそれはボルドリーニやマスター IB らによって版画化され (図 22), グレコの同主題画の発想源ともなった。

さらにいっそう興味深いのは、ヤコポ・バッサーノと彼の工房の作品群だ。グレコの少年像よりやや幼いように見えるものの、同じように白襟のシャツにベスト、ときには上着をつけた田舎風の少年が火を吹いているというモチーフが、宗教主題にたびたび登場しているのである<sup>22</sup>。おそらくそのもっとも早い作例は1562年頃制作された《羊飼いたちの礼拝》(ローマ, パラッツォ・コルシーニ国立絵画館) (図 23) である。これは夜景図ではないが、画面の前景右端という際立った位置に、主場面にひとり背を向けて横向きに地面にかがみこみ、頬を膨らまして燃え木を吹く少年が描き込まれている。一方、ヤコポとフランチェスコの共作とみられる《聖ヨアキムの幻視》(コペンハーゲン, トルバルドセン美術館) (図 24) は漆黒の闇に覆われた夜景図であり、前景左の暖炉の前で、右手の燃え木に息を吹きかけながら、左手の蠟燭に火をつけようとしている少年が横向きに捉えられている。さらに1588-89年頃の二点の夜景図《茨冠のキリスト》(ローマ, 個人蔵およびミラノ, グイド・ロッシ・コレクション) にも類似した少年が登場する。ローマの作例 (図 25) では、容器に入った炭火にかがみこんで蠟燭を手にしてている少年が描かれており、ミラノの作例 (図 26) では



図 23 ヤコポ・バッサーノ 《羊飼いたちの礼拝》 ローマ, パラッツォ・コルシーニ国立絵画館

<sup>22</sup> カポディモンテのヴァージョンが20世紀初頭A. ヴェントゥーリによってヤコポ・バッサーノに帰属されていた事実が象徴するように、この作品群をめぐる両者の緊密な関係は相当以前から注目されてきた。(H.E. Wethey, *op. cit.*, p. 79) こんにちなお、グレコの《蠟燭に火を灯す少年》の異作ともいべき作品(ジョノヴァ, パラッツォ・ピアンコ絵画館所蔵)がバッサーノ工房に帰属されるなど、問題は決着していない。バッサーノ作品における「火を吹く少年」のモチーフについては、W.R. Rearick, *Jacopo Bassano's Later Genre Paintings, The Burlington Magazine*, 1968, CX, 782, pp. 241-49. Paolo Berdini, *The Religious Art of Jacopo Bassano: Painting as Visual Exegesis*, Cambridge, 1997, pp. 103ff. W.R. Rearick, *Vita ed Opera di Jacopo dal Ponte, detto Bassano, in Jacopo Bassano c. 1510-1592*, eds. B.L. Brown and P. Marini, *Exh. Cat.*, 1992-93, pp. CLVI-VIII, and no. 36, 77.



図 24 ヤコボとフランチェスコ・バッサーノ 《聖ヨアキムの幻視》コルシャム・コート，メシェン・コレクション

判然としないが炎を前に少年が横向きにかがみこんでいる。W.R. リアリックによれば、興味深いことに、《聖ヨアキムの幻視》から少年のモチーフのみ抽出されて、独立画面を構成している作品が存在し（北アメリカの個人蔵であるという）、そこには制作年代が 1570 年代であること示す年記があるとされている<sup>23</sup>。とすれば、それは側面観の少年の全身の単独像ということになる（図 27）。

バッサーノ一族による上記の少年を含む夜景図の制作年代を考慮すると、グレコがこれらを直接に実見し参考とした可能性は少ないかも知れない。しかしながら、これらはバッサーノ工房において 1562 年頃の《羊飼いた



図 25 ヤコボ・バッサーノ 《茨冠のキリスト》ローマ，個人蔵

ちの礼拝》以後、「火を吹く少年」というモチーフへの関心が、途絶えることなく生き続けていたことを物語っているとみるべきであろう。そして N. ハヅィニコラウの指摘するよ

<sup>23</sup> W.R. Rearick, *op. cit.*, 1968, pp. 246-47, fig. 15-17.



図26 ヤコポとフランチェスコ・バッサーノ 《茨冠のキリスト》 ミラノ, ガイド・ロッシ・コレクション



図27 ヤコポとフランチェスコ・バッサーノ  
《聖ヨアキムの幻視》(部分図)



図28 エル・グレコ 《聖フランチェスコの幻視》  
(部分図) マドリッド, セラルゴ美術館

うに、これはバッサーノ工房とグレコの緊密な関係を浮き彫りにしていると思われるのである。たしかにポーズはじめ相違点は少なくないが、白襟のシャツや素朴で独特にひなびた少年の佇まいに、共通するものが感じられるからである。バッサーノの少年像はまったく古代的というにはほど遠く、むしろ当代の田園生活を具現する少年のイメージであり、それゆえにこそエクフラシスを構想した際にグレコの記憶の中にあって、造形化のなかで導きの糸となったのかも知れない。言い換えるなら、独立した半身像風俗画として「蠟燭に火を灯す少年」を正面に据えるという発想そのものは、バッサーノ作品から敷衍して出来たのではなく、むしろローマにおいてエクフラシスを行おうとすることから浮上し、それを具体化するなかでバッサーノの少年のイメージは、少なからぬ役割を果たした可能性が考えられる。



図29 エル・グレコ 《キリストの降誕》（部分図）  
イリエスカス、ラ・カリダド施療院



図30 エル・グレコ 《羊飼いたちの礼拝》（部分図）  
マドリッド、プラド美術館

しかしながら、漆黒の闇の中にある白熱の発光体、暗黒の中の光源そのもののリアルな描写にここまで肉薄することにこだわり、光源が生み出す強烈な照明効果の造形そのものを正面に据えて、作品の真のテーマとしたのはグレコその人にほかならない。そしてこうした造形への意志という点において、「蠟燭

に火を灯す少年」という作品群は、イタリア滞在期における古代への傾斜を物語る異色の一エピソードにとどまることのない意義を、じつはグレコ芸術において獲得していると思われるのである。すなわち神的なるもの、超越的なるもののメタファーとしての光であり、それはスペインにおける彼の晩年の作品群において、闇の中で極端なまでに明るく輝き炸裂する白熱の光として造形化されることになる（図28・29・30）。「蠟燭に火を灯す少年」は、まぎれもなくそうした造形への出発点に、画家を立たせたのであった。イタリアで研鑽ののち、スペインにおける活動のなかで、光の造形が形而下的なるものから形而上学的なるものへと置き換わってゆくその道筋は、グレコにあって、古代美術への関心から遠ざかり、あえて当代の芸術潮流の先端へと向かってゆく道筋に重なってゆくのである。

〔付記〕 本稿は、2008年12月にセルバンテス文化センター（東京）で開催されたフォーラム「スペイン美術と古代世界」（スペイン・ラテンアメリカ美術史研究会・民族藝術学会共催）における発表の一部に加筆修正を行ったものである。



# Tilesius und Japan (Teil 2)

## Tagebuchauszüge über die Rückreise von Nagasaki nach Kamtschatka 1805

Frieder Sondermann

### Vorbemerkungen

Die verschiedenen Aufzeichnungen von Wilhelm Gottlieb Tilesius zum Aufenthalt in Japan sind bislang nicht umfassend ediert worden. Daher wird auch in diesem Artikel der Versuch gemacht, wenigstens Teile davon allgemeiner zugänglich zu machen.<sup>1</sup> Der erhaltene zweite Band (von ursprünglich 3) seines handschriftlichen Tagebuches der Weltumseglung befindet sich im Tilesius-Nachlass des Stadtarchives Mühlhausen in Thüringen, wo Tilesius 1769 geboren wurde und 1857 auch starb. Sein Sohn Adolph hatte alle Materialien des Vaters 1886 dem Stadtarchiv testamentarisch übereignet.

Weil diese Tagebuchnotizen wegen ihrer ausführlichen Beschreibungen von Tieren und Pflanzen für Naturforscher von größerem Interesse als für Kulturhistoriker sind, wurden sie bisher wenig beachtet. Obwohl Tilesius selber immer wieder eine illustrierte Publikation seiner Reiseerinnerungen – möglicherweise auch in Teileditionen – ins Auge fasste, kam dies Projekt zeitlebens nicht zustande. Er hat sein Tagebuch in der vorliegenden Form erst nach der Weltumseglung aus den verschiedenen Aufzeichnungen zusammengestellt und immer wieder durch Hinweise auf neuere Fachliteratur zu darin behandelten Stichpunkten ergänzt und erweitert. So zeigt etwa ein Vergleich von Manuskriptblättern zum Aufenthalt in Macao 1805/6, wie aus einem rudimentären Diarium ein buchähnlicher Vorlesungstext oder Essay geworden ist. Die gewichtigen umfassenden Publikationen der Mitreisenden Adam Johann von Krusenstern (1810–1814) und Georg Heinrich von Langsdorff (1812) hätte er nur durch ein spezielleres Fachbuch ergänzen können, zumal er schon für diese beiden Werke die unkommentiert gebliebenen Illustrationen geliefert hatte. Doch er publizierte nach und nach nur Exzerpte aus dem Tagebuch in Form von Artikeln in Fachzeitschriften.

---

<sup>1</sup> Vgl. die vorausgehenden Aufzeichnungen “Tilesius und Japan (Teil 1): Tagebuchauszüge über Ankunft und Aufenthalt in Nagasaki 1804/5”, in: *Tohoku Gakuin Daigaku Kyoyogakubu ronshu* No. 154 (2009, Dez.) S. 105-147 [東北学院大学, 教養学部論集, 第154号, 2009年12月, 105-147頁].

Natürlich hatte auch Tilesius schon recht früh verschiedene Informationen über den Japan-Aufenthalt bekannt gemacht, etwa durch Briefe, die er an seine Freunde in der Heimat sandte und von diesen veröffentlichen ließ.

— Einige Bemerkungen aus Japan, in: Kilian's Journal *Georgia oder der Mensch im Leben und im Staate* 1806, Nr. 96 (Sp. 757-760), Nr. 103 (Sp. 819-820), Nr. 104 (Sp. 821-826).

Auch sind die wichtigsten Ergebnisse seiner ichthyologischen Studien in Japan von ihm in Wort und Bild publiziert worden:

— Description de quelques poissons observés pendant son voyage autour du monde. In: *Mémorial de la Société Impériale des Naturalistes de Moscou*, Tome II (1809), p. 212-249, Tab. XIII-XVII.

— Abbildungen und Beschreibungen einiger Fische aus Japan, und einiger Mollusken aus Brasilien, welche bei Gelegenheit der 1sten Russ.kaiserl. Erdumseglung lebendig beobachtet wurden, in: *Denkschriften der Münchner Akademie der Wissenschaften 1811/12*, math. Classe, S. 71-88 (+ Taf. II-IV) und ebd. 1813, S. 31-50 (+ Taf. III-V).

Doch das umfassende Werk als Summe seiner Erfahrungen und Eindrücke erschien nie. Was es hätte enthalten können, kann auf Grund der verstreuten, archivierten Materialien nur erschlossen werden. Als wichtigstes Zeugnis dafür ist wohl das eigenhändige Tagebuch anzusehen, das er über die Beobachtungen während der Weltumseglung führte.

Zum Vergleich mit dem Mühlhäuser Tagebuch sollen hier vorab zwei handschriftliche Dokumente von Tilesius herangezogen werden. Dabei handelt es sich zum einem um Textauszüge aus dem unvollständigen, im Archiv der Akademie der Wissenschaften in St. Petersburg deponierten

*Tagebuch meiner Reise um die Welt, welche ich mit dem berühmten Erdumsegler H. Capitaine von Krusenstern von der R. Kaysrl. Marine in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 gemacht habe, geschrieben an Bord der Nadeschda von dem Naturforscher und Historiographen Dr. Tilesius Kaysrl. Ruß. Hofrath und Professor 1809*

zum anderen um eine Abschrift aus einer frühen Version seines Tagebuchs, die sich heute in Berlin befindet (Staatsbibliothek zu Berlin-Preußischer Kulturbesitz, Nachlass Wilhelm Gottfried Tilesius von Tilenau).

Das erstere, Petersburger Manuskript wartet mit folgender Einleitung auf<sup>2</sup>:

---

<sup>2</sup> Archiv der Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg, Sign. : F. IV/Op. 1/d. 800, folio 1-36, 37, 38-41 sowie 43-65, hier : folio 1f.

Erste Abtheilung

Schiffarth von Europa nach dem südlichen America.

Niemand wird in diesen flüchtig niedergeschriebenen Papieren schon etwas genau Untersuchtes, Wohlgeordnetes oder Vollendetes oder Correctes suchen. Erdumseglungen sind die schnellsten Durchflüge durch die Meere des Erdballes und Naturforscher und Physiker haben hier nicht die Zeit, Versuche zu machen, Vergleichen anzustellen oder andere Operationen vorzunehmen durch welche die Sinne und der Verstand vor möglichen Täuschungen und Irrthümern gesichert werden können. Man kann schon mit ihnen zufrieden seyn wenn sie schnell auffaßen und von der Menge von Thatsachen die sich ihnen auf entfernten Stellen der Erde, die andere Europäer nie zu sehen bekommen, darbieten, diejenigen niederschreiben, die zu wichtigen Untersuchungen und nützlichen Resultaten führen können, wenn sie mit den nöthigen Vorkenntnißen versehen, eine richtige Auswahl desjenigen treffen, was andere Naturforscher des festen Landes in ihrem ganzen Leben nie zu Gesicht bekommen können und was der Wißenschaft gewiß entzogen würde, wenn sie es nicht mitbrächten, wenn sie dasjenige auf der Stelle durch Zeichnung mit Farben und Pinsel in einer geübten Hand versinnlichen und fixiren, was nicht aufbewahrt werden kann, sondern in wenigen Stunden abstirbt zerfließt vertrocknet verbleicht verschwindet oder entstellt wird, wenn sie mit einem Worte ihre Zeit anwenden, daß ihnen keine Stunde zum Spiel zur Unterhaltung oder zur langen Weile übrigbleibt und daß sie bey ihrer Rückkehr sagen können, die Zeit sey ihnen nur zu schnell verflogen und sie hätten in derselben mehr gearbeitet als in jeder andern ihres ganzen Lebens. Ich meinestheils glaube das allerdings von mir sagen zu können und ich habe in der That eine

[1v] so große Menge von nach zu arbeitenden Materialien gesammelt aufgezeichnet und abgebildet, daß ich kaum hoffen darf, mein noch übriges Leben werde hinreichen, dieselben insgesamt gründlich ausarbeiten zu können.

/2r/ früh Am 23 August 1803 gelangte ich gesund von Elsinor in Copenhagen an und begab mich sogleich zu Sr. Excellenz dem Kammerherrn von Resanof und zu Herrn von Krusenstern, von welchen ich der übrigen Schiffsgesellschaft vorgestellt wurde. Auf den Schiffen fand ich weder die nöthigen Instrumente noch diejenigen naturhistorischen Schriften, welche zu dieser Expedition unentbehrlich waren. Ich machte deshalb meine Vorstellung noch dasjenige Unentbehrliche was man in Copenhagen von diesen Bedürfnissen bekommen könnte anzuschaffen, sie wurden genehmiget und nunmehr hatte ich vollauf zu thun, alles dasjenige, was ich schon vorhanden glaubte, in wenigen Wochen zusammenzutreiben. Ob nun gleich Copenhagen gerade nicht der für den Buchhandel so vortheilhafte Ort war, daß man daselbst unsere literarischen Bedürfnissen sogleich vorrätzig zu finden hoffen konnte ; so ersezte uns doch die Bereitwilligkeit und Fürsorge der Herrn Brummer und des Herrn Professor Wahl, welche uns die nöthigen Schriften aus den Bibliotheken anderer Gelehrten einstweilen verschafften diesen Mangel und so wurden also durch die Güte dieser achtungswerthen Männer die in einem von mir überlieferten Verzeichniße verlangten Werke, einige Hauptwerke ausgenommen, in kurzer Zeit herbey geschafft. Die zum Fang der Insecten nöthigen Instrumente wurden so gleich bestellt, wie auch die zum Aufwahren derselben nöthigen Glaskästen und andere zum Erhalten nöthige Liquores und Troquen auch Instrumente zum Präpariren und was noch in der kurzen Zeit herbey zu schaffen möglich war angeschafft. Herr Prof. Wahl überließ uns zum Opfer der Wißenschaft ein besonderes nach seiner Angabe verfertigtes Eisen zum Fang der Mollusken und Corallen, um halben Preiß, welches er ehemals in Norwegen mit Nutzen angewendet hatte. Schon am 1 September waren wir bereits in so weit mit allen nothwendigen

Bedürfnissen versehen und am 7 September giengen wir von Copenhagen ab.

Am 9 September befanden wir uns bereits bey Elsinor, wo wir vor Anker giengen. Da ich schon vor mehreren Wochen mehrere Tage hier gewesen war so sehnte ich mich nicht nach dem Lande, weil ich sie schon kannte

Am 11 September wurde die Festung Kronenburg mit Kanonenschüssen begrüßt und die Anker gelichtet,

Am 13 September kamen wir bereits aus dem Sunde.

Zu der im folgenden ausführlicher beschriebenen Rückreise von Japan nach Kamtschatka gibt es eine teilweise anders lautende Version von Tilesius' Hand.<sup>3</sup> Diese als "Abschrift" deklarierten Blätter könnten aus dem Nachlass von Johann Christian Rosenmüller stammen, einem mit Tilesius befreundeten Arzt in Leipzig. Bei dessen Tod im Februar 1820 scheint es nämlich zu einem Durcheinander der nachgelassenen Schriften gekommen zu sein, so dass Tilesius seine ihm geliehenen Tagebuchnotizen nicht zurück erhielt.<sup>4</sup> Natürlich ist auch denkbar, dass es sich beim Berliner Teilnachlass um eine der verschiedenen Abschriften von Tilesius für andere Zwecke und Personen (z.B. für den Naturforscher Karl Asmund Rudolphi) handelt. Da manche Detailinformationen fehlen, die im später angefertigten (Mühlhäuser) "Tagebuch" vorhanden sind, kann man auf eine relativ frühe Abfassung vor 1810 schließen.

(1)

Abschrift aus meinem Journale, so weit ich in aller Eile kommen konnte, Längen und Breitengrade mochte ich nicht fragen aus Furcht vor verdrießlicher Antwort.

Mittwochs den 1 May 1805.

NO. Heute früh um 10 Uhr sahen wir die Nordwestküste [durchgestr.: Insel *Toosima*] von *Nipon* in der Entfernung sie ist von ziemlicher Höhe aber ganz kahl. Die Schluchten der Berge schienen mit Schnee oder mit Sand angefüllt zu seyn, auch zeigten sich am Horizont 8 bis 10 Japonische Fahrzeuge, es wurde aber bald sehr neblig und bis weilen kamen Windstöße mit Regen wir näherten uns dem Lande immer mehr ich konnte aber nicht eher eine Zeichnung entwerfen bis nach Tische halb zwei Uhr, um 3 Uhr nahm ich noch eine und eine dritte Abends um 6 Uhr wo wir uns wieder vom Lande entfernten: Um diese Zeit aber war der Berg, deßen Spitze bis her immer in Wolken eingehüllet war, frey, es fiel Windstille ein und dauerte einen großen Theil der Nacht hindurch fort, so, daß man befürchten konnte vom Strohme ans Land getrieben zu werden. Es zeigten sich heute wieder Bachstelzen am Schiffe und am Schiffe trieb viel Seetang vobey, von welchem mir die Matrosen für Branntwein etwas herausfischten. In der vorigen Nacht hatten die Wellen einen Fisch aufs Verdeck geworfen, welchen aber Monsieur Langsdorf nach seiner gewöhnlichen Art zu sich genommen hatte ohne mir denselben zu zeigen, so glaubte ich der Wißenschaft durch diesen Menschen zu nützen und habe mich so häßlich betrogen und mir selbst eine Laus in den Pelz gesezzt. 12° Rr. Thr. Wärme

---

<sup>3</sup> Staatsbibliothek zu Berlin–Preußischer Kulturbesitz, Nachlass Wilhelm Gottfried Tilesius von Tilenau, Mappe 8, acht doppelseitig beschriebene Blätter mit Reisenotizen der Zeit vom 1. bis zum 29. Mai 1805.

<sup>4</sup> Vgl. "Tilesius und Japan" (Teil 1) (s. Anm. 1), S. 113.

Donnerst. den 2 May 1805. Wir haben heute den ganzen Tag an der Nordwestküste von *Nipon* fortgesegelt. Nachmittags aber fiel wieder Windstille ein. Das Land wird ziemlich niedrig und besteht bloß aus Sandhügeln und Bänken, es scheint sich auch nur ganz allmählig zu heben, denn wir hatten 2 deutsche Meilen vom Lande 25 Faden Tiefe, das Wetter war aber heute ununterbrochen schön und sonnigt. Vormittags schon zeichnete ich einige *Vuen*, nachmittags aber ununterbrochen die ganze Küste, welche sich zuletzt wieder in ein hohes mit Schnee bedecktes Vorgebürge erhebt, an deßen Fuß noch einige Dörfer liegen. Im flachen Lande welches von den gelben

[1v]

Sandhügeln gebildet wird und aufgeschwämmte Küste ist, die ihre Gestalt mit jedem Jahre verändert, war eine Einbucht, an welcher eine ziemlich große Stadt lag, und die einen guten Haven zu bilden schien wenigstens lagen hier eine 20 Fahrzeuge hier vor Anker, vielleicht war es die Mündung eines Flußes, der sich hier ins Meer ergießt zu beyden Seiten der Stadt war etwas Busch und einige Dörfer Längst der Küste weideten ganze Heerden Kühe. Im Hintergrunde erhob sich höheres bebautes Land welches überall volkreich und sehr bewohnt zu seyn schien. Da wir durch die Windstille einige Stunden in dieser Gegend zurückgehalten wurden; so ließen sich bald mehrere Fahrzeuge, eben so, wie gestern, auf der Höhe sehen, welche uns zu beobachten schienen und Abends um 7 Uhr kamen 4 große Ruderbarken mit 100 Mann gerade auf uns los. Da eine solche Anzahl nicht von bloßer Neugierde zu uns gelockt zu seyn schien, so brachten sie uns ins Gewehr, zumal da man doch nicht wissen konnte, ob die Ruderer Japoneseer Chinesen oder Coreer wären, denn sie ruderten nicht wie die Japaner, sondern wie wir, und ihre Barken waren auch ganz anders gebaut, als die Japanischen zu *Nangasaki*. Als sie aber näher ans Schiff heran kamen; so waren es wirklich unbewaffnete Japoneseer, die ganz ruhig ihre Pfeiffe Toback beym Rudern rauchten sie wurden aber durch die Trommel und durch das Lauffen unserer Matrosen durch die Zurüstungen an den *Canonen* dergestalt erschreckt, daß sie sogleich Seegel seetzten und schleunig zurückkehrten. Man rufte ihnen zu, sie mögten sich nicht fürchten und ans Schiff heran kommen, weil man den Nahmen der Stadt und des Landes zuverlässig erfahren wollte; aber sie kehrten sich nicht daran und segelten fort. Es scheint, als wären sie vom Gouverneur dieser Stadt, um uns auszukundschaften und zu bewachen, ausgesandt worden; denn man sahe nachher in der Gegend, wo sie hingesegelt waren, nächtliches Feuer.

*Rr. Thr.* Warm 13°. Es wurde heute auch wieder vorbey treibender Seetang aufgefangen, dessen Arten ich sonst wo noch ein andermal beschreiben will.

(2) Freytages den 3 May 1805. Das gestrige *Cap* kam heute früh wieder zum Vorschein, doch so daß der gestrige hohe Vordergrund heute im Hintergrunde zu stehen kam, wir giengen mit frischem Winde an [darüber: längst] der Küste fort (in der Stunde 6 bis 8 Knoten) und erreichten um 9 Uhr den sehr hohen mit Schnee bedeckten *Pik*, welcher die schmale lange und niedrige Küste von *Sangar* begränzt, hierauf um 12 Uhr das *Cap Sangar* selbst, welches wie eine große Erdzunge weit in die See hervorstehet wir giengen bis um 2 Uhr längst dem Gebürge *Sangar* fort und sahen die Endspitze deßselben und um 3 Uhr zugleich die Straße der Durchfahrt und das Gebürge *Matmai* deßen Nord*Cap* nach unserm Schiffe *Nadejda* genennet wurde. Wir giengen ziemlich nahe an das *Gebürge Matmai* heran so, daß wir die Nordwestliche Spitze desselben welche sich allmählig herabsenkt, wie auch die Stadt und einige Dörfer deutlich sehen konnten, im Haven der Stadt lagen viele Fahrzeuge vor Anker und einige kreuzten auch in der Durchfahrt. Sobald man uns bemerkte hatte, wurde sogleich auf dem hinter der Stadt gelegenen Berge ein großes Feuer angezündet dessen Rauch man bemerkte bis uns das Land selbst aus dem Gesichte verschwand. Zwei kleine aber sehr hohe einzelne Inseln zeigten sich in W.N.W. schon um 2 Uhr, das

*Cap Nadejda* in *N* und *Matmai* erstreckte sich bis *NW*. *Sangar Cap* aber lag in *SO*. Ich bemerkte hier Sturmvögel und Papageytaucher, ob es heute gleich schon sonniges Wetter war ; so blies doch der Wind ziemlich frisch und kalt (*Rr. Thr.* 10° Wärme) Das Gebürge von *Matmai* ist weit höher als die bisherigen und die Gipfel liegen noch mehrentheils voll Schnee bedekt. Als wir wegen widrigen Windes, der uns nicht nach den Inseln zu steuern ließ, umwandten und wieder zurückgingen so bemerkten wir auf den *Sangargebürge* Wachfeuer, welche in regelmäßigen Reihen wie die *Illumination* in *Nangasaki* angesteckt waren, doch hat sich uns heute kein japanisches Bot genähert. Die Stadt *Matmai* schien sehr regelmäßig gebaut zu seyn und lag dicht am Ufer in der Fläche, so viele *Magazine* aber konnte man nicht bemerken wie an der gestrigen Stadt, die uns mit 4 großen Barken begrüßen ließ. – Küstenzeichnungen habe ich heute sehr zahlreich entworfen./

Sontags den 28 April 1805 Auf der Reise von *Nangasaki* nach den *Curilen*

Man beschäftigt sich die in Japan aufgetraffen Schätze und Herrlichkeiten sie mögen nun in Fächern Tobackspfeiffen Lackwerk oder eigenem Machwerk bestehen, zu ordnen. Hier sizzt einer und schreibt die Geschichte der in Japan im Gefängniß verlebten Tage, dort schreibt einer das Verzeichniß seiner Schätze oder der Handelsartikel, die er dort gesehen, dort zeichnet einer bunte Japonische Huren Bilder oder ein Japonisches Buch sklawisch nach und will es in eine *NationalBibliothek* als Japonisches Original verkauffen, dort *copirt* einer die Zeichnung eines dritten und schreibt darunter *ad naturam pinxit*. Hier schaut einer neugierig hinter dem Stuhle über die Achseln um zu sehen, was jener schreibt. Hier rezensirt einer aus Uiberdruß Neid und langer Weile alles schlecht, was er selbst nicht versteht noch machen kann. Immer wieder dieselben *Scenen*, jeder will mehr scheinen, als er ist und der *Egoismus* schreit aus jeder Kehle, nur dann und wann durch jüdischen Eigennuzz, Dickhäutigkeit, Freßbegierde und andere schöne Tugenden unterbrochen. Das ist ein Leben wie im Paradies. Hier will einer die unglaublichsten unverzeihlichsten Beleidigungen, die nur durch Leibesstrafen Genugthuung erhalten könnten, mit einer Flasche *Mallaga* oder einer Müzze wieder gut machen. Dort wundern sich einige, daß man ihnen Gefälligkeiten versagte, gegen die sie undankbar gewesen sind und statt der Gegengefälligkeiten mit Verachtung Grobheiten und Selbstsucht groblich beleidiget haben. Hat jemand Talent und Geschicklichkeiten und verbirgt die Produkte seines Fleißes nicht auf der Stelle ; so kommen die andern sogleich, davon zu profitiren, Beute zu machen und sie für eigene Kunst auszugeben. Giebt man dieses nicht zu, so wird das Kunstwerk unbarmherzig getadelt, als Sudeley heruntergesezt, und der Künstler als ein unwissender ungeschickter und unnützer Flegel verspottet. So ist es Schiffsmanier. Eine Wissenschaft aber, von der man keine Begriffe hat, gilt bey jeden für unnütze Pedanterey, und der sie übt, für Pallast : so geht s der Naturgeschichte. – /

(3) Man hat mir aufgetragen ein historisches Tagebuch zu schreiben, aber es würde ja, wenn ich diesen Auftrag befolgen und der Warheit zugleich getreu bleiben wollte aus dem *Journal historique* eine *Chronique scandaleuse* werden, und dies gilt noch überdieses nur von dem, was mir und jedem andern nicht verborgen bleiben kann. Wie viel ist aber, was man vor mir sorgfältig geheim hält, wie viel was man mit einem unzeitigen Mantel der Liebe zudeckt.

Sogar meine vermeinten Freunde ziehen höhnische Minen und sehen scheel, wenn ich mich nach dem Datum oder nach dem *Barometer*stande oder nach dem Längen und Breitengrade erkundige.

Wo soll ich also auch nur die geringfügigsten Facta zu einer Geschichte, die ich nicht kenne, woher Materialien zu einem historischen Journale hernehmen, das mir die eine Parthey zu schreiben aufträgt und die andere mir untersagt. Jedermann ist ja auf diesem Schiffe mehr Geschichtsschreiber, als ich, jedermann hat ja auch mehr Gelegenheit dazu und mehr Mittel in Händen. Ein jeder *Officier* schreibt hier ein weitläuffiges Journal und glaubt sich weit mehr berechtiget dazu und weit mehr geschickt dazu, weil

er Seeoffizier ist und des Steuermanns Journal nehmen und abschreiben darf – Wie würde man mit der Antwort die Nase rümpfen wenn ich fragen wollte wie viel Knoten wir giengen, ob wir einen oder 2 Grade an diesem oder jenem Tage gemacht hätten, wie scheel und verächtlich sieht man mich nicht über die Achsel an, wenn ich nach dem *Compas* sehe oder beile, die Gegenden und Richtung einer Küstenaussicht darnach bestimme.

Nein dergleichen Aufträge auszuführen liegen für mich außer den Gränzen der Möglichkeit, ich kann nur das, wo kein Neid, keine fremde Hinderniß mich zu stören im Stande ist, vollbringen. Jeder will hier mehr scheinen als er ist, jeder will sein Schriftstellertalent (oft ohne alle *Orthographie* und richtige Gedankenfolge –) zeigen und Ruhm einärthen, wo keiner zu hohlen ist. Daher das Vordrängen, das Vorgeiffen die Erniedrigungen und andere Qualen einer so unschicklich zusammen gedrängten, einer so ungleichen und einer so unnöthig zahlreichen Gesellschaft, wo so mancher Pallast mitfährt. /

sehr kalt 7° Rr. Thr. Wärme.

Sonnabends den 4 May 1805.

Heute früh sahen wir das *Cap Sangar* und *Matmai* in der Entfernung die beyden vulkanischen Inseln *Oosima* und *Koosima* lagen aber näher, das *Cap Nadejda* aber ganz entfernt in *O. 80 Matmai ONONO*, der nahe *Vulkan* aber *Koosima NW*, er war gestern der hinterste und heute, da wir in voriger Nacht zwar 4 Knoten gegangen, aber 3 vom Strome zurückgetrieben waren, der, welcher uns zunächst lag. Wir fuhren dicht an ihm vorbey (seine Höhe von der Meeresfläche betrug ich hatte von mehrern Seiten sorgfältige Abbildungen dieses Vulkans entworfen, weil ich so nahe war, daß ich die Verwitterungen die Bruchstücke und Brüche des Gerölls und den Crater sehr deutlich ohne Fernrohr sehen konnte. Er raucht beständig theils an den Rändern theils aus den *Solfataren* und besteht durchaus nur aus einer unermischten und gleichartigen Steinart welche schwarz blau ist, wie TrappLawa oder Grauwakke. Auf der Seite waren herablaufende Schluchten und frischer Bruch, welcher durch das Fernrohr sehr porös und braunroth aussahe. Diese Vulcane sind unbewohnt und so öde und wüste daß auch kein Gräschen dort aufkommt, sie sind steil und unzugänglich so weit die Wellen den untern Pic bespülen, so weit bemerkt man die auf einander liegenden Schichten des ehemaligen Lawaflußes welche zum Theil von den Wellen zerstört abgewaschen Um den Vulkan herum flog eine sehr große graue Möwenart und ein Wallfisch, der das Wasser aus seinen beyden Sprizzlöchern hoch in die Luft trieb, später hin sahe ich auch wilde Gänse und Taucher, Sonntags den 5 May passirten wir die Insel *Okosir*, welche sehr nahe an der Küste von *Matsmai* liegt, ich habe sie wie alle gesehene Küsten, von verschiedenen Seiten mehrmals so wohl für mich als für den H. C.v. *Krusenstern* gezeichnet, die Küstenansichten des letztern belaufen sich bereits über 100, welche auf 10 bis 12 *Royal* Bogen zusammengedrängt sind, die er alle seinem Atlas beyzufügen denkt, der wohl den *Vancouverischen* übertreffen wird. /

(4) Montags den 6 May 1805 Sonntigt und windstill. 13° Rr. Thr. Wärme. Wir sahen heute das *Cap Otsiui* oder *Otziui* und bemerkten gegen 12 bis 1 Uhr gegen über Land in *NO*, sodaß wir vermutheten hier eine Durchfahrt zu finden. Das *Thermometer* wurde in die Tiefe gelaßen, das Tau hielt aber nur 150 Faden (und die Meerestiefe ist hier unergründlich), die Wärme war 6° g. in einer Tiefe von 900 Fuß, da sie in der *Atmosphaere* im Schatten auf 13° stieg. Die Japoniser hatten Feuer angebrannt und der Rauch stieg an mehrern Stellen des Vorlandes vom *Cap Otsiui* in die Höhe und deutete auf die Anwesenheit eines *Europaeischen* Schiffes, ich zeichnete 5 *Vüen* vom *Cap* und der Durchfahrt, welche heute noch zweifelhaft ist, Abends mit der Dämmerung erhob sich der Wind und wurde contrair um 10 Uhr Sturm, das *Barometer* war auch heute früh schon gefallen. Abends sahe man auf dem Vorlande des Caps Feuer. Sturm die ganze Nacht hindurch.

Dienstags den 7 May 1805. Heute früh war noch Sturm, Mittags stellte sich Windstille ein, welche bis

abends anhielt, wo wir an dem Vorgebirge hinab, welches die große Bucht bildet im Hintergrunde einen stark rauchenden Vulkan bemerkten der auch des Nachts noch in der Ferne leuchtete : ich habe diese Küstenansicht gezeichnet. Es wurden heute wieder Wallfische und Taucher bemerkt, auch sahe ich die große graue Möwe wieder unserm Schiffe folgen. Große Bäume Treibholz giengen beym Schiffe vobey.

Mittewochs den 8 May 1805. Heute befanden wir uns den ganzen Tag in der großen Bucht, deren Vorgebirge ich gestern zeichnete, gleich früh entstand eine anhaltende Windstille, die uns nicht vorwärts ließ, dabey lag ein beständiger Nebel auf dem nahen Lande, der keine freye Aussicht und Zeichnung erlaubte. Obgleich der Tag warm und sonnigt (14° *Rr Thr.*) war ; so blieben doch die Wolken beständig auf den Bergen liegen und der Nebel verbarg bis gegen Abend alles, was uns umgab. Der Seegrund bestand aus Serpentin und Lawageschieben ohne Schörl. Die ganze Küste besteht aus Eisbergen deren Gipfel mit Schnee bedeckt sind und sieht noch frostiger aus, wie *Kamtschatka*.

Donnerstags den 9 May 1805. Heute kamen wir aus der Bucht und paßirten zwei Inseln, die kleinere und höhere schien unfruchtbar, die andere aber war niedrig und lang und zeigte Waldung und einiges Akkerland, es zeigte sich ein großer Wallfisch und Tümmler auch sahen wir Zugvögel, viele Millionen/ [4v] Schwalben zogen heute Nachmittags von Sud nach Nord. Nachmittags {unter dem undurchdringlichsten Nebel} erhob sich der Wind heftig und Abends war wieder Windstille und heftige Schiffsbewegungen von den hohen Wellen (*Siep.*) Auf der *Russischen Carte* ist von *Laxman* ein Durchgang angezeigt worden, den wir neben den heutigen Inseln nicht gefunden. (Uibrigens *Rr. Therm.* 14° Wärme)

Freytages den 10 May 1805. Heute früh schon zeigte sich das Land trübe und bald fiel Windstille und Nebel wieder ein bis Nachmittags wo ich die gestrige Küste wieder sehen und zeichnen konnte. Die beyden Inseln waren im Hintergrunde, aber in *NNW* gegen Abend zeigte sich noch eine dritte Insel sehr bewölkt, welche nur aus einem rauchenden Pik zu bestehen schien, es wurde dunkel ehe wir ihn erreichten. Nachmittags bemerkte man in eben dieser Gegend ein leer auf dem Meere treibendes Boot (*Cannot*) ohne Menschen man sezte ein Bot mit 3 Matrosen aus und holte es herbey, Es war ein japanisches *Cannot* doch nicht, wie die in *Nangasaki* sondern flach, die Ruder auf beyden Seiten, wie bey dem unsrigen angebracht, 18 Fuß lang mit Stricken zusammengeneht mit Leisten [durchgestrichen : Angeln] eisernen Klammern und kupfernen Nägeln beschlagen und auch 4 Rudern, einem hinlängl. Vorrath Brennholz und einem holzernen Busch versehen. An dem einen Ruder war japanische Schrift, sie waren von Fichten das Boot aber von Kampfholz, in dem Bote lagen Makrelenköpfe und einige Uiberreste von verzehrten Seesternen (*Asterias rubens*), das *Cannot* war sehr gut und wasserdicht wurde aber von unserm unvorsichtigen Matrosen beym Heraufziehen an der Seite zerschlagen. Inwendig waren die Wände ganz mit Fischschuppen beklebt und man sahe wol, daß es ein Japonisches Fischerboot gewesen war, die 4 großen Böte welche am 2 May aus der Japonischen Stadt von der flachen Küste zu uns kamen waren beynahe eben so *construïret*, wahrscheinlich war dieses Bot vom Ufer durch den gestrigen Sturm losgerißen und in die See getrieben worden. Wir waren heute ziemlich nahe am Lande, welches mit schroffen Ufern niedrig und mit verkrüppelten Busch bewachsen ist, dahinter erheben sich einige Hügel deren Gipfel mit Schnee bedekt sind, ich zeichnete dieses Land, weil hier eine vorgebliche Durchfahrt angezeigt ist. /

(5) Sonnabends den 11 May 1805.

Der Nebel trat gleich früh um 8 Uhr ein so, daß ich nur den hohen Eispic, der eine eigene Insel ausmacht, zeichnen konnte, die gegen ihm über liegende Küste zieht sich sehr in die Länge besteht blos aus niedrigen Busch und Zwergholz, wie in *Kamtschatka* [durchgestr. : das vorde] hintere Land besteht aus Eisbergen oder niedrigen Hügeln, das Vorland ist aufgeschwemmter Sand. Es kamen *Curilen* zu uns



und begrüßten uns.

Das Land heisst nach Aussprache der *Curilen* oder *Ainos*, die unter Japon. Botmäßigkeit stehen, Aino Mittags gingen wir in einer Bucht, deren Spitze Soja, die aber heißt, vor Anker, Gleich nach Tische giengen wir mit 2 *Chalouppen* an Land, es war aber so weit vom Lande, daß wir auf 1 1/2 Stunde segeln musten, wir trafen dort ein sandiges Ufer voller *calcinirter* und frischer Muschelschalen, Schnecken, Seetange, Meerigel, *Alcyonien* und andern Seeauswürfen, hinter demselben erhob sich Gestrippe und hohes Schilf auf einem hier und da morastigen Grunde, hinter diesem erhoben sich eine unabsehbare Reihe von Sandhügeln mit niedrigem Busche und Zwergholz bewachsen, deren Gipfel zum Theil noch mit Schnee bedeckt waren. Diese Hügel hatten die Gestalt der Wälle und schienen eine natürliche Schanze oder Bollwerk zu bilden. Hier und da am Strande waren zerstreute Fischerhütten mit Trokkenhäusern und Fischerböten von derselben *Construction*, wie wir vor einigen Tagen eins aufgefangen hatten. Aermliche muthlose von Ungeziefer und Ausschlag geplagte Familien saßen hier umher oder waren mit Fischfang beschäftigt. Die Leute schienen sehr gutmüthig; Nachdem wir eine ziemliche Strecke in gröster Geschwindigkeit, als hätten wir Eile, am Ufer hingelauffen waren, so kehrten wir in einer Hütte ein, in welcher gegen 10 bis 12 Menschen im Kraise um einen Feuerherd umher saßen, über welchem ein kupferner Keßel hing, in welchem Fische gekocht wurden. Vor der Hütte war ein kleines Vorhaus in welchem allerley nach Art der Japonester gearbeitete Gefäße und Geräthe standen, die Thür zum inneren Hause wurde aufgeschoben, die Wände waren in schiefer Richtung und am Dache war eine ziemlich grosse Oeffnung ein Zugloch für den Rauch, über dem Feuerherde waren überal Stangen angebracht an denen Fische aufgehangen und geräuchert waren. In den Gefäßen stand Schnee, den sie an Erma[n]glung [?] des Quellwassers, an der Wärme zerfließen ließen und tranken /

[5v] Auf der Erde lagen überall Japanische Strohmaten und die Leute saßen auch ganz wie die Japaner mit untergeschlagenen Beinen, die vornehmern hatten auch wie die Japaner mehrere Röcke, über einander die untersten oder das Hemde bestand aus Japanischen Zeuge. Das Oberkleid aber aus einem gelbröthlichen von Baumrinde gewebten groben Zwillig, der mit blauen Canten geziert war; hinter dem Naken und auf den Schultern waren sie mit einer blauen Borte in Gestalt eines Kragens besetzt. Am Gürtel hieng eine chinesische Tobackspfeiffe nebst hölzernen Tobackskästchen und ein Meßer von Japanischem Stahl nebst hölzernen modellirten Heft in einer hölzernen Scheide: bey einigen war die Scheide auch blos mit Baumrinde zusammengenähet. An der Seite sahe ich auch Japanische Strohschuhe stehen; Die Gesellschaft bestand aus jungen und alten, Männern und Weibern und Kindern, sie waren gröstentheils einerley gekleidet, man theilte seidene Fälbel Messer Scheeren u dergl. unter sie aus; sie bezeigten ihren Dank durch dieselben Bewegungen der Hände und des Kopfs, die sie bey dem Gruße machten. Sie senken den Kopf demüthig herab, erheben die Hände und führen sie über dem Kopf nach beyden Schultern. Ihre Waffen, die sie höchstens gegen die Vögel und Bären brauchen, sind Bogen und Pfeile, die wahrscheinlich vergiftet sind. In der Hütte befand sich ein junger Bär, der an einem Pfahle befestigt war, ohngefähr 2 Fuß lang; ich benutzte die Gelegenheit und entwarf eine Zeichnung von ihm. Vögel, die heute geschossen wurden waren Enten, Möven, Droßeln oder Krammetvögel Strandläuffer etc. Die Fische die man hier in der Hütte und in den Böten sahe waren Heringe, Groppen und so viel man aus den geräucherten Stücken sehen konnte, eine Art Lachs. Die Heringe waren frisch gesotten, sehr delikat. Auf dem morastigen Grunde sahe ich zwei Arten von *Arum*, *Caltha palustris* eine blaue Blume wie *Lamium*. Der Wald bestand aus verkrüppelten Föhren und Fichten. Als wir zurück kamen waren *Ainos* und Japonester da gewesen welche Bücher *obsceen* Inhalts Meßer Japonische *Compass* *Carten* und andere Lakwaren vertauscht hatten, es saß ausser diesen noch ein *Aino* auf dem Vordeck, welcher getrocknete ästige ganz schwarze *Holothurien* und Sprizzwürmer zum Verkauf anbot

(6) Sonntags den 12 May 1805. Heute war der übrige Theil unserer Schiffsgesellschaft ans Land gefahren und ich musste also am Bord bleiben. Es war auch gröstentheils Regenwetter trüb und neblig, die *Ainos* [überschrieben aus : Curilen ?] brachten heute keine Fische aber desto mehr Meßer Tobackspfeiffen Kleider und andere Bedürfnüße, wie sie bey ihnen gebräuchlich sind, welche hier am Schiffe begierig gegen alte Kleider Meßer Scheeren Spiegel Blech usw. umgetauscht wurden. Es kam auch ein Japonischer Offizier nebst seinem Gefolge und 10 *Curilen* angefahren, welcher uns gleichsam *examinierte* ; sich nach der Ursache unseres Anlandens erkundigte, das Schießen am Lande verbot und uns zur baldigen Abreise rieth, widrigenfalls er genöthigt seyn würde nach *Matsmai* zu schreiben von wo eine Flotte mit Schießgewehr ausgesand werden würde, die uns fortreiben sollte. Man zeigte ihm, daß wir wegen widrigen Windes hätten ankern müßen, und damit war er zufrieden und gab beyläufig manchen geographischen Aufschluß über die benachbarten Insuln, und überzeugende Beweise, daß er die Curilischen Inseln Camtschatka und Rußland eben so genau kannte als Japan. Hier hörten wir die Japonischen Nahmen und erfuhren, daß wir uns bey dem Lande Jeso befanden : Dieser Mann hatte auch den *Laxman* gesehen und erzählte uns, daß sich auch jezt wieder ein rußisches Schiff im Haven von *Nangasaki* befände - welches dort überwintert hätte.=usw. - Seine Leute aber verhandelten indeßen hier in andern Theilen des Schiffes japanische Ferngläser, Bücher, *lascive* Gemälde Pfeiffen und *lakkirte* Sachen usw. die man in Japan nicht so leicht hatte erhalten können, ich konnte vor der Habsucht der andern nichts bekommen. Die Leute, welche ihn begleiteten, waren Japonische Soldaten in der bunten *Matsmai* uniform ohne Gewehr ich zeichnete einen in seiner Tracht sie trugen sämtlich Strumpfhösen, keiner von ihnen ruderte, sondern die *Ainos* dienten ihnen als Sklaven, einer der *Ainos* der am Steuer stand hatte einen Bärenpels und einen Strohhut auf, der zuckerhutförmig und mit Fischbeinstäben belegt war. Die Böte waren fast so wie die von *Matsmai*. Das Steuer besteht in einem dicken (und breiten Ruder welches oben mit einem Querholz versehen ist es wird nicht am Stern sondern hinten zur Seite des Bots gesteuert und ist frey in den Händen des Steuermanns wie die anderen Ruder./

[6v] Montags den 13 May 1805. Heute früh um 5 Uhr wurde der Anker gelichtet und wir giengen wieder unter Seegel, um 7 Uhr zeichnete ich die Insel *Ribunoschiri*, ein dürres Inselchen, von Klippen umgeben. Hinter derselben ebenfalls in *SW* ragte der große Pic de Langlé hervor, welcher auf der Insel Riuschiri liegt und bereits vorgestern in der Nähe von 2 Meilen gezeichnet worden ist, er ist beständig besonders am Fuße mit Wolken umhüllt und scheint bisweilen zu rauchen.

Nachmittags entdeckten wir einen grossen Irrthum auf der Rußischen Carte welche nach einer Japonischen von *Laxman* und des *Peyrousens Carte* zusammengesetzt ist, theils durch die Nachrichten des gestrigen Japonischen *Officirs* theils durch die Ansicht des Landes *Segalien*, namentlich der beyden *Caps Crillon* und *Aniwa*, welche ich um 3 und 5 Uhr zeichnete ; die beyden *Caps* lagen uns *NO.* die andere Spitze aber *NW.* Später sahen wir in *NO.* einen gefährlichen Stein ganz einsam und abgesondert aus dem Meere hervorragen. [durchgestr. : Wir ändern unsern *Cours* und gehen auf *Urup* los.] Der Seegrund bestand hier aus Kies kleinem Porphy und Senitgeschieben [?], Sand Corallen, Seeeygeln, *Nereiden* und Seewurmgehäusen. Es war heute sehr windig und kalt (3° *Reaumur Thermost.* Wärme) auch regnete es einigemal.

Dienstages den 14 May 1805 (sehr kalt 2 1/2° Rr. Thr. Wärme) es erschienen anfängl. dieselben Berge wie gestern doch von einer andern Seite, *Pic de Langle* in *SW Cap Crillon* in *NO.* und *Aniba* in *NO.* der gefährliche Felsen ist ein wahres Robbeneiland er war ganz mit Seelöwen besäet welche man schon von weitem brüllen hörte. ich konnte durch das Fernrohr deren 2 Arten unterscheiden, eine gelbe kleinere und eine schwarze größere, sie trieben das Wasser weit in die Höhe durch ihr Schlagen und Springen und schienen entweder ihre Begattungszeit hier zuzubringen oder Junge zu haben ich zeichnete alsdann das

*Cap Crillon* welches wir ziemlich nahe paßierten (und beyläufig *Cap Aniba* in *NO 33*) wir giengen Abends in der Dämmerung in der *Bay Aniba* tief bey der Lachsforellenbucht vor Anker. Nachmittags schon sahen wir ein Japonisches Schiff voransegeln welches uns zuvorkam und näher an dem schmalen Landstrich, wo die 15 Wohnungen zu sehen waren, vor Anker gegangen war, es fuhren beständig 2 Bote von diesem Schiffe nach den Wohnungen. Auf den Bergen lag noch vieler Schnee und um unser Schiff herum flogen Albatroße, oder liefen vielmehr mit ausgebreiteten Flügeln auf der Wasserfläche /

(7) Die Lax forellen Bucht

Mittwochs den 15 May 1805. ganz früh war der erste *Lieutenant* an Land gegangen und hatte das Fischnezz mitgenommen, um dort am Strande fischen zu lassen es war aber nicht geschehen und sie kamen Abends ohne Fische zurück. Früh um 8 kamen die Japonese an unser Schiff und erkundigten sich nach unserm Hierseyn sie haben hier einige Niederlaßungen, wir fuhren nach Tische auch an Land aber die Brandung war so hoch und daß Ufer so seicht und so voller Sanddämme, daß wir erst lange nach einer Durchfahrt suchen und endlich doch Japonische und Ainoische Fahrzeuge zum Landen nehmen mußten. Ein ziemlich breiter Fluß welcher sich an einer Japonischen *Factorey* ins Meer ergießt scheint vor seinen Ausflusse die erwähnten Sanddämme gebildet zu haben, die uns hier das Landen so erschwerten. Das Vorland ist ein sehr niedriger und langer Erdstrich von aufgeschwemmten Sande hinter welchem theils Moräste mit Schilf und Sandriedgras theils ein magerer Wald von Nadelholz aus Zwergtannen Fichten und Larichenbäumen verkrüppeltes Birkenholz u s w. zu sehen sind. Ich bemerkte auf dem kleinen Landstrich, den mir die kurze Zeit zu durchlaußen erlaubte Angelika Schierling Holunder wilden Zellery u s. am Strande fand sich im Sande viel großes Treibholz und eine geriebte Spindelschnecke (*Murex despectus vel antiquus L.*) welche mit *fig 1293 Tab 138* im 4t. Bande von *Martinis* und *Chemnitz* Conchylienwerk<sup>5</sup> einige Aehnlichkeit hat, fast jedes Exemplar war mit einer olivenbraunen Seerinde belegt, welche mir neu zu seyn scheint, sie ist etwas rauh und blättert sich trocken leicht ab. Außerdem fanden sich auch große Kammuscheln (*Pecten maximus* mit 2 *convexen* Klappen, die sich beynahe einander gleich sind) Gänsemuscheln (*Anodontites* oder *Mytilus L.*) und Klaffmuscheln (*Mya truncata*) Scheidenmuscheln (*Solen ovatus*) u sw. Von Krabben sahe ich hier die große Teufelskrabbe *Maja maxima* und noch 2 andere Arten, die in der Folge noch näher zu bestimmen sind. Die Landesbewohner sind ganz dieselben wie die auf *Jeso* an der Landspitze *Soja*, auch ihre Sprache Furchtsamkeit etc, ganz dieselben, sie nennen sich wie jene *Ainos* und ihr Land *Karafuta* sie scheinen nicht so unreinlich wie jene und haben schlechtere auch oft gar keine Hütten In dem Magazine der Japaner, welches sehr gut und mit drei facher Kleidung von Stäben Stroh und Scheiten gebaut ist, liegen ganze Schiffsladungen gesalzener Fische, liegen (*Salmo Trutta* u *Salar*) Tonnen Reis und Salz im Stroh auch nöthige Werkzeuge zum Fischfang, um dieselben herum, sind die ärmlichen Hütten der *Ainos conisch* von aufgestellten Stangen mit alten Jap. Strohmatte belegt. Hier kriechen sie theils in Bären- theils in Wolfspelze gehüllt und mit Seehundstiefeln bekleidet dicht zusammen und machen ein

[7v] Feuer in der Mitte an auf welchen sie Fische kochen oder räuchern und darum herum sizzeln und Tobak rauchen. Die Weiber haben blaue Mäuler und sind in Wolfspelze gehüllt die mit einem Tobaksgürtel umgürtet sind. Ihre *Physiognomie* hat mit der *Kamtschadalischen* Aehnlichkeit. Sie sind faul und wie es scheint von den Japonesern unterjocht. In der Jap. *Factorey* saßen 2 Kaufleute, die mit dem Schiffe gekommen waren auf einem erhabenen Sisse und hatten ihre Waaren und ihre *Oekonomie* neben

---

<sup>5</sup> Es handelt sich um das elfbändige Werk : Friedrich Wilhelm Martini und Johann Hieronymus Chemnitz, *Neues systematisches Conchylien-Cabinet ...* Nürnberg, 1769-95.

sich. Eine Menge *Ainos* standen und saßen, im Vorhause um ein großes Feuer, auf dem Fische geräuchert, gekocht und gebraten wurden, herum und rauchten *Tobak*. Die Japoniser sollen auf der andern Seite des Ufers eine grössere *Factorey* und einen Tempel haben. Ein Theil unsere Mannschaft war ganz früh in einer anderen Bucht gelandet, wo eine noch bessere Japonische Niederlaßung war, als hier, sie hatten dort mehr gesehen und mehr erfahren, als wir, die Rückfahrt war ihnen aber auch beschwerlich geworden.

Donnerstags den 16 May 1805 Heute früh um 6 Uhr giengen wir schon wieder unter Seegel, gegen Mittag bekamen wir einen sehr heftigen Sturm, welcher mich seekrank machte, aber bald nachließ Abends um 9-10 Uhr kehrte dieser Sturm zurück und hielt einen Theil der Nacht an. Nachmittags um 5 Uhr paßierten wir das *Cap Aniba*, davon ich eine Zeichnung entwarf. Der Tag war trübe und neblig so, daß man das benachbarte Land nicht deutlich erkennen konnte.

Freytags den 17 May 1805; helles Wetter 6° *Reaumr.* Wärme aber sehr kalter Wind *Cap Aniwa*. Heute früh um 9. und 10 Uhr in der Nähe gezeichnet. Nach Tische Windstille bis in die Nacht, es zeigten sich eine Menge Wallfische auf allen Seiten des Schiffes, welche das Waßer in hohen Stralen in die Luft sprizzten und sich aneinander in die Höhe lehnten und auf der Oberfläche des Waßers spielten. Das Blasen dieser Thiere aus den Sprizzlöchern machte ein brausendes Geräusch, welches man in einer sehr weiten Entfernung hören konnte. Man vernahm auch das Brüllen der Seerobben und Seelöwen unter Wasser. Ich versuchte es einige auf der Oberfläche des Wassers spielende Wallfische zu zeichnen, welches aber sehr schwierig ist wegen der Schnelligkeit des Untertauchens. Bey der heutigen Windstille erschienen Seemelonen oder Melonenquallen (*Beroe*) von ansehnlicher Größe auf der Oberfläche des Waßers, sie waren größer als Hünereyer. In der Nacht hörte man das Blasen und Schnaufen der Wallfische und das fürchterliche Brüllen und Brummen der Robben und Seelöwen, welche hier zahlreich sind. Die ganze Nacht hindurch Windstille.

(8) Sonnabends den 18 May den ganzen Tag bis gegen Abend Windstille helles sonniges Wetter 6° *Reaumr.* Wärme. weit vom Lande getrieben, gegen Abend zeichnete ich das *Cap Tonin* nebst *Cap Aniwa* im Hintergrunde. Es zeigten sich heute viele Seekälber (*phoca vitulina*), auch Wallfische, und ein Taubenähnlicher Landvogel setzte sich auf die Masten flog aber bald wieder dem Lande zu. Ich zeichnete heute eine *Actinia glauca*, einen *Holothurio rostratus* und eine *Amphitrite adspersa*, welche an *Dr. Langsdorfs* Austern festsäßen. Nachts blieben wir liegen um die Aufnah[m]e des Landes wo wir stehen geblieben waren fortzusezzen.

den 19 May Sonntags früh standen wir vor der [...] bergigen Küste mit dem verkrüppelten Gehölze, hinter welchem die Bucht lag, welche zu sondiren *Petrosskyewitsch Kalawatschof* geschickt wurde, bey seiner Rückkunft brachte er zwei kleine Hunde mit, welche Bären ähnlich sind.

Montags den 20. May  
[keine Eintragung]

Dienstags den 21. Nahmenstag des Gesandten *Nicol* - helles sonniges Wetter Windstille bis Nachmittags

Mittewochs den 22 May flaches Land hinten Eisberge Taucherenten kalt 8° *R.* Wärme. Abends giengen wir in der Bay 4 Meilen weit vom Lande vor Anker, Windstille bis den folgenden Tag 5 Uhr, wo wir wieder lichteten.

Donnerstag den 23 Friederici u. *Ratmanof* giengen an Land und brachten 2 Enten und 2 Schnepfen, einen 30 Pf. Salm, Schneckeneyerstöcke eine *Signatus* einen neuen rothen *Fucus* u. *Sacharinus*, 2 *Alcyo-*

*nia, Eschara foliacea, laciniata*

Freytag den 24 May Sturm und Regen, es wurde ein röthlich und bleygrau geflekter eulenartiger Habicht gefangen man war dicht vor den einzelnen Klippen im Nebel vorbeysesegelt ; ein Seehund hatte sich am Schiff gezeigt

Sonnabends den 25 May : sehr neblig kalt ° Rr: Gefrierpunct es wurde gegen Abend wieder stille, beyde Tage brachte ich seekrank im Bette zu.

Sonntags den 26 May. sonnigt und kalt 2° Rr: Kälte die ganze Nord und Westseite war mit Eise bedeckt, große Schollen trieben am Schiffe vorbei und eine Menge Papageytaucher (*Alca Torda*) flogen dicht auf der Meeresfläche. es zeigten sich auch weisgraue Meerschwalben. Man scheint zu beschließen *Segalieu* zu verlassen und nach *Kamtschatka* zu gehen, weil der Gesandte sehr auf dem Beschluß seiner Reise dringt, ich legte heute früh die Tange auf, es waren Zucker tang mit einer dicken Seerinde und *Serpula spirillum*[8v] und ein neuer fuchsrother oder *Isis nobilis* farbener kleinbättriger Tang wovon mir nur ein Exemplar gebracht wurde. Die dicken knolligen Wurzeln des Zuckertanges sind mit *Alcyonium lobatum*, *spongia fucorum corallina Flustra foliacea lacinulata calcarea* etc. durchwachsen und überzogen, Nachmittags untersuchte ich das andere *Alcyonium ramosum gelati nosum*, welches ich bis heute in Seewasser *conservirt* hatte, es ist bläulich durchscheinend schlüpfriecht und inwendig kann man goldgelbe Stellen wahrnehmen die der Quer u. Längendurchschnitt als goldgelbes Mark darstellen, welches seiner Substanz nach weich und breyartig ist und sich durch die längst den Aesten lauffenden Röhren hinzieht (*Structura fibroso tubulosa*) in den Zwischenräumen der Aeste befinden sich viele häutige geringelte Röhren, welche von der *Amphitrite fibrillosa* bewohnt waren, diese Gehäuse sahen dem Japanischen *Fucus tubulosus* ähnlich, nur waren sie etwas stärker von Haut. Wir sahen jetzt Abends leuchtende Körper in den Wellen treiben, -

Montags den 27. May kalt 3° Rr: Wärme früh noch kälter, ebenfalls wieder Eisgang Sturmvögel zeigen sich auch Tümmler, dicken Nebel, der *Barometer* fällt 4° schnell Abends heftiger Sturm, ich arbeitete heute an der Ausführung der Küstenansichten.

Dienstags den 28. May den ganzen Tag und die ganze Nacht Sturm, der um so gefährlicher ist, je näher wir den *Curilen* sind, Es wurden leuchtende Körper auf das Vordeck geworfen, es waren große Fischeyer (Lachs ?), wie die Weintrauben.

Mittwochs den 29. May. kalt sonnigt, früh erblicken wir eine curilische Insel welche blos in einem ziemlich hohen *vulcanischen Pic* besteht, dessen *Crater* raucht, wir bleiben den ganzen Tag wegen beständiger Windstille vor diesem Pic stehen und ich entwerfe eine sehr ausgeführte Abbildung für den *Capitaine*. Es ist hier sehr unangenehm, vorher heftiger Sturm dann ganze Tage lang Windstille mit Nebel, und zwar eine sehr unruhige Windstille, ungeachtet man nicht von der Stelle kommt ; so wird man doch von den hohen Wellen so sehr geschaukelt, als müsse man den heftigsten Sturm aushalten. Gegen Abend erblickt man eine zweite curilische Insel welche der ersten zur rechten Hand liegt und kurz drauf kommt von NordWest herauf dicht auf den Wellen ein dicker Nebel angezogen, der den ganzen *Horizont* einhüllt und verhindert eine Zeichnung zu nehmen. ich untersuchte heute nochmals die leuchtenden Körper welche der Sturm mit den Wellen aufs Verdeck geworfen hatte, es scheinen Fischeyer zu seyn, sie waren jedes von der Größe eines Weinbeerkornes und hatten häutige Stiele, der Inhalt war gallertartig ohne Spur eines jungen Thieres ihr Schimmer war wie eine große feurige Kohle oder glühende Musketenkugel, im Waßer, wie Taubeneyer, In der Nacht fiel ein fast [durchgestr. : fuß] zollhoher Schnee aufs Verdeck.

Diese von Tilesius verfasste Abschrift seines Tagebuches ist an sich schon interessant genug. Sie belegt, dass er bereits zu Lebzeiten anderen Personen Einsicht in seine Rei-

seaufzeichnungen gewährt hat. Man erkennt, dass der zeitweise stark frustrierte Verfasser hier auch persönlichen Gefühlen gegen seine Mitreisenden Ausdruck verlieh. Dabei mag der Gedanke mitgespielt haben, bei möglichen Anschuldigungen von Seiten des ihm feindlich gesinnten Vorgesetzten Nicolai Petrovich Rezanov rechtfertigende Beweise für sein Verhalten zu dokumentieren. Die offen gebliebenen Stellen für Angaben zu Temperatur oder Namen weisen darauf hin, dass er den Text noch nicht vollständig mit den beiden erst später gedruckten Reiseberichten abgleichen konnte, was dann im “offiziellen” Tagebuch (Exemplar im Mühlhäuser Stadtarchiv) nachgeholt wurde. Die Nummern der Blätter stimmen nicht ganz mit der Chronologie überein.

Je länger Tilesius mit einer umfassenden Edition seiner Reisebeschreibung zögerte, desto mehr veraltete sein Material, weil die Naturforschung sich rasch entwickelte und durch neuere Forschungsreisende (wie etwa Philipp Franz von Siebolds Nachrichten über Japan) weitaus fundiertere Berichte über die besuchten Länder an die Öffentlichkeit kamen, als der in der deutschen Provinz zurückgezogen lebende Privatgelehrte sie hätte anbieten können. Bei seinem Tod hatten Tilesius’ Aufzeichnungen nur noch historischen Wert und gerieten deshalb nach und nach in Vergessenheit.

Der Plan von Eduard-Friedrich Poeppig, eine Biographie über den Kollegen zu schreiben, konnte wegen dessen Tod nicht verwirklicht werden.

Einen ersten Versuch, diese Aufzeichnungen auszuwerten und zu publizieren, machte Hans Hasert mit seiner akademischen Hausarbeit<sup>6</sup> in Form einer skizzierten Lebensbeschreibung zu Tilesius, die allerdings keine weite Verbreitung fand. Doch seither ist nicht viel an publizistischer Aktivität bezüglich der Handschriften von Tilesius zu verzeichnen.

## 1. Editionsprinzipien<sup>7</sup>

Soweit es ohne Vergleich mit der originalen Handschrift möglich ist, soll der Text wort-

---

<sup>6</sup> Hans Hasert: *Das Leben des Wilhelm Gottlieb Tilesius v. Tilenau (1769-1857), der als Zeichner und ‘Naturalist’ auf der ‘Nadeshda’ an der ersten russischen Weltumsegelung unter dem russischen Kapitän Adam Johann von Krusenstern teilnahm.* (Päd. Hochschule Potsdam masch. 1965). Vgl. den jüngst erschienenen Artikel von Ingrid Kästner (Leipzig) “Wilhelm Gottlieb Tilesius von Tilenau (1769-1857) – Arzt, Naturforscher und Künstler.” In: *Leipzig-Erfurt: Akademische Verbindungen. Festgabe der Akademie gemeinnütziger Wissenschaften zu Erfurt zur 600-Jahrfeier der Universität Leipzig.* Hrsg. v. Jürgen Kiefer, Werner Köhler und Klaus Manger. Erfurt 2009, S. 91-103.

<sup>7</sup> Vgl. dazu das im Teil I Gesagte (siehe Anm. 1).

und buchstabengetreu wiedergegeben werden. Das bedeutet u.a., dass die Eigenheiten des Schreibers hinsichtlich Orthographie und Interpunktion beibehalten werden. So tauchen Worte wie "Japoneser" und "Japonisch" in einer vom heutigen Gebrauch abweichenden Schreibweise auf. Die durch Tinten-, Schreibfederwechsel und Handschriftvarianten erkennbaren Bearbeitungsphasen können hier nicht rekonstruiert werden. Die in eckige Klammern gesetzten Passagen stammen durchweg nicht von Tilesius, sondern von mir. Die Passagen in geschweiften Klammer zeigen Einfügungen von Tilesius an. Auch kann ohne Kenntnis aller Unterlagen nicht immer deutlich angegeben werden, wo Tilesius Exzerpte dieses Tagebuchs entweder in andere Handschriften übertragen oder dann selber publiziert hat. Die im Tagebuch vorhandenen Hinweise auf Krusensterns *Atlas zur Reise um die Welt* (russ. 1813, dt. 1814) und die *Mémoires* der Akademie der Wissenschaften von St. Petersburg zeigen an, dass Tilesius sich solche Transferaktionen notierte. Möglicherweise hat er ab 1815 bei seinen Vorlesungen in Göttingen und dann in Leipzig auch darauf hingewiesen.

Weil die zum Teil lateinisch verfassten, manchmal sehr ausführlichen naturhistorischen Beschreibungen von Tieren und Pflanzen vorrangig für Taxonomen wichtig sind, bleiben sie hier aus Platzmangel weitgehend ausgeklammert.

## 2. Der Tagebuchtext<sup>8</sup>

### 110. Abreise von Japan, Sondierung der Japanischen Küsten, Insel *Sutsima*, *Oki*

den 18. April 1805 früh wehte ein günstiger Wind, es wurden die Anker gelichtet und wir giengen unter Seegel. Es war eine *Gorgonia Placomus* und eine der *muricata* oder *pilosa* ähnliche *Sertularia* mit dem Anker heraufgezogen, an welcher ich die lebendigen Polypen an ihren Mündungen (X) beobachten konnte, auch zeigten sich einige kleine sehr schöne rosenrothe Seescheiden (*Ascidia*) mit ihren beyden Mündungen, ich war eben im Begriff eine Zeichnung zu machen, als mich ein kleiner Sturm überraschte und den Glas *Cylinder* über den Hauff warf die Seekrankheit stellte sich auch ein und ein plözzliches Unvermögen zwang mich diese Körper dem H.D. *Langsdorf* zur Verwahrung zu übergeben, welcher sie nachher verlohren hat. Ich hatte heute den frühen Morgen benutzt und eine gestern angefangene Zeichnung des umliegenden Landes von unserem jezzigen Ankerplazze aus zu vollenden.

den 19 und 20 April dauerte der Sturm und meine Seekrankheit fort. der 21 April war der erste Osterfeyer-tag der Rußen, das Wetter war erträglich und ich konnte doch wenigstens wieder auf dem Verdecke aushalten, um eine Küstenzeichnung von der Insel *Sutsima* [Tsushima], an welcher wir heute vorbeey kamen, zu entwerfen. Die Japonischen Fahrzeuge folgten uns noch immer nach, um unsern *Cours* zu beobachten.

---

<sup>8</sup> Stadtarchiv Mühlhausen/Th., Signatur : Tilesius Bibliothek, 82/291. Ich danke dem Archiv für die bereitgestellten Kopien.

Am 22 und 23 Aprill sahen wir wieder ein paar Inseln die ich ebenfals, obgleich wir sehr weit vom Lande abhielten, zeichnete, man war noch ungewiß, welche von beyden *Oki sey*.

Am 24 Aprill (8° Wärme *Rr.*) zeigte sich eine große Mövenschaar um unser Schiff mit großem Geschrey, wir hatten sie bisher schon immer gesehen, es war dieselbe Art welche ich im *Nangasaki* Haven gezeichnet habe. (*Larus canus u. cruentus, rastro apice coccinis -atis*) sie haben krumme Knie, lange nackte Füße und einen schnellen poberlichen Tanzmeistergang, ich habe diese Stellung in der Zeichnung nachzuahmen gesucht :

Donnerst. den 25 Aprill. Freytags d. 26 Aprill sonnigt und kühl 10° *Rr. Thr.*

Sonnabends den 27. Aprill der *Barometer* fällt Abends Regen.

Sonntags den 28. – starke Bewegung, große Wellen, *contrairen* Wind, beständigen Regen der Soldat Petruschka liegt an den Kinderpocken krank

Montags den 29. Aprill sonnigt und kühl 10° *Rr. Thr.* der *Barometer* steigt wieder heute sind kleine Landvögel namentl. Bachstelzen an Bord gekommen ; Wir gehen vor den Wind 4 Knoten nach Osten. Abends 10 Uhr heute leuchten die Fische mit matten Glanze und schießen pfeilschnell vor dem Schiffe vorbei, man kann aber doch bemerken daß es nicht der Fisch selbst, sondern vielmehr die kleinen Krebse sind, die er in Bewegung sezt.

#### **111. sind alles *Anecdota* d.h. noch nicht herausgegebene Merkwürdigkeiten**

##### **Nordwestküste von *Nipon*. S. die nautische Abbildung**

Dienstags den 30 Aprill 1805. frischen Wind trübes Wetter 11° *Rr. Thr.* Wärme Ein kleiner Habicht von der Größe einer Taube hellgrau gesprenkelt mit breiten schwarz und weis quergestreiften Schwanze, sezt sich ermüdet auf die Seegelstangen, geht aber bald wieder davon.

Mittwochs den 1 May 1805. Heute früh um 10 Uhr sahen wir das *Cap Toosima* oder die Nordwestküste von *Nipon* in *NO.* in der Entfernung, sie ist von ziemlicher Höhe aber ganz kahl, die Schluchten der Berge sind noch mit Schnee angefüllt, auch zeigten sich am Horizont 8 bis 10 Japonische Fahrzeuge. Es wurde aber bald sehr neblicht und bisweilen kamen Windstöße mit Regen. Wir näherten uns dem Lande immer mehr, ich konnte aber nicht eher eine Zeichnung entwerfen bis nach Tische halb 2 Uhr, um 3 Uhr nahm ich noch eine und eine dritte Abends um 6 Uhr, wo wir uns wieder vom Lande entfernten. Um diese Zeit aber war der Berg, deßen Spitze bisher immer in den Wolken eingehüllt gewesen war, frey, es fiel Windstille ein und dauerte einen großen Theil der Nacht hindurch fort so, daß man befürchten konnte, vom Strohme ans Land getrieben zu werden. Es zeigen sich wieder Bachstelzen am Schiffe, auch trieb wieder Seetang vorbei, von welchem mir die Matrosen für Brandtwein etwas heraus fischten. (10-12° *Rr. Thr.* Wärme)

Donnerstag den 2 May 1803. Wir segelten heute den ganzen Tag an der Nordwestküste von *Nipon* fort. Nachmittags aber fiel wieder Windstille ein. Das Land wird ziemlich niedrig und besteht blos aus gelben Sandhügeln und Bänken, es scheint sich auch nur ganz allmählig zu heben: denn wir hatten 2 deutsche Meilen vom Lande 23 Faden Tiefe [.] Das Wetter war heute ununterbrochen schön und sonnigt. Vormittags schon zeichnete ich einige Ansichten, nachmittags aber ununterbrochen die ganze Küste, welche sich zulezt wieder in ein hohes mit Schnee bedektes Vorgebürge erhebt, an deßen Fuß noch einige Dörfer liegen. Im flachen Lande, welches von den gelben Sandhügeln gebildet wird und blos aufgeschwämte Sanderde ist, die ihre Gestalt mit jedem Jahre verändert war eine Einbucht, an welcher eine ziemlich große Stadt lag [*Nosiro* ?], die einen guten Haven zu bilden schien, wenigstens konnten wir gegen 20 Japonische Fahrzeuge zählen, die hier vor Anker lagen und es schien als wenn der Hintergrund des Havens von der Ausfluß Mündung eines großen Flußes gebildet würde, der sich hier ins Meerergießt. Zu beyden Seiten der Stadt war etwas Busch und längst der Küste weideten ganze Heerden Kühe. Im Hintergrunde erhob sich ein hohes bebautes Land, welches überall volk-



reich und bewohnt zu seyn schien. Ich nahm von dieser Ansicht eine Abbildung. Da wir durch die Windstille einige Stunden in dieser Gegend zurückgehalten wurden ; so ließen sich bald mehrere Fahrzeuge, eben so

#### 112. *Cap Sangar. Straße Sangar 4 Seeräuberböte*

wie gestern auf der Höhe sehen, welche uns zu beobachten schienen und Abends um 7 Uhr kamen 4 große Ruderbarken mit ohngefähr 150 Mann gerade auf uns los. Da eine solche Anzahl nicht von bloßer Neugierde zu uns gelokt zu seyn schien, so brachten sie uns ins Gewehr, zumahl, da man doch nicht zuverlässig wissen konnte, ob es Chineser Japonenser oder Coreer wären: denn sie ruderten {nicht wie Japonenser sondern wie} wir und ihre Barken waren auch ganz anders gebaut als die Japonischen in *Nangasaki*. Als sie aber näher ans Schiff herankamen ; so waren es wirklich unbewaffnete Japonenser, die ganz ruhig ihre Pfeiffe Tobak bey dem Rudern rauchten sie wurden aber durch die Zurüstungen an den Canonen dergestalt geschreckt, daß sie sogleich Seegel setzten und schleunig zurück kehrten. Man rufte ihnen in ihrer Sprache zu, sie mögten sich nicht fürchten und an's Schiff heran kommen, weil man den Nahmen der Stadt und des Landes zuverlässig erfahren wollte ; aber sie kehrten sich nicht daran und seegelten schleunig zurück [.]. Es scheint, als wären sie von dem Befehlshaber der Stadt ausgeschiedt worden, um uns auszukundschaften und zu bewachen : denn man sahe nachher in der Gegend, nach welcher sie hingeseegelt waren, nächtliches Feuer. (*R. Thr.* Wärme 13°) {Es trieb Seetang vorbey.}

Freytags den 3 May 1805. {Heute 5 verschiedene nautische *Vuen* gezeichnet 1 um 8 Uhr um 9 Uhr um 1, 2 und 4 Uhr.}

Das gestrige *Cap* kam heute früh wieder zum Vorschein ; so daß der gestrige hohe Vordergrund heute im Hintergrunde zu stehen kam, wir giengen mit frischem Winde längst der Küste fort (6 bis 8 Knoten in der Stunde) und erreichten um 9 Uhr den sehr hohen mit Schnee bedekten *Pick* {*Tilesius S. Krusenst*} welcher die schmale {flache} lange und niedrige Küste von *Sangar* begränzt, {Kru. Reise II, Band p. 28-33.} Hierauf um 12 Uhr das *Cap Sangar* selbst, welches mit einer langen Erdzunge weit in die See hervorsteht. Wir giengen bis um 2 Uhr längst dem Gebürge *Sangar* fort und sahen die Endspitze deßelben und zugleich die Straße oder Durchfahrt von *Sangar*, in welcher sich ein Japonisches Fahrzeug sehen lies. Um 3 Uhr sahen wir *Matsmai*, deßen Nord*Cap*, so die Straße begränzt, nach unserm Schiffe *Cap Nadesda* genannt wurde. Wir giengen ziemlich nah an das Gebürge *Matsmai* heran, so, daß

#### 113. die Stadt *Matsmai* oder *Maza*. die Inseln oder Vulcane *Koosima*, *Oosima* *Pic Tilesius* ist kein erloschener *Vulcan* (Schiffsgeföhle, Glückseeligkeit des Seelebens. S. pager ist der gröste und *Oosima* der kleinste in der Welt S. *Horners Ausmeßung*. {*Okosir*})

wir die Nordwestliche Spitze deßelben, welche sich allmählig herabsenkt wie auch die Stadt und einige Dörfer deutlich sehen konnten, im Haven der Stadt lagen viele Fahrzeuge vor Anker und einige kreuzzten auch in der Durchfahrt. Sobald man uns bemerkt hatte, wurde sogleich auf dem hinter der Stadt gelegenen hohen Berge ein großes Feuer angezündet, deßen Rauch man so lange bemerkte, bis uns das Land selbst aus dem Gesichte entschwand. Zwei kleine aber sehr hohe einzelne Inseln zeigten sich in *WNW*. schon um 2 Uhr, das *Cap Nadesda* in N. und *Matsmai* erstreckt sich bis *NW*. Das *Cap Sangar* aber lag in *SO*. Ich bemerkte hier Sturmvögel und Papageytaucher. Ob es heute gleich sönniges und schönes Wetter war, so blieb doch der Wind ziemlich frisch und kalt (*R.Th.* 10° Wärme) Das Gebürge von *Matsmai* ist weit höher als die bisherigen und die Gipfel sind noch sämtlich mit Schnee bedeckt und zum Theil in den Wolken verhüllt. Als wir wegen widrigen Windes, der uns nicht erlaubte, nach den Inseln zu steuern, umwändten und wieder zurückgiengen, so bemerkten wir auch auf den *Sangar* Gebürgen Wachtfeuer, welche in regelmäßigen Reihen, fast wie

*Tuffs Illumination* auf *Desima* angesteckt waren, doch hat sich uns heute kein Japanisches Boot genähert. Die Stadt *Matza* schien sehr regelmäßig gebaut zu seyn und lag dicht am Ufer, hatte aber nicht so viele Magazine ohngeachtet sie größer war, als die gestrige Stadt, die uns mit 4 großen {Seeräuber} barken begrüßen {oder auskundschaften} ließ. Küstenzeichnungen habe ich heute mehrere (5.) entworfen.

Sonnabends den 4 May [Datum korrigiert aus: Sonntag 28 April] (sehr kalt 7° *Rr:Thr.* Wärme)  
{Krusenst. Reise II pag. 33.}

Heute früh sahen wir das Cap *Sangar* und *Matsmai* in der Entfernung. Die beyden vulkanischen Inseln *Oosima* und *Koosima* lagen aber näher das Cap *Nadesda* aber ganz entfernt in O. 80. *Matsmai* NO. Der Vulcan *Koosima* NW. er war gestern der hinterste und heute, da wir in voriger Nacht zwar 4 Knoten gegangen, aber 5 vom Strome zurückgetrieben waren der, welcher uns zu nächst lag. Wir fuhren dicht an ihm vorbei, seine Höhe wurde gemeßen, sie betrug von der Meeresfläche 150 Faden {von Horner gemeßen}.

Ich hatte von mehreren (3) Seiten sorgfältige Abbildungen dieses Vulkans {wir wurden 3 mal drum herum vom Strohme getrieben} entworfen, weil ich so nahe war, daß ich die Verwitterungen, die Bruchstücke und Brüche den Crater und das Gewölle sehr deutlich ohne Fernrohr sehen konnte. Er rauchte beständig theils an den Rändern des Craters, theils aus den Solfataren, der Rauch war ganz silberweis. Der ganze Berg besteht durchaus nur aus einer unvermischten und gleichartigen Steinart, welche ganz schwarz blau ist wie Schiefer Trapp Lava oder schwarze Wakke. Auf der Seite waren herablaufende Schluchten und frischer Bruch, welcher durch das Fernrohr porös und braunroth aussahe. Diese *Vulcane* sind unbewohnt und so öde und wüste, daß auch kein Gräschen dort aufkommt. Ich habe den kleinsten Vulcan in den *Memoires de l'Acad. Imp.d.Sc. de St Petersburg 1816* beschrieben und abgebildet in meinem *Memoire sur le plus petit Volcan du globe* um meine Ansicht der *Typhoone* daß sie nicht unter die *Categorie* der Stürme sondern der *Vulcane* gehören geltend zu machen, habe auch eine besondere Abhandlung über den *Typhoon* geschrieben mit welcher das Blut des Prof. *Meinike* in Skeuditz aufgetroknet wurde.<sup>9</sup>

#### 114. *Vulcan Insel Koosima, Cap Otziuy* *Okosir.*

Sie sind steil und {an manchen Stellen sogar} unzugänglich, so weit die Wellen den untern Theil des *Pick* bespülen, so weit bemerkt man die auf einander liegenden Schichten und Lagen des vormaligen Lavaflusses, welche an den Rändern von den Wellen zerstört abgewaschen und entblößt sind. Ich machte die Vorstellung ein Bott auszusezzen und diesen sehr niedrigen Vulcan, der so wenig Zeit und mühe zu beobachten gekostet hätte, zu besteigen, zumal da man bey dergl. Fällen sonst Tage reisen unternehmen und mancherley Unbequemlichkeiten ausgesetzt ist; es wurde mir aber versichert, daß wir dergleichen mehrere treffen würden und daß ich auf festen Lande noch sehr oft Gelegenheit haben würde *Vulcane* zu beobachten. - Um den Vulcan herum flog eine sehr große graue Mövenart *Albatros* Auch zeigten sich Wallfische, welche aus zweien Sprizzröhren das Waßer hoch in die Luft bliesen, später hin sahe ich auch wilde Gänse und Taucher.

Sonntags den 5 May 1805. Heute paßirten wir die Insel *Okosir*.

Montags den 6 May 1805. sonnigt und windstill 13° *Rr:Thr.* Wärme

Wir sahen heute das Cap *Otsiui* oder *Otziuy* und bemerkten gegen 12 bis 1 Uhr gegen über Land in NO, so, daß wir vermutheten hier wieder eine Durchfahrt zu finden. Es war wegen der Windstille Zeit, das *Thermome-*

---

<sup>9</sup> Es handelt sich wohl um Johann Ludwig Georg Meinecke (1781-1823), der 1823 Professor für Chemische Technologie wurde und auf dem Weg zur Kur nach Karlsbad war, als er Selbstmord in Schkeuditz beging. Sein *Lehrbuch der Mineralogie ...* (1. Aufl. 1808, 2. Aufl. 1824) könnte diesbezügliche Informationen enthalten.

ter in die Tiefe herunter zu laßen, das Tau hielt aber nur 150 Faden (und die Meerestiefe ist hier unergründlich.) In einer Tiefe von 900 Fuß war die Wärme des Waßers nur 6° g L., da sie doch in der *Atmosphäre* im Schatten auf 13° *Rr. Thr.* stieg. Die *Japoneser* hatten Zeit gehabt uns auch hier zu bemerken und Signalfener angezündet, Der Rauch stieg an mehreren Stellen des Vorlandes vom *Cap Otsiui* in die Höhe und deutete den Nachbarn die Anwesenheit eines Europäischen Schiffes an. ich zeichnete 5 Ansichten vom *Cap* und der Durchfahrt, die wegen des niedrigen Windes, den wir hatten, heute noch zweifelhaft ist. Abends 10 Uhr verstärkte sich der Wind bis zum wirklichen Sturm, (*Barometer* war auch heute früh schon gefallen) welcher die Nacht hindurch wütete. Uiberall am Lande waren Wacht und Signal feuer angezündet.

#### 115. *Jap. Inseln Teurire und Janekesiri*

Dienstags den 7 May 1805. Heute früh wütete noch der Sturm, Mittags stellte sich Windstille ein, welche bis Abends anhielt, wo wir an dem *Cap Otsiui* herab eine große Bucht und unter den Bergen des Hintergrundes einen stark rauchenden Vulkan bemerkten, der auch des Nachts hindurch in weiter Ferne leuchtete. Ich habe Nachmittag diese Küstenansicht gezeichnet. Es wurden heute wieder Wallfische und Taucher bemerkt, auch sahe ich die große graue Möve wieder unserm Schiffe folgen. Große Bäume Treibholz giengen beym Schiffe vorbey.

Mittwochs den 8 May 1805. Heute befanden wir uns den ganzen Tag in der großen Bucht, deren Vorgebürge ich gestern zeichnete. Gleich früh entstand eine anhaltende Windstille, die uns nicht vorwärts ließ, dabey lag ein beständiger Nebel auf dem nahen Lande, der keine freye Aussicht und keine Zeichnung erlaubte. Obgleich der Tag warm und sonnigt war (14° *Rr. Thr.* Wärme) so blieben doch die Wolken beständig auf den Bergen liegen und der Nebel verbarg bis gegen Abend alles, was uns umgab. Der Seegrund bestand aus *Serpentin* und Lavageschieben ohne Schürl. Die ganze Küste besteht aus den höchsten Bergen deren Gipfel mit Schnee bedeckt sind und noch frostiger aussehen als die Kamtschadalischen.

Donnerstags den 9 May 1805. Heute kamen wir aus der Bucht und paßirten 2 Inseln, *Teurire* und *Janek[s]iri*. Die kleinere und höhere schien unfruchtbar, die andere aber war niedrig und lang, zeigte Waldung und einiges Ackerland. Es zeigte sich ein großer Wallfisch und mehrere Tümmeler, auch sahen wir Zugvögel. Viele Millionen Schwalben zogen in ununterbrochenen Zügen über das Meer von Süd nach Nord und wurden den ganzen Tag beobachtet. Nachmittags erhob sich ein heftiger Wind und ein undurchdringlicher Nebel. Abends war wieder Windstille und starke Schiffsbewegung von dem hohen Meere. (*Siep*) Auf der Russischen *Carte* von *Laxman* ist ein Durchgang angezeigt, den wir neben den heutigen Inseln nicht gefunden haben. (14° *Rr. Thr.* Wärme.)

Freytags den 10 May 1805. Heute früh schon zeigte sich das Land trübe und bald fiel Windstille und Nebel wieder ein bis Nachmittags, wo ich die gestrige Küste wieder sehen und zeichnen konnte. Die beyden Inseln {*Teurire Janneksiri*} waren im Hintergrunde, aber in *NNW.* gegen Abend zeigte sich noch eine dritte Insel sehr bewölkt, welche nur aus einem rauchenden Pik zu bestehen schien {*Pic de Langles*}, es wurde aber dunkel ehe wir ihn erreichten. Nachmittags bemerkte man in eben dieser Gegend ein leeres auf dem Meere herumtreibendes Boot ohne Menschen, man sezzte ein Boot mit 3 Matrosen aus und holte es herbey, Es war ein Japanisches *Cannot*, doch nicht gebauet, wie die Böte

#### 116. ein Japanisches *Cannot* auf dem Meere ohne Leute. Lezzte Spitze von *Matsumai* Soya genannt, bewohnt von *Ainos*. Ankerplazz.

in *Nangasaki*, sondern flach, die Ruder auf beyden Seiten wie bey den unserigen angebracht, 18 Fuß lang mit Stricken zusammengenähet, mit Leisten, eisernen Klammern und kupfernen Nägeln beschlagen und mit 4 Rudern einen hinreichenden Vorrath von Brennholz und einen hölzernen Busch, der ihnen statt Flagge dient, stand japanische Schrift, sie waren von Fichten, das Boot aber schien vom Campferholz zu seyn. In dem

Boote lagen Makrelenköpfe und einige Uiberreste von verzehrten Seesternen (*Asterias rubens*) das *Cannot* war sehr gut und waßerdicht, wurde aber von unsern unvorsichtigen Matrosen beym Heraufziehen an der Seite zerschlagen : Inwendig waren die Wände ganz mit Fischschuppen beklebt und man konnte daraus schließen, daß es ein Japanisches Fischerboot gewesen seyn müße. Die 4 großen Böote, welche am 2ten May Abends aus der großen japonischen Stadt von der flachen Sandküste zu uns kamen, waren beynahe eben so *construiert*, wahrscheinlich war dieses Boot durch den gestrigen Sturm vom benachbarten Ufer losgerißen und in die See getrieben worden.

Wir waren heute ziemlich nahe am Lande, welches niedrig doch mit schroffen Ufern und mit verkrüppelten Busch bewachsen ist. Hinter demselben erhoben sich einige Hügel und Berge, deren Gipfel noch überall mit Schnee bedeckt sind, ich zeichnete dieses Land, weil hier eine vorgebliche Durchfahrt auf der Ruß. Carte von *Laxman* angezeigt ist, davon außerdem ist es keiner Zeichnung werth, arm niedrig und verkrüppelt.

Sonnabends den 11 May 1805. Der Nebel trat sogleich früh um 8 Uhr ein, so, daß ich nur den hohen Schnee Pik der in W. {*Pic de Langlé*} eine eigene Insel ausmacht, zeichnen konnte. Die gegen ihm über liegende Küste zieht sich sehr in die Länge, besteht blos aus niedrigem Busch und Zwergholz, wie in *Kamtschatka*, das hintere Land besteht aus Schneebergen und niedrigen Hügeln, das Vorland, ist, wie hier über all aufgeschwemmter Sand. Bald zeigte sich die Endspitze oder das lezzte *Cap* von *Matsmai*, welches eine lange flache Erdzunge in die See schickt, auf welcher einige Fischerhütten gebaut sind. Sobald uns die Leute erblickten, welche unter Japonischer Botmäßigkeit stehen, zündeten sie ein großes Feuer an, um alle Nachbarn auf uns aufmerksam zu machen bald kamen sie auch selbst zu uns gerudert, wahrscheinlich von den Japonesern abgeschickt, und begrüßten uns freundlich. Sie hatten lange Bärte, dickes

#### **117. die *Ainos*, ein von den Japonesern unterjochtes Volk. Seekörper natürliche Ansicht und Beschaffenheit der Erdzunge *Soya* und Bucht.**

schwarzes und struppiges Haar, wild über das Gesicht herabhängend, ein grobes fast Japanisches Oberkleid, mit einem Gürtel, an dem Tobakspfeiffe und Meßer hiengen, keine Unterkleider, große schwarze Augen breite Nasen vorstehende breite Jochbeine, aufgeworfene Lippen, weiße Zähne, kleine Statur der Gruß bestand in einer Verbeugung, wobey sie die flachen rückwärts gekrümmten Hände empor huben und über beyde Achseln hielten. Ihr *Colorit* war wie das der Kamtschadalen bräunlich gelb. Sie nannten sich selbst *Ainos* und die Landspitze an der Bucht in welcher wir hier vor Anker giengen *Soya*. Gleich nach Tische giengen wir mit 2 *Chalouppen* an Land, es war aber noch so entfernt, daß wir über 1 1/2 Stunde seegeln musten. Wir trafen dort ein sandiges Ufer voller *calcinirter* und frischer Muschelschaalen, Schnecken (*murex pinna Buccin Mac-tra puten*) Seetange *fucus clathras, alatus* {*saccharin, cartilag,*} *etc.*, Meerygel, *Alcyonium* und andern Seeauswurfes. Hinter demselben erhob sich abwechselnd mit morastigen Grunde, Gestrippe und hohen Schilfe eine lange Reihe von Sandhügeln mit niedrigem Busche und Zwergholze bewachsen. Die Gipfel der Höhen waren zum Theil noch mit Schnee bedekt. Diese Hügel waren alle regelmäßig getrennt und standen gleichsam in amphitheatralischen Reihen so, daß sie ganz die Gestalt kurzer Wälle an unsern Festungswerken hatten und eine natürliche Schanze oder Bollwerk zu bilden schienen. Hier und da am Strande laagen zerstreute Fischerhütten in halb Japonischen Geschmack erbaut nebst Trokkenhäusern (wie die Ruß. Palakans in *Kamtschatka*) und Fischerböten von derselben *Construction*, wie wir noch vorgestern eines aufgefangen hatten. Ärmliche und muthlose von Ungeziefer und Ausschlag (*Lepra Graecorum* (*Elephantiasis, Ichtyosis* und *Tinea*) geplagte Familien saßen hier umher, andere waren mit Fischfang beschäftigt, ich sahe hier außer einer Menge Heeringe und Lachsarten einen *Cottus* den ich skizzirte, der sich aber auch in *Kamtschatka* findet. Die Leute schienen geduldig und gutmüthig. Nachdem wir eine ziemliche Strecke in der grösten Geschwindigkeit, als hätten wir sehr zu eilen, am Ufer hingelauffen waren, so kehrten wir in einer Hütte ein, in welcher

gegen 10 bis 12 Menschen im Kreise um einen Feuerherd herum saßen, über welchen ein Kupferner mit Fischen angefüllter Keßel hieng. Sie kochten mit Schnee, und es schien eben nicht als wenn in der Nähe ein Brunnen wäre, weil auch ihr Trinkwaßer aus geschmolzenem Schnee bestand. Vor der Hütte war ein kleines Vorhaus in welchem allerley nach Art der Japoner gearbeitete Gefäße und Geräthe standen. Die Thür zu einem Hause wurde aufgeschoben, eben so ein großes Rauchloch im Kiebel des Daches, welches die Stelle des Schornsteines vertrat. Die Wände hatten eine schiefe Richtung und über dem Feuer war ein Stanggengerüste gebaut, welches mit Fischen, die sie hier räuchernten, behangen war. Auf den Fußboden lagen

**118. Beschreibung der *Ainos*, ihrer Wohnung, Lebensart, Kleidung, Waffen, der Bär ein Hausthier wird von den Weibern gesäugt, an der Brust gros gezogen und dann in einem Käfig fett gemästet u geschlachtet wenn dabey**

japanische Strohmaten und die Leute saßen auch ganz wie die Japaner mit untergeschlagenen Beinen. Die vornehmern hatten auch, wie die Japaner, mehrere Kleider über einander, die untersten oder das Hemde bestand aus Japanischen Zeuge. Das Oberkleid aber aus einem gelbröthlichen von Baumrinde gewebten Trillig, der an den Ermeln und Halse Achseln usw mit blau durch wirkten Jap. Borten besetzt war. Eine ähnliche Tracht doch weit bunter hatten die Soldaten aus *Matsmai*, wie ich in den Abbildungen zeige. Am Gürtel hieng eine chinesische oder Japanische Tobakspfeiffe nebst einen hölzernen Tobakskästchen und einem Meßer von Japanischen Stahl nebst hölzernen modellirten Hefte in einer hölzernen Scheide bey einigen ärmern war die Scheide auch blos aus Baumrinde von Birken zusammengenähet. An der Seite sahe ich auch viele Paare Japanischer Strohschuhe stehen. Die Gesellschaft bestand aus jungen und alten Männern und Weibern und Kindern, sie waren gröstentheils einerley gekleidet und aßen oder rauchten Tobak, ließen sich auch durch unsere Gegenwart gar nicht stören. Man theilte seidene Fälbel, Meßer Scheeren Spiegel und dergl. unter sie aus, sie bezeigten ihren Dank durch dieselben Bewegungen der Hände und des Kopfs, die sie bey dem Gruße machten. Sie sanken nämlich den Kopf demüthig herab, erhoben beyde Hände und sanken sie über dem Kopf nach beyden Schultern Ihre Waffen die sie höchstens gegen Vögel und Bären gebrauchen sind Bogen und Pfeile, die warscheinlich an den Spizzen vergiftet sind. In der Hütte befand sich ein junger Bär, der an einem Pfahle befestiget war, ohngefähr 2 Fuß lang. Ohngeachtet das Thier sehr unruhig war und sich weder untersuchen, noch nahe an sich kommen ließ; so benutzte ich die Gelegenheit und entwarf eine Zeichnung von ihm. Man erfuhr nachher, daß auch die andern Herrn in mehrern *Ainos* Wohnungen junge Bären vorgefunden hatten, es scheint also daß ein gewißer Aberglaube diesen Gebrauch unterhält Vor ihren Hütten standen nackte Tannenbäume, welche mit Querhölzern Haken Stroh, Haren und Federn aufgepußt waren und an welchen gewisse Charaktere eingeschnitten waren. Warscheinlich eine ähnliche abergläubische Sitte. Am Strande hörte ich hier und da Hunde bellen, in den Hütten aber sahe ich keinen. In einer Ecke der Hütte wo ein Lager zum Schlafen war und wo die mehresten Geräthe standen, bemerkte ich 3 bis 4 große schwarze glänzende Zylindrische Gefäße wie die Oefen, welche aus Eisen oder Töpferthon gemacht zu seyn scheinen, man vermuthete, daß sich darin ihre Gözzen befänden, weil sie nichts davon vorzeigen wollten. Es ist warscheinlich, daß dieses von den Japonesern unterjochte Volk auch die Japonische Religion angenommen habe.

**119. Naturerzeugnisse Thiere Pflanzen etc. auf *Soya*. *Hemilepidotus macrocephalus* eine zweite *Species* zu dem neuen Kamtschatkischen *Genus* (sonst war es eine *Var.* vom *Cottus Scorpius*, sie hatten den halb geschupten Fisch nicht untersucht**

Vögel, die heute in aller Eil geschossen wurden, waren Sturmfläuffer Krammetsvögel, Enten, Möven, Taucher, u.s.w. Die Fische, die man hier in der Hütte und in den Böten sahe, waren Heringe, Groppen und Lachsarten. Die Heringe frisch gesotten waren besonders sehr wohlschmeckend. Auf dem morastigen Grunde sahe ich zwei Arten von {*Pothos*}, eine *Calla* einige *Orchides* eine blaue Blumen dem *Lanium* ähnlich. Der Wald

bestand aus verkrüppelten Föhren, Birken und Fichten (*Pinus zembra, pinna laryx etc*) wegen des Morastes und wilden Gesträuches und Dornengeflechtes konnten wir nicht tiefer eindringen, um etwa andere Holzarten zu bestimmen oder aufzusuchen.

Als wir an's Schiff zurückkamen, so zeigte man uns allerley Japonische Waaren die wir in *Nangasaki* vergeblich zu erstehen gestrebt hatten., Es waren namlich während unserer Abwesenheit Japonische Kaufleute an Bord gekommen und hatten hier Japonische Spielkarten, Bilderbücher *obscenen* Inhalts, Lakwaren, Schermeßer, Compaße, Schreibzeuge, Kleider u. dergl. mehr verhandelt. *Ainos* waren noch an Bord und verkauften {Kleider u} geräucherte Fische, Meßer, Tobakskästchen u dergl. an die Matrosen. Ein anderer *Aino* saß auf dem Verdecke und bot uns ästige ganz schwarze geräucherte *Holothurien* und Spizzwürmer zum Verkaufte an. *Sanguifuga marina Fucus natans Saranna* Herbst, u heise Bohnen

Sonntags den 12 May. 1805. Heute war der übrige Theil unserer Schiffsgesellschaft an Land gefahren und ich mußte also an Bord bleiben. Es war auch gröstentheils Regenwetter trüb und neblig.

Die *Ainos* brachten heute keine Fische, aber desto mehr Meßer, Tobakspfeiffen, Kleider und andere Bedürfnisse, die bey ihnen gebräuchlich sind, welche hier am Schiffe mit der gewöhnlichen allgemein verbreiteten Begierde und Habsucht gegen Meßer Scheeren Spiegel Blech usw. eingetauscht wurden. ich bekam nichts von allen, wie gewöhnlich – wurde noch über dies von einem Matrosen um eine *Bouteille* Brandtwein betrogen. Es kam ein Japonischer *Officier* nebst seinem Gefolge und 10 {behaarte} *Ainos* angefahren, welcher uns gleichsam *examinirte*, sich nach der Ursache unseres Hierseyns erkundigte, das Schießen am Lande verbot und uns zur baldigen Abreise rieth, widrigenfalls er genöthigt seyn würde nach *Matza* zu schreiben, vonwo eine Flotte mit Schießgewehr gegen uns ausgesand werden würde, die uns fortreiben sollte. Man erklärte ihm, daß wir wegen widrigen Windes hier hätten Anker werfen müßen und damit war er zufrieden und gab beyläufig manchen geographischen Aufschluß über die benachbarten Inseln und zugleich Beweise, daß er die Curilischen Inseln *Kamtschatka* und Rußland eben so genau kenne als Japan. Hier hörten wir die Japonischen Nahmen der Inseln und Küsten, die wir bisher gesehen hatten, mehrere stimmten mit der *Laxmannischen* überein, und erfuhren daß wir uns bey dem Lande *Jeso* befänden.

**120. der Japanische Befehlshaber auf der Landspitze *Soya* von *Matsmai*. Abschied von *Matsumai*, – Ansicht der Insel *Ribunossiri* und *Riuschiri*, die sich in einen Pic erhebt der bey *La Perouse* *Pic de Langle* heißt, *Cap Crillon Segalien***

Dieser Mann hatte den *Laxmann* persönlich gekannt, und erzählte uns als eine Neuigkeit, daß sich eben jizzo ein Rußisches Schiff in dem Haven von *Nangasaki* befände, welches dort überwintert hätte. usw. Sein Gefolge, welches aus Japan. GerichtsDienern und Soldaten bestand, verhandelte indeßen in andern Cajuten und unter den Matrosen Tobakspfeiffen Pettschafte, Schreibzeuge, Fächer, lakkirte Sachen, Japonische Ferngläser *lascive* Gemälde, Bücher usw. die man in Japan nicht so leicht hätte bekommen können, ich konnte auch jezt vor der Habsucht der andern nichts weiter bekommen, als eine schlechte Tobakspfeiffe. Die Japonischen Soldaten waren ohne Gewehr und in der buntgarnirten dunkelblauen *Matsumai* Uniform, sie trugen sämmtlich dunkelblaue Strumpfsachen, keiner von ihnen ruderte, sondern die armen *Ainos*, die ihnen als Sklaven dienen, griffen sich aus Leibeskräften an, das schwere Bot fortzubringen. Ein *Aino* der das bewegliche aber freye Steuerruder führte, war in ein Bärenfell gekleidet und hatte einen Strohthuth, der zuckerthuthförmig und mit Fischbein stäben bewährt war, auf dem Kopfe. Die Böte waren bey nahe eben so gebauet, wie die von *Matmai* Das Steuer besteht in einem dicken und freyen Ruder, welches eben so gestaltet ist, wie die andern nur größer und statt der Handhabe mit einem Querholze versehen ist, es wird nicht am Stern, sondern hinten an der Seite des Botes gesteuert und ist frey in den Händen des Steuerannes, wie die andern Ruder.

Montags den 13 May 1805. Heute früh um 5 Uhr wurden die Anker gelichtet und wir giengen wieder unter Seegel, um 7 Uhr zeichnete ich die Insel *Ribunossere* in *SW.*, ein dürres Eiland von Klippen umgeben.

Hinter demselben ebenfalls in *S.W.* ragte der große *Pic de Langlé* hervor, welcher auf der Insel *Riuschiri* liegt und bereits vorgestern in der Nähe von 2 Meilen von mir gezeichnet worden ist, er ist beständig mit Wolken umgeben und besonders an seinem Fuße in zerrissenes Gewölk verhüllet, bisweilen scheint er zu rauchen. Nachmittags zeigten sich die Vorgebürge von *Segalien Cap Crillon* und *Aniwa*, welches die Japoniser *Karafuta* nennen. Auf der Rußischen Carte, welche aus *Laxman* und *LaPerouse componirt* ist, ist man durch die Japonischen Carten, welche *Laxman copirt* haben soll, veranlaßt worden *Carafuta* zu einer eigenen Insel zu machen, die von *Segalien* abgesondert ist, in der Natur ist es nicht so, sondern *Karafuta ist Segalien* und *Segalien ist Karafuta*. Man darf nur die Gestalt der Vorküsten von beyden auf der Rußischen Karte vergleichen, so bemerkt man schon die auffallende Uibereinstimmung. Man soll auch durch speziellere Nachrichten des Japonischen *Officers* zur Bemerkung dieses Irrthums aufmerksam geworden seyn, ich bin bey diesen Unterredungen nie zugegen gewesen, und was die Namen der Länder die wir sehen betrifft; so werden sie sorgfältig verheimlicht – was ich nicht weis, schreibe ich nicht!

**121. Der gefährliche Stein voller Robben und Seelöwen. Cap Crillon, die Bay Aniwa wir gehen in der Lachsforellen Bucht vor Anker. Die Japonische Faktorey an der Mündung des Flußes. Die Sanddämme, schwierige Landung pp.**

*Cap Crillon* und *Aniwa* zeichnete ich um 3 Uhr und um 5 Uhr, die beyden Vorgebürge lagen uns in *NO.* die andere Spitze aber in *NW.*

Später hin sahen wir in *NO.* den gefährlichen Stein, welcher mit allem Rechte also von *LaPerouse* genennet wird (*la Dangereuse*) aus dem Meer hervorragen, er liegt ganz einsam von andern Land abgesondert mitten im Meere und ragt, besonders zur Fluth, sehr wenig über der Meeres Fläche hervor. Der Seegrund bestand hier aus Kies, kleinen Porphyr und Senit [?] geschiebe, Sand Corallen, Seeygeln, Nereiden und Serpulin. Es war heute sehr windig und kalt. (*Rr. Thr.* 3° Wärme) auch regnete es einigemal.

Dienstags den 14 May 1805. sehr kalt 2 1/2° *Rr. Thr.* Wärme) Es erschienen anfänglich dieselben Berge, wie gestern, doch von einer andern Seite, *Pic de Langlé* in *S.W.* *Cap Crillon* und *Aniwa* in *NO.* Der gefährliche Felsen ist ein wahres Robbeneiland, er war ganz mit Seelöwen besäet welche man schon von weitem brüllen hörte: ich konnte durch das Fernrohr deren 2 Arten unterscheiden, eine gelbe kleinere und eine schwarze größere sie treiben das Waßer durch ihr Schlagen und Springen hoch in die Luft und scheinen entweder ihre Begattungszeit hier zuzubringen oder Junge zu haben Ich wünschte diese Thiere etwas näher zu besehen und vielleicht eines davon zu schießen, man war aber nicht dazu geneigt. Nachdem wir den Stein, der von dieser Seite eine ganz andere Gestalt hatte, als gestern, so, daß ich ihn beynahe nicht wieder erkannt hätte, paßirt waren, und dem *Cap Crillon* immer näher kamen; so zeichnete ich daßelbe und beyläufig auch *Cap Aniwa* in *NO* 33, wir giengen Abends in der Dämmerung tief in der *Bay Aniwa* welche sonst Lachsforellenbucht genannt wird, vor Anker. Nachmittags schon sahen wir ein Japanisches Schiff voransegeln, welches uns zuvor kam und näher an dem schmalen Landstrich, auf welchem ohngefähr 15 Häuser und Hütten gezählt wurden, vor Anker gieng. Auf den Bergen lag noch vieler Schnee und um unser Schiff herum flogen Albatroße oder liefen vielmehr mit ausgebreiteten Flügeln auf der Waßerfläche hin. Mehrere hatten hier am Strande den unverletzten *Nautilus papyraceus* gefunden.

Mittwochs den 15 May 1805. Ganz früh war *H. Rattmanof* an Land gegangen und hatte das Fischnezz mit genommen, um dort am Strande für uns fischen zu laßen, es war aber nicht geschehen und sie kamen Abends ohne Fische zurück. Früh um 8 Uhr kamen die Japoniser – (blos Matrosen) an unser Schiff, erkundigten sich nach unserm Hierseyn und nahmen eine dictatorische Mine an, wurden aber verlacht. Sie haben hier Niederlaßungen und Fischereyen. Wir fuhren nach Tische auch an Land aber die Brandung war so hoch und das Ufer so seicht und so voller Sanddämme, daß wir erst lange nach einer Durchfahrt suchen mußten und endlich doch noch Japonische und Böte der *Ainos* zum Uiberkommen und zur Landung nehmen mußten. Ein ziemlich

breiter Fluß welcher sich neben der Japonischen Factorey ins Meer ergießt, scheint vor seiner Mündung oder Ausfluß die erwähnten Sanddämme hieher geschlänmt zu haben, die

**122. Natürliche Beschaffenheit des Landes, Bäume, Kräuter, Muscheln, Fische, Magazine und Faktorey der Japaner Hütten den Ainos. Abreise. Cap Aniwa**

die Landung ungemein erschweren. Das Vorland ist ein sehr langer und niedriger Erdstrich vom aufgeschwämmten Sande, hinter welchem theils Moräste mit Schilf und Sandrindgras theils ein magerer Wald von Zwergtannen Fichten und Larichenbäumen verkrüppeltes Birkenholz u.s.w. zu sehen sind. Ich bemerkte auf dem kleinen Landstrich, den mir die kurze Zeit zu durchlauffen erlaubte, Angelika, Schierling Holunder, wilden Zellerie usw. Am Strande im Sande bemerkte ich viel großes Treibholz, und eine geriebte Spindelschnecke (ähnlich dem *Murex despectus* oder *antiquus L.* welcher *fig. 1293. tab 138 Martini Conchyl. Vol IV.*) fast jedes Exemplar war mit einer olivbraunen Seerinde belegt, die sehr rauh ist und getrocknet leicht abblättert, ferner große Kammmuscheln (*pecten maximus* mit 2 convexen Klappen die sich beynahe einander gleich sind Gänsemuscheln (*Anodontites* u. *Mytilus*) und Klaffmuscheln (*Mya truncata*) Scheiden {Ich sahe dort auch einen Hasen *apus timidus.*} muscheln (*Solen ovatus etc.*) {...} Von Krabben sahe ich hier Scheeren und Rückenschilde der großen Teufelskrabbe (*Maja maxima*) und das Menschengesicht. Die Landesbewohner sind ganz dieselben wie auf *Jeso* oder *Matsmai* auf der Erdzunge *Soya*: sie haben ihre Sprache Furchtsamkeit, Geberden, kurz es sind *Ainos* und nennen dieses Land mit den Japanern *Karafuta*. Sie scheinen nicht so unreinlich wie jene auf *Matsmai* wiewohl ärmer, viele haben gar keine Hütten, sondern liegen blos unter einer aufgehängten Strohmatten. In dem *Magazine* der Japaner, welches sehr gut und warm mit dreifacher Bekleidung aus Stäben, Stroh und Scheiten erbauet ist, liegen ganze Schiffsladungen ungesalzener Fische (*Salmo Trutta Umbla* und *Salar*) viele Tonnen mit Reis, unzählige Strohsäcke voll Salz; auch nöthige Werkzeuge zum Fischfang. Neben diesem großen *Magazine* befinden sich noch einige Arbeitshäuser und Vorrathskammern von andern Bedürfnissen, ein Faktoreyhaus, worin der Verwalter und die angekommenen Kaufleute wohnen, ein kleines auf Pfählen gebautes und mit einer Treppe versehenes Gemach, deßen sich die Japaneser in Ermangelung eines Tempels bedienen. Hingegen sind die Hütten der *Ainos* ärmliche konische Gezelte von aufgestellten Stangen mit alten Japonischen Strohmatten oder Thierfellen belegt, in welchen sie beständig Feuer oder wenigstens Rauch unterhalten. Hier kriechen sie in Bären oder Wolfspelze gekleidet, die Weiber mit Seehundstiefeln übrigens eben so gekleidet, zusammen und rauchen Tobak. Die Weiber sind an den Händen tatowirt und haben blaue Mäuler, ihre Kleidung besteht aus Wolfspelzen, die mit einem Tobaksgürtel umgürtet sind Ihre *Physiognomie* hat mit der Kamtschadalischen Aehnlichkeit. Es scheint eine sehr träge faule unreinliche und furchtsame *Nation* zu seyn. In dem Japonischen Factoreyhouse saßen 2 Kaufleute, die mit dem Schiffe angekommen waren, auf einem erhabenen Sitze und hatten ihre Waaren und ihre *Oeconomie* neben sich. Eine Menge *Ainos* und gemeine Japaner {standen und} saßen im Vorhause (*Atrio*) - um ein großes Feuer, auf welchem Fische geräuchert, gekocht oder gebraten wurden, herum und rauchten Tobak. Die Japaneser sollen auf der andern Seite dieses Ufers noch eine ansehnlichere Factorey nebst einem Tempel haben, wie uns einige Herrn unserer Schiffsgesellschaft, die dort gewesen waren, berichteten.

Donnerstags den 16 May 1805 Heute früh um 6 Uhr giengen wir schon wieder unter Seegel, gegen Mittag bekamen wir einen heftigen Sturm, Nachmittags um 5 Uhr paßirten wir das *Cap Aniwa*, davon ich eine Zeichnung entwarf. Der Tag war trüb und neblig, so daß man das benachbarte Land kaum erkennen konnte.

Freytags den 17 May 1805 helles Wetter (6° *Rr.Thr.* Wärme) aber sehr kalter Wind. ich zeichnete das *Cap Aniwa* heute früh um 9-10 Uhr in der Nähe. Nach Tische entstand eine Windstille welche die Nacht anhielt, es zeigten sich eine Menge Wallfische auf allen Seiten des Schiffes, welche das Wasser hoch in die Luft bliesen, sich an einander in die Höhe lehnten und auf der Waßerfläche spielten. Das Blasen dieser Thiere aus ihren Sprizzlöchern machte ein brausendes, Geräusch welches man in weiter Entfernung hören konnte. Man hörte



auch heute

[zwischen S. 122 und 123 sind 4 Blätter ohne Seitenzahlen eingeklebt, die hier als Seiten I bis VII gekennzeichnet sind]

**/I/ Walfische, Seerobben, Seelöwen, Cap Tonin, ein neuer Wurm *Holothurio rostratus*, *Actinia glauca*, *Amphitrite adpersa*.**

das Brüllen der Seerobben und der Seelöwen unter Waßer. Ich versuchte es einige auf der Oberfläche des Waßers spielende Wallfische zu zeichnen, welches aber sehr schwürig ist, weil diese Thiere nicht lange auf der Oberfläche des Waßers aushalten sondern mit ungemeiner Schnelligkeit untertauchen. Bey der heutigen Windstille erschienen Seemelonen oder Melonenquallen (*Beröe*) von ansehnlicher Größe auf der Oberfläche des Waßers sie waren größer als Hünereyer. In der Nacht hörte man das Blasen und Schnauffen der Wallfische, und das fürchterliche Brüllen und Brummen der Robben und Seelöwen, welche hier zahlreich sind. Die Windstille dauerte die ganze Nacht hindurch.

Sonnabends den 18 May 1805. Den ganzen Tag bis gegen Abend Windstille, helles sonniges Wetter 6° *Reaumur Thr.* Wärme. Durch den Strom wurden wir weit vom Lande getrieben. Gegen Abend zeichnete ich das *Cap Tonin* nebst *Cap Aniwa* im Hintergrunde. Es zeigten sich heute wieder Wallfische und viele Seekälber (*phoca vitulina*) auf der Oberfläche des Meeres. Ein tauben ähnlicher Landvogel seetzte sich heute auf die Mastung flog aber bald wieder dem Lande zu.

Ich zeichnete heute eine *Actina glauca* einen neuen Wurm, den ich einst weilen *Holothurio rostratus* {*Cumbricus* oder *Sanguifulga marino*} nenne und eine *Amphitrite adpersa* aus einer Röhre. Diese Würmer befanden sich an den Austern, welche *Dr Langsdorf* am vergangenen Mittwoch gesammelt hatte ; sie waren noch lebendig und ich habe sie mehrere Tage lebendig in Seewaßer in einem Glas Zylinder beobachtet. Der *Holothurio rostratus* ist ein kegelförmiger oder keulenförmiger Wurm, geringelt wie ein Regenwurm, welcher sich beständig wechselweise zusammenzieht und aus streckt und im leztern Falle zwei bis dreimal länger wie gewöhnlich ist und einen mit 10 bis 16 Fühlfäden besetzten Kopf hervorstreckt, der mit einem Maule durchbohrt ist und die Nahrung aufnimmt, aber auch zugleich den Unrath wieder auswirft. Wenn er sich zusammenzieht ; so wickelt er sich gleichsam auf und wendet sich um, wie der *Volvulus* in den Gedärmen Das äußere kehrt sich nach innen und dies Geschäft ist gleichsam ein *Intus Susceptio* zu nennen ; der ganze Wurm begiebt sich in das dicke beutelförmige oder keulenförmige Ende und so erscheint er in jeder Minute in einer andern Gestalt.

**II. *Cap Patience* in der *Baye Patience* vor Anker.**

Nachts blieben wir liegen, um die Aufnahme des Landes, wo wir stehen geblieben waren, fortzusezen.

Sonntags den 19 May 1805. Früh standen wir vor der bergigen Küste mit dem verkrüppelten Gehölze, hinter welchem die Bucht lag, die der *Capitaine* durch den Lieut. *Kalawatschof* sondiren ließ, bey seiner Rückkunft brachte dieser zwei kleine Hunde mit, welche ein bärenähnliches Aussehen hatten.

Seine Nachrichten beweisen, {nb. so viel ich davon erfahren konnte} daß die Bewohner dieser Gegend von denen *Ainos*, die wir bisher gesehen hatten, in nichts verschieden wären.

Montags den 20 May. Küstenzeichnung für den Capt.n übrigens an der Bachstelze und Meise von *Segalien Aniwa* gezeichnet.

Dienstags den 21 May. *Nicolaitag* der Rußen helles sonniges Wetter  
Windstille bis Nachmittags. eine Küstenansicht gezeichnet *Cap Patience* {*La Perouse*}

Mittewochs den 22 May. kalt früh 8° *Rr:Thr.* Wärme {nachmittags 6° *Rr Thr.*} Taucherenten flaches Land Hintergrund Schneeberge. Abends giengen wir in der *Bay Patience* 4 Meilen weit vom Lande vor Anker. Windstille bis den folgenden Tag Abends 5 Uhr wo wir wieder lichteten ich zeichnete heute an der großen breitschnabeligen Ente.

Donnerstag den 23. May. *Friederici* und *Ratmanof* giengen an Land und brachten 2 Enten und 2 Schnepfen nebst einem {3 Fuß langen} 30 pfündigen Salm mit. Ersterer brachte noch außerdem eine Menge anderer Dinge die er unter seine Freunde austheilte, als Muscheln Schnecken, Seekork Seerinden, Tange usw. worunter mir einige neue Dinge zu seyn schienen *Alcyonium lobatum*. *Alcyon* : *striato glandulosum mammilosum seu clavatum ramosum Lepas dentata, rosea spec. Lepas cornuta maxima. Fucus roseus et sacharinus Ovula buccin.mus.* etc. gewundene, zylindrische geballte und nestförmige Schneckeneyer. *S. Ellis* und *Lister.*) Auf dem Zuckertange und Gittertange (*fucus clathrus*) saßen große Seerinden und Wurmgehäuse (*Serpula spirillum* die Bohrmuschel (*Pholas dactylus*) in thonigen Sandsteine und Mergelschiefer in großer Menge. *Eschara* oder *Flustra laciniata candidissima* (neu) eine große achteckige Seenadel (*Sygnathus. Accipunger*) *Pecten maximus valvis aequalibus convexis. Pecten nodosus. Argonauta Argo (Nautilus papyraveus itrum Spagatus Cancer macrourus {Corallen Kammermuschel} C. maja* etc, ich sezte heute die Zeichnung der großen Ente fort.

### III. 22 May 1805. *Phoca Mimica, nautica Ochotensis* ist +Naturkörper von Segalien. Falco. Aquila leucoptera

+ der Stellersche SeeAffe *S. Pallas* neue nordische Beiträge V. pag. *Pennant Synops. arctic. Z. I.*

*Phoca ochotensis Pallas Zoogr. 1 p.117. Phoca nautica I. p. 108. a Tursionibus persecuta*

Da ich einmal das Verzeichniß der Naturkörper, welche aus der *Bay Patience* gebracht wurde angezeigt habe, so will ich es auch noch ergänzen durch die Körper welche ich selbst auf den beyden ersten Ankerplätzen von *Segalien* auf *Matsmai* Spitze sahe und *Bay Aniwa* wahrgenommen habe.

... [lange Liste der lateinischen Namen – siehe Anhang, Abbildung] ...

Das Merkwürdigste am 22 Julii war der Stellersche SeeAffe, am Cap an der Küste von *Sachalien*, er ist kein *Manatus* wie Steller der ihn an der Amerikanischen Küste fand, ohne seine *Extremitäten* deutlich zu sehen zu glauben schien und wofür ihn *Pennant* sowohl in der *Synops.* als in der *Zool arctica st.* wirklich ausgiebt, sondern eine *Phoca* die ich *mimica* nenne, vielleicht *nautica* oder *ochotensis Pallas.* 1. p.117.

*S. Krusenst.* II S. 145 am *Cap Rinnick* d 22 Julii

Steller Reise von *Camtsch* nach Nordamerika (in *Pallas* neuen nord. Beiträgen 5 Bande p.

sahe ihn an der NordAmerik Küste zwischen 54 u 55°.

Diese Bemerk *ex errore loci* hieher gerathen gehört weiter hinten zu pag 130 u 131 unter 22 Julii 1805.

### IV. Eis. 3° Kälte. Abgang von Segalien. *Alcyonium lobatum*

*Fucus membranifolius roseus. Esp. CXV.?* –

Freytags den 24 May 1805. Sturm und Regen und Nebel den ganzen Tag. Man war dicht vor einzelnen Klippen im Nebel vorbeysesegelt, ein Seehund hatte sich in der Nähe des Schiffes sehen laßen. Es wurde ein lillafarbener und bleygrau geflekter eulenartiger Habicht oder Sperber gefangen, welchen ich zeichnete und ausstopfen ließ. (der vorerwähnte *Falco var. Hudsonii vel miniuti L.*)

Sonnabends den 25 May 1805. noch immer Sturm, sehr nebelicht und kalt. 2° Kälte *Rr. Thr.* Beyde Tage brachte ich seekrank im Bette zu. Gegen Abend wurde es wieder stille.

Sonntags den 26. May. 1805 sonnigt und kalt 3° Rr. Kälte.

Die ganze Nord und Westseite war mit Eise bedeckt, große Schollen trieben am Schiffe vorbey so, daß immer 2 Matrosen mit Stangen am Vordertheil stehen und sie abstoßen musten damit das Schiff nicht beschädigt würde. Eine Menge Papageitaucher saßen gröstentheils paarweise neben einander oder flogen dicht auf der Meeresfläche hin (*Alco arctica* u. *Torda* wie es schien)

Es zeigten sich auch weisgraue Meerschwalben. Man scheint zu beschließen, theils wegen den Hindernissen des Eises, theils wegen der Unzufriedenheit des Gesandten, dem die Zeit hier zu lang wird, *Segalien* jezt zu verlassen, directe nach *Kamtschatka* zu gehen und dann wieder hierher zu kommen um die Beobachtungen und Bestimmungen von *Segalien* zu Ende zu bringen : ich legte heute früh die Tange auf : Es waren Zuckertang mit einer dicken Seerinde, warscheinlich *Eschara pumicosa* und der *Serpula Spirillum* dicht belegt und ein neuer kleinblättriger hochrother Tang, {ich vermuthete darin den *Fucus membrosifolius Esper Tab CXVn*} wovon ich nur ein Exemplar erhielt. Die dicken knolligen in einander geflochtenen Wurzeln des Zuckertanges sind mit *Alcyonium lobatum*, *spongia fibrosa*, *corallino officinarum*, *flustra foliacea lacinulata calcarea etc.* durchwachsen und überzogen.

Nachmittags untersuchte ich das andere *Alcyonium ramosum, gelatinosum*, welches ich bis heute im Glaszylinder mit Seewasser erhalten hatte, es ist bläulich durchscheinend und schlüpfrig, so daß man goldgelbe Stellen durchscheinen sieht, die der Quer- und Längen Durchschnitt als ein gelbes Mark zeigen, welches seiner Substanz nach weich und

**V. *mammillosum. Amphitrite fibrillosa. leuchtende Fischeyer. der rauchende Pik, eine curilische Insel. eine andere curilische Insel.***

breiartig ist und sich durch die längst den {Aesten} fortlaufenden Röhren verbreitet. Die innere Substanz ist structura fibroso-tubulosa. Von einer ähnlichen Beschaffenheit schien auch das *Alcyonium mammillosum* oder *ramoso-clavatum* zu seyn, an welchem jedoch die drüsigen Zellen zahlreicher regelmäßiger und deutlicher waren. In den Zwischenräumen der Aeste des erstern *Alcyoniums* hatten sich häutige und geringelte Röhren verflochten, welche die Gehäuse der *Amphitrite fibrillosa* waren. Diese Gehäuse sahen dem Japanischen *Fucus tubulosus* ähnlich, nur waren sie stärker und dichter von Haut. Wir sahen jezt Abends leuchtende Körper in den Wellen treiben, sie sind gros einzeln und von den tropischen merklich verschieden.

Montags den 27 May 1805. kalt 3° Wärme Rr. Thr. früh noch kälter. Heute ebenfals wieder Eisgang, ein dichter Nebel umhüllt das Schiff. Tümmeler und Sturmvögel zeigen sich häufig. Der *Barometer* fällt innerhalb einer Stunde 4°, Ich arbeitete heute an der Ausführung der Küstenansicht von *Segalien* für den H Capt. v. Krusenstern.

Abends trat heftiger Sturm ein.

Dienstags den 28 May 1805. Den ganzen Tag und die ganze Nacht Sturm, der um so gefährlicher ist, je näher wir den Curilischen Inseln kommen. Nachts wurden mit den Wellen vom Sturm leuchtende Körper auf das Verdeck geworfen, es waren Fischeyer von der Größe einer Erbse und einer Haselnuß.

Mittwochs den 29 May sonnig und kalt. 4° Wärme. Früh schon erblicken wir eine Curilische Insel, welche blos aus einem hohen vulkanischen Pik besteht, deßen Crater beständig raucht. Wir bleiben den ganzen Tag wegen anhaltender Windstille vor diesem *Pick* stehen und ich habe Zeit, eine sehr ausgeführte colorirte Abbildung davon für den H.C. v. *Krusenstern* zu entwerfen. Es ist hier sehr unangenehm : man hat entweder anhaltende heftige Stürme oder Tage lange Windstille mit dicken Nebel und zwar eine sehr unruhige Windstille, ungeachtet man nicht von der Stelle kommt, so wird man doch von den hohen Wellen so sehr hin und her geschaukelt, als müste man den heftigsten Sturm aushalten. Gegen Abend mehr durch den Strom als

durch den Wind vorwärts getrieben, erblickten wir eine zweite curilische Insel, welche der erstern zur rechten Hand liegt.

#### **VI. leuchtende Fischeyer. 4 curilische Klippen**

aber kurz darauf kam von NordWest herauf dicht auf den Wellen ein dicker und undurchdringlicher Nebel angezogen, der bald den ganzen Horizont einnahm und auch uns dermaßen verhüllte daß es mir unmöglich war, von der zweiten Curilischen Insel eine Zeichnung zu entwerfen. Ich untersuchte heute nochmals die leuchtenden Körper welche der Sturm mit den Wellen aufs Verdeck geworfen hatte, es schienen Fischeyer zu seyn, sie waren durchscheinend gelatinös von der Größe eines Weinbeerkerens und mit einem häutigen Stiele versehen und in einem ausgespannten dünnen Häutchen eingeschloßen. Darinnen war eine schleimige geruchlose Flüssigkeit ohne Spur eines jungen Thieres. Der nächtliche Schimmer dieser Körper war wie eine glühende Kohle oder wie eine feurige Musketen kugel. Im Waßer war ihr Licht vergrößert bisweilen von der Größe eines Taubeneyes. In der Nacht fiel ein fast Zollhoher Schnee aufs Verdeck.

Donnerstag den 30 May. Früh sahen wir 4 Curilische Klippen in *NW*. Um 12 Uhr fieng es an zu regnen und der Wind wurde stürmisch und schneidend kalt. Es zeigten sich eine Menge Sturmvögeln und Seepapageyen. Der Strom ist hier so heftig daß er auch einem frischen Winde Gleichgewicht hält. Heute Abends sahen wir diese Klippen zum zweiten male und befürchteten vom Strome angetrieben zu werden. Die Brandung war fürchterlich und der Nebel undurchdringlich.

Freytags den 1 Junii 1805. starker Nebel. Von Morgen bis Abend Windstille. Um 12 Uhr sahen wir in *SO*. eine ziemlich große Curilische Insel, es war hohes Land ganz mit Schnee bedeckt. Die Gipfel aber lagen unter dem dichtesten Nebel verhüllt. Hier zeigten sich viele Enten Taucher Seepapageyen. In der Nacht war ein Zoll hoch Schnee gefallen. Ob es gleich Mittag 2° Wärme war ; so war der Wind dennoch so schneidend kalt, daß der Schnee nicht aufthauete. Abends erhob sich der Wind und wurde bald sehr heftig. Der Nebel schien sich mit einem Schneegestöber von den hohen Berggipfeln zu heben, entblößte sie aber nur auf einige Minuten, kaum daß ich ihre Gestalt in meine Zeichnung übertragen konnte. Kurz vor Sonnenuntergang entblößte uns der Nebel eine andere Insel, die uns schon ziemlich nahe war, deren Pic uns, bis wir zwischen beyden durchfuhren, versteckt blieb. Der Nebel brach sich am

#### **VII. Durchfahrt zwischen 2 kurilischen Inseln. Der große Flügeltang *F. alatus giganteus*. eine dritte Insel entfernt, Kamtschadalische Küste *Lopatka*.**

Gipfel und der Pick schaute mit seinem hohen Haupte über den zerrissenen Mantel heraus, verbarg sich aber bald wieder, gleichsam als wenn ihm selbst vor dem rauhen Clima geschauert hätte. Eine dritte Insel lag hinter dieser in *SW*. 50. in weiter Entfernung und zeigten nichts als 2 hohe Berge, welche in dem Schimmer der untergehenden Sonne {noch} deutlicher wurden. Ein heftiger Wind bließ uns im reißenden Fluge zwischen beyden Inseln durch. Während der Windstille trieben eine Menge Flügeltange um unser Schiff, gerade so wie ich sie im vorigen Jahre in Kamtschatka am Ufer gefunden hatte : ich hatte damals keinen derselben genauer untersucht, weil mich der Gesandte damals mit der leidigen *Mineralogie* von *Kamtschatka* gequält hatte. Ich zog also einige derselben herauf und zergliederte sie. Sie kommen von 12 bis 32 Fuß Länge und von 10 bis 24 Zoll Breite vor. Ein mittleres Exemplar welches ich hier zergliederte, hielt 20 Zoll Breite, in der Länge aber, welche jezt nur 18 Fuß betrug, war es verletzt und abgerißen. Uiberhaupt findet man von diesem großen und zarthäutigen Tange selten ein ganzes und unverletztes Exemplar. Der ganze Tang besteht aus einem Blatte mit einer knolligen Wurzel, das Blatt ist an den Seiten aufgerollt und mit Querstreifen undulirt. Die Blattrippe ist ein hohler mit Seitenwänden unterbrochener Stempel es ist wahrscheinlich einer

der grösten Tange in der Natur.

Sonnabends den 2 Junii. Früh lagen uns 2 von den gestrigen Inseln in *NW.* und die dritte in *S.W.* Mittags trat Windstille ein, so, daß wir diese Inseln noch Nachmittags um 4 Uhr sahen. Alsdann aber erhob sich der Wind mit solcher Heftigkeit, daß wir mit wenigen Seegeln 8 Knoten giengen.

Sonntags den 3 Junii 1805 giengen wir mit schwachen Winde vorwärts Nachmittags um 3 Uhr sahen wir die Kamtschadalische Küste Abends da der Nebel etwas schwand, konnten wir *Lopatka* und die erste Curilische Insel sehen. Der Wind wurde frischer und ich mußte eilen die Zeichnungen in der Lage zu vollenden, in welcher ich sie angefangen hatte.

Montags den 4 Junii 1805, giengen wir bis gegen 9 Uhr mit frischem Winde vorwärts, dann aber wurde es still und wir kamen bey Tage nicht weiter als an das *Cap Powarotni* {oder *Cap Turne*}, weil die Windstille Tag und Nacht anhielt. Doch zeichnete ich noch die Picks, welche die *Awatscha* Bay begränzen: als den *Wilutschinska Strelnaja*, *Awatschinska*, *Besimenna* und *Schupanowa*, in verschiedene Ansichten, auch entwarf ich eine weit *instructivre* Ansicht der Einfahrt als *Kook* geliefert hat, für H.C. v. *Krusenstern*

Alle Berge lagen hier voll Schnee, jedoch war es bey der Windstille und dem sonnigen Wetter ziemlich warm 8° *Rr. Thr.* Wärme und selbst noch in der Nacht hatten wir 4° *Rr. Thr.* Wärme.

#### **VIII. Einfahrt die 3 Brüder, *Awatscha* Bay, Peter Pauls Haven. [ ⚓ ] Die *Maria* ein Compagnieschiff unter Commando des Lieut. *Maschin* geht nach *Codjak*, die *Fedosia* Transportschiff nach *Ochotzk***

Dienstags den 5 Junii 1805 war es früh so neblig, daß man die nahen Küsten nicht erkennen konnte. Gegen Mittag wurde es ein wenig heller, jedoch blieb der Nebel auf den Gipfeln der Bergen liegen, bis wir uns ihnen mehr näherten. Ich entwarf deshalb heute nur nahe Küstenansichten, z.B. die der Einfahrt, die *Kook* von der andern Seite geliefert hat, die der 3 Brüder und die des PeterPauls Haven selbst<sup>10</sup>, welchen wir Abends gegen 6 Uhr, da sich der Wind wieder erhob, erreichten. Auf einen Kanonenschuß kamen die *Officiers* heraus und benachrichtigten uns, daß der *Gouverneur Koschleff* bey den *Tschuktschen* und der *Major Krupski* in *Nischni Kamtschatka*, wären, daß ein Schiff von *Ochtosk* und ein anderes von *Kodiak* im Haven lägen, daß der *Artillerie Lieutenant Prokof Michalewitsch Interims Commandant* des Havens wäre, der *Brikaschick* brachte uns Briefe und Pakete mit Zeitungen und Journalen, unter denen aber nichts an mich adressirt war.

Hier erfuhren wir daß *Buonaparte* zu einem *Empereur des Gaules* sey ausgerufen worden und von *Rußland* nicht anerkannt werde etc. Die rußischen *Officiere Lieuten. Quastof. Dawindof* [!] und *Maschin*, welcher letztere das Schiff nach *Codjak* *commandierte*, blieben Abends bey uns zu Tische. Kaum waren unsere Matrosen mit dem Fischneze ausgefahren; so brachten sie auch schon eine beträchtliche Menge Heringe und Dorsch (*Gadus Cullarias*) von 3 Fuß Länge und bisweilen 3/4 Fuß Durchmesser. Man vermuthete anfänglich, daß wir nach den Gesezen des Havens vor der *Koschka* würden *Quarantaine* halten müssen, weil der Soldat *Petruschka* kurz nach unserer Abreise von Japan im Aprill an den Kinderpokken krank gelegen hatte, es wurde aber, weil es der Gesandte so gegen den *Interims Commandanten* wünschte, nicht weiter davon gesprochen. Der Dr. *Espenberg* stellte ein *Attestat* seiner Fürsorge aus, die Ansteckung am Lande zu verhindern und ich und Dr. *Langsdorf* unterschrieben es auf sein Verlangen. Es war auch wirklich alles mit Eiter beschmierte Bettzeug, Kleider etc. in die See geworfen worden und man hatte alles, was vom Schiffe an Land gieng vorher mit dephlogistisirter Salzsäure durchräuchert. [ . . . ]

---

<sup>10</sup> Vier Originalzeichnungen Tilesius' von der Rückkehr in die Awatscha-Bucht befinden sich jetzt im Moskauer Staatsmuseum für Geschichte (freundlicher Hinweis von Philippe Dallais, Zürich).

### 3. Vorläufiges Resumee zu Tilesius' Bericht über Japan

Da in einem weiteren Artikel (Teil 3) noch andere Aufzeichnungen von Tilesius zu Japan (aus dem Berliner Teilnachlass, aus dem Archiv der Akademie der Wissenschaften in St. Petersburg und dem Stadtarchiv Mühlhausen) mitgeteilt werden sollen, kann hier nur ein vorläufiges Urteil gefällt werden.

Was hat Tilesius aus der beschränkten Perspektive "hinter dem Bambusvorhang" von Land und Leuten (Nationalphysiognomie, Handel und Wandel, Bräuche, Kleidung, Regierungsform) registriert ?

Der Vergleich mit den beiden Naturforschern Carl Peter Thunberg und Engelbert Kämpfer und den von ihnen bereits beschriebenen Tieren und Pflanzen fällt zu deren Gunsten aus, da diese beiden Vorgänger besser plaziert und länger vor Ort waren. Natürlich hat er die zu Rate gezogenen Klassiker der englischen Meeresbiologie von John Ellis und Martin Lister studiert. Thomas Pennant nennt er gleich mit zwei seiner Werke : *Synopsis of quadrupeds* (1771) und *Introduction to Arctic Zoology* (1792). Pallas und Steller waren für ihn Pflichtlektüre, da sie die in den nördlichen Breiten vorkommenden Pflanzen und Tiere vor Ort gesammelt und bestimmt hatten. Hinzu kamen Werke von Eugen Johann Christoph Esper über Tange und von Johann Friedrich Wilhelm Herbst über Krabben und Krebse. Auch auf während Cooks Reise entstandene Illustrationen vom Eingang in die Awatschabucht wird von Tilesius hingewiesen, da er diese zu übertreffen hofft.

Vergleicht man das private Tagebuch von Tilesius (vielleicht sollte man eher von Arbeitsjournal sprechen) mit den gleichfalls nur für den privaten Gebrauch abgefassten Aufzeichnungen vom 4. Offizier Hermann Ludwig von Loewenstern, so fällt sofort auf, dass Letzterer sich berufsbedingt natürlich viel mehr Gedanken über Nautisches, Meteorologisches, aber eben auch über Merkantiles und Psychologisches macht als der auf seine naturwissenschaftlichen Objekte fixierte Tilesius, so dass das Erzählte viel unmittelbarer auf den Leser wirken kann.

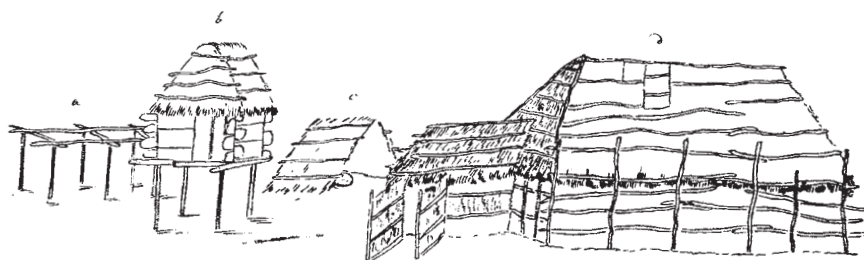
Die Sichtweise und Dokumentation von Tilesius ist in der Tat vorwiegend auf sein Arbeitsgebiet beschränkt. Mitmenschliches gerät nur am Rande ins Blickfeld (etwa der spröde registrierte Selbstmordversuch des japanischen Heimkehrers). Umso mehr fallen daher Werturteile zu den Gastgebern und ihrem Verhalten auf.

Der zeichnerisch weniger begabte Offizier von Loewenstern hat etliche Episoden in karikaturhafter Weise im Bild festgehalten. Vom zum Chronisten avancierten Tilesius könnte

man eigentlich mehr schriftliche und bildliche Dokumentation der beteiligten Personen erwarten. Jedoch scheint er von den Diskussionen an Bord weitgehend ausgeschlossen worden zu sein – oder sie bewusst gemieden zu haben.

Dass er die vier nach Japan heimkehrenden Seeleute nicht portraitiert hat, erscheint unwahrscheinlich. Aber diese Konterfeis sind weder im “Atlas” noch in den vorliegenden nachgelassenen Illustrationen auffindbar, obwohl Loewenstern sich von solch einer Skizze am 27.IX/9.X. 1803 eine Notiz gemacht hat.

#### 4. Abbildungen



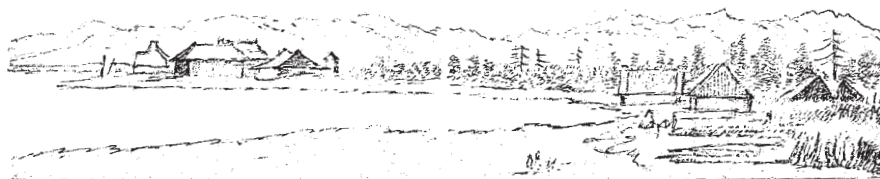
a, für Gerüste die Fische zu trocknen, b, Vorrathskammer der Sibirier. c, für die russ. d, das Wohnhaus ———, Matmai, Sakhalin, u. in republikanisch Kompendium der Kurilen u. galit Odenokche.

Tagebuch Herm.Ldw.v.Loewenstern (EAA, Historisches Archiv, Tartu, Krusenstern Font, f. 1414, N3, S4, Nr. 95) (B: 20.2 × H: 11.7, rotbr. Tinte, geschöpftes Papier m.Wz.) Siedlung auf Holzpfählen – “a, Ein Gerüste die Fische zu trocknen, b, Voraths Kammer oder (russ.: balagan) c, Ein Keller. d, das Wohnhaus ——— (russ.: auf Matsmai, Sachalin, und auf den Kurilischen Inseln normal und diese Gebäude sind ähnlich).





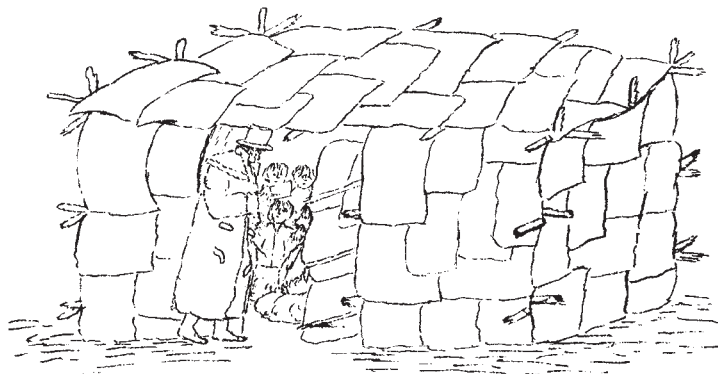
*Aniwa Bay auf Segalien Lachsforellen Bucht Etablissements der Japaner.*



„Aniwa Bay auf Segalien Lachsforellen Bucht Etablissements der Japaner.“

[Tilesius-Album, Nationalbibliothek Moskau, Font 178 M 106935 a]

99



Tagebuch Hermann Ldw.v. Loewenstern, (EAA, Tartu, Krusenstern Font, N. 3, S. 4, Nr. 99) (B : 15,3 × H : 10,8)  
Europäischer Zeichner (Tilesius ?) vor einer Ainu-Hütte



# 連濁に対する（見かけ上の）反例

高 橋 直 彦

## 0. 摘 要<sup>(1)</sup>

日本語には、複合語後部成素初頭の清音が濁音として具現する現象（いわゆる連濁）が観察されることが指摘されている（e.g. 田舎 + 侍（さむらい）→田舎侍（-ざむらい））。加えて、連濁を阻止する制約もこれまでに幾つか指摘されている（つまり、連濁が適用されない場合にも、連濁の適用不可自体を司っている副次の一般則があることが明らかにされている）。そして、かかる阻止制約のいずれにも抵触しないにも拘わらず連濁が見られない事例に関しては、これを例外視するというのがこれまでの慣例であって、立場によっては、連濁には例外が多過ぎるため語彙項目ごとに連濁適用の可否を個々に指定するという方策が結局は早道である、とさえ言われることがある。本稿では、こうした見解で云われる例外というものが、真の反例と見かけ上の反例とに大別され、かつ、真の反例と呼ぶべき事例は想定されているよりもごく少数であることを指摘し、併せて、そもそも、伝統的な文脈で云われる連濁の例外という概念そのものが、連濁という現象の本質を基本的に見誤ったこと——全体的視野を欠き、機能主義的観点を看過したこと——に起因することを指摘する。

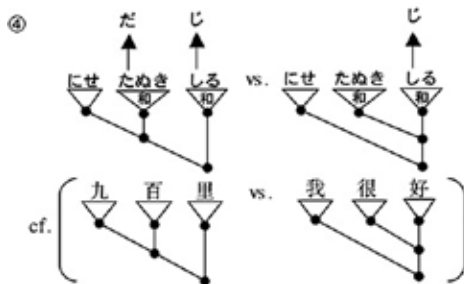
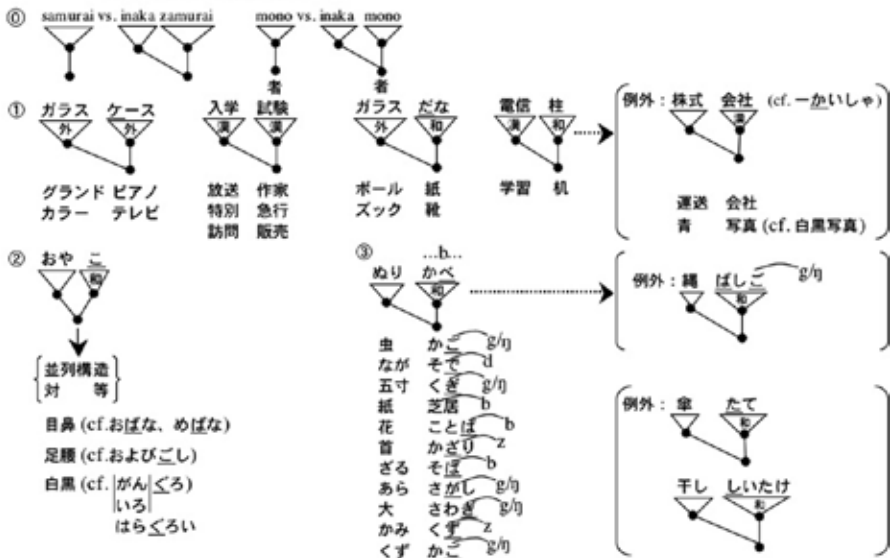
(1) に本稿全体の論の展開と結論とを図式化しておくので、随時参照されたい。因みに、(1A①, ③)の[±有]の「有」は「有声音」の略、①の[+和]の「和」は「和語」の略である。(1A⑥)および(1C)が本稿で主張したい点である。1節では、連濁に対する阻止制約として伝統的に指摘されてきた諸制約を見る。これを承けて2節では、かかる制約に照らしてもなお説明がつかないとされてきた連濁に対する例外を見る。3節では、2節での例外扱いの多くが基本的に連濁の本質を見誤ったことに起因すること、そして、もっと広い視野を見据えた機能主義的観点から連濁現象の存在理由（raison d'être）を捉え直すとき、真の反例はこれまでに想定されてきたよりも少数であることが判明することを指摘し、連濁（を始めとする言語現象）に対する機能主義的観点に基づくアプローチというものの重要性を指

---

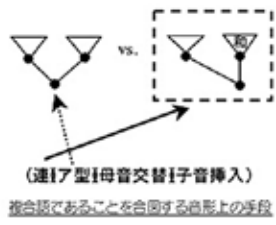
(1) 本稿で論じたトピック自体は、インフォーマルな形のものも含め、既に1990年より、筆者担当の大学での授業や学会での口頭発表といった機会でも折りに触れ公にしてきたものである。とりわけ授業の場では、データのもつ言語学的な意味合いを考察することに加えて、「発想のための図式化の重要性を考える」という文脈で言及をしてきたという経緯がある。以下のページにアップした図式化の例も参照されたい。<[http://raspberrys.jp/chart\\_e.g.html](http://raspberrys.jp/chart_e.g.html)>

(1)

- (A) ① [±有]の対のある音の[-有]→[+有] (=「連濁」の定義 (の一部))
- 連濁絡みの因子：  
 ① 右側要素/後部要素が[+和]  
 ② 意味的に前・後部要素が対等でない (=後部要素が主要部)  
 ③ 後部要素に、[±有]の対を成す音のうちの[+有]の子音が含まれていない = Motoori-Lyman's Law  
 ④ 「枝別れ制約」も関与  
 ⑤ 一定の「項構造」を区別する必要性/有効性も関与  
 ⑥ 機能主義的観点の重要性



- ⑤ 項構造：手書き vs. もの書き  
 ⑥ 機能主義的観点の重要性



(1) 連+ア型	わらい+こど	→	わらいごと
	くさ+はな	→	くさばな
		→	くさばな
(2) 連	わらい+こど	→	わらいごと
	にし+ひ	→	にしび
(3) ア	あさ+ひ	→	あさひ：例外ではない
(4) 無変化	あさ+ひ	→	あさひ
	ゆう+ひ	→	ゆうひ
	ほし+しいたけ	→	ほししいたけ
cf. にしび (日差し)      ゆうひ あさひ (太陽) (太陽)			



摘する。なお、連濁についての通時的考察（連濁が歴史的にどの時期に現れ、連濁出現の契機となった音声的なメカニズムはいかなるものであったのか、等）は本稿の直接の関心事ではない。ただし、「通時態」と（「通時態」と似て非なる概念たる）「文法間規則」との間の概念的異同の問題については、後程、論の展開上一部触れるところがある（4. 補説）。

## 1. 連濁阻止制約

日本語には、(2)に見るように、複合語後部成素初頭の清音が濁音として具現する、いわゆる連濁が観察される<sup>(2)</sup>。

- (2) a. /k/ → [g]/[ŋ] : 他人 (ひと) + 事 (こと) → 他人事 (-ごと)), etc.  
 b. /s/ → [z] : 田舎 + 侍 (さむらい) → 田舎侍 (-ざむらい)), etc.  
 c. /t/ → [d] : 両 + 隣り (となり) → 両隣り (-どなり)), etc.  
 d. /h/ → [b] (/p) : ゴミ + 箱 (はこ) → ゴミ箱 (-ばこ)), etc.

さらに、この連濁（という仮説）には、これを阻止する制約（補助仮説）が幾つか存在することもこれまでに指摘されている。これには少なくとも(3)に示す制約群を挙げることができ。McCawley (1968), Otsu (1980), Ito & Mester (1986), Vance (1987, 2008), 内海 (1998), Tsujimura (2006) 等を参照されたい。上山 (1991), 大津 (2004) には、非常に分かりやすい形での導入的な説明が見られる。（因みに、これは科学的な仮説構築という営為一般に当てはまる点だが、ここに挙げた連濁阻止制約群 = 補助仮説群でもって全てが尽くされているのか否かは、現段階では（さらに言うなら、原理的にはいつまでも）実は分からないのであるが、この点の本稿全体の結論を根底から覆す因子とはならないことは、論の展開に伴い、了解頂ける筈である。）

- (3) i. 語種の違いに基づく制約 (cf. (1A ①))  
 ii. 意味の違いに基づく制約 (cf. (1A ②))  
 iii. いわゆるライマンの法則 (cf. (1A ③))  
 iv. (右) 枝分かかれ制約 (cf. (1A ④))

---

(2) a が [g] [ŋ] いずれで具現するかには方言差等の因子が絡むが、本稿では立ち入らない。また、d が [b] [p] いずれで具現するかにも複雑な因子が絡み、同じく立ち入らないが、連濁というとき、通常は [p] となるケースは除いて考える。いずれにせよ、こうした点を勘案しても分かるとおり、連濁は純粋な音声現象ではなくて、典型的な形態音韻現象である。

## v. 項構造弁別の際の必要性/有効性 (cf. (1A ⑤))

以下、(1)と(3)とを行き来しながらもう少し具体的に見てゆくことにしよう。(1A ①)は、連濁が単なる「有声音化現象」と規定されるものではなく、「対応する有声音の片割れ (=濁音)が存在する無声子音 (=清音)が有声音化 (濁音化)する現象」である旨を述べたものである。「田舎者」の「者」の [m] は有声音だがそもそも通常 有聲・無聲の対立がないため (つまり、清音と対を成す濁音ではないため) この場合連濁とは見做されない訳である。連濁の「濁」は正しく濁音の「濁」なのである。(濁音は有声音の真部分集合を成す関係にある。)

因みに、これは次に述べる点とも関わるのであるが、(1B)の右に示す如く、和語では「濁音は語頭に立たない」という制約が存在するお陰で、「-ばな」=「はな」、「-ぞら」=「そら」という連合が容易に成り立つことになる。(こうした制約を持たぬ外来語・漢語では、それぞれ「(-) pig」≠「(-) big」、「(-) 店 ((-) ten)」≠「(-) 電 ((-) den)」等となってしまう。)

次に (1A ①)=(3i) を見よう。連濁は基本的に「後部成素が、語種の点で和語の場合に観察される」という語種制約をもつ現象である。「ガラスケース」の「ケース」は和語ではない(外来語である)ため、「ガラスゲース」にはならないし、「入学試験」の「試験」も和語ではない(漢語である)ため、「入学じけん」にはならない。(敢えて「入学じけん」と発音すると「入学事件」という別の意味の表現になってしまう。)「ガラス柵」「電信柱」は「柵」「柱」が和語であるため「-だな」「-ばしら」と定石通り連濁する<sup>(3)</sup>。

(1A ②)=(3ii)に移ろう。連濁には、和語であるという条件に加えて、「複合語の前部成素と後部成素とが意味的に対等な並列構造にある場合ではなく、後部成素が意味的に主要部である場合に適用される」という意味制約も課されることになる。(1A ②)に示した「親子」が「おや-ご」と連濁せず「おや-こ」のままであるのは、「親子」という表現においては「親」と「子」とが意味的に対等・並列の資格に立っているためであり、「子」が「親子」の意味的な主要部に立つ関係にあるのではないためである。(「おや-ご (親御)」さんという表現もあるものの、ここでの論点には当然当てはまらない<sup>(4)</sup>。)

(1A ③)=(3iii)に移る。これは「複合語後部成素に濁音が既に含まれている場合には連濁が阻止される」という趣旨の音韻制約である。発見(1894)者とされる Benjamin Smith Lyman (1835-1920) の名に因み「Lyman の法則」として知られる (が、この現象自体は既に本

(3) 和語か漢語かの違いは、漢字表記するか否かとは別次元の話である点に注意。「柵」「柱」は漢字で表記するしないに関わらず和語である。

(4) 連濁の話とは直接関わらないが、「親御さん」という言い方は、非主要部の「御-」が主要部に後続する(「-御」)という有標のケースとなっている。(ついでながら、住所表記にみる「(大)字-」は、逆に、主要部である「(大)字-」が非主要部に先行するという有標のケースである。通常は、「-番地」「-丁目」「-村」「-町」「-市」「-県」等、全て主要部が非主要部に後続する。)

居宣長 (1730-1801) によって指摘されているとされるため、本来「Motoori-Lyman の法則」と呼ぶべきものである)。また、かつては前部成素に含まれる濁音によっても連濁が阻止されていたと言われており、「なか+じま (中島)」vs. 「なが+しま (長島)」等の対立にその痕跡を見ることができる。(これは、「濁音の連続を嫌う」という音声レベルの因子が形態構造という因子を言わば凌駕した結果と把握することができる。)

次に、(1A ④)=(3iv) について。これは「複合語の構成要素たる形態素が3つ以上に及ぶ場合、要素間の結合順序の違いが連濁の適否に影響を与える」ことがあり、かかる違いは(1A ④)に見る如く「左枝分かれ vs. 右枝分かれの違いに帰するものとして図式化・一般化可能である」という趣旨の形態構造制約である。「にせ」+「たぬき」+「しる」は、<<「にせ」+「たぬき」>+「しる」>という結合順序の場合(左図)、定石通り(2度)連濁して「にせだぬきじる(狸ではないものを食材にした汁物)」となるが、<「にせ」+<「たぬき」+「しる」>>という結合順序の場合(右図)は、「にせ」と「たぬき」とが構造上相対的に離れてしまうためにそこでは連濁が起こらず、「にせたぬきじる(狸汁と称しているがそうではない汁物)」と1度だけ連濁する、という違いが生ずる訳である。(cf. Otsu (1980), 大津 (2004)) (なお、これは連濁ではないものの、北京官話の四声の「変調」(/三声 + 三声 / → [二声 + 三声])にも基本的に同じ原理が働いていると考えてよい。「九百里」(左図)が[二声 + 二声 + 三声]と定石通りに具現するのに対して、「我很好」(右図)は[三声 + 二声 + 三声]と(変調が1度だけ適用される形で)具現する。ただし、興味深いことに、「我很好」をある程度以上の速さで発話した場合には[二声 + 二声 + 三声]と定石通りに具現することがある。これは、形態構造という因子を発話速度という音声レベルの因子が凌駕した結果と把握することができる。)

(1A ⑤)=(3v) について。「手書き (-がき)」vs. 「もの書き (-かき)」を比較すると、「もの書き」では連濁が適用されていない。上述(1A ①-④)=(3i-iv)のいずれをもってしてもこの不適用は説明がつかない。けれども、(次節でも指摘するとおり)これは単に例外視すべきものでもなくそれなりの謂れのある例外とでも呼ぶべきものである。後部成素に対する前部成素のもつ意味関係(=項構造)に着目すると、「手書き」=「手で [手段] 書くこと」vs. 「もの書き」=「もの(文章)を [対象/結果] 書く人」といった違いが浮き彫りになる。(cf. 内海 (1998)) つまり、連濁が前者で適用され後方で適用されないという形で連濁の適否そのものが、両者の項構造の違いを合図しているという、間接的ながらもある一定の意味弁別の役割を担っている訳である。

以上、本節では、連濁に対する阻止制約として指摘されてきた制約を概観した。これを承けて次節では、かかる制約に照らしてもなお説明がつかないとされてきた連濁に対する例外



を瞥見する。

## 2. 連濁に対する例外

本節では、前節で見た連濁阻止制約に抵触しないにも拘わらず連濁が見られない事例（これを「例外」視するのが従来の慣例）、もしくは連濁阻止制約に抵触するにも拘わらず連濁が見られる事例（これを「例外に対する例外」視するのが従来の慣例）を見ることにする。

まず [+和] が絡む (1A ①)=(3i) を見よう。「例外に対する例外」として後部成素が漢語であるにも拘わらず連濁を起こすものに「株式/運送会社 (-がいしゃ)」「青写真 (-じゃしん)」等がある。「-会社」に関しては、2点指摘すべき事項がある。第1点。和語 vs. 外来語・漢語という図式が厳密に史的事実に基づく概念というよりも日本語母語話者にとっての共時態の次元での（無意識裡の）意識に基づく概念であるという点である。換言するなら、重要なのは、「会社」という語彙項目が歴史的に漢語として採り入れられたか否かという事実関係の方ではなくて、この項目を現用している母語話者にとっての共時態レベルでの馴染み度の方だという点である。つまり、この項目は、既に和語に準ずる程に馴染みのあるものとして（無意識裡に）受け容れられてしまっているからこそ、和語同様の扱いを受けて連濁の適用対象となる、といった見方である。<sup>(5)</sup>第2点。第1点の傍証として、頻度は落ちるが「株式/運送会社 (-かいしゃ)」といった発音も聞かれる（cf. 「某 K&K」）という意味での「揺れ」を示す項目である点を勧告されたい。「-写真」に関して、2点指摘すべき事項がある。第1点は「-会社」の場合と同様の点である。第2点。第1点の傍証として、「白黒写真 (-しゃしん)」<sup>(6)</sup> という「揺れ」も示す点。さらに、「青写真 (=じゃしん)」vs. 「白黒写真 (-しゃしん)」の違いは、両者の枝分かれ構造の違いに帰すべきものと思われる。ここで1節の「にせだぬきじる」vs. 「にせたぬきじる」の議論を想起されたい。両者の違いは、別の観点から見ると、「にせ」とそれ以降の部分との結びつきの緊密度と捉えることも可能である。即ち、仮にいま緊密度の違いを「にせ =」緊密度高い vs. 「にせ -」: 緊密度低い と表記することにするなら、「にせ =だぬきじる」: 緊密度高い vs. 「にせ -たぬきじる」: 緊密度低い、という図式が想定可能であろう。これと基本的に同様の違いが「青 = 写真 (=じゃしん)」: 緊密度高い vs. 「白黒 - 写真 (-しゃしん)」: 緊密度低いとの間に見られる、という訳である。

(5) これも連濁とは直接関わらないが、外来語としての語種意識が薄れて和語に準ずる扱いを受けた例として、特定の職業人が用いる「おビール」という言い方がある。「お-」は和語、「ご-」は漢語につき、外来語には何もつかないというのが原則である。e.g. 「お名前」「ご氏名」「ネーム（プレート）」

(6) 因みに、1節で述べた通り（cf. (1A ②)=(3ii)）、意味制約により「白黒」は「しろ-くろ」と濁音化しない。

その証拠に、「白黒 - 写真 (-しゃしん)」は写真の一種であって、(ほぼ)「白黒の写真」と言い換え可能な(相対的に「句」に近い)複合語であるのに対して、「青 = 写真 (= じゃしん)」は「青い写真」とは言い換えることのできない、全体がもっと熟した塊としての(典型的な)複合語表現であって、そもそも写真の一種ではない。

「株式/運送会社 (-がいしゃ)」「青写真」以外にも「例外に対する例外」はあるが、この点に関しては次節で触れることにする。

対等・並列という意味構造が絡む (1A ②) = (3ii) に関しては、制約がある意味素直に適用されるので割愛して、「Motoori-Lyman の法則」絡みの (1A ③) = (3iii) に移ろう。有名な例外は「縄ばしご」である。後部成素に既に濁音「ご」が含まれているにも拘わらず、連濁(「-は」→「-ば」)がだめ押し的に適用されるという意味で、「Motoori-Lyman の法則」が当てはまらない例、本節の初めて述べた「例外に対する例外」に相当する例である。これに対する扱ひも次節で述べる。

枝分かれ制約が絡む (1A ④) = (3iv) および項構造が絡む (1A ⑤) = (3v) についても、上で既に触れた点以外は次節で述べることにする。

### 3. 機能主義的観点の重要性

本節では、前節で見た伝統的な例外扱ひが基本的に連濁現象の本質を見誤ったことに起因すること、そして、広い視野を見据えた機能主義的観点から連濁の存在理由をあらためて捉え直すなら真の反例がごく少数であることが判ることを指摘し、連濁に対する機能主義的アプローチが重要であることを指摘する。

結論から述べよう。連濁の存在理由/機能を一言で述べるなら、要素 A と要素 B (前部成素と後部成素) が個々バラバラに並んでいるのではなく、全体で一つのまとまりをもったもの(複合語)だということを音形上合図する一手段、ということになる。ここで重要なのは、飽くまで一手段であるという点である。(1A ⑥) = (1C) に見る如く、複合語であることを音形上合図する手立てが日本語には実は複数個存在し、かつ、そのうちのどの一つ(もしくは複数)に依拠する形で合図しても原理的には構わない。連濁はそのうちの一手段であるに過ぎない。複数個の手段のうちいずれでも、複合語であることを合図できれば、それで目的は達せられるのである。従って、複数個の手段のうちただ一つ (= 連濁) のみに視野を限定し、その「適用・不適用」を事細かに云々しても、そのこと自体には実質的な意味はほとんどないことになる。

ここで、直感的に理解するために喩えを援用して考えてみよう。いま、ある工場で行なわ

れる作業行程として、2つの物体を何らかの手段で繋げて「1つのまとまり」にするような行程を想定する。その手段として（便宜上）以下の3つの選択肢があるものと仮定する。即ち、2つの物体を（A）鎖で連結する、（B）銚（かすがい）で連結する、（C）粘着テープで連結する、の3つである。さて、2つの物体が「1つのまとまり」になっていると見做されるための条件は、「(A) か (B) か (C) の少なくともいずれか1つの手段で連結されていること」である。もちろん、だめ押しの複数の手段で連結されていても構わない。（つまり、包括の「または」= inclusive 'or' の世界である。）いずれにせよ、いまの場合、少なくともいずれか1つの手段で連結されてさえいれば「1つのまとまり」と見做されるには事足りる訳である。このような状況下で、全体の中からたまたま（A）以外の手段で連結されているものを敢えて取り出してきて、「これは（A）という手段を使っていないではないか。（A）手段使用の例外だ」と言挙げしたところで、実質的な意味はほとんどない。これと同じことである。

連濁の例外云々という伝統的な論議は、連濁という現象が（他の現象と協働しつつ）そもそも何故存在するのか（連濁の存在理由）、つまり、日本語の音体系の中で連濁という現象が（他の現象と協働しつつ）一体どのような働きをしているのか（連濁の職能）、その根本原理を見定めることができなかつたことの証左である。

さらに言うなら、連濁がこうした職能を果たすあくまでも一つの手段であって、同様の職能を果たす手段が他にも用意されているということは、考えてみるなら納得のいくことである。そもそも連濁には(3)に示したような適用上の制約が課される訳だが、このことは、とりもなおさず連濁のカバーする守備範囲が限られていることを意味するからである。つまり、まとまりであることを合図する手段が連濁のみであってはある意味逆に困ることになる。連濁の他にそれぞれ守備範囲を部分的に異にする複数の手段があることによって初めて、（まとまりであることを合図可能な）全体の守備範囲が広く確保されることになる。例えば、「村祭り（むら-まつり）」の場合、「-まつり」は[m]で始まるので連濁のしようがない。しかしながら、この場合、代わりに「アクセント型の交替」に依拠する形の手段に訴えている。「まつり」→「むら-ま<sup>1</sup>つり」また、(1A③)の「紙芝居」は、「Motoori-Lymanの法則」のために「連濁」は阻止されるものの「かみ+しばい」→「かみし<sup>1</sup>ばい」という形で「アクセント型の交替」を示す。(1A⑥)の右の(2)「わらいごと」は、「アクセント型の交替」を示さぬ代わりに「連濁」という手段に訴えている、…といった具合である。（こうした手段はそれぞれが単独で適用されるだけでなく、実際には言わばだめ押しの複数个適用されても構わない。(1A⑥)の右の(1)「わらいごと」、(1C)の「わりばし」「むらさめ」等を参照。序説冒頭に挙げた「田舎侍」（「さむらい」→「-ざ<sup>1</sup>むらい」）も同様である。）

以上を念頭に、ここであらためて、連濁にとっての真の反例と見かけ上の反例という概念

について考えてみよう。

(1A ⑥)の右の(3), (4)を参照されたい。「西日」(-び)は連濁するが、「朝日」(-ひ)は連濁しない。「朝日」は真の反例であろうか、それとも見かけ上の反例であろうか。仮に見かけ上の反例だとしたら、それはどのような意味で見かけ上の反例なのであろうか。まずそもそも、「西日」の「日」と「朝日」の「日」とは意味が違う。(cf. 内海(1998))前者は「(西からの)日射し」、後者は「(朝昇る)太陽」の意味で使われている。このことは、見方によっては、両者の意味の違いを前者は連濁適用、後者は連濁不適用という手段によって表し分けられていると見做すことも可能である。そう考えた場合には、「朝日」が連濁しないのは単なる例外ではなく、それなりの理由のある例外とも呼ぶべきものとなる。さらに、「朝日」には実はアクセント上「あ<sup>1</sup>さひ」と「あさ<sup>1</sup>ひ」という揺れが見られるが、少なくとも後者に関しては「アクセント型の交替」という手段(cf. (1C))を援用しているという意味で見かけ上の反例と見做して差しつかえないことになる。

連濁にとっての例外とされる「傘立て」(-たて)((1A)の右半ほど)は、真の反例か見かけ上の反例か。答は以下のようになる。「傘立て」は、純粹に連濁のこのみを射程に入れて考えた場合には例外と見做されることになるけれども、複合語であることを合図するための手段全体を視野に入れて考えた場合には見かけ上の反例と見做して差しつかえない。「アクセント型の交替」という他の手段を援用している(「か<sup>1</sup>さ」→「かさ<sup>1</sup>たて」)からである。<sup>(7)</sup>

では「干ししいたけ」((1A)の右半ほど, (1A ⑥)の右(4))はどうか。これには((1A ⑥)=(1C)の)「連濁」も「アクセント型の交替」も「子音挿入」も「母音交替」もいずれも見られない。では、真の例外なのであろうか。しかしながら、これに関しても、発想を転換しつつ眺めるならば、見かけ上の反例と見做すべきことが判明する。ここで、後部成素ではなく前部成素の方に着目してみよう。「干し」はこの場合、(「干す」の連用形そのものでもはやなく)拘束形態素になっている。A+BのAが拘束形態素ということはとりもなおさず<A+B>が「ひとつのまとまり」である、ということを述べているのと実質的に同じことである。その意味ではこの「干ししいたけ」も真の反例と見做す必要はないことになる。(同様のことは前パラグラフの「傘立て」の「立て」(拘束形態素)にも当てはまる。cf. 註(7).)

((1A ①)の右で例外とした)「株式/運送会社」について。まず「-がいしゃ」は語種制約に対する例外なのであって、「連濁」に対する例外ではそもそもない。次に「-かいしゃ」は語種制約により確かに「連濁」は生じていないが、「アクセント型の交替」が見られるという意味では見かけ上の反例と見做して差しつかえない。(因みに、「-がいしゃ」でもだめ

(7) いわゆる無アクセント方言の場合はどう考えるのか、という点に関しては、次パラグラフの最後参照。

押し的に「アクセント型の交替」を示している。）「青写真」「白黒写真」に関しても同様である。「-じゃしん」は語種制約に対する例外であって、「連濁」に対する例外ではそもそもないし、「-じゃしん」も「-しゃしん」も「アクセント型の交替」を示すという意味で見かけ上の反例である。

（(1A ③)の右で例外とした）「なわばしご」はどうか。これは「Motoori-Lymanの法則」に対する例外であって、「連濁」に対する例外ではそもそもないし、かつ、「アクセント型の交替」もだめ押し的に示している点に着目されたい。

ことほどさように、従来例外視されてきたものは、そのほとんどが見かけ上の反例であることが判明する。そしてこの知見は、連濁（および協働する他の手段）の存在理由/機能をあらためて問い直すという機能主義的観点に基づくアプローチによって初めて得られた訳である。こうした観点は、連濁のみならず、実は、他の様々な言語現象の説明にとっても極めて重要な意味合いをもつことになるのであるが、ここでは本稿の範囲を越えるものとなるため、割愛せざるを得ない。

以上、本節では、従来例外視されてきた事例のほとんどが連濁現象の本質（存在理由/機能）に着目するなら見かけ上の反例と見做されることになるという点を見た。

#### 4. 補 説

上では、連濁という現象をトピックにして機能主義的観点の重要性を確認した訳であるが、実はいまひとつ確認しておくべき重要な点が残されている。本節ではこの点にごく簡単に触れて本稿の筆を擱く。

筆者は1988年よりひな形（照合）方式という理論的枠組に依拠して研究活動を行なってきた（高橋（1995, 2000, 2005, 2009, 他））。そこでの主な主張は、いわゆる共時態のレベルでは「変更規則」は原理上許されない、とするものである。この変更規則禁止という条項と(2)に見る連濁という「変更規則」とはどのように関わるのであろうか。

この点を勘案するにはまず、「通時態」と「文法間規則」との異同、および「共時態」と「文法内規則」との異同を確認しておかねばならない。図式(4)を参照されたい。世に言う「通時態」が汎個人的で時間的スパンの大きな概念であるのに対して「文法間規則」は（通時態も含むが）加えて個人レベルの時間的スパンの小さな概念である獲得過程の各段階「間」の対応づけを規定する概念でもある。そして、ひな形方式に云う変更規則禁止という条項は、「文法内規則」（これにも、汎個人レベルの世に言う「共時態」と個人レベルの獲得過程の各段階「内」のレベルとがある）のレベルにおける「基底形」と「表層形」との対応づけを規

(4) <<http://raspberrys.jp/4.html>> にカラー版をアップしたので参照されたい。

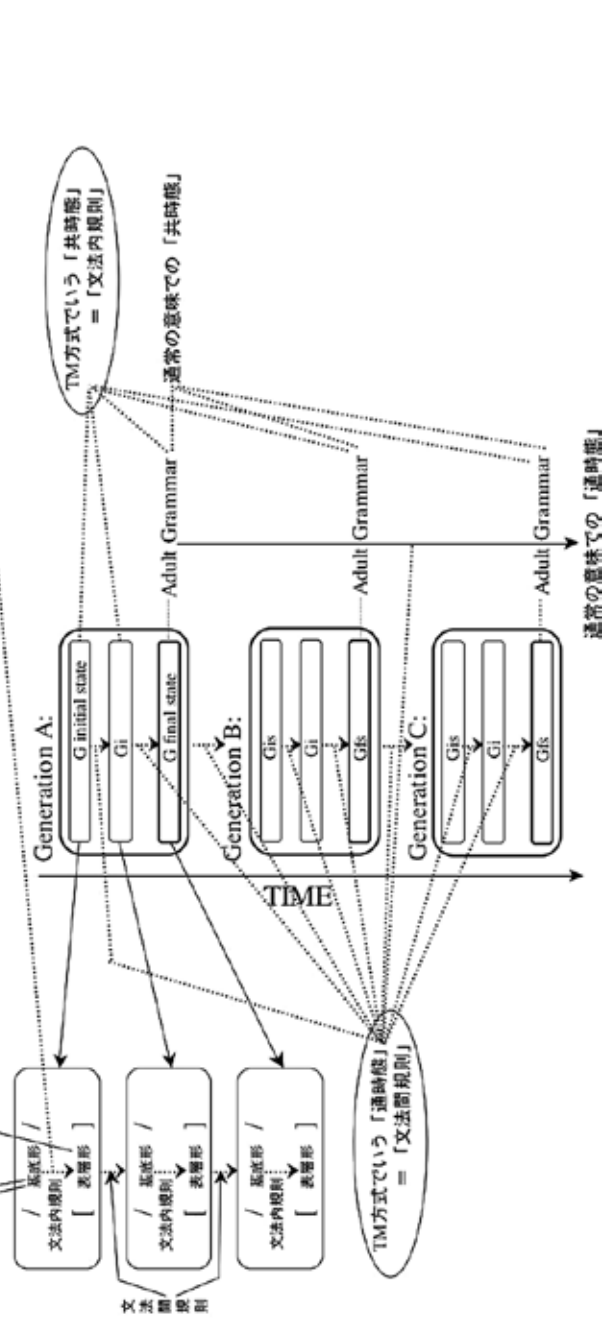
TM方式における理論構築・文法評価の際の作業原則（前論(1995)の(28)と基本的に同じであるが、用語のみ一部変えてある。）

(4) i. 通時態（＝「文法間規則」と共時態（＝「文法内規則」）とは峻別せねばならない。  
 通時態（＝「文法間規則」）は基本的に「変更規則」を用いて規定されIP方式がなじむが、共時態（＝「文法内規則」）はIP方式はなじまない。  
 即ち、共時体系（＝「文法内規則」）内の一般図式としてはIP方式流に「変更規則」（＝「書き換え規則」）を含んではならない。  
 ii. 共時体系（＝「文法内規則」）は一見IA方式がなじむように見えるが、それは表面的なデータの整理の上でのことで、データを説明するためには、IA方式流に「置形態」を無原則に設定してはならない。即ち、特例（の原則が保持できない場合）を除き、「一つの意味に一つの形式」という原則を堅持せねばならない。

上の作業原則を実行可能なものとするため、次のようならもう少し具体的な作業原則を設定する。

(4') iii. i. の原則に則り共時体系内に変更規則（＝「書き換え規則」）を含まないようにするために、次の3つの原則を立てる。

a. 基底形に記載する情報は最少（minimal）でなければならぬ。  
 b. 置形構造（置形階層構造・置形構造等）の「ひな形」がUGレベルと個別文法レベルで規定される。  
 c. 基底形から置形形を導く派生の引き金として、Avoid Void（＝AV）（「空白を避けよ」）＝MATCH（「照合せよ」）という原理がUGレベルで想定される。これは「基底形をひな形に突合せよ、そして、ひな形に合致させるべく基底形の空白部分を避けよ（埋めよ）」という要請である。  
 この原理のパラメーターの値が個別文法レベルで一定に組合わされて出来た操作群が、いわゆる個別文法レベルでの規則であるが、これは「指定規則」であって「変更規則」（＝「書き換え規則」）ではない。  
 ひな形方式では、基本的に、こうしたひな形照合操作（template-matching process）の総体が派生（derivation）に他ならないと考える。



定する概念として位置づけられる。

連濁との関わりで述べ直すと、以下の如くなる。汎個人的な「通時態」vs.「共時態」レベルで言うなら、所与の史的段階  $T_i$  で存在しなかった（連濁）複合語が史的段階  $T_{i+1}$  で使用されるに至った場合、 $T_i$  の文法  $G(T_i)$  と  $T_{i+1}$  の文法  $G(T_{i+1})$  とを関連づける規則は、汎個人的な「文法間規則」（≒「通時態」）ということになる。この場合は当然「変更規則」に依拠せざるを得ない。 $G(T_i)$  と  $G(T_{i+1})$  とで「文法が（マイナーにせよ）異なっている」からである。しかし、汎個人的な「文法内規則」（≒「共時態」）である  $G(T_i)$  と  $G(T_{i+1})$  それぞれの内部では「変更規則」は禁止されることになる。

同様に、個人レベルの所与の発達段階  $t_i$  で存在しなかった（連濁）複合語が発達段階  $t_{i+1}$  で使用されるに至った場合、 $t_i$  の文法  $g(t_i)$  と  $t_{i+1}$  の文法  $g(t_{i+1})$  とを関連づける規則は、個人レベルの「文法間規則」ということになる。この場合は当然「変更規則」に依拠せざるを得ない。 $g(t_i)$  と  $g(t_{i+1})$  とで「文法が（マイナーにせよ）異なっている」からである。しかし、個人レベルの「文法内規則」である  $g(t_i)$  と  $g(t_{i+1})$  それぞれの内部では「変更規則」は禁止されることになる。

さて、では、汎個人的なレベルにせよ個人的なレベルにせよ「文法内規則」で変更規則が禁止されるとした場合、例えば (2) はどのような形で把捉し直せばよいのであろうか。詳細はまた別の機会（「-本」の交替現象（「-ホン」～「-ボン」～「-ポン」～）を扱った、現在あたためている論考）に譲るとして、基本的には、原音素的な抽象音を基底形として設定することにより「文法内規則」に「文法間規則」が混入しないようにするという作業原則に則って理論構築を行なうことになる、という点だけ予告しておきたい。（因みに、1節で触れた北京官話の「変調」も「変更規則」に依拠することなく定式化が可能である。また、(1C)の下「複合語であることを合図する音形上の手段として挙げた (A⑥) = (C) に関する補足」中の、下から4行目「(a) 音便（「行きて」→「行って」）」等も、高橋（1995）で論じたように、「変更規則」に依拠することなく定式化が可能である。）

最後に一点だけ。序説で「立場によっては、連濁には例外が多過ぎるため語彙項目ごとに連濁適用の可否を個々に指定するという方策が結局は早道である、とさえ言われることがある」と述べ、3節で機能主義的の観点に基づきこの考え方の非妥当性を指摘した訳であるが、もう少し中立的な述べ方をするなら、次のようになろう。連濁のみに着目してその例外を指摘し、語彙項目ごとに云々というのは確かに妥当性を欠くものの、複合語であることを合図する手段のうち、具体的にどれ（とどれ）が個々の語彙項目に実際に適用されてゆくことになるのか（汎個人的な通時態レベルであれ、個人的な発達段階間のレベルであれ）、という問題は、結局は、基本的に史的偶然の問題であって、その意味では「語彙項目ごとに」とい

う言い方は間違っていない、という点に留意されたい。その意味でも、註(2)に述べたとおり、連濁は総花的に適用される一般則ではない「形態音韻現象」なのである。(因みに、この辺りの論理に対する認識が基本的に欠如しているのが、最適性理論 (Optimality Theory) である。) 同様に、(3)に挙げた阻止制約にしても、これはこれまでに先人が発掘してきた立派な知見なのであって、無意味な一般化な訳では決してない。ただ、こうした個々の知見のもつ意味合いが真に理解され、活かされるためには、それぞれが理論全体の中で占める位置づけを機能主義的観点から押さえ直さねばならぬ、というのが本稿の主旨である。

### 参 照 文 献

- Ito, Junko & Armin Mester (1986) "The Phonology of Voicing in Japanese: Theoretical Consequences for Morphological Accessibility," *Linguistic Inquiry*, Vol. 17, No. 1, 49-73.
- McCawley, James D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*, The Hague: Mouton.
- Otsu, Yukio (1980) "Some Aspects of Rendaku in Japanese and Related Problems," *MIT Working Papers in Linguistics*, Vol. 2, 207-227.
- 大津由起雄 (2004) 『探険! ことばの世界』, ひつじ書房
- 高橋直彦 (1995) 「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第 110 号, 東北学院大学, 107-78.
- (2000) 「弾音の生起環境」, 『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第 29 号, 東北学院大学, 67-114.
- (2005) 「英語の否定接頭辞 in-, un- の形態音韻論」, 『東北学院大学論集』第 142 号, 東北学院大学, 53-75.
- (2009) 「英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い」, 『東北学院大学論集』第 154 号, 東北学院大学, 91-103.
- Tsujimura, Natsuko (2006) *An Introduction to Japanese Linguistics (Blackwell Textbooks in Linguistics)*, Blackwell.
- 上山あゆみ (1991) 『はじめての人の言語学—ことばの世界へ』くろしお出版
- 内海 淳 (1998) 「連濁は音韻規則か」, 音韻論研究会 (編) (1998) 『音韻研究 理論と実践—音韻論研究会創立 10 周年記念論文集—』開拓社, 101-104.
- Vance, Timothy J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology*, Albany, N.Y.: State University of New York Press.
- (2008) *The Sounds of Japanese*, Cambridge University Press.



# ENGLISH CONVERSATION :

## OKU NO HOSOMICHI

Scott WATSON\*

Craig MacDONALD\*\*

### Abstract

What is this stuff called *eikaiwa*, and what would it mean to practise something called English Conversation, or to *teach* it to anyone? If *eikaiwa* tends to lie beyond the Grammar-Translation-based methods, standards and tests at the heart of a traditional curriculum in *Eigo* (English language), and if it is also something other than the methods and techniques of what we call EFL; if indeed it's somewhat impervious to studies in Applied Linguistics, then perhaps it is well to consider it, as we do, in practice, in *Eikaiwa* schools. We characterize this practice, considering it as *hobby*, *shumi*, or *dô*. We follow *dô* (read as, for instance, *Tao*) in search of enlightenment, freedom. This, we agree, is of the essence for us as *eikaiwa no sensei*.

### Hanami, 2001

Perhaps, to many I passed in the streets every day, I was always coming from a foreign land, and never arriving in Japan. Nevertheless, I begin: It was late in the *hanami* season when I first arrived in Japan in 2001.

On the first day, I made my start by learning one word, having come to Japan without really knowing anything about the Japanese language, much less about people who spoke it. Having arrived on the last Shinkansen the night before, having then crashed in a little room in the Hotel Oahu, I was waiting, somewhat bedazzled in the April sunshine in front of the hotel, for a couple of outbound teachers from the school where I was to work. Sally and Gord. It was their last weekend in Akita. They pulled up with a friend, Yoshi, in his car, yelling out the window for all on that dappled sidewalk to hear: *Hey, gaijin!* This, they told me as I got in the car, meant *foreigner* or *outsider*. They were having a laugh. Though difficult to mark

---

\* Tôhoku Gakuin University

\*\* University of Prince Edward Island

as really significant at the time, at least in Akita it would turn out to be a basic element in the consciousness of the foreign nationals I met, be they tourists, backpackers, Assistant Language Teachers, *eikaiwa* teachers, businesspeople, academics, expats, entertainers, whatever—they were all quite recognizable in the street, and all, knowingly, *gaijin*. I hopped in the car, and off we went to get set up for an evening *hanami* barbecue where local beef and beer would be enough to prompt the *oishii* remark which, I was informed, meant *delicious* (not that I'd heard this word in English, very often, since my childhood). The other word of that first day was *kawaii*: the women present wanted to make sure I understood that bit (meaning, they told me, *cute*) of their vocabulary. In the weeks and months to follow, the frequency of these terms, their cultural-hermeneutic saliency, quickly became apparent to me.

Watson (2008, p. 124) writes of teaching English in Japan as “not something I'd dreamed of doing but something to do while I dream, some way to make a living”. “I also wanted”, he maintains, “to look around Japan, absorb some of it, drink it in (literally and figuratively), learn something different, flirt with Zen, talk with people, check out the ladies, frolic in the neon nighttime establishments” (Watson, 2008, p. 124). Such, too, was my own frame of mind, to some extent, but I had to start by waking up in the morning, looking around the room, and saying to myself, *Right, I'm in Japan. Better watch out for the door-lintel as I go out to the kitchen for my morning coffee.* Every waking moment had become an adventure, had taken on a real uncertainty as to its outcome: I was in a place that had a different word for everything, or at any rate different uses and meanings for so many words that might otherwise be familiar—a phenomenon known as *false friends* in Applied Linguistics, but often called *Japanese English* in Japan. Even grocery shopping or using a machine to wash my clothes (both activities involving the interpretation of a great many signs: pictures, locations such as aisles in the market, trial and error—anything except the Japanese language written around me, to the point where an English word on a label or a button would jump right out at me, as from a kind of silence, and shout *look at me, use me, think about me*) became the kinds of tasks worthy of some really careful thought, and the co-ordination of a day's best efforts; getting on the right train or ordering a pizza would prove to be landmark accomplishments in a life where every day I tasted of such victory. Of course there were days when it seemed disappointing to catch the scent of adventure or comedy beyond my apartment door, only to wind up at the office for another day of enforced busyness, under constant scrutiny from the school manager, sitting with my colleagues in a cluster of desks arranged next to hers, ordered to fill in the time between classes by writing out scripted lesson plans—and such was the time-framework

within which my classes would fall during my time at Jack's : a rationalized, streamlined way of marking the time during which I was on the company dime. Punch in. Punch out. Go home at 9pm, after the last evening class. Breathe in. Breathe out. Begin again at noon the next day. I digress, perhaps, but always with an eye on the context, or perhaps the head-space, in which I had my first encounters with what's known as *eikaiwa*.

### **Eikaiwa**

Sometime in the first month, a new friend, a fellow Canadian named Jim, brought me to a place called, simply enough, The English Café. I remember the stained-wood interior, the Hawaiian bartender named Kirk and the Bass Pale Ale he was pouring—the first I'd had, thinking it was funny I'd have to go all the way to Japan for such an experience. Perhaps such a setting couldn't help me to believe it, but here I was, in the relatively small city of Aki-ta, capital of the Japan Sea-side prefecture of the same name, in the Tôhoku region of northern Honshu.

By this time, I'm sure, I'd heard the term *eikaiwa* (I was working for a place known as *Jack's Eikaiwa*), but when an older local man approached me at the bar to give me his business-card and say, *Please teach me English Conversation*, I felt hard-put to make out what he meant by thus framing things in English. The formal yet direct phrasing sounded foreign to me, although the words were quite simple and familiar. I could understand being asked to teach him English ; however, the seemingly extraneous *conversation* left me wondering if I was really understanding what I was hearing.

The man left directly after making his request. Mystified, I turned to the older and more experienced Jim, who explained that *English Conversation* was the going translation for *Eikaiwa*, and that *Eikaiwa* was also the Japanese equivalent of the English term *English as Foreign Language*. This was, he explained, a chance to practise autonomously, and it's what Jim himself had gradually come to do : building up a timetable of teaching engagements directly with those who were interested in what I would learn to call *private teaching*. Until then, I'd thought *eikaiwa* only meant *English school, as in Jack's English School*.

Here, in the proposed subject-matter of English Conversation, was a new piece of language which would, at least in this word *eikaiwa*, prove to come up often : jumping out of an overheard but otherwise comfortably unintelligible conversation taking place somewhere over my shoulder in the Café Christmas ; permeating, naturally, much of the actual conversation I had at Jack's. It seemed to be important to people, everywhere I went, or at any rate the sight

of me would seem to bring it up : *Oh, look, he must be an eikaiwa teacher ; have you ever tried eikaiwa ?* But I had reservations : Jim was explaining that the “lessons” would take place at my home or at my student’s home or, in the case at hand, probably right there at the English Café, meeting every week or so to share a beer and talk for awhile. Would *I* be able to teach in this manner ? For one thing, my contract with Jack’s would forbid me to teach anywhere except at Jack’s. I belonged to Jack’s, both on and off the clock, even in my sleep, as a condition for the very fact of being here in Japan. In a city the size of Akita I would have to worry about word getting back to my manager, and if that ever happened I could imagine losing my job—and then what would I do, being so new in this country, where I couldn’t even speak the language well enough to go job-hunting and Jack’s had even signed, as guarantor, the lease for my apartment. Besides, would this even be *teaching* ? Shouldn’t teaching happen in a classroom ?

To this day, *eikaiwa* nevertheless remains a mystery to me, except in its currency as the local name for the kind of English-teaching industry in which I was engaged. Still, I carry abundant stories of *eikaiwa*, and I mean to explore them now that I’m back in Canada for a time. This I will do, in part, as I keep in touch with my TGU colleague Scott Watson, signing his own name here as Zenmai : co-author of this text and more than half a lifetime resident in Japan. Following are letters representing our conversation. Mine are all signed by a C-Mac because this is a nickname proposed for me by Zenmai himself, some time ago. Maybe it will stick this time.

20 April 2009

Thank you, Dear Zenmai,

for agreeing to take up this conversation. Let me begin by asking you whether you would say that *eikaiwa* is a way of life, or a way of living in Japan,—or would you say that it’s just a Japanese way of distinguishing communicative (*kaiwa*-based) language instruction from the grammar-translation method which has prevailed for so long in the teaching of English (understood as *Eigo*, *English Language*) in Japan ?

A sense of mystification about *eikaiwa* is really my starting-point in this study. After working in it for over seven years, the first question I’ve raised for myself is *what is this stuff called eikaiwa?* Perhaps my question belies some sense of an ineffable, or unspeakable, mystery, since, if we can’t say what *eikaiwa* really means, then how can we teach it ? Conversely, if

we feel we know just what *eikaiwa* is, then where will we find the sense of mystery which also guides us? If it weren't an unspeakable secret to some teachers, that fundamentally, perhaps, their work as teachers is only meant, in the words of my American-born boss<sup>1</sup> at the franchised Blitz Language Centre, to consist in *conversating*<sup>2</sup> with Japanese people in English, then I suppose I shouldn't be surprised to look back and find that I've almost never had a really frank conversation with another teacher on this subject.

So it was about this time of year (and now eight years have passed) since I first arrived in Akita. I understand that the *hanami* season has come and gone already in Sendai for this year, but here in the farm's old orchard the lone little Japanese cherry tree is still only budding, the buds just now taking on a reddish hue, distinguishing themselves from the rest of the early growth. Looking forward to the blossoms, then, as also to your next letter, I remain, sincerely,

—C-Mac.

April 22

Hi C-Mac.

Yes, the notion of what, educationally, is supposed to be happening in those places called *eikaiwa* classrooms is vague. Then again, the concept of education is a vague one in itself if we try to extract it from the various agendas—religious, political, social, etc.—that use an instructional process of one sort or another in order to inculcate their particular programs in us.

If we take out that particular content of education what are we left with? A process? The verb *to learn*, or the verb *to teach*. Maybe combined into one word: *teachinglearning*. Two sides of one coin.

Looked at from another angle *eikaiwa* does seem to make sense, as much sense as anything that is done under the label *education* in a country such as America (which is used because of my firsthand experience of things in that country). It makes an economic sense because there is money to be made.

---

<sup>1</sup> (but not my fellow *gaijin*, as he would have me know—because of his African heritage, I gathered)

<sup>2</sup> (whatever he meant by that, it came with his insistence that *even a monkey could do it*—and hence a rationalization for the wage at which he would pay those who were, very much, in his *employ*)

If we compare *eikaiwa*, through that dimension, we can connect it with how in some U.S. universities philosophy is no longer being offered. There's no money in it anymore. Times change. Vernacular literature, it used to be, was not deemed worthy of being in a university curriculum. Only Greek and Roman classics were good enough. Modern languages were not taught at all. This refers to 19th century America.

Now Greece and Rome are out, computers are in.

*Eikaiwa* is there because a market for it can be created. Same goes for everything else in the curriculum at a Japanese university. All of sudden *international* sprang up to describe new departments of study created at universities all over Japan. High schools too. It is all playing to the market. Attracting customers. It has little to do with whether there is anything at all international about the course of study. The idea is to attract the customers and then dish out whatever the masses will buy, and they, as my door-to-door sales boss told me long ago, will buy a bucket of manure if it's presented in the right way.

When did this madness begin? English education began when Japan was opened up by America the new colonial power. Perry and his black ships. There was an immediate need to converse with American diplomats such as Townsend Harris (John Wayne in *The Barbarian and the Geisha*). Training in spoken English began. When the actual term *eikaiwa* appears I do not know.

You share a surname with the fellow who may have been the first spoken English teacher in Japan. Ranald (not Ronald) MacDonald. He was from Washington State. Astoria is the name of the town. Named after an American millionaire, famous in the fur trade and seal massacre. A hotel in NYC with his name. Waldorf-Astoria: Is it still there?

He was part native American. Shipwrecked and floated to Japan on a giant chunk of tofu—*not*!

As to whether *eikaiwa* may be an open way of life, or a closed way of making a living in Japan, taking, here, the way, the path, whatever: the sense of it changes depending on where one is within society—or out of it, if possible. To me it is a way of life. *Shidō* was Bashō's

“way of poetry”, and with him it was trying to live a life that is genuine. Same with Santôka. Same with Cid Corman. To mention a few.

薇

Zenmai

24 April

Many thanks, Zenmai,  
for your thoughtful response. I read much in your letter that will most likely guide our discussion by the light of saying *eikaiwa* is like anything, really : like anything that may be bought or sold as educational content, educational product, in today’s marketplace. (The word commodity has found heavy use in such contexts, I note since returning to Canada—where, for example, our prime minister speaks of *natural commodities*. I wonder when we’ll begin speaking of *human commodities*.) Yet teaching and learning, you seem to say, may go on despite commercial appeal. So, at least as long as there’s money to be made in education *of whatever kind*, in Japan, there will be those teaching and learning *eikaiwa*.

It is interesting, I think, that you use the expression *two sides of one coin* to describe teaching and learning : two (opposite ?) signs of the value of what is exchanged. I think you’re right, at any rate, to equate the exchange of teaching and learning *eikaiwa* with the expressed and explicit value of being *international*.

I remember a student of mine, herself a teacher at a *yôchien*, using a sentence that surprised me. She suggested that I (who, when asked about my travels before reaching Japan, was relating that I had spent a year and a bit in France and Germany as a younger person, and was now, obviously, in Japan, and also representing Canada in some way) was really *international*. Images of Austin Powers came to mind : *International Man of Mystery*. Or of Stuyvesant cigarettes : *International Passport to Smoking Pleasure...With Miracle Filter !* Was I being seen as elegant, sophisticated, worldly ? Monied, educated, upwardly mobile ? A model citizen of the world, bringing all these qualities with me to those aspiring Japanese who would one day—what ? See me on the street and offer directions ? Come to learn from me in class ? In some ways I feel that by virtue of an imagined international citizenship, an imaginary that would come around us, or surround me like a kind of bubble, I was like a walking doorway in my Japanese life, or at any rate a window : people would walk by and seem to

take notice, as often seemed to be happening in conversations in class everyday—to take notice of the view or experience of the world *beyond* Japanese shores, the view to which they might have supposed I could bring them ; something which, just by the looks of me, of me there, being *gaijin*, I could easily afford.<sup>3</sup>

A sense of the international, of the ability to speak English and to make connections and even friendships in other countries,<sup>4</sup> is also more or less explicitly behind the Japan Exchange and Teaching Programme. This is the biggest teaching-exchange programme in the world today, developed in Japan during the years of the bubble economy. Andorf's "Half In, Half Out" reflections, in a book on JET called *Getting Both Feet Wet*, summarizes the programme's mandate. It lies, she says, with the impressions formed in the schoolchildren who meet foreign teachers : "that Japan will become more outward-looking with time" and that Japanese people might become less "ignorant of people and cultures outside Japan". Andorf makes the very good point, at length of her reckoning of what it means to be international, that "prejudice is not only a Japanese vice"—though it may seem to be so, at face value, in the discourse of those who go to teach in Japan and who may at times feel so much like *gaijin* that they will commit the fallacy of concluding that a group whom we may identify as the Japanese are "prejudiced" in the sense of ethnocentric. The terms of Andorf's analysis surprise and comfort me most of all in their frank acknowledgement of everyday concerns in her professional discourse.

Such an address to the problem of prejudice may well be the full reach of the touted international perspective in a Japanese cultural context, and yet, you're right, it is a key selling-point for *eikaiwa*. The teacher, being a *native speaker*, may encounter being set aside for a particular vocation in really existential terms. For some there is a missionary zeal about teaching EFL which I think stems from such an emotional grounding. I also think it's worth noting that, where I came in as a Specialist in Humanities, there were many who'd arrived on Missionary visas. You know, I was surprised to find that I could count on being greeted in the street, in English, by young members of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, al-

---

<sup>3</sup> Herewith, a little dialogue for discussion in class :

A : *So you're teaching English in Japan, eh ? What's that like ?*

B : *Well, it beats working !*

<sup>4</sup> This has perhaps been rendered in more current English as *cosmopolitan*—see, notably, Pinar's recent book, *The Worldliness of a Cosmopolitan Education*, and its reception in the field of curriculum studies.



ways recognizable with their young and close-shaven faces, their white bicycle helmets and of course the white shirts and ties. Apparently they, too, would offer *eikaiwa* sessions, at no cost to those who didn't mind discussing their religion. But I felt that this, like the JET experience, was really beyond my ken as *eikaiwa* teacher : I'd be more like the guy who officiates at "Western-style" weddings, the ones in the chapels you find everywhere in Japan, with their fanciful architecture. Given enough proficiency to handle the parts of the service that were in Japanese, a man could make a good bit of extra cash in this way. I've heard rumours of aspiring novelists who would only do this sort of work, filling up their weekends with wedding gigs, and making enough to keep themselves going through the writing week. I wonder if anyone has yet written a novel that deals with that experience. Anyway, this wouldn't be for me, anymore than the modelling I was once asked if I'd like to do (*ha !*), since it would take up my precious weekends. Learning to speak Japanese and learning to love the weekends became one and the same change in my consciousness : if this was a difficult change, then it was difficult because such a majority of my time was spent in the context of my English-speaking apartment or my English-speaking offices. Again, here is the bubble, the doorway, the window.

26 April

I've just watched *The Barbarian and the Geisha*, the John Wayne movie you mentioned. I am aware, by the way, of the *sonnō jōi* drive behind the Meiji Restoration, which envisaged, in reaction to the advent of (John Wayne as) Townsend Harris and others, not only *revering the emperor* but also *expelling the barbarians* ; I wonder if such talk would have directly informed the choice of title for this movie.

I smiled when Harris looked at the *rundown* house he'd been given as first Consul General, on behalf of the US, at Shimoda—he looked around and said *home ; sweet home*. Later in the movie, his appeal to the shogunate, reaching out a neighbourly hand and stressing the common good, is practically a comical image to bear in mind as I also accept your invitation to see in it "America the new colonial power". Such, perhaps, is the kind of Americanization portrayed as the way of progress for Japan ; I stress that this movie was made in 1958, at length of an American-led occupation under MacArthur (the first foreign occupation in Japanese history, and one during which the emperor himself was forced to renounce the divine status into which mythology had borne him and all of those ancestors of whom the legends spoke, all the way

back to Izanami and Izanagi) and a Korean War in which Japan had been used as a strategic launching-pad.

Let's go back to somewhere near your own origins, shall we? Those you describe may be some of your earliest recollections of names associated with a (pre) history of *eikaiwa*. You begin with the Waldorf-Astoria hotel, in New York. There is also a community in Queen's, apparently, called Astoria; like the hotel, it owes its name to the Astor family.

Old John Jacob Astor himself, America's first multi-millionaire, trading in furs, land and opium, established a fort in Oregon in 1810, a few years after Lewis and Clark had spent a winter waiting near the same place, hoping that a ship would come and bring them back to the east.

Fort Astoria was then, you say, the birthplace of Ranald MacDonald (yes, a retrospective namesake of sorts), who is now remembered as the first teacher of English in Japan. Born of a Scottish fur-trader with Hudson Bay and of a member of the Chinook people, the boy MacDonald chanced to meet the shipwrecked Otokichi and a couple of other Japanese sailors, who seem to have left with him the impression that the aboriginal side of his heritage had its own origin and heritage, going way back, possibly to Japan. In 1848, MacDonald got dropped off by an American whaling ship, pretended to be shipwrecked on the small island of Rishiri, off Hokkaido; was captured by Ainu people, handed over to the Daimyo, and remanded to the Dutch of Dejima, near Nagasaki, who were at that time the only permitted operators of western trade with Japan;<sup>5</sup> he stayed for some ten months, and taught English to fourteen samurai, including Einosuke Moriyama, the renowned student of Dutch and English languages who would go on to negotiate, with others including Admiral Perry, the opening of Japan to the western world.

---

<sup>5</sup> You know, there's a great passage in *Gulliver's Travels*, near the end of the third voyage (to Laputa, Balnibarbi, Luggnagg, Glubbdubdrib—and Japan). Arriving in Japan on the way home to England, he claims that he's Dutch but refuses to trample the crucifix in what would be taken as token of a non-Christian faith. The Emperor to whom Gulliver claims to have been speaking  
 seemed a little surprised; and said, he believed I was the first of my Countrymen who  
 ever made any Scruple in this Point; and that he began to doubt whether I were a real  
*Hollander* or no, but rather suspected I must be a Christian. (Swift, 1726/1920, p. 186)

Perhaps it's no wonder the protestant Dutch should have been the only western nationality tolerated as trading partners (apparently in numbers limited to the dozens, and only on Dejima) during the era of *sakoku* (*secluded country*) policy. Apparently the English could also have been contenders (other countries capable of this trade, like Portugal, being Roman Catholic), but the Dutch had convinced the shogunate that England was indeed a catholic country.

Jump just a couple of years from that forced opening by the black warships in Perry's command, and we're back at the arrival of Townsend Harris, the barbarian whose geisha, Okichi, is also much storied. If you go to Shimoda today, apparently you can find a temple-museum commemorating her times with Harris. Of course the movie told me nothing of this, but the story goes that Okichi's true love lived between her and a man named Tsurumatsu, that she was separated from him *for the good of Japan* when Harris arrived in need of a maid, that the lovers were reunited after his departure and until Tsurumatsu's untimely death, which preceded Okichi's by just a few years (they say that in her last days she was pretty much overtaken with the drink, and that she finally drowned herself in a river).

The rest, I suppose we may say, is history : a history of *eikaiwa*. Looking forward to your next letter,

—C-Mac.

### Shumi

One of the groups I taught in my last couple of years before leaving Sendai was an extraordinarily *genki* group of seniors who called themselves the Bushi. We'd meet at the local community centre in the Wakabayashi ward of the city. I didn't see them more than once every couple of months at first, and it seemed difficult, spending a couple of hours amongst these chatty people, to keep the dialogue from slipping, sometimes at great length, into Japanese. To feel like a really effective EFL teacher seemed practically out of the question. Interestingly, perhaps, Andorf's (2002, p. 162) reading of the local *matsuri* (*festivals*) she attended hinges on observing her students *outside* of their classrooms, as participants in wider town events ; for me, I think, the Bushi were themselves a town event. One Saturday morning they treated me to a dialogue in which we discovered the following.

*Eikaiwa* has its place amongst more or less widely recognized and accepted Japanese hobbies, or *shumi*. Many of the same people who practise *eikaiwa* have also practised more traditional Japanese disciplines like the tea ceremony, ikebana, or *shodô*. I feel, however, that when karate and other martial arts, just as well as fly-fishing, can clearly be seen on the same continuum of traditions old and new, the English word *hobby* fails to accurately portray the character of these free-time occupations, which are understood to be windows upon ways of the soul for those who engage in them. Indeed, such devotion to one art (there is probably a sense in which there can be only one in anybody's life), one activity in which the participant

may become a master, remains central to Japanese recreational life and is a unique concept when compared to the usual sense of *hobby*.<sup>6</sup>

Watson (2008, p. 108) defines the “conversational school” as “a for-profit entity that employs teachers of spoken English, teachers who had come mostly from English-speaking countries”. *Eikaiwa*, he says, is “‘real’, practical English, aimed at practical communication” as distinct from (even imagined as opposite to) a textbook’s “*John hit the ball into the woods and no one was able to find it*” (Watson, 2008, p. 129). The certified EFL teacher, however, full of buzzwords on teaching techniques, would find her career run ashore on this rocky coast if she did not lower the sail of “intellectual imperialism : one mode of knowing and living spread over the earth” (Watson, 2008, p. 113). Such a teacher will often find herself radically modulating, theories of teaching designed with English-speaking societal contexts in mind ; hopefully this is a process which leads to a deeper and more personal sense of what it means to be teacher or, as she will so often be addressed, *sensei*. There is a strong sense in EFL today, I think, that almost anything is to be preferred to the old grammar-translation methods for learning a language. If the *eikaiwa* classroom is supposed to contrast with what are widely characterized as outdated grammar-translation-based teaching methods in middle and secondary schools, then perhaps *eikaiwa* really could be almost anything : hobby to some, *shumi* to others, and so on.

Coming back to the topic of *shumi*, but still walking the road with Watson, the *eikaiwa no sensei* is likely to find that what *eikaiwa* students really want is novelty, and not necessarily novelty in styles of learning or some other element of *tekhne* in Applied Linguistics : simple diversion ; perhaps an entertaining insight on her life in their country (the pronouns are weighted here to suggest the kind of division many teachers experience when looked upon as native-speaking edutainers utterly dependent on their contracting companies) ; perhaps a bit of an escape from busy (and, one might assume, boring) Japanese lives ; a sense, perhaps, of liberation ; or a way of keeping active, of studying something, polishing and improving, gaining merit. This seems to be where my Bushi group would come in, to deliver the narrative of the *shumi*, and it’s where Watson goes next as well, noting especially that he, too, was there for

---

<sup>6</sup> **hobby**

like *Dobbin*, a nickname for *Robin* (in turn, a nickname for *Robert*) ;  
 a nickname, then for a nickname for a Christian name ;  
 also often taken as a name for a toy horse, a *hobby horse*, made from a stick ;  
*Dobbin*, meanwhile, was used as a nickname for a real horse, on a farm) ;  
 ground for speculation to the effect that Anglo-Saxons have never really had *shumi* ;  
*not real, not work* and perhaps just a *passing interest*

diversion, as perhaps many would like to be anywhere.<sup>7</sup> “There we were”, says Watson :

housewives young, middle age, or older, retired businessmen, grandmothers and grandfathers, a college kid here and there, a few college professors. Some actually did have some degree of interest in English and pursued English study as they would another hobby. Some were there after having taken ceramics for a few years or had been in water colors before ; then on to conversational English. What was frustratingly obvious to me is that few of those who came to my classes were willing to put forth the effort needed—and it is a significant effort—to attain fluency or anything like it. (Watson, 2008, pp. 120-121)

Ultimately, the question may be this : *If we're not going to try to be good at it then what are we doing ?* “How can there be standards determining our curriculum”, I ask with Block (1998, p. 18), “when we don’t even know the situation to which those standards must answer” ? When, where, will our students be called on to have a conversation in English ? “For what am I preparing whom” (Block, 1998, p. 18) ? Perhaps the discourse of *shumi* lays all of these questions aside, provides another approach to discipline, to mastery, which may be measured not by performance standards but by degree of engagement, so that in order to become a master, you must choose a way of mastery. In practising one *shumi*, even once a week, one hopes to at least feel close to something beyond the demands of everyday life, and in that way learn or achieve something. But if *eikaiwa* is *shumi*, we need to draw a clear line between this kind of discipline and the hard work it takes to master a foreign language.

April 23

Dear C-Mac.

In the calligraphy classes, the formal tea etc., it is rare to see someone who is really being transformed or changed by being on a particular path. To persevere seems to be the ticket for these folks. They continue at these once a week sessions for ten years and more and become *veterans*.

---

<sup>7</sup> Is *eikaiwa* teaching a kind of professional diversion ? I remember thinking, as a new teacher, that it was something I could just try out for awhile. I was rather non-committal in my first year or so, and especially about this vague stuff called *eikaiwa*. When my one-year contract came up for renewal for the first time, I moved up to Sendai to see what I could learn by working in a larger school. This wish, to learn more about teaching, kept me exploring *eikaiwa* longer than many whom I saw come and go. It wasn’t until I was beginning to feel that I had to some extent internalized *eikaiwa*, worked it into my dialogue in some way, that I could feel at home and enjoy, not *working* as a teacher (for a boss, sometimes so many bosses it was just confusing, who might have this or that idea of *eikaiwa*), but *playing* as one. My understanding of *eikaiwa* was thus something to do as I dreamt, a way of dreaming up a living as I went along—a way, a life, in/to the country of my choice.

I see this at the yoga classes I used to attend. Ones who have been there under the same instructor for years and years. They still haven't mastered most of the poses because they don't do Hatha Yoga every day like one is supposed to, but they accumulate merit simply by persevering, by going to these classes regularly, or sometimes not very regularly, even though they are not receiving the physical or spiritual benefits it is claimed yoga offers (some of which, such as increased energy, I can personally attest to).

When yoga class is over they continue on as ever, as good consumer-citizens without any indication of any *praxis* that may have been inspired by their doing yoga. They don't even try vegetarianism (which is non-violence in yoga thinking) or charity or anything else.

I know this from observation. We, when I was going, would give one of our neighbors a ride. Each time she would run her mouth constantly and her talk gave evidence of a closed and sealed middle class mentality. After three years of listening to her there was no sign of any opening, any breaking out of that mindset.

The people who come to these *eikaiwa* schools are basically looking to fill up their time. Those who seriously want to learn a language would not enroll in these commercial conversation schools. There are exceptions though, and there are seriously motivated individuals who turn up from time to time.

As you have said somewhere in your writing (I think it was you who said it, or was it me?) *eikaiwa* classes have their good points. Friendships can be made. You can see the others and know the others as individuals—not just objects a package of knowledge is directed at. Whether that qualifies as a *dô* (道) or not I can't say. But it balances the outright crass materialism that haunts those schools.

It might be claimed that middle class lifestyle is a way of life. The way of the world. It is, but this isn't what we mean when we use the *dô* word. We mean something that will take us deeper, beyond, something fecund that will be our living a life that is genuine.

薇

Zenmai

28 April

Dear Zenmai,

you bring up your yoga classes, as something you used to do, and I guess I hadn't realized that you'd already parted with this activity. I remember, some time ago, you reported your disgust at the fact that the instructor was driving a Mercedes or something—a testament, as you saw it, to the money-grubbing which seems to go along with so much teaching and learning, even in yoga. You're quite right, I think, to highlight the once-weekly basis of the classes—it is, of course, basically the same with most *eikaiwa* classes, and the attendant problem is naturally the same as well : nobody is likely to become a master of any kind by practising an hour or so in a week.

Rather than *master*, then, we must say *veteran* when we speak of *shumi*, though I am aware that in ikebana or calligraphy certificates and licenses are issued, whereby, after years of practice and in recognition of mastery, a student may become a teacher. Yet whether this is also a path of personal transformation, a way of the soul, seems unlikely in your view. And actually, I'm a little surprised at this.

There may be, in any class of the sort we are discussing, the few who would respond with something more than mere perseverance. You, for example, took up yoga and seem to have pressed on beyond the weekly classes, to mostly dispense with the classes themselves and towards benefits like increased energy ; you didn't just become a veteran, you became a vegetarian. This, to you, is the *praxis* of yoga beyond the four walls, the fenced-in space, of an hour-long meeting. It is *the disciplined search in which you engage freely with the terms of your own existence*. To the relentlessly bourgeois neighbour who rode with you to the classes, the possibility of such thorough praxis wouldn't matter a bit—at this rate, her (rather narrow, as you seem to represent it) mindset was under no threat whatsoever, and whatever concern she may have expressed for the practice of yoga could no doubt have been reduced at a moment's notice to a passing interest, a commodified object—a toy, really, a hobby (horse).

Perhaps, then, I'm concerned with the few to whom *eikaiwa* is that more complete praxis : a concern tending to desire; an intention, a *dô* that leads out from the limits of concern for mere *shumi*. Here you seem to emphasize that the *eikaiwa* classroom is, perhaps for most who enter it, simply the kind of place to spend free time, taking an interest in something, which I think we tend to mean when we say, in English, that *everyone needs a hobby*.

To put what we do as somehow, hopefully (or at least according to what we could call our best intentions), over against this sort of materialism (against this essentially thoughtless, passive, even unintentional consumption of cultural commodities, of commodified culture), there are the good points on which you and I, as *eikaiwa no sensei*, agree: *eikaiwa* is, for some at least, a way of friendship, a way of seeing and knowing others as actual human beings and not just as faceless holders of accounts to which you and I, according to Freire's well-known banking analogy, are supposed to transfer the funds of English—to “deliver the product”,<sup>8</sup> as my Blitz training so memorably phrased it. Perhaps it's telling that Andorf, the *hafu*<sup>9</sup> JET to whom I referred in my letter of last Friday, had to look outside of her public-school classroom in order to see her students as members of the community, to feel herself a member of the same community.

As you know, one of my teaching engagements in Sendai, and one of the places where I felt most at home as *eikaiwa no sensei*, working always with just a few people (maximum of six to a group, just a couple of groups in a week), was at the Uncle-building community center operated by a company that actually called itself Culture, Inc. I smile to remember this one.

The usual sense of *culture* as used amongst Japanese learners of English seems to refer (imagined in the interlanguage of many as if it were, in English, a countable noun) first of all to the specific actions which may be taken as appropriate to a (general) societal context. You might hear that a student wants to know more about American *cultures* like shaking hands, eating junk food or wearing sunglasses a lot.<sup>10</sup> I suppose these actions would be referred to as *bunka* in Japanese, but in English I feel they are more specifically like what Peter McLaren defined (in his *Life in Schools*) as cultural forms, stressing that they're all about the economy, desire, values, power/knowledge, ideologies and relations. At any rate, somewhere in there, I had a deal with a company called Culture, Inc. (I smile to remember this one.)

---

<sup>8</sup> For a detailed account of her experience in the language and culture of what she also calls Blitz teaching, see Eva P. Bueno's "A Leading Language School" (2003).

<sup>9</sup> Can you imagine referring to someone, in matter-of-fact, everyday current English, as a *half*, let alone meaning that you will allow her, in your English-speaking idiom, to be imagined as a *half-blood*? Well I just narrowly avoided doing so, opting to use the Japanese term. I guess the going term in our language would be *bi-racial*, but the only difference I see is that one is admittedly subtractive, where the other is merely additive.

<sup>10</sup> On the other hand, you know, back at Jack's, a member in one of my classes spoke to my astonishment of how Japanese people's "black" eyes were especially adapted to bright sunlight, and thus did not require the use of sunglasses—explaining what I'd taken for a mere convention of fashion so far as I'd seen it evidenced in the streets.



Meanwhile, the more general idea of *culture* in English, going back to Middle English, refers to a cultivated piece of land. In the Latin root, identified as the verb *colere*, we find a sense of cultivation, of tending, of inhabiting. A way of life, as I like to put it, but also (if I may here distill another gist of McLaren's, borrowing I think from Henry Giroux) a form of production.

The first culture-centre in which I'd gone to work was referred to in the office at Jake's as *the bunka centre*. It was operated by the local branch of the public broadcaster NHK. The Centre offered art classes and other educational events at a low rate for the community. When I got there I found that the operating class model (from how far back I couldn't tell) was to go round the table and have each member of the class relate a story or raise a talking point. Perhaps it is significant that this pure *eikaiwa* model was the habit of a class hosted by NHK, whose airwaves carried several popular *eikaiwa* programmes—and these actually seemed to have worked quite well for some I met, particularly in this class. I wonder, indeed, if it was NHK that coined the term *eikaiwa* back in 1945 when, as you've related elsewhere, it appeared in the name of a radio show, first *Eigo Kaiwa* and then *Eikaiwa*.

As *sensei*<sup>11</sup> in the Culture™-centre bastion of the many *shumi* (a place where you could take lessons in printmaking, karaoke, tap-dancing, belly-dancing, yoga, cooking, Ikebana, basic computer use, even smiling and of course English), I had been teaching in the English school for a couple of years when I was invited to plan and introduce a new course. It was to be carried out in English, yet to be something that wouldn't only be another *eikaiwa* class; not actually part of the existing English school, but part of an arrangement with the wider culture centre, promoted as a new course of a new kind. It seemed, in my conversations with the school manager, that the easiest way to imagine such a thing was by looking at the construct of four skills in language teaching—reading, writing, speaking, listening: *eikaiwa*, as a form of conversation, would then ideally be limited to practice in the latter two, and a course of reading or writing in English would be considered, in a certain sense, something else entirely. Yet, despite the advertised uniqueness of this class with *Kureigu Sensei*, even because of it, this experience remained always always always mediated in conversation.

---

<sup>11</sup> *Sensei*: the *sen-* part (先) may be read as *previous*; the *-sei* part (生) refers to *birth*.

To me it seemed natural to open a workshop for English-language creative writing. This is the class to which I invited you, one evening, to discuss writing poetry in English, and your own work, especially as a translator of Bashô and Santôka.

Eventually I also started a kind of readers' circle in literature originally written in English, where the members would take turns leading each other, in English, through critical readings of selections from the works of Shakespeare, Milton, Swift, Melville, Conrad and others. Here, for certain, I thought I'd found *eikaiwa* in its purest form. Not that I really imagine it would work for everyone, but such were the ways I could think of, ways of opening conversation, with my students, to something beyond merely getting together every week or so in order just to speak to each-other in English (potentially about the same things week after week, seldom showing much progress in the production of English to speak about those things—overall, a process familiar to any *eikaiwa no sensei*, and one especially prevalent in the *salon* model for these classrooms, wherein students gather with a teacher—and chat around a sort of coffee-table setup).<sup>12</sup>

Most important in these experiences, I think, was the sort of community I was able to build, small though it may have been, of people who could accomplish so much, attending the ordinary *eikaiwa* classes at first, then moving into places in either or both of the more literary groups. They became the people with whom I'd celebrate Christmas, for example, inviting them to my home for eggnog, music, readings and stories.

In the Culture centre, I felt that the possibilities for bringing English conversation to bear in praxis upon specific cultural forms were limitless, and the opportunities as varied as the facilities. In an eight-storey building, there was of course a kitchen, there was at least one art

---

<sup>12</sup> So far as it's redolent of the French xvii<sup>ième</sup> or xviii<sup>ième</sup>, the *salon* is also a model for pure *eikaiwa*. The trouble with most *eikaiwa* salons is that they take place in a kind of *fishbowl*, with the teacher-host (in all his celebrity, verve and charm) navigating some kind of passage through what could indeed be a floating world — far removed, really, from her own home and smack-dab in the middle of an office with phones ringing here and there, a general buzz of activity setting the tone for what passes for conversation. The best salons I've seen gather a core of more or less the same members week by week, so that there won't be too many introductions (an over-emphasized theme in *eikaiwa*, it seems to me) going round and the group can maintain some continuity of feeling as people come and go, before and after the classes that they really came for. Gradually, themes emerge, and we run with them as far as we like. I would like it if there were more than one conversation going on round a table, if the table were large enough. Then I would feel we were really doing what we could do, in what would rightly be identified as a process of *enlightenment*.

studio, there were other studios for dance and exercise, there was a karaoke room. There was even a *chashitsu*, for tea ceremonies, made up with the *nijiriguchi* crawlspace-sized door and everything, all decorated on the outside (which is all I ever saw) as it were in a garden somewhere, with a path leading to it, across the *roji*, the dewey ground. Small, simple, quiet. Any of these, I felt, could be a unique sort of space for *eikaiwa*. For my part, I was doing what I could with my readers and writers. Well, really I was just getting started.

I guess that although I'd been asked to imagine something other than *eikaiwa*, I naturally carried *eikaiwa* into these projects of reading and writing. It is everywhere I go, I'm sure, being in the first place *eikaiwa no sensei*.

You question whether the middle-class lifestyle, being no doubt a way of life of some kind, can be considered a *dō*. You're right, I feel, finally to insist that *dō* must be something that can bring us deeper, beyond, "something fecund that will be our living a life that is genuine" and, as I think you would also say, getting away from the false comforts of an imagined middle-class way of life. I wonder what you see as the potential for a sense of *dō* in *eikaiwa*.

I guess you'll be reading this as Golden Week begins. Do you have any special plans for the holidays ?

Enjoying the weather and riding my bike more, now that the weather's getting warmer,

—C-Mac.

### Dō

I'll here pause and attend to 道 (*Tao/michi/dō*), which I now want to locate beyond *shumi*, since the desire by which we relate ourselves to 道 seems to involve more of us, more of our selves, than the concern with which we come together to practice our *shumi*. Concern for practice in *shumi*, I think, lies beyond any simple passing interest that we might take in cultural forms such as baseball, hockey or the tea ceremony (though baseball, hockey or the tea ceremony may all serve equally well, as *shumi* or as 道). I'm thinking of concern on the order of what one pursues in one's praxis, for instance, in a profession : a concern for others, for service within a community, mediated through a particular activity.

I'd like to lay out the little I know of 道. As Tao it may be found in an English dic-

tionary, defined as a way, especially, of harmony with the natural order. In Japanese, I realize it may be read as *michi* (street, road, even in the everyday sense) or as that piece we might identify as a common suffix (*dô*) in all these different spiritual disciplines known as the Japanese arts (including martial arts)—and *art*, too, can mean *way*, especially in the German idiom we sometimes experience in our use of English. 道 strikes me, from the sum total of my shallow readings in the *Tao Te Ching* or in the (other) words of Chuang Tzu : as a way *out* but also a way *in*, but always a way *through*—through the world, the given nature of things taken in totality ; perhaps a way of *mastery*, not only of nature but of ourselves ; a way of mastery situated in a given natural world, bringing us to a desired freedom, to happiness, to nature—here it may indeed be a way *back*, but always a way *through*, always situated in natural particularity. It is a journey or way of the soul, too, as explored in Bashô's *Oku no Hosomichi*, a poetic travelogue, a journey deep into northeastern Honshu, mindful no doubt of the region's name as *Michinoku* or, perhaps, *Michi no Oku*, *End-of-the-Road Territory*. *Oku no Hosomichi* has been translated into English in various ways, notably *The Narrow Road to the Deep North*, *Narrow Road to the Interior*, *Backroads to Far Towns* and, in Watson's edition, *Bashô's Road's Edge*. To venture my own phrasing, just for fun, I might suggest *The Trail of What Lies Beyond*. It is on this trail that Bashô wrote, *taking each day as journey, dwelling in journey*.

Watson writes :

Yes, every day in every way we are a journeywork of stars. Even standing still we move, change, live, die. As Heraclitus said, the only thing permanent is change. My home's name, 万流庵 [*Ban Ryû An*], the All Flowing Cottage, marks that as the letters inked on upturned roots (weathered enough to look like driftwood) fade, dissolve, disappear.

The Dao permeates everything and nothing. It goes with the energy flow all our prepositions channel—in, through, out of, back to and all the rest. It is as they say in “the heavens” and—as Chuang-Tzu tells us—it's in the piss and shit. It's everywhere in every thing and there is nowhere it is not. It's in our words so how could it not be in *eikaiwa*.

But : what can be said about the Dao is not the Dao. It's a way but it's the condition of there being no way. (Watson, personal communication, August 12, 2009)

Bashô, meanwhile, at the beginning of the *Hosomichi* :

A hundred generations are made of months and days passing by, as each passing year is a

traveller too. By boat to living's limits or leading a horse by its mouth towards old age is taking each day as journey, dwelling in journey. Many ancients have perished in journey. I too—from which year was it?—guided by winds from distant clouds, cannot keep from thinking to drift, roaming the strand, from autumn of last year ridding this ramshackle hut of cobwebs, year's end soon, hazy sky raising spring, would sooner be passing through the Shirakawa Barrier and in spite of myself feel totally involved with things of god, feel summoned by the god of travel and cannot take up what's at hand. So : mend my breeches, fasten a new cord to my *kasa*—no sooner treating my shins with moxa than Matsushima's moon burns in my heart—turn tenancy over to another and move to Sampo's country house.

grass hut

home to change

chickabiddy dolls

Leave this first portion posted on the hut. (Watson, Trans. ; personal communication, August 28, 2009)

Writing at about O-Bon, I find myself recalling how the holiday fell in 2006. I'd read about the *yamabushi* (Buddhist priests of the mountains, if you will) in Japan's sacred mountains, how their ascetic practice includes, famously, meditation immersed beneath a waterfall. It was to me more of a summer vacation, but there was I with my companion in the Dewa Sanzan (a group of three such mountains, found in Yamagata prefecture), near the summit of the tallest of the three, Gas San. Now I don't recall if Bashō's known to have visited more than Haguro San, the smallest of the three, but the entire arrangement of trails amongst these three places, with these old roads made of stone along most of the way, traversed not in solitude (not at O-Bon, at any rate) but as part of a steady stream of climbers—these are ways of pilgrimage. We'd spent the day climbing up to the Gas San summit by a longer alternate route (and mostly deserted, as alternate routes always seem to be in these places—even at O-Bon, fortunately) to what most of our fellow-travellers and holiday-makers were taking, then down along the main trail to drop off our packs at the *hinan-goya* where we planned to sleep, then down some more, over ladders (again alone since the destination was accessible from the other side by bus) to Yudono San's revered hot spring, where steaming waters issue from a great boulder turned orange by traces of the waters that flow all over it; we'd walked about, as pilgrims do, in the warm cleansing waters of the shrine, then climbed again up over the ladders to the *hinan-goya* ; we'd experienced a practically mystical sunset in which I'm pretty sure we were seeing as far south along the Japan Seacoast as Sado ga Shima ; and just at dusk there

appeared at our hut's door a fellow who said he was in *yamabushi* training, on his way over the summit to where he was lodging (he made the trek out and the return, before and after the day's exercises, with each dawn and dusk). He told us he knew where to find some good spring-water, just off the trail a little distance from here. We decided to follow him.

Passing along at dusk, behind him, I was aware of how difficult it was to keep up although his footsteps laid out a rhythm that matched the ground much more effectively than mine had done all day, and thus seemed easier to follow than my own sense of where feet could fall. He certainly didn't appear to be in any kind of hurry, like he was floating up the slopes and simply drawing me along, aloft. We conversed, too, and I learnt that he was from Tokyo, where, no doubt, he had work and all the rest ; but he would spend all of his holidays in the mountains, and was able to do so as part of a curriculum of training so that one day he'd be *yamabushi*.<sup>13</sup> After we got to the spring, he turned around and in so doing seemed, before my eyes, to become more like a cloud than like a human being, but a cloud with these eyes peering out from the midst. Anyway, it took my companion and me twice as long to walk back *down* to the hut, and when we got back we really couldn't account for how we'd got *up* to that place so quickly.

I wrote of this experience to Watson. He wrote back :

Yes *Eigo no Hosomichi*, going on into the cloud, the blur, with only a pair of human eyes looking out from within it. The only human element left.

B may have got to 50 K a day. Some days. Pushing it. And that is walking in *waraji* (straw sandals). Not the walking shoes available today. And they had to change them a couple times each day. They'd wear out.

Satori, enlightenment, samadhi, nirvana. Bliss is the word used to describe the state of samadhi. God consciousness some call it. Or in Buddhism it might be considered an end to suffering. Life with no suffering. Freedom from suffering. Are these attempts to escape ? Ways out ? The Buddha as I understand it was seeking a way out of suffering.

Realizing there is no way, does that become a way of no way ? Sort of like Sisyphus. (Watson, personal communication, 15 August 2009)

---

<sup>13</sup> I've since learnt that there are courses available to anyone who might be serious about such an experience. They're not so different in price, if you break it down to a daily rate (they seem, often, to be three-day courses), compared to staying at an *onsen* (hot-spring) resort. Another alternate route to the enjoyment of the mountains ?

Sisyphus, it is worth noting, is a favoured figure in Maxine Greene's *Teacher as Stranger* (1973), as she calls on teachers to do philosophy. Her Sisyphus is borrowed from Camus (1955), who wrote of him as a kind of absurd hero. The Sisyphean Task is punishment for a life of breaking basic laws of god and man : killing guests, tricking and binding Thanatos, and so on; Sisyphus was literally a hell-raiser, and this is what he had coming to him. The Sisyphean Challenge with which he settles into eternity is to roll a great rock uphill ; the rock never makes it, rolling back down to the bottom ; the Challenge repeatedly renews itself, and the rock gathers no moss. Camus writes of Sisyphus's "scorn of the gods, his hatred of death, and his passion for life" (1955, p. 89). "The teacher", maintains Greene, "who is familiar with anguish and absurdity can hardly feel sanguine in his ordinary life" (1973, p. 258).<sup>14</sup> And with absurdities, we remember like Estragon in *Waiting for Godot*, there is "Nothing to be done" (Beckett, 1952/1994, p. 2)—even when, as Block points out, "this doesn't stop them from waiting for Godot" (1998, p. 28). The question of curriculum in *eikaiwa* reaches deep as we ask ourselves what it means to *teach* (or to *learn*) *English conversation*. Doesn't it depend on what we want to talk about ? Will our conversation be more or less essentially *English* as we discuss, now this topic, now that ? Is it that we want to approach English language by addressing progressively more English topics ? Or is English language merely understood as providing a way of conversing, and conversation as providing enlightenment ? Is enlightenment an understanding of freedom, a freedom greater than the suffering that confronts us in life as we know it ? *What, after all, is the English that you want to learn ?* After asking all of these questions and more, we may well find that at any rate, at least there is no other way of going about things. No way *except* through.

May 1 Friday

Dear C-Mac—

Probably going on with letters and narratives with your various correspondents will help build an *eikaiwa* community of sorts. Then newsletters, panel discussions, *kaiwa* bars, etc.

A subculture though not necessarily deviant in any criminal way.

---

<sup>14</sup> **Sanguine**  
 ruddy ;  
 optimistic ;  
 (full) of blood ;  
*genki*

*Zenmai*. It's a fern that is edible and long ago a short piece of fiction of mine was published under that name. *Zenmai* it is. In English it's called the osmund fern ; it flowers too. Difficult to prepare for eating though. Please don't confuse me with Donny Osmund.

Well you did your homework regarding Ranald and Townsend and Okichi. It's been so long since I read about them. It's refreshing to hear of them again. There is speculation that RM was a U.S. government spy. A book on that subject even.

There are Japanese works dealing with the Okichi story. Can't remember whether there's a Nô play or Kabuki or what. Various things on her I think. *Tôjin Okichi* is one title if my memory is right.

And one of America's finest poets attended Townsend Harris High School in NYC. William Carlos Williams.

Yes, I agree that *dô* goes beyond *shumi* and *shumi* goes beyond *hobby*.

Yes, I'm still doing yoga every day on my own. And, since it's good to get to a more experienced practitioner from time to time, I do go occasionally on a Sunday morning to a group session. That teacher still leads a simple life and is satisfied driving a non-luxury automobile. I may have lost my "veteran" status in the eyes of the other members. On the other hand it is disappointing to see those others still unable to do some of the poses that, if they would practice every day for a month, they'd be able to do. But they don't. There seems to be something like determination *not* to do them every day. Maybe there is a fear that they would *kawaru*, change, and no longer be the *normal, regular person (futsû no hito)* they see themselves as.

It makes me wonder, though, if they even care to honestly look at themselves at all. After all there is that fear of deviating from what is considered normal. It seems that, if one really becomes serious about something, that person is seen as heading towards *sensei*. Or else why do it so seriously? That is the thinking, I think. That is why they asked me so many times if I'm planning to be a yoga teacher when I retire from the university. It is not my purpose to become a *sensei* though ; just to be responsible for my own health.



Yoga is like religion or anything else : you bring it into a culture and it takes on various aspects of that society. Yoga in Japan is different from yoga in India. Zen Buddhism in America is different from Zen in Japan. Christmas in England is different from Christmas in Italy. On and on. Same with foreign language classrooms I suspect.

Fear of deviation (or of the potential social ostracism that comes with it) is a big factor in this society and begins at an early age with school lunches and dress, among other things. The school lunch has to be in the range of what everyone else brings. There is variation. It doesn't mean everyone is eating exactly the same meal, but the variation must be within inspected limits. Like you can have *tonkatsu* (deep fried pork cutlet) or fried chicken, spaghetti or *yaki-soba*. That sort of variation.

Once when our kids were on a midget league baseball team they were going on the road and were told to bring two *onigiri* each for lunch. The inside of the *onigiri* could vary but it was supposed to be two. Instead I made them sandwiches to take. There was some flak about that. And the coach *gave me a look* too.

You're right that I no longer attend Ms. Mercedes's class, nor do I receive Ayurvedic medical advice from her Indian spouse "Dr." BMW.

Whether *eikaiwa* can be a *dō*, a way, a path. It depends. Anything can. How much of one's life one is willing to give to whatever the event is. If one gives it one's life then that event will become a way of life. With *eikaiwa*, what is the purpose? Does anyone really see *eikaiwa* as a way of life?

The purpose of anything we do is, ultimately, life, as is the meaning of each word we utter. They all come from and mean life.

To communicate through words in a way wherein the words are working at their utmost to say the unsayable (=life) is poetry. Taken broadly and not just as what is formally presented as poetry on a page. So that some passages of *Moby Dick* are poetry. Some passages in Cormac McCarthy's *Suttree* are poetry, and we can say that about various other works that are not set down as formal poems. Some things Emerson wrote are poetry, but usually *not* his formal

poetry.

It is possible then that what gets said in a conversation class can be vital enough, fecund enough, to be called poetry. Any words that move us to look at our lives deeply and honestly, whether they are on the page of a book or coming from the mouth of someone sitting in an *ei-kaiwa* salon or wherever. There are no rules, no restrictions. It can be a *dō*.

\* \* \* \* \*

There is still contact with a handful of students who've come my way at TGU. One is married and with three kids. Living now in Senegal. Just the other day she sends us seeds of the Baobab tree. I'm looking to germinating and planting them over Golden Week. The eldest we saw just a couple months back when we were down in Gunma at a hot spring. She's 41 now. Going to grad school like you. A couple I see from time to time as they are working here in Sendai. Graduated seven years ago. One I introduced to yoga therapy. She has some kind of involuntary nervous system problem that I'd heard can be treated through yoga therapy. She's doing better. The youngest just graduated in March and now is down in Tokyo working on JR trains.

The connection is that they all put their heart into it. They weren't genius level brains or anything but they put themselves into what they did with me and when they are willing to do that I make myself available to them outside of class wherever.

A community evolves. A community of individuals. Which is an expression I got from Corman, who got it from WCW.

Others I do not open myself to and do not make myself freely available. It's because the feeling that comes to me is that they see me as a *renshū dai* (a practice dummy, maybe), not a person, but an entity they can improve their conversation with.

Free, yes, sure. Never did money occur to me with those five above. Gladly I gave them what they seemed to need. One, the youngest, was over here learning yoga from me even.

Because of my sense of where they are coming from. From someplace human and someplace

good. Not from ambition. Not that ambition is necessarily an evil. It's just not something I can appreciate or get with.

In my thinking it is only when each is coming from this simply human place can there be communication. Otherwise there are obstructions and the energy flow does not get through.

\* \* \* \* \*

My sense of the *kaiwa* classroom is that it's a basketball court. They need to get on the court and play. Coach stops the play from time to time to correct things, show how to, etc. But mostly they need to experience the joy of playing. I tell them speaking ability is very much like a muscle and that the more they speak the stronger they will get. If they lay off long the muscle will weaken. Also I try to get them to become independent learners so that each gets a sense of what it is he or she needs to work on more. Granted, very few do that, but it seems to me this is the way to go.

Otherwise we have the standard hamburger factory approach to language teaching. In other words we each have to come up with some way that makes sense to us, we need to develop a personal sense of what it is we are doing.

This doesn't mean that what another teacher is doing is wrong. Hopefully what they are doing is coming from within themselves, something they've worked out for themselves. Otherwise it's a cop out. Students sense that right away and know it's the same old stuff they've always been getting.

Signing off now.

Later,

Zenmai

5/2 7 a.m.

Morning C-Mac.

You ask about the kanji for *shi* (poem, poetry), as in Bashô's sense of *shidô*. The latter would be 詩道. The poetry *shi* originates long ago in China and is connected with the word "leaf" (or leaves). If my memory is correct.

All for now.

Take care,

Zenmai

2 May 2009

Thanks for putting it so well, Zenmai :

these letters and narratives will hopefully build an *eikaiwa* community, if only for the purposes of representing the conversational quality of what *eikaiwa* is, or how it's experienced. Whether it might extend into newsletters, panel discussions or *kaiwa* bars (or perhaps salons, in the old Enlightenment sense of people gathering on a regular basis to discuss a particular topic)—well, I guess that remains to be seen. I especially appreciate your comment, though : that such a community could be “a subculture though not necessarily deviant in any criminal way”. I guess I should say I hope so!

You've related the hypothesis that Ranald MacDonald was an American spy, sent, more than drawn, on his adventure into the unknown. I suppose there is something dashing and adventurous about how he turns up on Rishiri Island,<sup>15</sup> calls himself a shipwreck, and gets passed along, clear across Hokkaido and down the greater part of Honshu's length. He must have been quite aware (as I'm sure 007 himself would have been, were he there) of risking his life on this voyage.

Okichi, meanwhile, you're quite right, seems to have been immortalized repeatedly in Japanese drama, and *Tôjin Okichi* (*Okichi the Concubine*) is indeed one such title—of a 1930 movie starring Sessue Hayakawa.

So *dô* goes beyond *shumi* as *shumi* goes beyond *hobby*. You say your yoga practice, for example, goes beyond hobby, in your daily pursuit of the discipline's benefits. This seems well beyond the habits of your classmates, whom you join only occasionally, and yet, you're right, in order to retain your *veteran* status in their eyes, you'd need to be amongst them every week. This is what you've given up, as you've gone the *kawatta* route (as one who is *changed* or, to

---

<sup>15</sup> Rishiri is a remote place, even today—part of a national park, off the coast of a wide farmland that stretches more than a hundred kilometres along the roadside before you get to the port of Wakkanai, with the neighbouring Rebun Island included as well ; I've seen Rishiri's peak, one of those they call a *ko* (*little*) *Fuji*, from the boat to Rebun Tō—escorted the entire way by grey seagulls, tenacious as anything on a day too windy for their feeders, the passengers, to be out on the deck in large numbers.

borrow a popular adjective from my part of the world, *different*). I'm glad you've put your finger on this hang-up, as it may indeed be the very thing that keeps a hobbyist's interest in check. Some will no doubt practise yoga only when they're wearing the right clothes for it, only when they've met for a yoga class ; to practise at home, for instance, would be *kawatta* in the *crazy* sense to such practitioners.

Let's call them the hobbyists, and say that for you it's more of a *shumi*—or is it rather *dô* to you ? Would the *shumi* praxis have as its goal that you should become *sensei*, just as others have asked you whether you'd become yoga *sensei* ? Perhaps you've left that behind as well. Is the practice of speaking English, in Japan, one which leads to becoming *eikaiwa no sensei* ? I remember hearing about a yoga class, somewhere in Sendai, that would conduct itself in English. For those to whom *eikaiwa* is more than a hobby, I guess.

5 May

So, indeed, yoga is like religion or anything else (even the *zenmai* from which you take your name) : plant it in one place and it must adapt. I have no doubt that yoga in Japan differs from yoga in India, that American Zen and Japanese Zen are two different things, as also Christmas in England, Italy—Japan, for that matter, with its feast of chicken and birthday-style cake. I agree that the same goes for EFL classrooms, and this is exactly why I choose to dwell on *eikaiwa*—as a unique area of praxis in EFL.

To those of us who live as *gaijin* anyway, and thus tend to notice life in Japan from a bit of a distance, fear seems strong, or somehow differently pronounced (compared to expressions of which we've been aware in the places from which we've come), of deviation from what we might call a bourgeois mentality ; you suggest that yoga, as also EFL, must adapt to that mentality. Certain practices become preferred or expected.

A student may often say, plain as day and fully confident that this is the natural way of having *eikaiwa*, *I want you to give me an equal portion of class-time in which to speak to you in turn, as everyone else will also speak to you—directly (we don't want to speak to each other as much as we want to speak to you)—and I want you to simply correct my mistakes as I go.* Similarly your son and his baseball coach have said to you that you may put anything you want in the two *onigiri*<sup>16</sup> which must be in his lunch, but there must be two of them and they

---

<sup>16</sup>—*rice ball* doesn't really give much of a picture unless you've seen one—

must be *onigiri* and not sandwiches. It's like on the plane : *Pork or chicken ? Spaghetti or yakisoba ?* (I once overheard an attendant on an Air Canada flight asking a Japanese passenger the literal translation of such a question : *Kohii ? Cha ?* then *Ocha ? Kocho ?*—same rising intonation she'd use in the English phrasing, no trace of the *nomimasuka* which would ordinarily be required, so far as I know, for intelligible conversation in an imagined typical Japanese idiom.) There are the permissible deviations in the way we practise *eikaiwa*, and they follow a set of unwritten rules in whose composition I, as *gaijin*, have certainly never had a part. Of course I've had no part in deciding what Communicative Language Teaching should be, either, but my transgression will begin with what is explicitly prescribed in the classroom and then venture, only at greater risk of being misunderstood, into the office behind the classroom.<sup>17</sup>

The question remains, I suppose : can *eikaiwa* be of *dô*, or need it be, if the sense of *shumi* may match it for some, and that of *hobby* for many ? As you say, anything may become a way, a path, for the soul to tread. As we give our lives to it, especially as teachers, let's hope that it becomes a way of life.

The purpose, I would say, is to experience *truth*, whether understood as actuality or the beyond, in *inquiry*—that spoken in our lives, as we carry out what we understand as teaching. Life seeking knowledge. The root and purpose of anything, you say, the meaning of every utterance, is *life*. If this meaning is unsayable by means of any particular word (other than *life*), and when words work to say the unsayable (as *life*, for example), poetry is possible : I understand that this is how you try to direct your courses at the university. This is your own *dô* into the language classroom, and it's really not far from mine—at heart.

To speak of achievements, then, I'm glad that you list those students who've graduated from your courses and with whom you've maintained contact over the years. Each little summary you provide gives a picture of someone who continues to learn from you, and no doubt someone who teaches you as well. To me also, such lines of contact are precious, and it is really a recognition of *heart (kokoro)* that I guess we're talking about here : not just the heart that they put into their English lessons but the heart that they showed you as well; the heart of things

---

<sup>17</sup> Do I mean, here, to imagine the office, at Jake's for example, as a *backstage* kind of area, or a place to leave your shoes before entering the temple you've come to visit ?

that you and they were able to go on into or towards. Of course this is what we remember as teachers. And so a *community of individuals* evolves, based in mutual *recognition* and shared interest, shared concern, shared intention, shared desire.

Others may show interest but it must be categorized as ambition ; we forget them. This doesn't mean that they're not also outstanding students, but only that we tend to forget ourselves as stepping-stones for those who chase ambitions which we may not even understand. But to be simply human with each other—to me as to you, this is the root meaning of a course-title like *English Communication*, which in the end is just another way to say *eikaiwa*, after we've pretty much decided that, in the English spoken outside of Japan, the phrase *English conversation* may not have any specific content.

For now, signing off with itchy eyes and contacts in them, I remain

sincerely yours,

—C-Mac.

May 9 2009

Dear C-Mac—

There is a book by Terry Eagleton called, if I remember correctly, *Literary Theory*. In it he talks of an experiment conducted—by him or someone else—in which readers are presented with texts without being given authors' names. Some were from the canon usually fed to university students, some were “pulp”. The readers were to select which works appealed to them most, and, guess what, the pulp came out as the generally more favored readings. Go figure.

In a poetry seminar some 12 years back, three of the four members took the easy way and just brought in poetry from their high school textbooks, which came complete with the textbook author's words telling them what each poem “means”. One girl though—and she is the one who the other day sent me the Baobab seeds from Senegal—really went to town. She scoured the university library. She brought in stuff she found in second hand bookstores downtown. She brought poems from Thailand, from Germany, from Indonesia, from England, from China. She is the one who introduced me to Santōka. *And* : the three others there with us were exposed to these poems too.

\*\*\*\*\*

An idea that crossed my mind is that you in your project might theorize on ways in which *ei-kaiwa* can be liberatory (this is hooks's word which doesn't seem to have worked its way into any dictionaries I have). How can a *dō* be liberating? As opposed to the standard academic classroom fare of passive students and professors droning into a microphone, the *kaiwa* classroom can be almost wholly based on experiential knowledge. It can be a place where authoritative (coming from the one with the "right" to disseminate knowledge) analytical knowledge shares equally with other styles of learning. The *kaiwa* classroom can be *about* its members, their lives, their thoughts, their feelings, their experiences. Where the standard lecture classroom is a predetermined package of knowledge directed *at* them. Plus: the *kaiwa* classroom could be set forth as a liberatory pedagogical model for the rest of the university. Because it seems to me, and as I pointed out in EIALSL, learning needs to be integrated with learners' lives.

\*\*\*\*\*

Yes, well in our classes at TGU it is my intent to point learners towards the unknown. Which often means *unlearning* the junk their heads come filled with, acquired in the schooling they've had till now. My own head too was way back overwhelmed by junk. Like how we were taught that the earth's core is molten metal. If I ask in class "how can anyone know that? has anyone ever been there?" they see me as a troublemaker. The earth's molten metal core was just, along with so much else, mostly everything else, something we were supposed to "learn" so as to answer questions on a test so we could pass the course get promoted go to college get a job and not end up on the "Great Society's" streets starving and homeless. Same as Japan, in essence, and elsewhere I imagine.

Which is why it irks me that they made TGU classrooms' windows so that they can only be opened about ten centimeters. Those windows were my favorite teaching aid. For example I'd slide them wide open and with my arm guide their vision outdoors and ask: "Do you see any time out there? Any minutes or seconds or hours? How about a year? If there really is no such thing as a year outside our human heads then how old are you really?" Alas. How can I do that now that a window can be opened only partially?



I asked about that at a meeting. Why the need to mess with the windows. The answer is something about another school far away where a kid had jumped out (probably because the lectures are so dull—Ha !). There is another answer about TGU in particular where some male students would make mischievous fun sliding them open with so much force that the window would bounce out of its track, fall to the ground and break or maybe kill someone who knows.

Now every window's opening is restricted.

\* \* \* \* \*

EFL adapts to bourgeois mentality, yes, because EFL wants to make money (just as yoga-biz wants to make money) and EFL was from the beginning manufactured by that bourgeois mentality. If you look at that book called *The History of English Language Teaching* or something like that, Oxford U. Press, or Cambridge, it tells how language learning was needed to conduct business. Trading, etc. From its origins it is all about money—why else would anyone want to learn another language? Just joking.

Where were we now? The past: the past doesn't necessarily have to determine what things can change into. Though often it does. A classroom, though, can be a base of transformation, lives can be changed, society can be changed. Thing is members need to let it happen. Let it flow.

I always tell our group, opening the window, "I don't see any rules out there". There are no rules determining what must happen here. But it has to be more than just a topic that people can pay lip-service to, run their mouths blah blah blah and then head for home and television. A teacher has to get them to look deeper. To probe into things below the surface. Even so, only a few will be touched.

(It amuses me the way some sit there in a seminar class nodding along with my words as if they understand or agree, but then it turns out they've grasped nothing. It's just play acting.)

The other day in class we are talking about the North Korean missile crisis, as I named it. I ask them "doesn't Japan have missiles?" Guess what: no one knows. Then I ask them

why people in North Korea, which is, according to Western and Japanese media, a brutal totalitarian state, know they have missiles, but people in Japan, supposedly a free democratic society, don't know whether they have missiles.

To get them thinking beyond what they hear or see in the media or hear in their usual schoolrooms. To get them looking into their unknown. I'm not giving them any knowledge or information—just pointing to look into something/nothing.

All for now,

薇

Zenmai

10 May (Mothers' Day) 2009

Well, dear Zenmai,

today was a day for lobster with Mom. The much-celebrated season has just begun here. If nothing else, it's a good way to enjoy life on this Island, coming none too soon after such a long winter.

You've asked a bit more about what was going on in the class I've referred to as a kind of readers' circle. My thinking was that it should be treated as a first sally for my students into reading literature in English, emphasizing important elements of theory and criticism. For convenience in gathering material, I selected something called *A Beginner's Guide to Critical Reading*, which did, I felt, an exemplary job of collecting notable texts, presenting them in a simple historical order, and highlighting some of the critical points of view to which these works may be exposed. So we read of "Framing the Outsiders" in a scene from *The Merchant of Venice*, of "Colonialism and the Loss of Eden" in a selection from *Gulliver's Travels*, of "Sex and Politics" in Wilde's fairy tale of *The Happy Prince*, and so forth. Perhaps the input could have been wider in its scope,—but it was, because every Friday afternoon there were half a dozen people gathered in the room to bring their worlds to bear on these works. In any case it seemed like a good place to start. Members of the group would take turns presenting works, would take turns as teachers concerned with the works they'd chosen (each chose her own text in turn), each for at least four consecutive weeks' discussions, from amongst these pages.

I wonder if such classes, in which you have indicated that you would look for a kind of liberatory experience such as bell hooks might advocate, really differ in this potential from *eikaiwa*. Certainly the goal (of finding ourselves on a path towards enlightenment, mastery, freedom, happiness) would be the same.

I guess this could be read as a sense of *dō* in education generally, where, as you say, opposed to the standard academic classroom fare of students who are educated and of professors who are educating into a microphone,<sup>18</sup> the *kaiwa* classroom can be almost wholly based on experiential knowledge, on members' desires and intentions and sense of (changeable, always changeable, contingent) historical context. As hooks says in *Teaching to Transgress*, the standard fare is rooted in fear: "fear that leads to collective professorial investment in bourgeois decorum as a means of maintaining a fixed notion of order".

The *kaiwa* classroom can indeed be *about* its members, their lives, their thoughts, their feelings, their experiences. The standard lecture classroom may be the place where a predetermined package of knowledge (interested in efficient science, economic art or correct religion) is directed at the students, imagined as passive objects in the process of education, as *that which is educated*.

The *kaiwa* classroom could be set forth as a liberatory pedagogical model for the rest of the university—a site for freely exploring the relationships that exist between theory and society,

---

<sup>18</sup> I never understood why, at the university, there would always be a microphone on the lectern in a room built to house no more than 60. I remember one classroom in particular, which I shared with a group of history majors (I'll always remember the *banana* dialogues and skits they made for me, using nothing but the words *no*, *not*, *my*, *your* and *banana*). I'd walk in on a day which I knew was brilliant and sunny and mild, and I'd find the curtains drawn and the windows shut behind them, the air-conditioning on, that silly chair lodged inexplicably under the lectern (if I were to sit on it I'd be hidden behind the cavernous lectern), and a microphone on top. Still on. As if the last teacher had simply disappeared at the end of her class-time, leaving behind this empty space directly behind the podium, just so, and everything else centered around that absence, even the students sitting in the same places they'd been sitting for that last lecture, the same places where they always sat; perhaps she'd thought she'd leave things just so for the next teacher, so I could slip in unnoticed; *perhaps she was still there*, I would almost think.

"In a classroom in which all is prescribed and known", Block (1998, p. 15) reminds us, "—in which it is declared what a teacher should teach and a student should learn—there can be no teachers and no students. In such a place we would be not strangers but unseen".

I made it a ritual to right every one of these wrongs, smiling and chatting away with my students and always leaving the microphone perched precariously on the sill of the open window, overlooking (as it did) a part of the hillside which set the campus apart from the rest of the community on three sides. The sound of birdsong, of cicadas in the summertime, would fill the room as we got talking. I remember one unusually clear day beginning class by calling everybody over to the window and help me identify what great mountain we could just make out, way off in the distance. I think we decided, rightly perhaps, that it was Mt Chōkai.

unencumbered by or at any rate distanced from the dominant language of the surrounding society, talking a new society into existence, using a new language. This is very much what I'm driving at in my own sense of what *eikaiwa* offers, as a way of teaching and learning in which students and teachers alike are free to manage themselves, to actively engage each other through questions, dialogue, stories of personal experience grounded in the community setting.<sup>19</sup>

11 May

I feel it is in part the *dō* of *eikaiwa*, this kind of Japanized EFL, to give place first of all to the members of a group who have gathered for the otherwise simple purpose of practising English—but to really give place to the members themselves, their lives. *How was your weekend?* would be a commonplace in how to begin “warming up” to a typical EFL lesson, but I don't imagine EFL teachers as the sort to *allow* such “chitchat” to endure more than five minutes—just until the teacher has taken attendance, you know. However, it seems to me that the more I felt like an *eikaiwa* teacher, the less I would be trying to segue my way into “today's lesson”.

I remember one particular class at the Culture centre, with whom I worked for a good couple of years before starting at the university, whose members generally knew that when they all seemed to have stopped talking for a moment, I would probably introduce some kind of teaching point. I was always amused at how deftly, amongst themselves, they would maintain the lively sort of conversation, especially on topics that arose right there in their accounts of their weekends, most of the time to the utter frustration of any real drive I might have had, to actually do the busy work of being an *EFL teacher*.

The hour would go by, and things would wrap up politely, and that would have been it for a

---

<sup>19</sup> I think it's worth noting, here, that an important aspect of the experience of *gaijin* as *eikaiwa no sensei* has to do with the dialogue that may be built in class—a unique forum for engagement with the sometimes strange new community setting of this life in Japan. At the level of concern for community, beyond interest in hobby-culture, a student may find the opportunity to take part in the teacher's sometimes fundamental questions as to what the immediate community consensus, such as there may be, appears to value.

To me as *gaijin no sensei*, “everything is always suspect.... It is the process of inquiry—the production of doubt—that creates the educational environment. The rest is silence” (Block, 1998, p. 15). I am free to envy those who know what is supposed to make up a course in *eikaiwa*, but really, I find I can do much better than to act in resentment towards a kind of certainty resting with standards for *communicative competence* or *performative automaticity*—as if by invoking such terminologies I would then know what I was doing. Instead, I can look beyond, move beyond.

week. But the things they would talk about. One of them took an interest in Dante (and this was probably what sparked my readers' circle), and would sometimes turn everyone's attention to big ideas in mediaeval European mythologies, as she read through the *Inferno* in Japanese and English. She would later spend three months as head reader in the circle, dwelling on a series of heartbreaking passages from *Paradise Lost*. She also enjoyed hiking and fishing and generally getting out into the mountains, so had plenty to talk about. Another, married to an established local doctor with his own practice, liked to consider the sorts of stories you might hear in the news (and to read and discuss newspaper articles in English). Another was an avid traveller and sportsman (and businessman, especially restaurateur), with plenty of reports on skiing in the European alps or of scuba-diving in Okinawa. Another always had stories about looking after her aging mother, but might not share them except in one-to-one sessions, whenever they came up. All kinds of people came through this class (membership was never fixed, as students were free to join any class geared to the right level), but such was perhaps the hard core of members I'd see every week. With each of these personalities came a unique presence about the class, and I was often overjoyed at the house on fire we all were, together.

I wonder if this (to me) *eikaiwa* purity—this forum for inquiry using English as a new mode in conversation—a new medium for *you and me*, for the dialogue (sometimes internal) that we would undertake to deliberately and concertedly, self-consciously, become explicitly aware of and cultivate, (transform, negate) in our desire, beyond concern, for a newly shared citizenship—I wonder whether this process that meant something concrete to each of us, wherein “the teacher-of-the-students and the students-of-the-teacher cease to exist and a new term emerges”, as Freire said (“teacher-student with students-teachers”), would answer well to your sense of learning integrated with learners' lives.

To keep with Freire for just a moment, I want to pay attention to his *logos*, the level of consciousness at which “true knowledge” may appear, as opposed to *doxa*. I want to take this binary and ask it whether, if *Eikaiwa* were *logos*, would *Eigo* as taught in the middle and secondary levels be the *doxa* from which a liberation were called for? Or would that position be better suited to EFL as imagined in “international-best-selling” textbooks in Communicative (English) Language Teaching? In either case, I want to look at *eikaiwa* as *logos*, hear it expressed as dialogue, in which Freire would recommend recognizing our intentions, critiquing them and eventually realizing our humanity, our liberty in the world of our actions, our existence.

## The Garden Path

13 May

You lament the fact that the university has fixed all of its windows so that they won't open more than ten centimetres—these windows which you used to enjoy throwing wide open so that your students could look out from off that hillside, where you would ask them to survey and look for some example of what they were then speaking of—rules, in your example. I remember coming in to a class one day and finding that the windows had these new warning labels and weren't opening as they'd done before. Perhaps this was during your sabbatical year. I was told the same story, of how a student, somewhere, had jumped to some kind of death out a university window; it's certainly true that we can only speculate as to this student's reason for doing so. The story of vandalism I didn't gather at the time.

In your “Essay in a Language Seeking Life”, you've imagined your classroom as a place like a tea-hut in a garden. A place to learn, you say, learning itself, refers to something other than its own formation, the same way a Japanese garden opens to—lets in—what's outside and beyond. Even a distant mountain, framed in foregrounding leaves and lifted by a passing breeze, can be part of such a garden, can be *in* it. The unknown—a mystery—comes into making this garden how it is.

You and I seem to agree that this experience of *eikaiwa* is practically the opposite of EFL, if EFL is often characterized as instrumental, as a link in a chain of world-economic expediences, a kind of social leverage for those who have the means and leisure to pursue English, those who often say they want to learn “business English”. Did you realize, by the way, that the term *pidgin* seems to derive from rendering in a Chinese-speaking context something about how we may *talk business*? It goes back quite a ways.

The yoga practice that is about looking better naked isn't easily seen as a path to enlightenment, yet some would say *any reason is a good one, as long as it gets people in the door*. Perhaps there's something to this, and the teacher needs to allow for many who will begin when few will seem to follow through. The Yoga Works studios now catching on in the US have been called the Starbucks of their industry, and certainly there have been some powerful examples of such marketing amongst *eikaiwa* schools like Telos or Super or, for a really inter-

national example, Blitz. Yet I find that there is always room (perhaps not so much in those schools but more easily, for the few teachers who venture out into them, in other places like culture centres)—room for the other kind of practice that you and I are now able to talk about, where *eikaiwa* is whatever the participants' (yes, including the teacher's) imagination lets it be. We let it be what it will, we let it grow, and we don't try to force it to be something someone says it's supposed to be, in which case, as you say, we are all—learners and teachers—slaves.

It's a beautiful day here (25°) and I'm writing from a hammock in the corner of an apple orchard that's (still) about to blossom. Life is good. Keeping in touch,

—C-Mac.

### References

- Andorf, D. (2002). Half in, half out. In D. Chandler & D. Kootnikoff (Eds.), *Getting both feet wet : Experiences inside the JET Program* (2nd ed., pp. 154-168). Tokyo : JGPS Press.
- Bashô, M. (1996). *Bashô's road's edge*. (S. Watson, Trans.) Sendai : Bookgirl.
- Bashô, M. (2004). *Backroads to far towns : Bashô's travel journal*. (C. Corman, Trans.) Buffalo : White Pine.
- Bashô, M. (2005). *The narrow road to the deep north*. (N. Yuasa, Trans.) London : Penguin.
- Bashô, M. (2006). *Narrow road to the interior*. (S. Hamill, Trans.) Boston : Shambhala.
- Beckett, S. (1994). *Waiting for Godot : A tragicomedy in two acts*. New York : Grove. (Original work published in 1952)
- Block, A.A. (1998). "And he pretended to be a stranger to them..." : Maxine Greene and *Teacher as stranger*. In W.F. Pinar (Ed.), *The passionate mind of Maxine Greene : "I am...not yet"* (pp. 14-29). London : Falmer.
- Bueno, E.P. (2003). A leading language school. In E.P. Bueno & T. Caesar (Eds.), *I wouldn't want anybody to know : Native English teaching in Japan*. Tokyo : JGPS Press.
- Camus, A. (1955). *The myth of Sisyphus and other essays*. (J. O'Brien, Trans.) New York : Vintage.
- Eagleton, T. (1996). *Literary theory : An introduction* (2nd ed.). Minnesota : UP.
- Freire, P. (1970). *Pedagogy of the oppressed*. London : Continuum.
- Greene, M. (1973). *Teacher as stranger : Educational philosophy for the modern age*. Belmont : Wadsworth.
- hooks, b. (1994). *Teaching to transgress : Education as the practice of freedom*. New York : Routledge.
- Howatt, A.P.R. (1984). *A history of English language teaching*. Oxford : UP.
- Huston, J. (Director) (1958). *The barbarian and the geisha* [Motion picture]. Japan : 20th Century Fox.
- Jacobs, R. (2001). *A beginner's guide to critical reading : An anthology of literary texts*. London : Routledge.
- Lao Tzu (1963). *Tao te ching*. (C. Lau, Trans.) London : Penguin.

- McCarthy, C. (1992). *Suttree*. New York : Knopf.
- McLaren, P. (1989). *Life in schools : An introduction to critical pedagogy in the foundations of education*. Boston : Pearson.
- Melville, H. (1967). *Moby-Dick; Or, the whale*. In H. Harrison & H. Parker (Eds.), *Moby-Dick : An authoritative text ; Reviews and letters by Melville ; Analogues and sources ; Criticism*. New York : Norton. (Original work published 1851)
- Merton, T. (1965). *The way of Chuang Tzu*. New York : New Directions.
- Mizoguchi, K. (Director) (1930). *Tôjin Okichi* [Motion picture]. Japan : Nikkatsu Uzumasa.
- Pinar, W.F. (2009). *The worldliness of a cosmopolitan education : Passionate lives in public service*. New York : Routledge.
- Roach, J. (Director). (1997). *Austin Powers : International man of mystery* [Motion picture]. USA : New Line.
- Swift, J. (1970). *Gulliver's travels*. In R. Greenberg (Ed.), *Gulliver's travels : An authoritative text ; The correspondence of Swift ; Pope's verses on Gulliver's travels ; Critical Essays* (2nd ed.). New York : Norton. (Original work published 1726)
- Watson, S. (2008). Essay in a language seeking life. *Tôhoku Gakuin University College of Liberal Arts Review*, 151; 85-141.



# 強磁場による荷電ベクトル場不安定とカオスパターン

## I 保存系

高 橋 光 一

強磁場中の荷電ベクトル場は、摂動論的な真空の不安定の原因となり、最低エネルギー状態として弦状の場の静的配位が提案されている。本論では、不安定モードの保存力学系を数値的に調べ、時系列とその周波数スペクトル、Poincaré断面の形状とそのフラクタル次元、局所的リヤプノフ指数から、その運動は（準）周期的か、カオス的で興味深いフラクタル構造を持つことを示す。

### 1. 序論

我々の宇宙（宇＝空間，宙＝時間）は、約 138 億年前に誕生した直後に急激に膨張し—インフレーション宇宙の時代—、引き続き真空のエネルギーの解放により生成された熱い放射と物質で満たされ—ビッグバン宇宙の時代—、膨張の速度を落としながら冷え続けて現在に至り、いま再び徐々に膨張を加速し始めている。このような宇宙の歴史の記述は、素粒子論的宇宙論の進歩と 1980 年以降の卓越した宇宙観測技術により近年驚くほどに精密化されてきた（例えば Guth, Steinhardt, 1989; 佐藤勝彦, 2008 を参照）。

素粒子論的宇宙論の観点からは、宇宙の歴史の中で次のような幾つかの特筆すべきでき事が起きたと考えられている。

でき事	経過時間	温度
1) 重力の出現	$10^{-44}$ 秒	$10^{32}$ K
2) 色力の出現と物質生成	$10^{-36}$ 秒	$10^{29}$ K
3) 弱い力と電磁気力の分化	$10^{-10}$ 秒	$10^{15}$ K
4) クォークの閉じこめ・核子の生成	$10^{-4}$ 秒	$10^{12}$ K
5) 電子と陽電子の対消滅	1 秒	$10^{10}$ K
6) 軽い原子核の合成	3 分	$10^9$ K
7) 宇宙の晴れ上がり	38 万年	3,000 K

ここで、‘重力’は Newton の万有引力、‘色力’は物質の基本構成要素クォーク間にグルー

オンを介して作用する力である。1) から 5) の現象は真空の相転移と呼ばれる。

我々に馴染みの深い、光によって引き起こされる電磁気力は、宇宙が誕生して  $10^{-10}$  秒後に生まれた。この混沌の時期に、宇宙で最初の超強磁場が生まれた可能性がある (Savvidy 1977; Matinyan, Savvidy 1978; Vachaspati 1991; Enqvist, Olesen 1994)。例えば, Vachaspati (1991), Enqvist, Olesen (1994) によれば, 3) の相転移時に  $m_w^2 \sim 10^{24}$  G ( $m_w$  は電弱理論における W 場の質量) 程度の磁場がランダムなヒッグス場の勾配によって生まれ, 宇宙の膨張と共に弱められて現在観測されている銀河磁場  $10^{-16}$  G の種になった。ところが, このような強い磁場は, スピン 1 の W 場の磁気モーメントと直接相互作用して, 磁場そのものを不安定にする。以下でこの事実について説明する。

磁気モーメント  $\boldsymbol{\mu}$  と磁場  $\mathbf{B}$  の相互作用エネルギーは, 古典論によれば

$$E_\mu = -\boldsymbol{\mu} \cdot \mathbf{B}$$

であり,  $\boldsymbol{\mu}$  と  $\mathbf{B}$  が平行のとき,  $E_\mu$  は最小になる。相対性理論では, 質量  $m_0$  電荷  $e$  の素粒子は, 磁気モーメントの大きさが  $|\boldsymbol{\mu}| = \hbar |e| / 2m_0$  であり, また静止エネルギー  $m_0 c^2$  を持つので, 磁場中で静止している素粒子と磁場の全エネルギーは, その最小値が

$$E_T^c = m_0 c^2 - \frac{\hbar |e|}{2m_0} B + V \frac{B^2}{8\pi}$$

で与えられる。ここで,  $\hbar$  はプランク定数を  $2\pi$  で割ったもの,  $c$  は真空中の光速, また右辺の最後の項は磁場のエネルギー密度に系の体積  $V$  を欠けたものである。上式は, 粒子の質量が十分小さいとき負になる。この不自然な結果は, 量子論を考慮すると改善され, 粒子のスピンが  $s$  のとき

$$E_T^q = E_0 + V \frac{B^2}{8\pi} \tag{1a}$$

$$E_0 = \sqrt{m_0^2 c^4 - \hbar |e| (2s-1) B} \tag{1b}$$

が最低エネルギー状態のエネルギーを表す式となる。しかし, 今度は,  $s \geq 1$  で磁場が十分強いと静止エネルギーが複素数になってしまう。このとき, 素粒子は質量が虚数の粒子—タキオン—になったという。タキオンが生じると, それまでの真空が崩壊して新たな状態に変質する。

上に述べたように, スピン 1 以上の荷電粒子は, 磁場が臨界強度を超すと摂動論的真空の不安定を引き起こすことが知られている (Tsai 1973; Skalozub 1983; Fujimoto, Fukuyama 1983; Sogut, Havare, Acikgoz 2002)。これは, 粒子の磁気モーメントが磁場の長波長モードと相互作用することによって, (1b) で表されたように粒子がタキオンとなることによる。

ベクトル場では、磁場に直交する成分がタキオンになる。以下では、 $s=1$  のベクトル場に話を限る。

上に述べたような、磁場に直交する荷電ベクトル場のこの特徴は、自発的対称性の破れに基づくすべての統一理論に共通している。例えば、電弱相互作用の標準理論では、摂動論的真空で質量がある  $W^-$  ボソンが強磁場との相互作用によってタキオンのふるまうようになる (Skalozub 1983; Sogut, Havare, Acikgoz 2002; Skalozub 1985; Ambjørn, Olesen 1989)。この状況は次のようなモデルで簡単に表現できる (以後、自然単位系  $c=\hbar=1$  を用いる) :

$$S = \int dt d\mathbf{r} \left[ |(\partial_\mu + ieA_\mu)\phi|^2 - m^2|\phi|^2 - \frac{1}{4}(\partial_\nu A_\mu - \partial_\mu A_\nu)^2 \right] \quad (2a)$$

$$\mathbf{A} = \frac{1}{2}(-By, Bx, 0), \quad A^0 = 0 \quad (2b)$$

$S$  は相対論的に不変な作用、 $A^\mu$  は背景  $U(1)$  ゲージ場で、たとえば (2b) のようにとって、空間の  $z$  方向を向く磁場を表すものとする。結合定数  $e$  は、正 (負) の電荷の場に対しては正 (負) とする。 $\phi$  が荷電中間子場  $W_\mu$  の不安定モード  $(W_1 - iW_2)/\sqrt{2}$  を表す。 $m$  は不安定モードの有効質量で、次のように磁場に依存する :

$$m^2 = m_0^2 - 2|e|B \quad (3)$$

この右辺の第2項は、もとのローレンツ不変なラグランジュアン中の磁気モーメント項  $ie(\partial_\nu A_\mu - \partial_\mu A_\nu)W^{*\mu}W^\nu$  を対角化することで得られたものである。また、基底状態のエネルギーの2乗は、(3) にサイクロトロン運動の零点エネルギー  $|e|B$  を加えると (1b) のように与えられるのである。

スカラー (スピン 0) とスピノル (スピン 1/2) に対しては、それぞれ  $E_0^2 = m_0^2 + |e|B$  と  $E_0^2 = m_0^2$  となることと比べれば、スピン 1 粒子の磁気モーメントの効果は明らかである : 磁場が十分強いと粒子はタキオンになる。

後の便宜のため、不安定モードの運動方程式 (EOM) の解について簡単に復習しておく (Ruder, Wunner, Herold, Geyer 1994)。円筒座標系  $(r, \theta, z)$  で  $z$  方向に一様な  $\phi$  の EOM は、 $t$  を時間として (2a), (2b) より次のように書かれる :

$$\left( \frac{\partial^2}{\partial t^2} - \frac{\partial^2}{\partial r^2} - \frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial r} - \frac{1}{r^2} \frac{\partial^2}{\partial \theta^2} - ieB \frac{\partial}{\partial \theta} + \left( \frac{eB}{2} r \right)^2 + m^2 \right) \phi = 0 \quad (4)$$

この式は、 $B$  が  $r$  と  $t$  のみの関数のときには一般に正しい。この場合、磁場に対する EOM は

$$\left(\frac{\partial^2}{\partial t^2} - \frac{\partial^2}{\partial r^2} - \frac{3}{r} \frac{\partial}{\partial r} + 2e^2|\phi|^2\right)B - \frac{4}{r^2} \left(ie\phi^* \frac{\partial}{\partial \theta} \phi + 2|e||\phi|^2\right) = 0 \quad (5)$$

となる。とくに、磁場が時間的・空間的に一様するとき、(4) は調和振動子の運動方程式になる。その解はよく知られていて

$$\Phi_{n,l}(r) = \frac{1}{\sqrt{n!l!}} (b^\dagger)^l (a^\dagger)^n \Phi_0 \propto e^{-il\theta} r^{|l|} e^{-|e|Br^2/4} L_n^{(|l|)}(|e|Br^2/2) \quad (6)$$

となる。ここで

$$\Phi_0 = \sqrt{\frac{|e|B}{2\pi}} e^{-|e|Br^2/4} \quad (7)$$

は基底状態関数である。また、 $L_n^{(\alpha)}(x)$  は Laguerre の多項式、 $a^\dagger, b^\dagger$  は調和振動子モードを生成する演算子である。磁場についても、数値的には動径方向にガウスの振る舞う弦状の解が得られる。この解の角運動量の  $z$  成分は  $-l$  で、エネルギー固有値は  $E_n^2 = (2n+1)|e|B + m^2$  である。これより、 $B$  が臨界値  $m_0^2/|e|$  を超えると  $E_0^2 < 0$  となり、これまで述べた、‘最低エネルギー状態’  $\Phi_{0,l}$  は制御不能な  $\phi$  凝縮を起こす不安定状態になるという結果を得る。

同じくタキオンモードにより真空の不安定性を引き起こす通常の Higgs スカラー場の場合と異なり、 $\phi$  の一様な凝縮は(4)の  $r^2$  項のために無限のエネルギーを要する。Sokoblz (1985, 1986) と Ambjørn and Olesen (1989) は、電弱相互作用の Weinberg-Salam 理論において最初にこの問題を取り上げ、超伝導現象との類似性から、基底状態として磁場の弦が格子状に配列している状態を提案した。すでに述べたように、宇宙初期の電弱相転移で強い磁場が生まれることも指摘されており (Savvidy 1977; Matinyan, Savvidy 1978; Vachaspati 1991; Enqvist, Olesen 1994)、この問題は宇宙論と密接な関連を持つ可能性がある。

問題を少々異なった観点から見てみよう。相転移が起き、臨界磁場を超える磁場が突然生まれたとしよう。Sokoblz (1985) と Ambjørn and Olesen (1989) が考えたように、その後不安定モードは磁場弦を形成すべくゼロから成長を始めるであろう。それから何が起きるだろうか。よりエネルギーが低い状態へ向かって弦が成長を続けると同時に、磁場は、 $\phi$  との相互作用により初めの値から局所的に変化するであろう。このことは、不安定性の原因である負の質量 2 乗 (3) もまた  $B$  とともに変わることを意味する。(4) と (5) で定義される系は保存系であることに注意しよう。したがって、相転移時にエネルギーの高い状態から出発した系は、静的な状態に落ち着くことはなく、永遠に振動を続けるであろうことを予想させる。それはどのようなものだろうか。

臨界磁場を超える磁場が存在するとき、摂動論的真空からの場の僅かの変移が、その後ど

のような動的変化を荷電ベクトル場+強磁場系にもたすかは宇宙論的な関心を引く物理的問題である。われわれはこの問題を、EOMのパラメータをWeinberg-Salam理論のような物理的モデルが許すものに限定せずに調べてみたい。次節以降で示すように、このとき運動方程式系(4),(5)は、カオスを示す興味深い解を与えることがわかる。この系のカオスデータの博物学的整理の後にその物理学的意味について触れる。

## 2. 力学系の構成

古典作用(2)は $\phi$ の2次の項までしか含まず、既に説明したようにそれ自身で安定状態を作ることはできない。したがって、 $G$ は正の数として、(2a)に4次の項 $-G|\phi|^4/2$ を付け加えることにする。(例えばWeinberg-Salam theory理論では、 $\theta_w(\sin^2\theta_w \approx 0.23)$ をWeinberg角として $G=e^2/(2\sin^2\theta_w) \approx 2e^2$ である。)  $G$ が大きいほど、不安定モードのポテンシャルの深さは浅くなる。すると、作用(2a)は

$$S_T = S - \int dt d\mathbf{r} G |\phi|^4 / 2 \quad (8)$$

のように変更される。これによるモデルの非線形化と前に述べた $B$ の可変性により、解析的分析は非常に困難となるので、以後、数値計算によって解の性質を調べることにする。このとき、できるだけエネルギーの低い解を求めたい。さらに、対象の自由度を減らしたい。そのために、 $\phi$ に対してはノード無しの単一調和振動子モード(7)を、 $B$ に対しては単一ガウスモードを仮定する：

$$\phi(r, t) = (m_0/|e|) f(t) \Phi_{n,l}(r) \quad (9a)$$

$$B(r, t) = (m_0^2/|e|) \left( h_0 - h(t) e^{-h_0 m_0^2 r^2 / 2} \right) \quad (9b)$$

$h_0$ は、 $m_0^2/|e|$ で規格化した無限遠での磁場の値である。 $m_0\sqrt{h_0/2}r \rightarrow r, m_0\sqrt{h_0/2}t \rightarrow t$ のように無次元変数を導入し、(9a)と(9b)を $L_T$ に代入し、 $r$ 積分を実行すると、 $z$ 方向の単位長さあたりの作用として次のものを得る(無次元の一定エネルギー密度項 $h_0^2/2$ と全体に掛かる定数因子 $\pi m_0^2/2e^2 h_0$ を落とす)：

$$S_T^{(n,l)} = \int dt \left[ c_0 |\dot{f}|^2 - c_0 \left( 4n + 2|l| + \frac{2}{h_0} - 2 + \frac{2el}{|e|} \right) |f|^2 + \left\{ \left( 2c_1 - c_2 \left( 4s - \frac{2el}{|e|} \right) \right) h - c_3 h^2 \right\} |f|^2 - c_4 \frac{G}{2e^2} |f|^4 + \frac{1}{8} \dot{h}^2 - \frac{h_0}{4} h^2 \right]. \quad (10)$$

ドットは無次元の $t$ についての微分を表す。ベクトル粒子の不安定モードを考えるので、

$s=1$  である。  $c_i (i=0\sim 4)$  は,  $n, l, h_0$  に依存する定数で, 次のように定義される:

$$c_0 = \int_0^\infty dx e^{-x} x^{|l|} L_n^{(|l|)}(x)^2, c_1 = \int_0^\infty dx e^{-(1+h_0/2)x} x^{|l|+1} L_n^{(|l|)}(x)^2, c_2 = \int_0^\infty dx e^{-(1+h_0/2)x} x^{|l|} L_n^{(|l|)}(x)^2$$

$$c_3 = \int_0^\infty dx e^{-(1+h_0)x} x^{|l|} L_n^{(|l|)}(x)^2, c_4 = \int_0^\infty dx e^{-2x} x^{2|l|} L_n^{(|l|)}(x)^4. \quad (11)$$

磁場が臨界値より僅かに大きい  $h_0=1.01$  のときの  $c_i$  の値を表 1 に示す。

表 1  $l=0$  と  $-1$  での  $c_i$  の値 ( $h_0=1.01, n=0$ )

	$c_0$	$c_1$	$c_2$	$c_3$	$c_4$
$l=0$	1	0.4414962	0.6644518	0.4975124	0.5
$l=-1$	1	0.5867060	0.4414962	0.2475186	0.25

(10) で  $el < 0$  のとき, 2 次の項の  $l$  依存性はなくなる。最低エネルギー状態は  $n=0$  と  $el \leq 0$  のときに実現するであろう。この条件の下で, (10) から変分法によって導かれる  $f$  と  $h$  の運動方程式は次のようになる:

$$\ddot{f} = \left\{ 2 - \frac{2}{h_0} + 2 \left( \frac{c_1}{c_0} - (2s + |l|) \frac{c_2}{c_0} \right) h - \frac{c_3}{c_0} h^2 \right\} f - \frac{c_4}{c_0} \frac{G}{e^2} f^3, \quad (12a)$$

$$\ddot{h} = -2h_0 h + 8(c_1 - (2 + |l|)c_2 - c_3 h) f^2. \quad (12b)$$

(12) が, われわれがこれから解こうとする力学系である。単位長さあたりの保存する ‘エネルギー’ は,  $s=1$  として次式で与えられる:

$$E^{(l)} = c_0 |\dot{f}|^2 + 2c_0 \left( \frac{1}{h_0} - 1 \right) f^2 + \{ 2(-c_1 + (2 + |l|)c_2)h + c_3 h^2 \} f^2 + c_4 \frac{G}{2e^2} f^4 + \frac{1}{8} \dot{h}^2 + \frac{h_0}{4} h^2. \quad (13)$$

### 3. 力学系の基本的性質

力学系 (13) をベクトル  $\mathbf{v} = (f, \dot{f}, h, \dot{h})$  を用い  $\dot{\mathbf{v}} = \mathbf{F}(\mathbf{v})$  のように表したとき, ヤコビ行列は  $J = \partial \mathbf{F} / \partial \mathbf{v}$ , すなわち

$$J = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 0 \\ 2 - \frac{2}{h_0} + 2 \left( \frac{c_1}{c_0} - (2s + |l|) \frac{c_2}{c_0} \right) h - \frac{c_3}{c_0} h^2 - \frac{3c_4}{c_0} \frac{G}{e^2} f^2 & 0 & 2 \left( \frac{c_1}{c_0} - (2s + |l|) \frac{c_2}{c_0} - \frac{c_3}{c_0} h \right) f & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \\ 16(c_1 - (2 + |l|)c_2 - c_3 h) f & 0 & -2h_0 - 8c_3 f^2 & 0 \end{pmatrix}$$

で与えられる。 $J$  の固有値  $\lambda_i, i=1\sim 4$  は、われわれの力学系では変数  $f$  および  $h$  のみの関数である。保存系であるため、その和は 0 になる： $\sum_{i=1}^4 \lambda_i = 0$ 。一つが正の実部を持てば、負の実部を持つ固有値が必ず存在し、系の位相体積はある方向への膨張と他方向への圧縮を同時に受ける。すべての固有値が純虚数の時は、系は周期的に振動する。

位相空間の原点  $\bar{f} = \bar{f} = \bar{h} = \bar{h} = 0$  は固定点であり、 $h_0 < 1$  で安定である。他方、 $h_0 > 1$  では、ヤコビ行列の固有値は原点では  $\pm\sqrt{2-2/h_0}$  と  $\pm i\sqrt{2h_0}$  である。二つの実固有値は、散逸系での Lyapunov 指数に対応するもので、正符号の固有値の存在は原点が  $f$  方向に不安定な鞍点であることによる。(12a) の  $G$  項のために  $f$  の成長には限度があり、位相体積が保存的な膨張圧縮性を持つことから系はカオス的に振る舞う可能性がある。次節以降でこれが事実であることが示すが、運動のカオスの性質は  $G$  が小さいときに顕著になるので、われわれはとくに小さい  $G$ 、すなわち  $G/e^2 = 0.2$  の場合について詳しい計算の結果を示すことにする。(Weinberg-Salam 理論の場合は  $G/e^2 \approx 2$ 。)

$h_0 > 1$  に対しては、安定固定点が存在する。それは系のパラメータとともに変わり、たとえば  $G/e^2 = 0.2, h_0 = 1.01, l = 0(-1)$  に対しては  $(\bar{f}, \bar{h}) (\pm 4.001 (\pm 2.533), -1.581 (-0.732))$  である。また、そこでのエネルギー (13) は、 $-11.886 (-0.895)$  である。この固定点は、Skalozub (1985), Ambjørn, Olesen (1989) で論じられた場の弦構造に対応する。 $\bar{h}$  が負であることは、磁場の部分的な遮蔽、すなわち  $B(r=0) > B(r=\infty) > 0$  を意味する。別の言い方をすると、 $f$  が成長する以前に存在していた磁場に比べ、弦の中心部の磁場の方が強い。これは、磁気モーメントと磁場との相互作用を表す (10) と (12) の  $c_2$  に比例する項—有効質量が (3) のかたちの—による。

## 4. 数値計算

### 4.1. 時系列

われわれはまず、方程式 (12a) と (12b) を  $h_0 = 1.01, l = 0$  および  $\lambda/e^2 = 0.2$  場合について数値的に解く。初期条件は  $f = 0.1, \dot{f} = \dot{h} = \dot{h} = 0$  である。この状態のエネルギーは  $E_{ini} = -0.000193$  で、真空のそれよりもわずかに低い。 $f$  と  $h$  の時間変化を図 1 に示す。典型的な周期  $T \sim 5$  (仮に  $m_0 = m_w$  ( $W$  ボソンの質量) とすると、これは  $\sim 5\sqrt{2/h_0}/m_w \sim 5 \times 10^{-26}$  s に相当する) に加えて、多くのモードの不規則な混合が起きていることがわかる。

扱っている対象は保存系なのでエネルギーは計算の各段階で一定でなければいけないが、時間を離散化する数値計算では誤差のためにエネルギー値は初めの値からずれるのが一般で

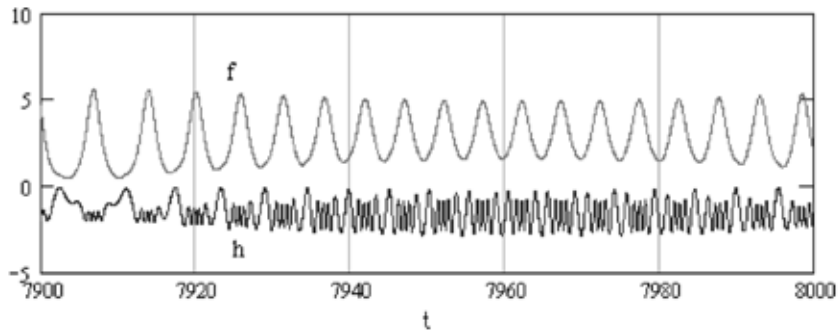


図 1  $f$  と  $h$  の  $7900 \leq t \leq 8000$  における時系列。パラメータは、 $G/e^2=0.2$ ,  $h_0=1.01$ 。初期条件は  $f=0.1$ ,  $\dot{f}=\dot{h}=\dot{h}=0$  ( $E=-0.000193$ )。

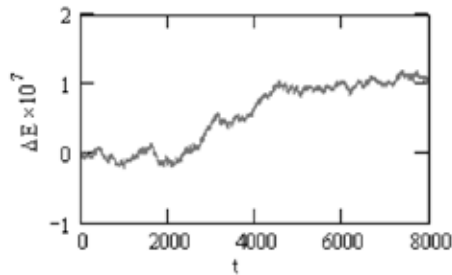


図 2 エネルギー値の  $E_{ini}$  に対する比の 1 からのずれ

ある。このずれが大きければ計算の結果は信頼できない。この研究では計算には補外法の一つである Bulirsch-Stoer 法 (Stoer, Bulirsch, 1996) を初期時間刻み幅  $8000/2^{19}=0.0153\dots$ 、精度  $10^{-12}$  で用いた。ちなみに、Runge-Kutta 法の効率はあまり良くないようである。図 2 に、各時刻におけるエネルギー値を  $E_{ini}$  で除したのから 1 を引いた  $\Delta E$  の変動のようすを示す。相対誤差は問題にしている時間にわたって  $10^{-7}$  程度以内に収まっていることがわかる。これは、本論文の目的のためには十分な精度である。

#### 4.2. 周波数スペクトル

周波数スペクトルを図 3 に示す。 $\nu=1/T \sim 0.2$  近辺の  $f$  のピークを含めて広い分布が見られ、カオスが起きていることを示唆している。

#### 4.3. Poincaré 断面

軌道の  $\dot{h}=0$  での Poincaré 断面を、時間間隔  $(0, 8000)$  でとったものを図 4(a) と 4(b) に示す。前者は  $f-h$  平面、後者は  $f-\dot{f}$  平面への射影である。また、図 4(c) と 4(d) はそれぞれ図 4(a) と 4(b) の一部分を拡大したものである。これらのパターンは、軌道がフラク



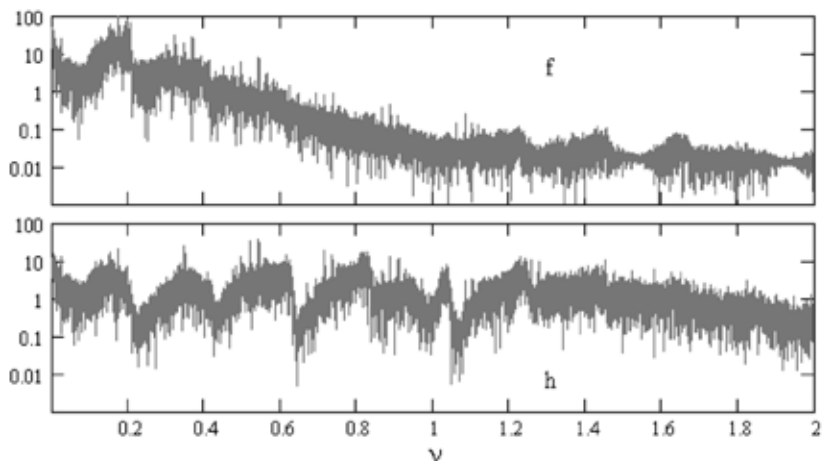


図3  $f$  と  $h$  の周波数分布。パラメータは図1と同じ。

タル的構造を持つらしいことを示している。軌道が通過しない有限の領域が穴トーラスの断面として現われている。位相空間の代表点は、これらトーラスの間を不規則に遍歴するものと思われる。

今の場合、Poincaré 断面は  $E^{(i)}|_{\dot{h}=0} = -0.000193$  で決められる、3次元ユークリッド空間中に埋め込まれた2次元面上にある。ここで  $E^{(i)}$  は、もともと独立な4変数  $f, \dot{f}, h, \dot{h}$  の関数である(13)で与えられていた。Poincaré 断面のユークリッド次元はしたがって  $4-2=2$  のはずである。しかし、図4で示唆されるフラクタル的構造—点密度の非一様性—により、Poincaré 断面それ自身は2より小さいフラクタル次元  $D$  を持つ可能性がある。それを数値的に決定するために、Poincaré 断面を構成する点の系列よりランダムに等確率で  $N$  個の点、 $P_m, m=1, 2, \dots, N$ , を選ぶ。それぞれの点の周りに半径  $\delta_j, j=1, 2, 3, 4$  の球面を描き、その内部の点の数  $n_j$  を数える。 $\ln n_j$  を  $\ln \delta_j$  に対してプロットしてできる直線の傾き  $D_m$  が点  $P_m$  における局所次元で、 $D$  は  $D_m$  を単純平均して得られる。この方法では、 $D_m$  は点  $P_m$  における点密度の重みがかかっているため、われわれはいわゆる情報次元を測定していることになる(Schuster 1988)。図4(a), (b)のPoincaré 断面は13,940点からなる。ここから160点を選んで上記の方法を適用し、 $D=1.80 \pm 0.26$  という結果を得た。結果として、Poincaré 断面は、連結な2次元面を密に埋め尽くすことはないと予測できるであろう。Fermi-Pasta-Ulam (1955) の非エルゴード系を思い出すまでもなく、これは例外的なことではない。加えて、われわれのPoincaré 断面は、図4(c)と(d)が示すように全体的にはフラクタル図形と考えてよいだろう。ただし、計算時間を十分長く取れば、連結な2次元面を密に埋め尽くす可能性を完全には排除できない。

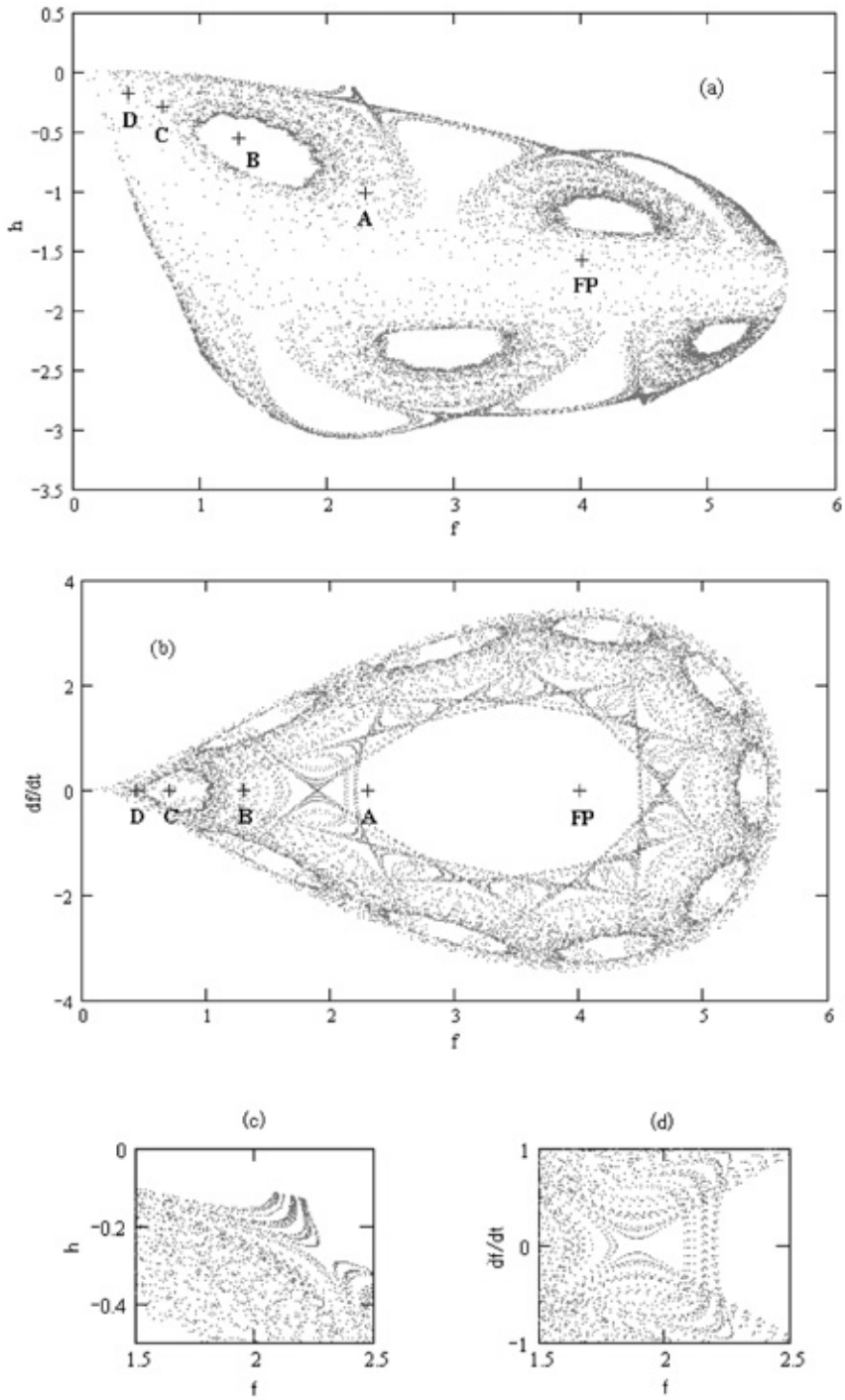


図 4 (a) :  $\dot{h}=0$  での Poincaré 断面の  $f-h$  面上への射影。(b) : 同じく  $f-\dot{f}$  面上への射影。FP は固定点  $\bar{f}=4, \bar{h}=-1.58, \bar{f}=\bar{h}=0$  を表す。(c) : (a) の一部分の拡大図。(d) : (b) の一部分の拡大図。(c) と (d) は  $t=16000$  までの計算である。

#### 4.4. カオスへの移行

固定点  $\mathbf{FP}$  のすぐ近くで、軌道は一般に 2 次元トーラス  $T^2$  を形成する。これは、そのような場所ではヤコビ行列の固有値が一般に互いに非整合的な純虚数となるからである。整数比になる場合は、トーラスは不安定で、パラメータの変化とともに壊れていく (KAM 定理。例えば Berry 1978; Schuster 1988 を参照。) 初期条件を、 $\mathbf{FP}$  から少しずつ変えたときに何が起きるかを見るために、図 4 に示された  $\mathbf{A}$ ,  $\mathbf{B}$ ,  $\mathbf{C}$ ,  $\mathbf{D}$  (すべて  $\dot{f}=\dot{h}=0$  とする) の 4 点を選び、そこから出発したときの時間変化を  $0 \leq t \leq 1000$  の範囲で追跡した。結果を、前と同様に Poincaré 断面の射影と周波数分布として図 5 に示している。

軌道  $\mathbf{A}$  (‘初期条件  $\mathbf{A}$  の軌道’の意味、以下同様) と軌道  $\mathbf{B}$  では二つの基本周波数  $\nu_0$  と  $\nu_1$  が現れ、他の周波数はそれらの整数倍の和として与えられている。すなわち、軌道は準周期的で  $T^2$  を形成する。(面白いことに、 $\mathbf{A}$  では比  $\nu_1/\nu_0$  が黄金比  $(\sqrt{5}+1)/2=1.6180\dots$  に近い。) 軌道  $\mathbf{C}$  でトーラスが壊れ始め、軌道  $\mathbf{D}$  ではカオス的である。 $T^3$  の存在はまだ不明なので断定はできないが、われわれがここで見ているのは、エネルギーという外部パラメータの増加に伴う Newhouse-Ruelle-Takens の経路 (Newhouse, Ruelle, Takens 1978) を経てのカオスであるのかもしれない。(  $\mathbf{FP}$  から  $\mathbf{A}$  の間で起きる現象は、散逸系における、固定点から極限周期軌道に移行する Hopf 分岐を連想させる。)

#### 4.5. エネルギー依存性

運動のカオス的側面は、初期条件を少し変えて軌道が  $f > 0$  のみならず  $f \leq 0$  の領域にも入り込むようにするとさらに明瞭になる。図 6 に、初期条件を  $f=0.1$ ,  $\dot{f}=0.05$ ,  $h=\dot{h}=0$  ( $E=0.00231$ ) としたときの Poincaré 断面を示す。この場合、 $E$  が真空  $f=0$  よりも高く、代表点は軸  $f=0$  上のポテンシャルの峠を乗り越え、その両側を不規則に行き来する。(図が軸  $f=0$  に関し対称でないことに注意。)

#### 4.6. 指数の最大値

近接する軌道や軌道上の近接する点同士が、互いに引き付けあうまたは反発しあう傾向は Liapunov 指数で表される。「引き延ばし」効果が顕著なカオス領域では反発の傾向が強く、この状況は軌道に沿って長時間平均された最大 Liapunov 指数  $\lambda_{\max}$  が正の値を取ることで示される。 $\lambda_{\max}$  は、散逸系では初期条件の不連続関数で、力学系とアトラクターが決まると決まる。われわれの系は保存的で、解の連続性により軌道の形は初期条件に連続的に依存するので Liapunov 指数も初期条件の連続関数である。したがって、アトラクターが存在する散逸系の場合のような、力学系の制御パラメータのみの関数としての Liapunov 指数はない。

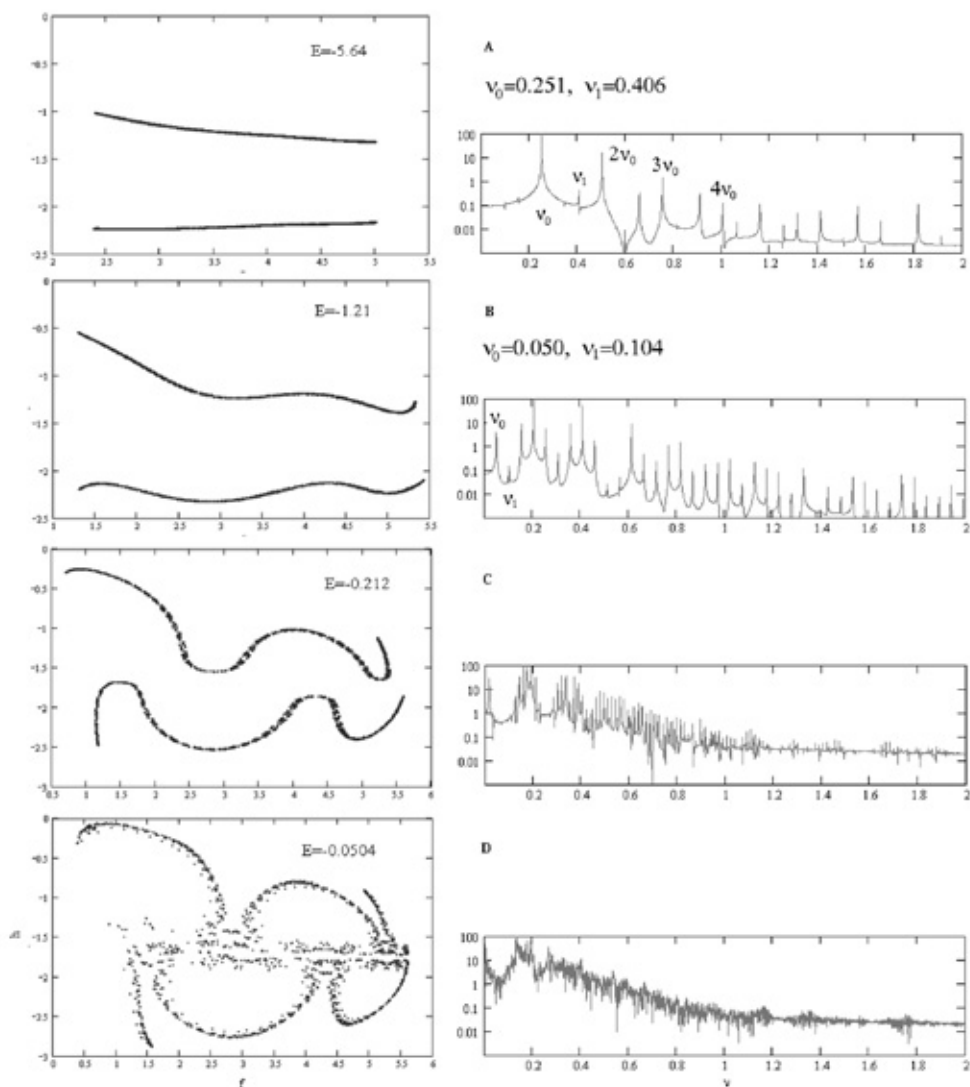


図5  $\dot{h}=0$  での Poincaré 断面の射影 (左) と周波数スペクトル (右)。各点の  $(f, h)$  の初期値とエネルギー  $E$  は次のようである。A :  $(2.4, -1.02)$ ,  $E = -5.64$ ; B :  $(1.3, -0.552)$ ,  $E = -1.21$ ; C :  $(0.7, -0.298)$ ,  $E = -0.212$ ; D :  $(0.43, -0.183)$ ,  $E = -0.0504$ 。

例えば、図4においてFPの近傍の軌道では  $\lambda_{\max} = 0$  であるが、A, B, C, Dを初期条件とする軌道ではそれぞれ0.398, 0.692, 0.806, 0.861という値を取る。また、図4のPoincaré断面を与える元の軌道では0.847である。

このように、 $\lambda_{\max}$  が正の値を取る軌道では、位相体積がある方向に急速に引き延ばされ、近接する軌道がすぐに離ればなれになる。この様子を見るために、はじめに  $f-f$  面上に小さな円弧状に2,000個の点を配列し、これを  $t=0$  における状態とし、時刻  $t=35$  においてこれらの点がどのように配列するかを調べた。結果を図7に示す。これらの図から、問題に

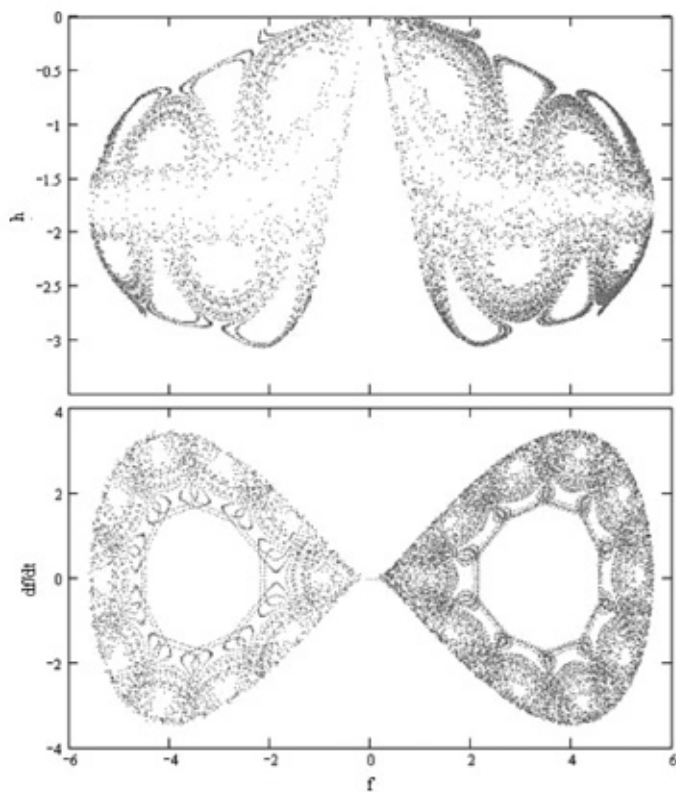


図6 (a) :  $\dot{h}=0$ でのPoincaré断面の $f-h$ 面上への射影(上)と、同じく $f-\dot{f}$ 面上への射影(下)。初期条件は $f=0.1, \dot{f}=0.05, h=\dot{h}=0$ 。

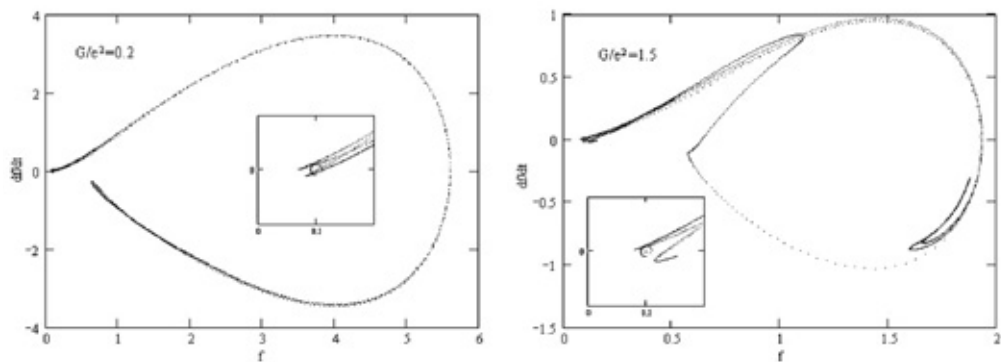


図7  $f-\dot{f}$ 面上に初期点2000個を、中心 $(0.1, 0)$ 半径 $0.1$ 角度 $0$ と $3\pi/2$ の範囲の円弧状に配列し、 $t=35$ での点の位置を描く。左が $G/e^2=0.2$ 、右が $G/e^2=1.5$ 。はめ込み図は初期点列近辺を拡大したもの。

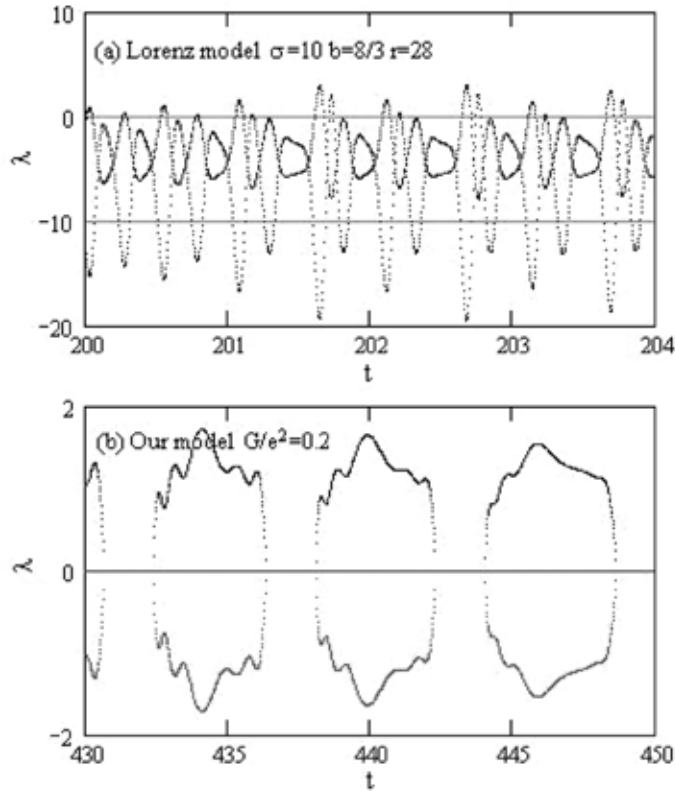


図 8 ヤコビ行列の固有値の時間変化。(a) Lorenz モデル( $\sigma=10, b=8/3, r=28$ )。(b) われわれのモデル ( $G/e^2=0.2$ , 初期条件:  $f=0.1, \dot{f}=\dot{h}=\dot{h}=0$ )。

している力学系が非常に強い引き延ばし効果を内包していることがよくわかる。

ついでに、ヤコビ行列の固有値の実部が軌道上でどのような値を取るかを、図 8(b) に示しておく。参考のために図 8(a) に散逸系の典型例として Lorenz モデル (パラメータは  $\sigma=10, b=8/3, r=28$ 。これらのパラメータの意味については例えば Schuster (1988) を参照されたい。) の場合を示した。Lorenz モデルでは、最大固有値がたかだか 3 程度であるのに対し、負の固有値は  $-19$  にもなり、非常に大きな押し潰し効果が見られる。しかも、正の固有値が現れる時間的割合は  $0.2$  にも満たない。これに対しわれわれの保存系モデルでは、正と負の固有値は対になって高い割合で現れ、引き延ばしと押し潰しの効果は常に釣り合っている。結果的に、最大 Liapunov 指数は既に述べたように  $1$  に近い値になっている。

最大 Liapunov 指数はヤコビ行列の最大固有値の平均で与えられるので最も計算しやすいという利点はあるが、その数値だけで上に見た系の振る舞いを描き出すことは不可能である。ここでは、系の引き延ばし効果の原因を見るために、図 4 の場合についてヤコビ行列の最大固有値の実部が Poincaré 断面上でどのように分布しているかを調べてみた。結果を、図 4 (a)

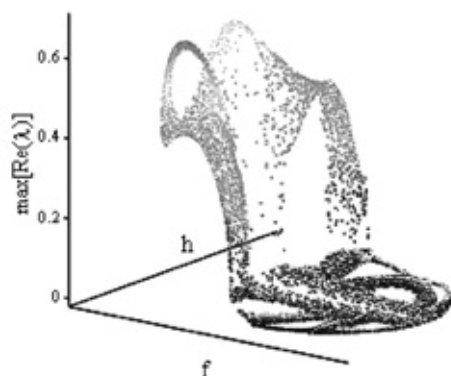


図9  $\max[\text{Re}(\lambda)]$ の、図3(a)に示されたPoincaré断面上での分布

上の点  $(f, h, \max(\text{Re}(\lambda_i)))$  の3次元散布図として図9に示す。図の底辺部の広い領域で  $\max(\text{Re}(\lambda_i))=0$  (準周期的), 周辺の  $f$  が小さい領域で  $\max(\text{Re}(\lambda_i))>0$  である。系は準周期的領域に長く留まった後, 小さい  $f$  の領域に移動してからすばやく  $f$  を増加させるようすが良く窺える。これが, われわれの系がカオスを生む直接的メカニズムになっていると考えられる。

#### 4.7. $G$ 依存性

これまでは, (13)において小さい  $G$ , すなわち  $G/e^2=0.2$ , の値を主に採用してきた。Weinberg-Salam 理論のような現実的な理論では, より大きい値,  $G/e^2=1/(2\sin^2\theta_w)\approx 2.16$  が使われる。そこで最後に,  $G/e^2$  を大きくしたときの系の振る舞いを調べておく。比較のために, 他の条件は図4の場合と同じにとる (したがって,  $G$  が大きいほど軌道のエネルギーが大きい)。

時系列, 周波数スペクトルは, ここには示さないが  $G/e^2=0.2$  の場合のように低周波数領域ではランダムである。  $G$  が大きくなるにつれ, 高周波数領域 ( $G/e^2=0.2$  に対し  $\nu>1.4$ ) ではほぼ一定値に近づく。

Poincaré 断面を図10に示す。  $G$  が大きくなると細かい構造が失われるように見える。これは  $G$  が大きいほど周波数スペクトルが高周波数領域で単調になることと対応していると思われる。次元については前と同様にして,  $G/e^2=0.7$  と2に対しそれぞれ  $D=1.73\pm 0.33$ ,  $1.84\pm 0.36$  を得た。

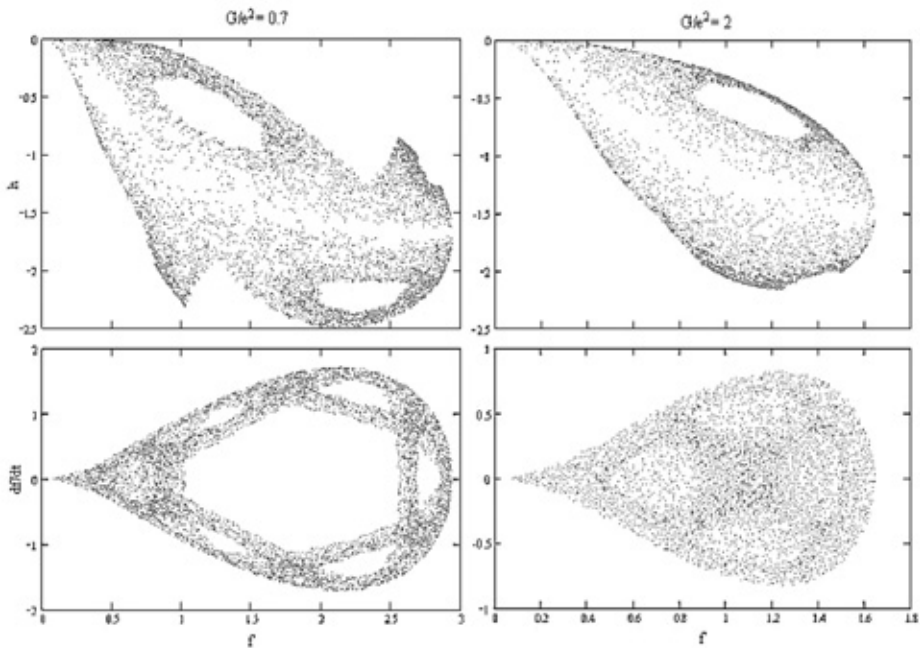


図 10 二つの  $G$  での Poincaré 断面。左:  $G/e^2=0.7$ , 右:  $G/e^2=2$

## 5. 結論と課題

われわれは、荷電ベクトル場が強い磁場の下で不安定になることに注目して、不安定モードと強い磁場との相互作用を表す単純な保存力学系モデルをつくった。そして、とくに 0 主量子数・0 角運動量のモードについて、その運動を数値的に調べた。

初期条件（あるいはエネルギー）によって古典軌道は（準）周期的かカオス的かのいずれかになる。不安定モードの 4 次の結合定数  $G$  が小さいとき、エネルギーの高い軌道はフラクタル性をもつことが、Poincaré 断面のフラクタル次元の計測からわかる。Poincaré 断面は、そのフラクタル構造がきわめて印象的であると同時に、位相空間内のいくつかのトーラス  $T^2$  とその間の複雑な運動の存在を垣間見せてくれる。初期条件（あるいは系のエネルギー）を変えた軌道計算によると、低エネルギーでは二つのおそらくは非整合周波数による  $T^2$  が形成される。エネルギーが上がるとあるところで  $T^2$  は突然形を崩しカオスに移行するが、その前に 3 次元トーラス  $T^3$  が形成されるのかはまだ確かめることができていない。もしこれが確認できれば、散逸系における  $T^3$  を経てのカオスへの移行 (Newhouse, Ruelle, Takens 1978) に対応する現象が保存系でも起きることを示す具体的事例となる。

$G$  が大きくなるとともに不安定モードのポテンシャルは浅くなり、軌道のフラクタル性は弱まるように見える。軌道は微分方程式のパラメータとともに連続的に変化するはずであ



る（例えば Hirsch, Smale, Devaney 2004）が、その変化がどのようなものかはまだわかっていない。

上記の事柄は、物理的に興味深い意味を持つ。臨界磁場を超える磁場のもとでは、荷電ベクトル場の運動は（準）周期的にもカオス的にもなり、必ずしも静的な配位に落ち着く（Skalozub 1985, 1986 ; Ambjørn, Olesen 1989）わけではない。相転移が 2 次で、エネルギー差が小さいうちの真の真空内での弦形成が可能な場合は、Skalozub と Ambjørn, Olesen が考えた場の配位が起きうるが、相転移が 1 次の時は、偽の真空と真の真空とのエネルギー差が大きいので、定性的には本稿での  $G$  が小さいケースと似た状況がつけられると思われる。カオスの古典的取り扱いの妥当性は問題になるが、このとき不安定モードの振幅は  $O(m_0/e)$  程度の大きな値に達するので、保存系に話を限れば、本稿での古典論的解析はそれほどのはずではないモデル的描像を与えてくれるのではないだろうか。

非アーベルゲージ場の不安定性によって、初期の宇宙で強磁場が生成し（Savvidy 1977 ; Matinyan, Savvidy 1978 ; Enqvist, Olesen 1994）、したがって本稿で見出されたような荷電ベクトル場の不安定モードによるカオスが宇宙的な舞台の上で実現する可能性がある。（カオスでの典型的な時間スケールは宇宙的な相転移の時間よりも短く、系はカオスの状態に十分長く滞在することができる。）現実には、ベクトル場はレプトンなどと結合し崩壊するので、そのことによる散逸効果を取り入れなければいけない。これが系の運動にどのような結果をもたらすかは興味のある問題である。

## 参考文献

- Ambjørn J and Olesen P, 1989 *Nucl. Phys.* **B315** 606 ; 1990 *ibid.* **B330** 193.  
 Arnold V J, 1964 *Sov. Math. Dokl.* **5** 581.  
 Berry M V, 1978 in *Topics in Nonlinear Dynamics* ((ed.) Jorna S, Am. Inst. Phys. Conf. Proc. **46**)  
 Enqvist K and Olesen P, 1994 *Phys. Lett.* **B319** 195.  
 Fermi E., Pasta J. and Ulam S. 1955, *Los Alamos Scientific Laboratory report* LA-1940.  
 Fujimoto Y and Fukuyama T, 1983 *Z. Phys.* **C19** 11.  
 Guth A and Steinhard P, 1989 *The inflationary universe in New Physics* (Cambridge University Press, Cmbridge) p 34.  
 Hirsch M W, Smale S and Devaney P L, 2004 *Differential Equation, Dynamical Systems, and An Introduction to Chaos* (Elsevier, Academic Press, New York) p 147.  
 Matinyan S G and Savvidy G K, 1978 *Nucl. Phys.* **B134** 539.  
 Newhouse S, Ruelle D and Takens F, 1978 *Commun. Math. Phys.* **64** 35.  
 Ruder H, Wunner G, Herold H and Geyer F, 1994 *Atoms in Strong Magnetic Fields* (Springer, New York), Chap. 2.  
 Savvidy G K, 1977 *Phys. Lett.* **B71** 133.  
 Schuster H G, 1988 *Deterministic Chaos*, (VCH, Cambridge) Chap. 7.

Skalozub V V, 1983 *Sov. J. Nucl. Phys.* **37** 283.

Skalozub V V, 1985 *Sov. J. Nucl. Phys.* **45** 665 ; 1986 *ibid.* **43** 1045.

Sogut K, Havare A and Acikgoz L, 2002 *J. Math. Phys.* **43** 3952.

Stoer J and Bulirsch R, 1996 *Introduction to numerical analysis*, third edition, (Springer New York)

Tsai Wu-Tang, 1973 *Phys. Rev.* **D7** 1945.

Vachaspati T, 1991 *Phys. Lett.* **B265** 258.

佐藤勝彦 2008, シリーズ現代の天文学 2 宇宙論 I (日本評論社) 第 1 章

# ピーター・ロッシによる応用社会学緒論

ピーター・ロッシ著 久 慈 利 武 訳

## 第1部 アメリカにおける戦後の応用社会調査

### 序論

第二次世界大戦のはるか以前のソーシャルワークとの断絶以来、社会学はずっと主としてアカデミックな学問である。ASAの会員大半はアカデミックスかアカデミックスになろうとしている者たちである。政府や経済の民間部門に位置するものはほとんどいない。他の社会科学との対照性はきわめてはっきりしている。心理学者の半数近く、経済学者の3分1近くは非アカデミックスである。その表面上は応用社会学者は多くないように見える。少なくとも、アカデミズムの外部で実践する社会学者としてフルタイムの生計を立てるのは実行可能には思えない。

しかしこれらの外見は誤りである。社会学者の仕事の多くは応用であるが、社会学者の雇用基盤は、個人の実践家や政府、私企業の雇用者としてよりも、大学、短大の根拠地内にいる方が多い。実は、この論文が明らかにするように、応用社会学者の仕事の一部は戦後の社会学の成長を深く形作ってきたのである。

応用社会学という用語は、様々な活動をカバーする。その一部は盛んであるように見えるが、他のものは比較的沈滞しているように見える。まず、応用社会学は公共政策問題の解決に社会学理論と知識を応用することを意味する。これは、我々の初期の創設者の多くが社会学をアカデミックな事柄以外に実際に応用することを考えたときに、念頭に置いた類の社会学の応用であった。応用社会学のこの分枝——社会学理論と知識の応用——は盛んではない。社会学理論は我々が追求すべき類の社会政策の明確なビジョンに導いてきていない。社会学者で政策形成者、それへの助言者になっている者はほとんどいない。たまたま戦後期に、社会学者が権力の周囲近くにいる自分を見いだしても、我々は社会政策の設計者ではなかったし、そのような周囲の最も外郭の境界を突き破ってなかに浸透した者もない。

応用社会学の2番目の意味は、個人、世帯、組織に対する臨床実践である。大体、社会学者は個人、世帯に対する臨床実践をソーシャルワーカーや心理療法家に任せてきた。また我々はもっと有力なモデルを意のままにする経済学のような学問と競合するので、組織とあまりうまくやってきていない。臨床社会学は、どちらにせよ盛んではない。事実、臨床の実践家

の州認定に向かう目下の趨勢が続くならば、臨床社会学者は州の認定制限によって臨床実践から閉め出されるであろう。

応用社会学の3番目の意味は、応用問題への社会調査の形を取った応用社会学の仕事の意味である。この形の応用社会学、つまり応用社会調査はこれまで盛んであり、これからも繁栄し続ける兆候を見せている。応用社会調査者として、社会学者は情報の収集者として、社会政策の評価者として、経験に基づいた社会現象モデルの構築者として有用であることを証明してきた。もちろん、社会学者は応用社会調査の独占者ではない。この領域では、我々は経済学者、心理学者、教育研究者と競ってきている。彼らは応用社会調査を行うスキルを持っている。

応用社会調査は我々の社会についての我々の理解だけでなく、我々の学問の成長にも寄与してきた。戦後期のより重要な経験的仕事は応用の関心から生じ、学問としての社会学の成長は、経験的な応用社会調査によって開発された我々の社会についての知識によって深く影響を受けてきた。

応用社会調査と基礎的社会調査の境界が曖昧であることと、学問としての社会学が基礎的社会調査にあまり報酬を与えすぎるバイアスをもつ<sup>\*</sup>ゆえに、この貢献は社会学内で気づかれないままに見過されてきた。

<sup>\*</sup> 社会学者は彼らの公刊した仕事の応用的出自を曖昧にする傾向がある。

## 1. 応用社会調査と基礎的社会調査のフuzzyな区分

学問としての社会学はその中心的関心事として公共政策の発展に関わる争点の多くをもってきた。社会学者は社会秩序維持の問題、価値物の分配の問題、階層の問題、人種関係の問題、家族構造の問題、他の行動領域への仕事のインパクト、逸脱の起源等に関心を向けている。応用社会調査はまた政策形成者と政府がそのようなトピックに関する研究に資金を進んでつけるので、そのような事柄に関心を払う。かくして、応用調査者によって取り組まれるトピックはしばしば社会学の関心事の中核でもある。要するに、応用社会調査は社会学の中心がするのと同じ主題を扱う。

方法には両者の間に何の違いもない。応用社会調査と基礎的社会調査は、データ収集、リサーチの設計、データ分析に同じ技法を用いる。事実社会学が基礎的調査で用いる技法の多くは元々は応用の文脈で設計されたものであるという十分な証拠がある。例えば、エリア確率サンプリング、サンプル・サーベイ実践の多く、多くの統計手法。

事実、主題、方法の区別の不在は応用社会調査と基礎的社会調査の間の境界のフuzzyさの源泉である。

それでは両者の違いは何か。二つの主要な違いがある。

第一に、応用社会調査は主として政策争点への関心によって駆動される。応用調査は、当該の社会現象の究極的理解によりも、所与の目的を達成するために政策がどのように変更されるべきかにより関心を払う。しかしながら、究極的理解は実効的な公共政策の形成を妨げず、促進することにあるので、応用社会調査は政策にレリバントなデータを提供するだけでなく、しばしば基礎的の学問関心を照射することがある。しかし、政策関心は変化するし歴史的に縛られている。今年の政策関心は去年のそれでないし、来年のそれでないことがあり得る。これは、応用リサーチが政策の関心事であることをやめ、基礎的リサーチが政策関心事となることがあることを意味する。例えば、1947年のNORCによる職業威信の研究（Reiss 1962）は、政府雇用のなかでの科学者の威信低下への関心から、軍のひとつによって資金がつけられたものであった。そのような事柄への政策関心は、科学者を雇うこと以外の科学共同体に関係づけるベターなやり方が軍によって考案されてきていたので、長らく衰退してきた。だが、NORCによる威信研究は、重要なリサーチとして階層の分野では持続してきたのに、応用社会調査としては同定されなかった。同様に、基礎社会学は政策関心が基礎社会学を政策に関連したものにするようにシフトしたので、応用的なものになりうる。Mertonは将来 Cloward/Ohlin（1960）が自分の基礎的メッセージを非行防止プログラムに変換しようとするだろうと予想せず、アノミーと社会構造に関する論文（1938）を執筆した。

両者の二番目に重要な区別は、二つの活動の組織コンテキストにある。応用社会調査は、クライアント志向なのに対し、基礎的調査は学問志向である。資金給付機関、組織は応用社会調査の目標を定義するのに対して、学者や研究者は基礎的調査の目標を設定する。対応する権威構造にも違いがある。クライアントは彼が資金給付する応用調査の営為を監督する傾向があるのに対して、基礎的調査者はグラントによって資金が給付されていてももっと自立的である。

現時点で応用調査の大半が大学外の個々のリサーチ会社で行われているという事実は、ある程度基礎的社会調査を応用社会調査から区別している。我々の学問のアカデミック志向のゆえに、社会学者が応用社会調査にもっと十分に参加するのにハンディキャップとなっている。

## 2. 応用社会調査の趨勢

応用社会調査は第二次世界大戦のあいだかなり爆発的注目を浴びた。戦争省の情報教育支局は S.A. Stouffer を長とする強力なリサーチ・ユニットを持った。彼は社会調査の戦後の指導者の多くを雇い、『アメリカ兵士（Stouffer et al. 1948）』の戦後の出版を通じて、社会調査

がいかに重要な政策貢献が出来るかの広範な事例を示し、同時に社会学にも貢献した。Rensis Likert を長とし、主として心理学者をスタッフとした農業省内の同様な戦時活動は、ミシガン大学 SRC の戦後創設の起源となった。現在はシカゴ大学にある NORC は、第二次世界大戦中に、戦時情報局の世論調査アームと消費者向け商品の戦時の宣伝と価格統制への民衆の反応をモニターする価格管理局として発足した。

第二次世界大戦の終息と共に、応用社会調査の政府支援縮小は多くの研究者をアカデミックな場に戻した。良く訓練された経験的リサーチャーの群は、大学院カリキュラム内の経験的計量的リサーチにより高位の地位と堅いポジションを提供することで指導的大学の院生の養成の性格を変えた。結果として、経験的社会学者はリサーチ方法としてサンプルサーベイにマイナーな追加物を開発した。

連邦政府が戦後直後は応用社会調査に対する支援水準を縮小したが、1950年代は、様々な部署の応用社会調査にとって依然として研究資金の入手が可能であった。軍は人的資源の管理に関する仕事に支援を続けた。州の部署は、議会が州の部署とその出先が国内の世論調査を実施することを禁じるまで、外国の政策イベントに対する民衆の反応に関して NORC での世論調査を通じて蛇口を維持続けた。民間防空局は我が国がロシアによって爆弾を落とされた際に何が起こるかを知ることを期待して、自然災害に対する被災者の長期に続く反応研究を支援した。連邦政府のリザーブ・ボードは消費者の期待と意思についての ISR に資金支援をした。居住・住宅金融公社は居住移動と大都市の成長に関する少数のリサーチに資金支援をした。

民間の財団も活発でなくはなかった。1950年代はフォード財団は時折評価リサーチの要素を付着した一連のデモンストレーション・プロジェクトを開始した。特に重要だったのは、各々が非行の因果関係の当時流行していたパラダイムのひとつに集中するいくつかの非行プロジェクトに、この財団が資金給付をしたことであった。

しかしながら、1960年代は（現時点では縮小の兆候を見せている）応用社会調査のブーム期がスタートした。多数の出来事が上昇急成長曲線をスタートさせた。まず、国立科学財団（NSF）はその管轄範囲を基本プログラムに社会科学を含むまで広げ、後に社会科学にも位置を与えることになる応用プログラムを開始した。NIMH は、研究所を社会学ならびに密接に関連する社会科学における基礎的応用的リサーチを支援するように導いたコミュニティ精神健康プログラムを立ち上げた。大統領による諮問委員会のいくつかは、警察、犯罪被害者、（のちに市民の無秩序と暴力の10年間）に関する政策に志向したリサーチの機会を与えた。

応用社会調査の最大の端緒は貧困戦争と関連した立法から到来した。特に重要なのは、立

法のいくつかに組み込まれ、新たなソーシャル・プログラムに責任を持つ機関によって政策として厳格に追求される評価に新たに力点がおかれたことであった。1964年の初等中等教育法は、不利益を被る児童を高い比率で抱える学校への援助の評価を明確に要求した。この法は評価が学校を改善するために戦う親たちに弾薬を提供することを期待して上院議員 Robert Kennedy による法案に付帯されたものであった。新たに創設された OEO はたくさんの重要な応用社会調査に資金給付した。そのなかには、ニュージャージー・ペンシルバニア州所得維持実験、経済的機会のサーベイ、世帯所得動態研究が含まれる。

社会政策の実効性を評価する手段としてのランダムに統制された実験の利用はニューデールの時代以来提唱されてきているものであったが、貧困戦争の試みの中で設置されたプログラムと機関の大洪水は実際に最初の大規模な試みに資金を給付した。1967年にニュージャージー・ペンシルバニア州所得維持実験がスタートし、すぐに他の所得維持実験（シアトル、デンバー、ガリー、農村部ではアイオワ州、ノースカロライナ州）が後続した。連邦政府に後援された全国健康保険プロジェクトは、ランド・コーポレーションによって行われた全国健康保険実験に導いた。3つの住宅手当実験は1974年の住宅立法の際に特に要請されたものである。労働省は、刑をおえた囚人に失業保険の恩恵を与えることが再犯防止にどれだけ効果をもつかの実験に研究資金を与えた。

プログラムと政策の社会科学による検証におかれた新たな重視とそのようなプログラムと政策の実施の継続的なモニタリングは、1960年代、70年代における応用社会調査の成長に端緒の多くを与えた。自動的に好ましい結果をもたらすだろうと思われた政策とプログラムが設計されるのかという疑念に、それは由来している。それはまた、政策形成者、政府の官吏の側が社会科学にこれまで以上に曝されることの思惑もあった。議会と機関の長はもはや自分たちがすべての回答をもらおうと確信していないし、彼らのトレーニングと社会科学に対するこれまでよりも好意を施すことを通じて、社会調査がプログラムの達成に関して貴重で納得のいくデータを与えてくれることに気づいたのである。

1970年代は、政策争点とソーシャル・プログラムの評価に社会調査を一層利用する機運が続いた。強力な応用社会調査プログラムは、労働省、住宅、都市開発省、健康・教育・福祉省、司法省（法執行支援行政を通じて）、農業省、商業省内で成長した。教育はこの10年の終わりまで独立した省とはなっていなかったが、HEW省内での教育局の応用社会調査活動は、州教育当局、数千の郡部の学校区の教育活動を上から眺めるだけでなく、この数十年の最大規模な評価プロジェクトのいくつかを含む非常に大きな事業を形成していた。

1970年代末までに、連邦政府資金は毎年約2兆ドルが応用社会調査に支出された（Abt 1980）。さらに州政府、郡政府は毎年数千万ドルを支出した。民間セクターは官セクターに

よって明らかに圧倒されてはいるが、民間財団と企業は応用社会調査に資金を給付した。

### 3. 応用社会調査産業市場のなかでの（大学と社会学者の）シェアの少なさ

リサーチに志向した大学は戦後まもなくは、応用社会調査の需要の大半に応えたが、市場のアカデミックなシェアは 1970 年代末にはドラスティックに縮小した。これは大学が応用社会調査に従事しなくなったといっているのではなく、反対に応用の仕事で手に入る資金は大学の研究者と研究組織によって獲得されるものは漸増しているのである。大学内部の社会科学リサーチ・センターは繁栄した。ISR, NORC の過去 20 年での急速な成長をみればよい。むしろ資金全体でのアカデミックなシェアの減少は、応用社会調査の需要に応えるために起こった民間と非営利系のリサーチ組織の成長を反映している。前者のいくつかを挙げると、Urban Institute, Westat, Mathematica, Abt Associates である。前者の残りのものは、企業が社会調査部署や附属施設を開発したもので、Systems Development Corporation, Stanford Research Institute, Rand Corporation などである。

今日では、この産業はきわめて集中している。教育省(その前身は DHEW のなかの教育局)によって契約が結ばれた評価の 75% 以上が 12 の最大リサーチ会社に、5% 弱が大学に、残りが小リサーチ会社に (National Academy of Science 1981)。

応用社会調査会社とアカデミックなリサーチ組織の規模は考察するに値する事柄である。おそらく、500 の民間会社と 50 の大学は応用社会調査産業を構成するだろう。この産業は、応用社会調査の入手可能な連邦政府資金の 40~50% をしめるように思われる大規模な企業とリサーチセンターによって席巻されている。この集中にはいくつかの理由が存在するように思われるが、主要な源泉は、応用社会調査のスケールによって求められるタスクの規模にある。大規模なフィールド実験を行うのは、スキルを持ったフィールドワーク管理者から洗練された統計的モデリングにわたる非常に多様なタレントの集中を必要とする。これは大学が十分に参加できなかった主要な理由のひとつである。実際、附属のリサーチ組織を持たないリサーチ志向の大学は、大規模プロジェクトの入札では小企業である。一人ないし二人の基幹的研究者と院生たちでは必然的に書類上は素人として登場するアドホックなスタッフを集める場合を除いて、大規模なフィールドスタディを行うことは出来ない。

多くの社会学者は応用社会調査を行う適切なスキル訓練と経験を持っていたが、社会学者が応用社会調査予算総額のなかで得たシェアはごく小さなものであった。応用社会調査は公認の教育者を持ったことがなかった。事実その学問が実験ワークやフィールド経験の伝統を持たなかった経済学者が主要なフィールド実験の設計者、分析者であったことは皮肉なことである。



応用社会調査に社会学者の参加が低水準ないくつかの理由がある。

- 1) 社会学は心理学、経済学と対照的に、アカデミーによって重く支配されている。あらゆる種類の応用ワークは社会学のなかでは威信が低く見られている。
- 2) 多くの社会学者はチーム努力で仕事をする経験を持っているが、社会学のワークの支配的モードは多くとも一人の同僚と少数の院生と一緒に仕事をする単独のリサーチャーのそれである。
- 3) 社会学は政策志向ではない。社会学理論を構築する際に、我々は、公共政策の変化が社会問題の生起、分布にどのように影響を与えるかを識別することに関心を払わない傾向がある。
- 4) 深刻な社会問題を扱おうとする組織と密接なつながりを持つ社会学者はほとんどいない。対照的に、心理学者、教育研究者はそれぞれ精神的ヘルスケア産業、教育と密接なつながりを持っている。
- 5) 社会学者であるということは外部世界との曖昧な同一化である。社会学者を雇おうとするものをまごつかせる、社会学のスタイルの多様性、リサーチ洗練度の多様性、理論パラダイムの多様性が社会学に存在する。社会学者であることは、曖昧な資格集合を持つことである。

社会学の応用リサーチ活動のシェアの少なさの理由は内容的なものではないことに注意。経済学者、心理学者、教育研究者は少なくとも部分的に社会学的問題で仕事をしている。かくして、社会学者は応用社会調査に参加することを通じて社会学を富ますたくさんの機会を見逃していることは明白である。資金だけでなく、かなり社会学の知識基盤と理論的理解を拡大できるリサーチも含まれている。

#### 4. 応用社会調査による基礎社会学への寄与\*

\* 原題は「社会学者にとっての応用社会調査（参加）の機会」となっている。1980年学会会長講演では、この節と同じ内容で節題が「応用社会調査の基礎的関心事へのいくつかの寄与」となっている。会長演説の最終節の「今日の応用社会調査の機会」と取り違えたものと思われるので、表記のように改めた。

応用社会調査は社会学という学問のなかに公認された重要な位置を獲得してきてはいない。しかしながら、実際には、応用調査に起源を持つ社会学の仕事で価値を置かれるものの多くは、基礎的な仕事と見なされる傾向がある。基礎的な仕事と応用的な仕事の区別の曖昧さが反証の証拠を安易に定義から除外し、応用の仕事に対する従来のネガティブな査定を覆す証拠を見落とさせている。

応用の仕事が社会学の成長に果たしてきた寄与を正確に査定することが社会学にとっては

重要である。あらゆる種類の応用社会調査は社会学の発展に隠れた重要な役割を果たしてきている。社会学が理論と知識から利益を獲得し続けようとするなら、応用社会調査から恩恵を受け続けねばならない。応用の仕事に対するよそよそしい態度は結局、アカデミックな学問のなかでの社会学の位置を台無しにすることに導くものだ。

応用社会学による社会学に対して多くの貢献がなされてきた。まず、最も傑出した社会学者の多くは彼らのキャリアのかなりの部分を応用社会調査に充ててきた。そのような人物の不完全なリストですらきわめて印象的である。**LePlay, Durkheim, Giddings, Ogburn, Stouffer, Park, Hughes, Lazarsfeld, Kingsley Davis, Philip Hauser, Sewell, Duncan, Coleman.** また **Max Weber** ですら、労働者の士気の質問紙研究を行い、産業社会学の開花には至らなかったが応用社会調査を手がけようとした。ASA の 1950 年以後の 31 人の会長についての私の非公式な計算で、少なくとも 19 人ははっきり応用社会調査に関与している。残りの 12 人のなかにも密接な応用社会調査者に 2.3 名より多くが含まれると予想される。

応用の仕事に対する低い敬意についてのこれまでの議論に照らして、最も興味深く明らかになったことは、時間の経過のなかで彼らの最も重要な応用リサーチがオーウェル流の歴史の書き換えのように、基礎的な仕事として定義され直してきているため、かくも多くの会長が応用社会調査者として記憶されていないことである。例えば、ラザーズフェルドのパーソナル・インフルエンスに関する著作 (Katz/Lazarsfeld 1955) が、雑誌「トルー・ストーリー」に援助することが既婚婦人のあいだのオピニオン・リーダーに到達すると広告予定者を説得する証拠を手に入れようとして、McFadden Publication によって金銭支援を受けた応用的仕事に起源をもつことを、どれだけのものが知っているだろう。セーウェルと彼の仲間による非常に影響力のあった地位達成に関する一連の調査 (Sewell et al. 1976) は、その主たる目的がウィスコンシン州の高等教育への需要を予測することにあつた、高校 3 年生に関する州にスポンサーされたサーベイが皮切りであつたことをどれだけのものが知っているだろう。

我々の大半は社会学者が使用する統計的方法の基礎的な仕事の多くは、他の分野の応用の関心事、農業の実験的な仕事、心理学の検証の構築、産業の品質管理に由来する事実を知っている。傑出した例は、以下のリストが証明するようにきわめて数が多い。偏差の分析、因子分析、回帰分析等。大体において、社会学者は統計モデルに関しては、他の領域からのリサーチ方法の借用者である。

社会学者はデータ収集法の開発により重要な役割を果たしてきている。他の社会学者と共に、社会学者はサンプル・サーベイの科学と技法に重要な貢献をしてきた。サンプリング法、インタビュー構築等の開発に属する初期の仕事の多くは、他の社会学者との共同で、社会学者によって応用の文脈で着手された。エーリア確率サンプリング法は労働力の妥当な

定期的推計を実施したいというセンサス・ビューローで開発されたものである。広告産業、新聞、政治家候補者のために仕事をする心理学者、社会学者が態度サーベイを開発した。尺度法は少なくとも一部は戦争省の情報・教育部署のスタウファーによるリサーチ支局の仕事 (Stouffer et al. 1948) に由来する。事実この支局はサンプルサーベイにおいて戦後スペシャリストとなった多くの若い社会学者を訓練するための多くのことをしたし、もっと一般的には、社会学の主要な研究ツールとしてあらゆる種類のサンプルサーベイの使用を設置するのを助けた。サンプルサーベイの最も最近の開発物 (random digit dialing) は最初商業サンプルサーベイで働く人たちによって開発された。それが今では社会学の研究者によって利用されるまでになった。

さらに、Hollerith がパンチカードと自動表作成装置を思いついたのは、センサスの従業員であったことを思い起こさねばならない。エレクトロニック・コンピュータの最初の商業バージョン、UNIVAC I は少なくとも、部分的には 1950 年の人口・住宅センサスにおいて利用する需要によって開発が促進された。

社会調査において他に頻繁に用いられる技法は、応用の関心の追求のなかで開発されるか、応用調査において利用されることによって大いに影響を受けたものであった。例えば、過剰人口問題への戦後の強い公共政策関心は人口統計学の方法のさらなる開発に大きな端緒を与えた。ソシオメトリック技法はその開始を、モレノがトレーニングスクールでの若い女性の居住配置を最適化する工夫を開発したときにもつ。社会的野外実験は、農村地域の飲料水を処理する手続きを教える技法に関してシリアでの Dodd による初期のランダム化された実験に起源を持つ。

質的調査法も応用の仕事にルーツを持つ。ある実験ステーションに棲まう一農村社会学者によって実施された最も初期のアメリカのコミュニティ研究 (Williams 1906) は、農業技術の変化が農村に及ぼす影響に関心を払った。ウォーナーのニューベリーポートの研究 (Warner 1941) は、メーヨーとレスリスバーガーによる労働者の生産性に関する仕事 (Roethlisberger/Dickson 1939) から生まれたものだった。リンダの最初の中産階級の研究 (Lynd/Lynd 1938) は社会変動がアメリカ人の道徳生活に及ぼす影響を研究する関心から財団によって研究資金を融資してもらったものだった。

応用社会学の基礎社会学への技術的方法面での寄与は、新しい方法が内容的領域を横断して移転することが容易であるがゆえに、大きいものに思われる。対照的に、理論と経験的な知識は内容的領域とより密接に結びついているので、移転することは容易でない。おそらく内容的理論と経験的知見で応用の仕事から基礎の仕事への移転の大半は、社会学的心臓部にある主題——階層と不平等、組織、集合行動、逸脱と社会統制、人種関係と差別、ライフ・

チャンスとヘルスケア、家族ワークと職業等——を扱ってきている。実際応用の焦点で研究されてきていない内容的領域はほとんどない。

インターチェンジは相互作用的なものであるので、応用の仕事の基礎的な仕事への一方向的貢献を指摘することは難しい。パーソナル・インフルエンスと意見のリーダーシップの概念のような応用の仕事の貢献の一部は、それが起源を持つ応用の仕事に容易にたどり着ける。相対的な剥奪概念のような他のものは、応用の仕事への注釈ないしは二次的に分析に起源を持つ間接的な貢献である。さらに理論的著作に起源を持つ概念は応用の仕事のなかで洗練されてきたり、その逆も真である。概念の共同開発の事例には、地位達成、職業威信、アノミーが含まれる。読者には他の事例も想起されるだろう。もちろん、応用社会調査のより重要な貢献のひとつは、一般社会学に由来する概念の洗練や時には否定である。応用調査に吸収される概念の経験的なテストはそれらの反証にしばしば導く。例えば、烙印論の適用に関するリサーチはその視点にほとんど支持を生まなかったし、貧困の文化の存在に何ら証拠が見いだされていない。

応用の仕事の助けがなければ、社会学がこの 30 年に涉って少しも発展してきていないと述べることは、確かに言い過ぎであるものの、応用の仕事がこの 30 年の社会学の進展に強い寄与をしてきていないと述べることも等しくばかげたことである。社会学の基礎の仕事と応用の仕事は補完的な営為である。

## 5. 応用社会調査の試練と陥穽\*

\* 1980 年会長講演論文の再掲

応用社会調査の産物は、私が明らかにしようとしたように、社会学に強い貢献をしてきている。そのような貢献をする抱負は、ひとを応用社会調査に従事するよう動機づけるのに十分にであるが、応用の仕事には固有の満足が内在する。応用社会調査者になろうとするものが少なくとも気づかなければならない陥穽も存在する。応用社会調査の魅力と危険は、私が今から明らかにするような応用社会調査のもつ政争の具と化する性質にルーツを持つ。

応用社会調査は基礎的調査よりも多くのテクニカルなスキルを要する。応用社会調査の結果は政治過程で用いられるので、うまくなされることが明らかに重要である。結局、主要な専門誌掲載論文、モノグラフは執筆者のキャリアが同じトピックに関して仕事をしている一握りの他の社会学者を除いてほとんど影響を持たない。対照的に、応用社会調査の産物は、公共政策の形成変更において利用され、応用の仕事の過失は当該の社会学者だけでなく、制度、機関、政策形成者そして政策の意図された受益者にも影響があるかもしれない。

ASR, AJS に掲載されている論文に報告されている調査が十分なサンプルに基づき、十分

な測定用具を用い、適切な力を持つ調査設計を用い、堅い分析方法を用いているかどうかにかかわらず、社会学は関心があるものの、そのような関心は応用の仕事におけるほど卓越してはいない。編集者と読者は上記の点のいくつか欠陥をひきだすが、ことの真相は、「社会学に良いアイデアやデータがあまりに少ないので、論文の判定の際にタイプ1のエラーはタイプ2のエラー程重要でない」ということである。対照的に、たとえば transfer payment の仕事をやる気をなくさせる効果を推計することは、十分なサンプル、測定の正確さと妥当性、分析の信憑性を要求する。なぜなら、上記のエラーのいずれも、国を横断する貧困世帯のウェルビーイングに影響する社会政策に変換されるからである。

特に重要なプログラムの利害関係が高いときには、応用社会調査には極端な配慮が取られるべきだが、一定比率の応用社会調査はたいして質が高くない。応用の仕事の最良のものは確かに基礎的な調査の最良のものに匹敵する。しかし、第二次世界大戦後初期には、不十分な訓練しか積んでいない職員による、できの悪い、研究資金が不足で、実施が貧弱な多数のプロジェクトがあった。1970年代には、連邦政府機関が良質の仕事を確保する仕方を身につけるようになり、質の悪い成績の者は自らグレードアップするか、ビジネスから去ったので、応用社会調査の一般的品質はかなり改善された。

もちろん、応用社会調査が政策形成で使用されるという事実は、それが陥りやすい陥穽のひとつでもある。ある政策論争における論争者たちは人の仕事を使用したり、悪用するので、悪意のある論争の中心となることは非常にたやすい。コールマンと仲間の報告書(1966)、ヘッドスタート評価、所得維持実験のケースのように、論争を引き起こさない大きな社会調査というものはほとんどない。事実応用社会調査の論争的性格は、一部の応用社会調査の貶価的批判を提供するために党派によって雇われた方法論的批判者として調査研究者のパートタイム雇用を生み出してきている。

しかしながら、応用社会調査の結果をめぐる紛争はそのポジティブなサイドを持たないわけではない。分岐した見解の間の競争は応用社会調査に高品質に向かうかなりの進展の加速に導いた。例えば、プログラムの有効性についての疑似実験的推計に向けられた強烈な批判は、リサーチ設計を考案する際のアプリアリな理論役割を理解することによりかなりの前進を生み出した(Heckman 1980)。新しい方法論が発明され、旧来の方法論が新しい問題に適応され、アイデアの学問間の転移が応用調査を通じて加速されてきている。もちろんいわゆる基礎的な仕事は批判に曝されるが、応用の仕事にとっての肝要なプロセスはますますタイムリーで、ますます強力であり、それは、応用社会調査者にとってますます苦痛であるが技術的、概念的品質において比較的急速な進展をますます生産する特性である。

応用社会調査の政治的性質は依然として社会を改善することに関心のある我々にとって、

その魅力のもう一つの源泉である。応用社会調査の結果が何か善をなすであろう可能性が存在する。かくして、知見がより改善され、より有効な児童のケア政策への道を舗装することを期待して、働く母親によって使用される児童のケア配列に関するリサーチに着手するかも知れない。しかしながら、応用社会調査者として人が何を出来るかにはいくつかの制約が存在する。まず第一に、問題は調査者だけによってセットされるものでなく、一部の政策に志向した機関の発議で、ときには調査研究者と当該の機関のネゴシエーションによってセットされる。実際、これは、調査研究者に最も実りあるものに見える形で応用社会調査者としてリサーチ問題を自由にフレームづけられる訳でないことを意味する。人は通常「政策スペース」、つまり政策的に受け入れられるように思われる社会政策の代替的修正の範囲に制約される。かくして、例えば所得維持政策は議会に受け入れられるであろうものをスパンすると考えられる一組の支払いプランを定義した。要するに、応用社会調査で検討される主題と政策争点に政治的に課せられる範囲が存在する。

応用社会調査は臆病で、既存の社会政策とあまり異ならない政策代替肢の検討に主として専念する。革命よりもファインチューニングは政治のアジェンダである。せいぜい良くても、応用社会調査はリベラルとリベラル右派の人々に政治的には親和的である。

応用社会調査は革命的な変化を引き起こさないものの、実際に反動的でもないし現状維持擁護的でもない。少なくとも現在の歴史的時期では、応用社会調査は神話を剥ぐ手段、既存の制度の過失と不適合さを暴露するものである。彼らの調査で犯罪学者はアメリカの囚人に甚大なインパクトを持っている。学校に関する応用調査は学校が何をしているかに根本的な疑問を提起した。アルコールリズムに関する応用調査は確かに人格障害についての我々の理解を変えてきた。そのような事例は容易に増やすことが出来る。この2, 30年の社会政策はせいぜい素人の社会科学者の地位を持つ人々によって想像されたのが事実であり、その大半と長く続く制度は徹底的な経験的検証の吟味に対して耐えられない。

しかしながら、応用社会調査は、哲学の王になろうとする者の職業ではない。応用社会調査者は通常意思決定と政策形成の席に近づけない。しばしばかなりの調査がリサーチ結果にも調査研究者の助言にも耳を貸さないように思われる。せいぜい良くても、応用社会調査は政治的プロセスの代役は務まらない。それは政策形成過程に別なインプットを提供するだけである。実のところ、さもなければ誰がそれをもつだろう。我々の政治システムのひとつの美点は多様な利害集団の間で引っ張ったり、手放したりする帰結として決定が下される点である。そのプロセスは、社会科学の仕事のインプットであるが、絶対的権威の土台の上に仕事を置きはしない。

## References (Postwar Applied Social Research)

- Abt, C.C. 1980 "What's wrong with social policy research." in: C.C. Abt (ed.) *Problems in American Social Policy Research*. Cambridge, MA: Abt Books.
- Cloward, R./L. Ohlin 1960 *Delinquency and Educational Opportunity*. New York: Free Press.
- Coleman, J.S. et al. 1966 *Equality of Educational Opportunity*. Washington, DC: Government Printing Office.
- Dodd, S.C. 1934 *A Controlled Experiment on Rural Hygiene in Syria*. Beirut, Lebanon: American University of Beirut. Social Science Series 7.
- Heckman, J. 1980 "Sample selection bias as a specification error." in: E.W. Stromsdörfer (ed.) *Evaluation Studies Annual Review*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Katz, E./P.F. Lazarsfeld 1955 *Personal Influence*. New York: Free Press.
- Lynd, R.S./H.M. Lynd 1928 *Middletown*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- Merton, R.K. 1938 "Social structure and anomie." *American Sociological Review* 3: 672-682.
- Moreno, J.L. 1934 *Who Shall Survive?* Washington, DC: Nervous and Mental Disease Publishing Co.
- Reiss, A.E. 1961 *Occupations and Social Status*. New York: Free Press.
- Roethlisberger, F./W.J. Dickson 1939 *Management and the Worker*. Cambridge: Harvard Univ. Press.
- Sewell, W.H./R.M. Hauser/D. Featherman 1976 *Schooling and Achievement in American Society*. New York: Academic Press.
- Stouffer, S.A. et al. 1948 *The American Soldier: Studies in Social Psychology in World War II*. Princeton, NJ: Princeton Univ. Press.
- Warner, W.L./P.S. Lunt 1941 *The Social Life of a Modern Community*. New Haven: Yale Univ. Press.
- Williams, J.M. 1906 *An American Town*. Philadelphia: J.B. Lippincott.

## 第2部 応用社会学はアカデミックな社会学を救済することができる、それはいかにして

### 序論

アメリカのアカデミックな学問の一つとしての社会学がシカゴ大学への社会学部の設置でスタートしたのは、1世紀をほんの少し上回る以前であった。半世紀の比較的緩やかな成長の後、社会学は第二次世界大戦後の20年間に大きな拡張期を迎えた。この時期にほとんどすべてのアメリカの単科大学、総合大学に社会学部が設置され、それに在籍する学生、院生は大きく伸びた。1960年代までに、社会学は大半の場所でそのピークを迎えた。

その後は衰退の一途をたどり、在籍学生や院生の数も低下の一途である。社会学部が廃止されたところもある。社会学の院生の研究は、もはや優秀な志願者を引きつけなくなった。社会学は文化戦争の戦場の一つになった。原因が何であれ、我々は結果（アカデミックな社会学は目下悲惨な事態にある）を知っている。しかしながら、アカデミズムでの社会学部の

衰退はストーリーのほんの一部に過ぎない。しかしながら、応用社会学、特に応用社会調査は衰退していないのである。私がこれから明らかにしたいと思っているのは、応用社会調査はこれまでアカデミックな社会学を救ってきたし、これからも救っていくだろうということである。

もちろん、アカデミックな社会学が救われるべきかどうかは争点ではある。今日の骨折した社会学が現在の形で救済する価値があるということには疑問を持っているが、ほとんどあらゆる大学に社会学部が存在していることは、もっと学問的に一貫し、アカデミズムに強い立場を占める強さを持つように再建される魅力的な機会を提供しているのである。言うなれば、新しい学問をスタートさせるよりも、社会学部を手直しの方が容易なのである。

### 1. アカデミックな社会学と応用社会学の境界同定の難しさ\*

\*原文には題が付いていない。訳者がつけた。

極端を例外として、アカデミックな社会学と応用社会学には確固たる境界はない。原型の極にある二つを区別するのがかなり容易である。つまり、アカデミックな社会学はアカデミズムにベースを持つ社会学の仕事で、その主要なオーディエンスは学生と弟子であるのに対し、応用社会学は非アカデミックなコンテキストにベースを持つ社会学の仕事で、その主要なオーディエンスは政策形成者と実務家である。にもかかわらず、アカデミックな社会学者はしばしば応用的な仕事にも従事しており、旧式のアカデミック社会学者というものは非常に珍しい存在である。ほとんどもっぱら院生の指導にだけ当たっているものを例外として、かなりのものは応用的な仕事をしているので、区分はファジーである。その組織ベースが非アカデミックな場で、応用の仕事で生計を立てている応用社会学者の方が圧倒的に上回っている。

応用社会学とアカデミックな社会学は、ともに（内部は）多様な活動の集合である。アカデミックな社会学のコアは、教育と研究業績作りとリサーチからなる。しかしながら、各々の役割を遂行する多様なやり方がある。ある者は主として下位部門のコース（Lower division sociology という社会学内の専科がある）を教えるのに対し、他の者は自分の教育の時間の大半を院生とともに過ごす。スカラーシップとリサーチも教育の場合と同様多様である。あらゆる種類の出版物をカウントするならば、平均すると、学部メンバーは年に1編であるが、中位はゼロに近い。平均値は非常に多数を出版する少数派に強く影響されるからである。アカデミックな活動を横断しているのは、社会学内の様々な学問スタイルと主題の専門化である。

応用社会学もまたきわめて多様である。たぶん、最も古い形の応用の仕事は、社会批評、



公共政策、中心的な制度（中央官庁、研究所）、実践された社会的トレンドへの批判的批評である。その例は、**Amitai Etzioni, Christopher Jencks, Alvin Gouldner, James Coleman, James Q. Wilson** の仕事である。私の印象では、その仕事の大半は、アカデミックな生活に根ざした社会学者の仕事である。

第二の変種は、政策に関連した争点、プログラムに関連した争点についての経験的研究への社会学的アイデアとリサーチ・メソッドの応用である。私自身の仕事の大半（1940年代の居住地の移動の研究（Dentler との共著 1955）に始まり、連邦政府の懲役の指針と凶悪犯の懲役に対する世論の一致に関する最も新しい著書（Berk との共著 1997 を含む）はこの変種に属する。この変種の傑出した応用社会学者には、**Samuel Stouffer, James Short, Christopher Jencks, James Q. Wilson** がいる。じつは社会批評と応用リサーチのラインはしばしば交差する。

多くの応用社会調査は大学人によってなされているが、政府機関、リサーチ会社、独立した非営利リサーチ研究所にいる多くの応用社会調査者によってなされたものも多い。大規模な応用調査、特に連邦政府のプログラムの全国的な評価は、大きな調査会社（Manpower Development Research Corporation, Mathematica Policy Research, the Urban Institute, Abt Associates）によって実施されている。

第三の様態は、臨床的な仕事である。それは、ビジネス会社や人的サービス機関に対する診断的なコンサルタント業から、家族や個人に対する臨床的な仕事にまでわたっている。多くのアカデミックな社会学者はコンサル業務を公的私的機関や企業に提供しているが、臨床的な仕事のかなりの部分は大学の外にいる。臨床社会学の仕事は出版されることが非常に少ないので、臨床社会学を構成する活動の範囲と臨床的な仕事の最頻値的スタイルを明らかにすることは困難である。

私がたった今与えた簡単な描写は、社会学の生態のなかに応用社会学者だけによって棲息されている特有のニッチ、アカデミックな社会学者によって棲息されている特有のニッチを同定することが難しいことを例証する。もっぱら教師である人やもっぱら臨床に携わっている人を除いて、アカデミックな社会学者と応用社会学者は、組織的にも個人の社会学者の活動でも、かなり混合しているのである。

## 2. 応用社会学業績のアカデミアでの威信の低さ\*

\*原文には題が付いていない。訳者がつけた。

アカデミックな社会学と応用社会学の境界を明確に同定することは難しいが、両社会学はお互いに強い影響を与えていることが予想される。しかしながら、詳しく見ると、影響は相

互的なものではなく、一方的であるように思われる。つまり、逆よりも、応用社会学がアカデミックな社会学に貢献していることの方が多いのである。実際、アカデミックな社会学が応用の仕事に与えている影響を何とか同定して描写することはほとんど不可能であることが判明している。たしかに、アカデミックな社会学は応用社会学者が使用する社会生活への一般的な問題意識を与えているが、社会学理論は政策で使える概念に欠ける傾向がある。例えば、応用的な社会調査が、出身家族の社会化の影響に比べて、学校が、生徒間の学業成績の偏差にほとんど寄与していないことを発見したときに、社会学者で驚いたものはほとんどいかなかった。しかし、その知見に我々を驚かせなかった社会的な問題意識は、生徒の学業成績へのその影響を高めるために、我々の教育システムをどのように修正したらよいかは何の手がかりも与えない。公共政策の領域は、予算、法律、倫理の制約の下で、公共政策が達成可能なものは何かという領域である。我々がこの半世紀の応用の仕事で学んだのは、公共政策が社会変革の弱い用具であるということである。たとえそうであっても、公共政策は社会変革に影響を与えるための唯一の利用可能な用具である。アカデミックな社会学的リサーチは、まさしく社会生活に影響を与える主要な社会諸力に集中している。公共政策の努力は通常は効果があまりにも微弱なので、中心的な注目を浴びることはない。

対照的に、応用社会学が社会学の残りに影響を与えてきている個別的なやり方の多くを同定することははるかに容易である。

応用の仕事とアカデミックな仕事の融合にもかわらず、両者の間にはいくつかの軋轢がある。社会学者の間では、応用の仕事はアカデミックな仕事と同じ高さでは評価されない。アメリカ社会学会の会長にかなりの頻度で応用社会学者が選出されているが、その選出は学術の仕事にもとづいている。私も選出されたが、私のおこなった応用の仕事によるものかは疑問で、むしろ私のアカデミックな仕事によるものであると思っている。近年会長に選出された、その名を私が容易に思い出せる **James Coleman, William Sewell, James Short, James Wilson, William Foote Whyte** にも同じことがいえると思っている。彼らはいずれも傑出した応用社会学の貢献をしているが、ASA の有権者は、選出された会長を応用社会学者としてではなくアカデミックな社会学者として評価したものと私は確信している。

応用の仕事の威信の低さは、社会学に限らず、大半の社会科学に特有のものであることが指摘されるべきである。各々の学問では、公共政策ないしは他の実務の事柄に対する貢献よりも、学問に対する貢献の方がより寛大に報酬が与えられている。

研究資金委員会、学部の採用、昇進、テヌアの人事委員会での私の数十年の経験では、ASR, AJS 掲載のような履歴書記載項目は、明らかに応用的な仕事である項目よりも大きなウェイトが置かれる。郡や市で人的サービス機関やコミュニティ・グループに助言者とし

て働いた経歴は、大学の委員会で働いた経歴よりもはるかにウェイトが低かった。

主要雑誌の採択の決定で、応用的な仕事に対する偏見を味わったことがある。私が出版した応用調査から生まれた論文を ASR, AJS に掲載したいと希望したとき、論文の政策的関連性をトーンダウンしなければならないという苦痛を味わった。私の 1980 年の ASR 掲載の「犯罪と貧困」と題する論文は、ジョージアとテキサスの刑務所から釈放された受刑者に対する試験的な所得維持介入プログラムの効果を評価するための大規模なランダム化された実験結果を報告したのものであった。当時の ASR 編集者からの強い説得の下で、知見は労働力参加に関する理論の検証の装いをとって提示された。このように、トップ雑誌に掲載される応用の仕事は、主要な理論社会的なテーマと関連するように装った形で提示されねばならないのが常である。もしあなたが、紛れもない応用の仕事をどこかの雑誌に掲載したいと思ったら、あなたがそれを投稿できるのはマイナーな雑誌で、主要な威信の高い雑誌にはそっぽを向かれる。

主要な社会学雑誌に同じトピックで掲載するよりも、応用の仕事に基づいたモノグラフを刊行することの方がはるかに容易であるのは、どこか逆説めいている。例えば、シカゴ大学出版はホームレスに関する私のモノグラフの出版をきわめて熱心に受け入れてくれたが、AJS は同じトピックスの私の論文を却下したのである。これは市場の需要に対して、雑誌の編集者よりも、出版社の方が敏感であるからだ、と密かに思っている。雑誌の編集者は購読者数には比較的敏感だが、出版社は本が何冊売れるかに注意を払うのである。

もう一つの逆説は、社会科学のすべてにおいて、基礎的なリサーチよりも応用的なリサーチの方がはるかに財政支援が得られるということである。リサーチの研究資金や契約は後者の方がはるかに多く、基礎的なリサーチを応用的なリサーチと装うなら、資金が得られやすいほどである。これはリサーチが資金を得られやすいといっているのではなく、応用リサーチの方が基礎的なリサーチよりも比較的資金を得られやすいといっているのである。

応用社会学、特に応用社会調査を装うことが資金を得やすくするということは、応用の仕事が機を見るのに敏で、政策ニーズの絶えず変わる流行に敏感であるという非難を生じる。ある程度はその非難は真実に響く。私が行ってきた調査は私自身が先導したものであったことも少なくない。私が政策に志向した政府機関や財団に赴いて、彼らに資金を提供するように甘言を労したこともあった。しかし、たいていは、私の調査は、政策に志向した組織の命令で行われてきた。調査の領域は、教育問題、自然災害、犯罪、最も最近のホームレス問題と非常に多様である。もしあなたが私のリサーチ経歴（業績一覧）を眺めると、あなたは、私のねらいが一種のマイナーなルネッサンス人となることにあり、私は非常に多様なトピックをかき回ることができる奴だと思うことだろう。その評価はお世辞であっても正しくはな

い。というのは、私のリサーチ経歴のジグザクは、私自身のサブスタンティブな（内容的な）関心というよりも、機会が私の道においてくれたリードに従った傾向があるからである。何らかの機会が技術的には挑戦的で厄介な調査をさせるために登場したとき、その調査に私がサブスタンティブな知識がほとんどないトピックであっても、私はそのチャンスにしばしば飛びついた。

私が上に述べてきた緊張は社会学を容易に分裂に導くことができる類のものではない。応用社会学者は、今世紀（20世紀）の初めにソーシャルワーカーが独立の学会を創設したときのように、ASAから退会しそうには思えない。私はこの学問を代表するためにSAS(Society for Applied Sociology 応用社会学会)がASA(American Sociological Association アメリカ社会学会)に挑戦することを構想していない。また私はASAの「社会学的実践」部会がASAから退会して、ライバル学会を形成することも考えていない。かわりに、社会学者の何人かが機会にフィットするように色を変え、状況が要求するものに応じてアカデミックな社会学者と応用社会学者の間を往還する上手なアカデミックなカメレオンになることであろう。

さらに、社会学の内部に現在もっと深刻な緊張がある。ASAが分裂に向かうとすれば、その区分ははるかに深い内部の断層に沿って起こるであろう。しかしそれは別稿の主題である。

### 3. 応用社会調査の基礎社会学への寄与\*

\*原題は「応用社会学のアカデミック社会学への寄与」となっているが、1986年 *Journal of Applied Sociology* 3(1) 掲載論文の節題「応用調査の基礎社会学への寄与」再掲で、第1部4節の詳論であるところからこちらの題を採用した。

アカデミックな社会学と応用社会学の関係に関する私の内省は、その逆よりも応用社会学がアカデミックな社会学に対して同定できる貢献を多くしてきていると結論を下させた。今からその詳細を語ろう。

私が1930年代に学部生であったとき、社会学とは、学者が世界についてと他の学者が世界について書いたものを読み、大きな柔らかな肘掛け椅子の安楽のなかで、彼らが読んだものに注釈をつける学問領域であった、という私の気持ちにはいささかの疑いもなかった。確かに当時までに遡る経験的リサーチというものもあるにはあったが、この種の仕事の大半は学部のカリキュラムからは注意深く遠ざけられていた。そのカリキュラムの実践のサイドは、ソーシャルワークにエントリーする準備として喧伝された、非行、犯罪学、グループワークという少数のコースであった。

その初期に比べて、事態は大幅に変わった。まず、社会学者や他の社会学者はテクニカ

ルなりサーチ手続きや工夫のかなりの収集を意のままに獲得してきた。第二に、社会学のサーチは肘掛け椅子の職業であることをやめたばかりでなく、ひとりでやる職業でもなくなった。わたしが1950年代半ば、シカゴ大学のアシスタント・プロフェッサーとしてスタートしたとき、学部は、院生が修論や博士論文の作成過程で他者によって獲得されたデータを利用できるかどうか論争の渦中にあった。指導教員の一部は、他者によって収集されたデータを使用するなら、その結果のサーチはオリジナルな仕事ではない、と信じていた。近代の社会調査への参加するのは厭世のためでなく群居のためであるまでに、事態は大いに変化した。というのは、それは広範な分業への参加を要求するからである。中規模、大規模な社会的リサーチの努力はしばしばいくつかのテーゼと博士論文の基礎となった。

社会調査の組織の変化は40年以上にわたるインディアナのMuncieで行われた調査によって例証される。リンド夫妻が1920年代1930年代にMuncieを研究したとき、大規模な調査プロジェクトとみなされたが、彼らと一緒にフィールドに入った院生は数えるほどであった。Caplow & Barrが1960年代にMuncieに再び入ったとき、それは比較的小さな調査プロジェクトと見なされたが、彼らは紛れもなくアシスタントの大群を伴っていた。

第三に、社会学は、学部生が人文学の分布の(単位)要件を満たすのを助けるという役割以上に有用なものとなってきている。社会調査者は広範な量の記述的分析的リサーチを通じて、我々の社会についてのたくさんの経験的な理解を我々に提供してきている。この経験に基礎をおいた知識のすべてが社会学者によって産出されてきているわけではなく、人口統計学者、経済学者、統計学者、心理学者、教育研究者たちも経験的なリサーチの方法の装備の開発と適用に同じ重要な役割を果たしてきた。

私のテーゼは、社会学にこの50年間に起こった社会的リサーチのテクニカルな発展のすべてではないが大半は、公共政策の争点によって生み出された情報ニーズに対応したものであった、というものである。関与するメカニズムは明白で単純である。つまり解決は問題を要求し、社会調査者が解決する問題は、我々の社会の政策ニーズによって提起されるものである。ほぼ同じくらいに重要なものとして、技術的な発達のために必要な資金は、問題が存在し、政策に志向した機関が資金を提供するから入手が可能であった。

過去半世紀にわたる主要な技術的な発達のリストは長いものとなるため、本稿ではさわりをほんのちょっと触れることしかできない。ここに述べるのは、最も重要な技術的な発達の一部である。

我々全員は表作成する機械の原型が、IBMによって市販されるずっと以前、社会調査で利用できるように適応されるずっと以前、センサス・ビューローで開発された。しかし最初の大規模デジタル・コンピュータ、UNIVACはRemington Randによってセンサス・ビューロー

のために開発され、1950年のセンサスを表作成のためにビュローによって使用された事実は、それほど知られていない。もちろん、オリジナルな UNIVAC の数万の空の表からスーパーコンピュータや今日のパーソナル・コンピュータまでは長い道のりであり、最初の開発は明らかに応用社会調査の求めたものであった。

同じくらい重要な社会調査のツールはその起源をセンサス・ビュローに持った。サンプリング理論の基底にある一般原理は、1940年代のほぼ一世紀以上前であったが、制度化されてない人間母集団 (noninstitutionalized human populations) をサンプリングするための方法が開発されたのは、1940年代になってようやくであった。社会科学で最も用いられる経験的なデータ収集法である、近代のサンプル・サーベイの主要な柱である、エリア確率サンプリング法は、合衆国人口の失業部分のサイズを推計するようという、大恐慌期に生じた強い政策的ニーズに応じてセンサス・ビュローで開発されたものである。

第二次世界大戦中の軍隊でのサンプル・サーベイの採用や文民の士気の問題へのサンプル・サーベイの採用は、サンプリング・サーベイ・メソッドを政策のツールとして確立するのを助けた。シカゴ大学でトレーニングを受けた **Samuel Stouffer** は合衆国軍隊の調査単位を指揮した。戦後、彼はハーバード大学に就任した。food rationing に関してサーベイを行った戦時中の農業省の心理学者たちは、後にミシガン大学に移って、今日の the Multidisciplinary Institute for Social Research をスタートさせた。戦時中の国務省は海外の政策問題に関する合衆国の世論を研究するために the National Opinion Research Center を利用した。当時はデューク大学にあった NORC は 1948 年にシカゴ大学社会学部の付属施設になった。

上に挙げた進展は、過去数十年間社会調査に導入された最も重要なリサーチ・メソッドの一部が応用的なリサーチ問題を解決する必要から生じた事情を立証するのに十分である。社会学は依然として肘掛け椅子の状態にいるだろう。たぶん都市のエスノグラフィーを実践しようとしても、我々が今日住んでいるところの近くにはどこにも実践できる場所はないだろう。

しかし、政策問題への適用からもっとアカデミックな関心事に濾過したりリサーチ・メソッドが他にも多くある。若干の例を挙げる。因子分析、その起源は適正能力検査にあった。ネットワーク分析、その学問的な起源は **Moreno** の心理療法ワークにあった。広告業界のためにマスメディアの間接的な影響を識別する **Lazarsfeld** の仕事、それはイナベーションとオピニオンのリーダーシップの研究に導いた。

もっと重要な進展の一つは、実験パラダイムを実験室や農業試験場から持ち出して、実験パラダイムとサンプル・サーベイを組み合わせ、非公式な被験者に対して、ランダム化した実験を行ったことであった。最初の野外実験の一つは、シリアの水供給に関する公衆衛生

の介入の際に社会学者 **Stuart Carter Dodd** によって行われた。ランダム化した野外実験はその起源を政策問題の評価にもつのである。

経済のトレンドを予測するために開発された時系列分析は、後には社会のトレンドを研究するために用いられた。態度測定は最初市場リサーチで開発されたが、基礎的リサーチの最もポピュラーなツールに変貌しつつある。ごく最近の良質のサンプルとの電話インタビューを可能にすることによって、サンプル・サーベイの費用を下げることに大いに貢献した RDDM (the random digit dialing methods) は、マーケティング研究者によって開発されたものである。横断的サーベイという厄介な分析問題を遂行する方法は、クライアントが数ヶ月か数年以内の解決を要求する発展的問題に回答を与える縦断的なサーベイを待てない、応用調査者によって開発されたものである。

応用調査者による統計ツールの貢献は非常によく知られている。あなたは、t検定が the Guinness Brewery の一従業員によって開発されたこと、**Fisher** が実験設計とそれに付随する偏差を分析する方法を開発し、拡張した時、ある農業の実験ステーションに雇われていたこと、多重回帰開発の初期の仕事が商業省の職員によってなされたことを知っているか。

もちろん、これらの初期の開発とこれらの方法の利用の現在の技術水準に大きな違いがある。合衆国のセンサスの **Morris Hansen** とその仲間がエリア確率サンプリングの基礎的なアイデアを開発した場合はどうだというのか。**Blau & Duncan** と Wisconsin の彼らの後継者は地位達成を研究するために、大規模サーベイに着手したとき、彼らは何かを追加した。もちろん彼らは何かを追加したが、その貢献はこの点を例証する。アカデミックなりサーチは起源を応用的で、政策に関係した問題に持つ方法の上に組み立てられる。**Blau & Duncan** のデータがセンサス・ビュローの国勢調査に追加物として生成されたことを思い起こすべきである。その主要な役割は合衆国の労働力を測定することであったが、その政策の争点はエリア確率サンプリング設計の開発をスパークさせた。過去 20 ~ 30 年のこの傑出した基礎的な調査は、応用社会調査を背中に載せて運んでいたのである。

上に挙げた技術的な進展は単一の学問ではなく、多くの社会科学の所産であることが注記されるべきである。経済学者が時系列分析を開発した、奇妙な話だが、大規模な野外実験の大半を行ってきた。心理学者は測定の仕事の大半を行ってきた。社会学者はサンプル・サーベイの拡張——被害者研究 (victimization studies)、拡張されたパネル研究——に貢献し、社会的ネットワークに関する基礎的な仕事を行ってきた。近代のリサーチ・メソッドの数カ国語で書かれた起源は、そうであるべきだ。政策問題は学問の用語ではフレーズされていないからである。

今や、このストーリーの大半が何とか語られずにきている理由が存在するに違いない。社

会学者が自らの学問の歴史を無視するためではない。院生や学生が 19 世紀や 20 世紀初期の理論家を崇めるように求められる理論コースでカリキュラムは満ちている。図書館は、**Marx, Durkheim, Weber, Talcott Parsons** が実際に意図したことに関するタムード注釈でも満ちている。しかし、**Morris Hansen, Stuart Rice, Samuel Stouffer, Paul Lazarsfeld** については、彼らが著作で実際に意図したことに関しては非常にわずかである。

過去を葬ったり隠す何らかの不吉な兆しがあるといっているのではない。一つにはこれらの祖先は、彼ら書いたことは恐ろしく明快なのでほとんど解釈の必要がないのである。しかし、彼らが無視される主要な理由は、社会学の科学のサイドに彼らが貢献してきたことである。彼らの著述は、それをよく理解し自分自身の著述のなかに取り込んだために、その仕事を改善してきた他の著者の著述によって取って代わられて久しいのである。学問の歴史は人文学ほどには科学にとっては重要でもないし、中心的でもない。もしあなたが **Marx** を読み直したり、再解釈することによって、新しい重要な多くのことを学ぶことができるだろうが、実験設計に関する **R.A. Fisher** の 1930 年代の古典的なモノグラフを読み直したり、再解釈することよりも、過去数年の間に出版されたそのトピックに関する 6 巻かそらのものを読む方がはるかに多くのことが学ぶことができるだろう。

確かに、アカデミックな社会学者たちは応用社会調査者に追いつくためにたくさんのことをしてきた。我々は方法の教科書を書き、母集団サンプリングの基礎理論を拡張し、方法論的問題に関するテクニカルなリサーチを行い、応用的な仕事のパイオニアがなしてきたことをより合理化したり、より体系化してきた。たぶん社会学的な調査者たちは、政策問題への解答を追求するなかで、応用の仕事が彼らの発展を *force-draft* してこなかった場合に、これらのツールを次第に開発してきたのであろう。しかし多分そうではなからう。

応用社会調査は、経験的リサーチに重要なツールを提供することによって、スコラ的な学問となることからアカデミックな社会学を救ってきたのである。しかしそれがすべてではない。社会学を政策の関心事に関連づけることによって、応用社会調査が資金その他の支援が手にはいることを約束してきた。応用の仕事は、社会学や他の社会科学を政策のアリーナを扇動し、公共の関心事の核心でもあるものにレリバントにしてきている。

#### 4. 今後についてはどうか\*

\* 1986 年 *Journal of Applied Sociology* 3(1) 掲載の再掲：

社会学のリサーチツールの今後の発展が、政策その他の応用の関心事によって引き続き深く影響を受け続けることはないという理由は見あたらない。応用の仕事のダイナミックな圧力は依然として存在し、イノベーションと創造性を育てている。応用の争点は内在的に興味



深いものであり、政策に志向した機関はしばしば広範な発展が可能となるように、資金を提供してきている。応用的な社会調査は過去に基礎的な社会学\*を救済してきたし、その領域を今後も乾いたスコラ主義になることから守ってくれるであろう。

\*この節では、応用社会調査に対置してアカデミックな社会学でなく、基礎的な社会学という表現が用いられている。そのまま記載した。

他の種類の応用社会学が基礎的な社会学に対してどんな貢献をできたということは何も述べてこなかった。この争点に私が沈黙するのは、社会学がどのように応用されてきたかと応用から学んだ知識が基礎的な社会学を豊かにするためにどのようにフィードバックしてきたかの歴史に私が詳しくないことを意味する。たぶん、あなた方の多くは、あなた方自身の経験から実践の問題への実質的な社会学の応用が基礎的な社会学をいかに富ませてきたかの事例の収集を提供できるであろう。

過去の記録がどうであれ、そこにはきっと基礎的な社会学の今後の発展において果たされる役割がある。基礎的な社会学の主要な問題は、社会学理論が悲しいまでに未発達なことである。現在、社会学理論には二つの主要な潮流がある。一方で、オールド・マスターたちのテキストに注釈する旧来の活動が続いている。テキスト分析と批判的な注釈は、重要な学問活動ではあるが、実践的な関心事や経験的な調査からはかけ離れたものである。他方で、認識論的な関心が有力である。社会学理論家はほとんどが、我々が知っていることを我々はどのようにやって知ったのかという問いにとりつかれている。その問いに対する答えは、実践的な関心事にすぐには決して関連しない。だが、プラグマティズムと社会的相互作用主義に関する論文、ウェーバーと理解の過程に関する論文が基礎的な社会学が必要としているものでないことだけは確かである。

基礎的な社会学が必要としているものは、**Robert K. Merton** が20~30年前に刊行した「中範囲の理論」と呼んだものである (Merton 1968)。家族、近隣、コミュニティ、企業等の具体的な社会的実在のなかで進行する社会過程を同定し、特定する一般命題がそれである。例えば、我々は片親の家族の増加によって提示される過酷な不平等に対処する社会として学ぶことができることを期待して、世代間の紐帯と責任を維持し育む具体的な社会過程を同定し、特定することを必要とする。

きっと、諸問題の具体的な表現に身近に精通している応用社会学者がその一般的な理解に貢献できる多くのものが存在することだろう。

## 5. 結論

本稿は二つの主要なメッセージがある。

- 1) 応用社会調査の形を取った応用社会学は、基礎的な社会学に、その分野が単独の学問活動から孤立するのを禁じるリサーチツールを提供しながら、重要な貢献をしてきた。
- 2) 基礎的な社会学を、基礎的な社会過程がどのように働いているかの理解を提供する具体的なメッセージを持った科学的な学問するために、なされるべき多くの仕事はまだ残っている。

後者との関連で、応用社会学は、基礎的な社会学を認識論的な関心事と限られた記述的な経験的研究の不接合な夾雑物であることから救済することができる、ということをおは述べたかった。

### 追記

本稿は 1995 年の中西部社会学会の全員出席の会場での演説として提示したものに加筆したものである。

### References (重複は除く)

- Berk, R.A./K. Leihan/P.H. Rossi 1980 "Crime and poverty: some experimental evidence from ex-offenders." *American Sociological Review* 45: 766-86.
- Blau, P./Duncan, O.D. 1967 *The American Occupational Structure*. New York: Wiley
- Caplow, T. 1982 *Middletown Families: Fifty years of change and continuity*

### 訳者あとがき

本稿は Peter Henry Rossi の 2 本の論文を訳出したものである。最初のもは 1981 年 *American Behavioral Scientist* 24(3): 445-461 掲載の Postwar applied social research. growth and opportunities である。訳注でも触れているように、このなかの 2 つ節は American Sociological Association 会長講演 The challenge and opportunities of applied social research (ASR 1980 45: 889-904) から抜粋されたものが転載されている。2 番目のものは 1999 年 *Sociological Inquiry* 69(1): 110-120 掲載の Saving academic sociology である。これも訳注で触れているように、この後半部分は、1986 年 *Journal of Applied Sociology* 3(1) How applied sociology can save basic sociology. の転載である。99 年の発表であるが、内容的には 1986 年以降のことは何ら触れられていない。

Rossi, Peter Henry は 1921 年ニューヨーク生まれ、1943 年にニューヨーク市立大学で学術修士、51 年にコロンビア大学で Ph.D の学位を得ている。51 年にハーヴァード大学 Assistant Professor、56 年からシカゴ大学社会学部教授、67 年からジョーンズ・ホプキンス大学社会関係学部教授、74 年から 92 年までマサチューセッツ州のアマースト大学社会学部教授

を歴任した。教歴以外では、1960～67年の期間、Director of the National Opinion Research Center (Chicago University), Social Research and Evaluation to the National Science Foundation, the National Institute of Mental Health, the General Accounting Office, and the Rockefeller Foundation. のコンサルタント、学会関係では、アメリカ社会学会長、アメリカ応用社会学会会長を歴任している。

本稿を訳出しようと思いついた理由を披瀝しておきたい。訳者は、大学院で応用社会学特論と同演習を担当しているものである。その関係で、本誌にジェームズ・コールマンの応用社会調査の貢献を語ったマーチン・バルマー、ダイアン・ラヴィッチ、ジェラルド・グラントの論文を訳出したり、キャロル・ワイスの応用社会調査の代表的論文を訳出掲載してきた。さらに応用社会学がもっとも進んでいるアメリカの動向、辿ってきた歩みに関心があつて、パールシュタットの「アメリカ合衆国における応用社会学の展開」を本学教養学部論集151号(08年12月)に訳出掲載した。この論文は大まかな流れをとらえるのに向いているのだが、ソーシャル・アクションプログラム(社会政策)に定位した社会調査としての応用社会調査の歩みを実例に則しながら紹介しているものを探していて、実際に応用社会調査に50年にわたって携わってきた第一人者ロッシの「応用社会調査の戦後の歴史」があることを思い出した。

この論文は動向、歩みを辿るだけにとどまらず、応用社会学(応用社会調査)がアカデミクな社会学(基礎社会学)に寄与してきた側面、応用社会学がアカデミクな社会学を衰退から救済する潜在可能性も熱っぽく説いている。この箇所はアメリカ社会学会会長演説と重複する内容である。これを重点的に敷衍して詳しく述べたのが「応用社会学はアカデミク社会学を救済できる、それはいかにしてか」である。社会学は本来は応用社会学が初心であり、その初心に立ち返ることが低迷沈下するアカデミクな社会学の失地回復を図るもっとも正攻法な方途であることを、アカデミク社会学者に向けて語りかけている。

ロッシは、自ら研究調査費を調達するため積極的に働きかけていった、企業に委託されたマーケティング調査から学術的な成果を上げた師匠のラザースフェルドにならって、研究調査費を求めて、連邦政府の機関の政策形成に深く関与する政策のための社会調査を積極に行った。師匠が企業へのおべっか使いと揶揄されたように、行政機関のおべっか使いと揶揄されたこともあるそうである。応用社会調査の実績では他の追随を許さない。ピーター・ロッシの数多い著作の中から、アカデミクな社会学者にもっとも取っつきやすい論文ということで選んだ。

ロッシは、政策の事前、最中、事後の評価リサーチについても業績が多い。リプセイ、フリーマンとの共著である『プログラム評価の理論と方法』は初版は1979年、2004年に第7

版が出て、訳書が大島巖監訳代表で日本評論社（2005 年刊）より出ている。シャデッシュ／クック／レヴィトン共著『プログラム評価の基礎：実践の理論』（1991 年刊）で取り上げられた 7 人の代表的評価リサーチャーの一人に数えられ、彼のプログラム評価関係の業績が紹介され、評価が下されている。

なお応用社会調査業績（著書）に下記のものがある。

- Dentler, R.A./**P.H. Rossi** 1955 *Why Families Move: The Politics of Urban Renewal*.  
 Greeley, A.M./**P.H. Rossi** 1966 *The Education of Catholic Americans*. Chicago : Aldine Press.  
 Biddle, B/**P.H. Rossi** 1971 *The New Media and Education*.  
**Rossi, P.H./R.A. Berk /B.K. Eidson** 1974 *The Roots of Urban Discontent*. New York : John Wiley.  
**Rossi, P.H./K. Lyall** 1976 *Reforming Public Welfare*. New York : Russell Sage Foundation.  
 Wright, J.D./**P.H. Rossi/S.R. Wright/E. Weber-Burdin** 1979 *After the Clean-Up. Long Range Effects of Natural Disasters*. Beverly Hills. Sage  
**Rossi, P.H./R.A. Berk/K. Lenihan** 1980 *Money, Work and Crime*. New York : Academic Press.  
**Rossi, P.H./G.A. Fisher/G.A. Willis** 1986 *The Condition of the Homeless of Chicago* Amerherst, M.A. : SADRI ; Chicago, NORC.  
**Rossi, P.H.** 1989 *Down and Out in America : The Origin of Homeless*. Chicago : Univ. of Chicago Press.  
 Rossi, Arice S./**P.H. Rossi** 1990 *Of Human Bonding : Parent-Child Relations throughout the Life Course*.  
**Rossi, P.H./Richard A. Berk** 1997 *Just Punishments*.  
**Rossi, P.H./Richard A. Berk** 1997 *Thinking about Evaluation* 2nd. ed.  
**Rossi, P.H.** 1998 *Feeding the Poor : Assessing Federal Food Aid*. Washington, D.C. American Enterprise Institute.

#### 応用社会調査（アクションプログラム・評価調査）論文関係

- 1964 “Researchers, Scholars and Policy Makers : The Politics of large scale research.” *Daedalus* 92 : 1142-61.  
 1966 “Boobytraps and Pitfalls in the Evaluation of Social Action Programs.” Proceedings of the Social Statistics Section, American Statistical Association.  
 1967 “Evaluating Social Action Program.” *Transaction* 4(7) : 51-53.  
 1969a “No good Idea Goes Unpunished : Moynihan’s Misunderstandings and the Proper Role of Social Science in Policy Making.” *Social Science Quarterly* 50 : 469-479.  
 1969b “Practice, Methods, and Theory in Evaluating Social-Action Programs.” in J.L. Sundguist (eds.) *On Fighting Poverty: Perspectives from Experince*. New York : Basic Books. ch 10 : 217-234. 1966=1967=1969b  
 1971 “Observations on the Organization of Social Research.” → 1972  
 1972 (coedited. with W. Williams) *Evaluating Social Programs. Theory, Practice, and Politics*.  
 1972a “Testing for Success and Failure in Social Action.” in : 1972  
 1976 “Bookreview : Milbrey Wallin McLauhlin *Evaluation and Reform : The Elementary and Secondary Education Act of 1965/Title I. 1975*” *Harvard Educational Review* 46 : 263-267.  
 1977 (with S.R. Wright) “Evaluation Research : An Assessment of Theory, Practice, and Politics.” *Evaluation Quarterly* 1(1) : 5-52.  
 1978 (with J.D. Wright & S.R. Wright) “The Theory and Practice of Applied Social Research.”

- Evaluation Quarterly* 2(2) : 171-91.
- 1980 “The Presidential Address : The Challenge and Opportunities of Applied Social Research.” *American Sociological Review* 45 : 889-904.
- 1981a “Postwar Applied Social Research : Growth and Opportunities.” *American Behavioral Scientist*. 24(3) : 445-461.
- 1981b “The Professionalization of Evaluation Research in the United States.” in R.A. Levine et al. (eds.) *Evaluation Research and Practice : Comparative and International Perspectives*. Beverly Hills, CA : Sage. pp. 220-236.
- 1981 “Bookreview : Lee J. Cronbach and Associates. *Toward Reform of Program Evaluation*.” *American Journal of Education* 90(1) : 60-63.
- 1982 (with J.D. Wright) “Best Schools-Better Discipline or Better Students ? A Review of *High School Achievement : Public, Catholic, and Private Schools Compared* by J.S. Coleman, T. Hoffer, & S. Kilgore. New York : Basic Books.” *American Journal of Education*. 91(1) : 79-89.
- 1983 (with William Foote Whyte) “The Applied Side of Sociology.” in Howard E.Freeman, Russell R. Dynes, Peter H. Rossi, and William Foote Whyte (eds.) *Applied Sociology*. Jessey-Bass Pub. ch. 1 : 5-31.
- 1984a (with Howard E.Freeman) “Furthering the Applied Side of Sociology.” *American Sociological Review* 49 : 571-580.
- 1984b (with J.D. Wright) “Evaluation Research: An Assessment” *Annual Review of Sociology* 10 : 331-52.
- 1986 “How Applied Sociology Can Save Basic Sociology.” *Journal of Applied Sociology* 3(1) : 1-5.
- 1987a “The Iron Law of Evaluation and Other Metallic Rules.” *Research in Social Problems and Public Policy* 4 : 3-20.
- 1987b “No good Applied Social Research Goes Unpunished.” *Society*. 25(1) : 74-79.
- 1997 “Advances in Quantitative Evaluation, 1987-1996” *New Directions for Evaluation* 76 : 57-68.
- 1999a “Saving Academic Sociology.” *Sociological Inquiry* 69(1) : 110-120.
- 1999b “Three Encounters” *Contemporary Sociology*. 28(1) : 1-15
- 1999c “Interview to Peter Rossi : The Consummate Applied Sociologist” *Journal of Applied Sociology* 16(1) : 144-155.



前号〈154号〉について

前号（154号）に下記の誤りがありましたので訂正します。

訂正箇所	(誤)	(正)	著者
7頁 21行目	単純な交響曲損のため	→ 単純な構造のため	鈴木秀美
100頁 脚注(9) 3行目 4行目 6行目	<b>[n]</b> (口蓋垂鼻音) […nyɛ…] [in yɛ]	<b>[ŋ]</b> (口蓋垂鼻音) […n̠yɛ…] [in yɛ]	高橋直彦
179頁 8行～10行目	それが数えられる場所 つまり実在する人々の 世界で間違うという幽 霊によって掛け金がつ り上げられるときにの み、社会学のこの余分 な方策の必要がキック インする。	それがカウントされる 場所つまり実在する 人々の世界に迷い出る 幽霊によって賭け金がつ り上げられるときに のみ、社会学に対する 追加の仕事の要請が消 滅する。	久慈利武

前号（154号）は

〈[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_154/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_154/index.html)〉にて公開中です。





## 東北学院大学学術研究会

会 長	星宮 望
評 議 員 長	吉田 信彌
編集委員長	
評 議 員	
文学部	遠藤 裕一 (会計)
	北 博 (編集)
	辻 秀人 (編集)
経済学部	越智 洋三 (会計)
	細谷 圭 (編集)
	郭 基煥 (編集)
経営学部	菅山 真次 (庶務)
	目代 武史 (編集)
	折橋 伸哉 (編集)
法学部	黒田 秀治 (編集)
	白井 培嗣 (編集)
	羽田さゆり (庶務)
教養学部	吉田 信彌 (評議員長・編集委員長)
	野村 信 (編集)
	柳井 雅也 (編集)

### 東北学院大学教養学部論集 第155号

2010年3月5日 印刷

(非売品)

2010年3月10日 発行

編集兼発行人	吉 田 信 彌
印刷者	笹 氣 幸 緒
印刷所	笹氣出版印刷株式会社
発行所	東北学院大学学術研究会
	〒980-8511
	仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
	(東北学院大学内)

---

---

# FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 155

March, 2010

---

---

## CONTENTS

### Articles

El Greco and the Antique (I) .....MATSUI Michiko..... 1

Tilesius und Japan (Teil 2) : Tagebuchauszüge über die Rückreise

von Nagasaki nach Kamtschatka 1805

.....Frieder SONDERMANN..... 21

(Apparent) Counterexamples to Sequential Voicing (*Rendaku*) in Japanese

.....TAKAHASHI Naohiko..... 55

English Conversation: Oku No Hosomichi

.....Scott WATSON & Craig MacDONALD..... 69

Instability of Charge Vector Field Induced by a Strong Magnetic

Field and Chaos Patterns I Conservative System TAKAHASHI Koichi..... 109

### Translation

Peter Rossi's Articles on Applied Sociology .....KUJI Toshitake..... 127

The Research Association Tohoku Gakuin University  
Sendai Japan

---

---